

旧千代村の小字

【ヒジリ岩】

ヒジリイワ。

この小字は龍江大屋敷の村境の山地にある。大きな崩壊地もあり、地表に露出した岩もある。

ヒジリ岩とは何か。二説を挙げる。

①ヒジリ（聖）には、「山林修行をふまえた法華持経者と常行三昧をふまえた念仏者の二つの型に分けられる」（修験道辞典）というが、この場合は前者の「ヒジリが修行した岩」を意味するか。

②ヒジリはヒヂ（泥）・リ（場所を示す接尾語）で、イワ（岩）は「小石混じりの地」（語源辞典）と解する。ヒジリイワとは「湿地帯で小石混じりの土地」をいうのであろうか。この小字には、湿地らしい谷もある。

全国区地図にはヒジリ地名は 9 ヶ所あるが、ヒジリイワ地名は載っていない。

【沼塩田・沼塩田山】

ヌマシオダ・ヌマシオダヤマ。

これらの小字は、ヒジリイワ小字の下流側で、イタチ川の支流である木の根川の流域とイタチ川への合流点付近にある。

ヌマシオダヤマは「ヌマシオダ小字の近くにある山地」をいうか。ではヌマシオダとは何を意味しているのだろうか。シオダではあるが、塩分のある土地ではないだろう。ここでも二説を挙げておきたい。

①ヌマ（沼）は字面の通りで「湿地」をいう。シオは動詞シボル（搾）またはシボム（萎）の語幹で「楔形の谷の奥」（語源辞典）を意味する。タはタ（処）。ヌマシオダとは「楔形の谷の

奥で、湿地帯となっているところ」をいうか。

②シオは動詞シホル（霑）の語幹で「湿地」をいう（語源辞典）。ヌマシオダとは「湿地帯」を意味するか。

全国地図には、ヌマシオダ地名は記載が無い。

【バクチ岩】

バクチイワ。

この小字はヌマシオダ小字のある谷の一つ西側の谷の出口とその奥と、二ヶ所にある。この二ヶ所は、かつては繋がっていたのであろうか。

バクチイワとは何か。解釈を二つ。

①文字通り、「禁止されていた博奕を密かに行っていた岩陰」か。この小字のある場所は道路もない谷間である。十分にありうる解釈であらうか。

②バクチ←ハグ（剥）・チ（場所を示す接尾語）で、「露出地形」をいう（語源辞典）。バクチイワとは「岩が露出しているところ」を意味するか。

全国地図には、バクチ地名もバクチイワ地名も無い。

【バロ岩】

バロイワ。

この小字は、二つのバクチイワに南北から挟まれている。

分りにくい地名である。語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①バロは、ハル→ハロと転訛して、さらに濁音化した語か。動詞ハルク（払）の語幹で、「崩壊地形」を示す。バロイワとは「崩壊地に現れている岩のあるところ」か。

②ハルには、「台地」という意味がある。九州地方の方言であることが弱点であるが、これを用いると、バロイワとは「台地状になっていて岩のあると

ころ」であろうか。

バロイワ地名もバロ地名も全国地図には記載がない。

【大道下】

オオミチシタ。

この小字は、県道米川駄科停車場線と木の根川に沿った谷にある。

オオミチとは「幅の広い道」（広辞苑）をいう。オオミチシタは字面の通りで、「幅の広い道の下側に広がる土地」をいうのであろう。県道米川駄科停車場線を、この地名発生時にはかつてはオオミチとよんでいたのであろう。

オオミチ地名は全国地図には14ヶ所にあり、オオミチシタ地名も3ヶ所にある。

【清水山・清水ノ上】

シミズヤマ。

この小字も木の根川と県道米川駄科停車場線に沿っている。

シミズヤマとは文字通り、「清水の湧き出ている山」であろう。かつてはオオミチと呼ばれていた県道米川駄科停車場線を行き来する旅人や地元の人たちが渴きを癒やす清水が、この山の麓では溢れていたのであろう。

シミズノウエ小字やシミズヤマ小字の麓で下流側にある。シミズノウエとは、「清水山の付近にある土地」をいう。ウエ（上）には「付近。ほとり」の意がある（語源辞典）。

全国地図には、シミズヤマ地名は17ヶ所に及ぶ。

【太夫洞】

タユウボラ。

この小字は、シミズヤマ小字の南側上流にある東西に長い谷になっている。

タユウボラとは何か。これも二説を挙げたい。

①タユウ（太夫）とは、「伊勢の御師に付ける称号」（広辞苑）であったり、「神職の呼称」（国語大辞典）であるという。ここでは、「神職」としておきたい。タユウボラとは「神職が居住していた谷」であろうか。

②タユウ←タユと転じた語で、形容詞タユシ（弛）の語幹で「緩傾斜地」をいう（語源辞典）こともある。とすれば、タユウボラとは「緩傾斜地になっている谷」であろうか。

全国地図には、タユウ地名は2ヶ所にあるが、タユウボラ地名は無い。

【ケッタ洞】

ケッタボラ。

この小字は、タユウボラ小字の西側に広がる、広い小字で、幾筋もの谷を含んでいる。

ケッタボラとは何をいうのか。ここでも二説を挙げたい。

①この地方にはケッタクルという方言がある。「激しく蹴る」ことを意味する（長野県方言辞典）。ケッタボラというのは、「激しく蹴られたような崩壊地のある谷」とみることもできる。広い小字で、現在でもあちこちに崩壊地がある。

②ケッタとは「隠れんぼ」のことをいう。新潟、滋賀、三重あたりの方言だという。信州で採集された方言の中には無いようだが、地名発生時には残っていたことも考えられる。以上から、ケッタボラとは「隠れ田の多い谷」ともいえそうだ。現在も溜め池があって、水田が多い。

全国地図にはケッタボラ地名もケッタ地名も記載は無い。

【中ノ洞】

ナカノホラ。

この小字はケッタボラ小字の間に包まれている。田力の西端で龍江村境にある。

ナカノホラとは何か。田力の中心地でもないし、辺境と中央の間でもない。ここも二説を挙げる。

①ナカ(中)はケッタボラ小字の「中」を意味するか。ナカノホラとは「ケッタボラ小字の中に包まれている谷」と考えることはできないだろうか。

②ナカ←ナガ(長)と清音化した語で、「傾斜地」をいう。動詞ナガル(流)の語幹ではないかという(語源辞典)。とすれば、ナカノホラとは「流れるような傾斜地になっている谷」となる。当たり前すぎて地名にはなりにくい。静岡県榛原郡の方言だという。

全国地図にはナカ地名は190ヶ所もあるが、ナカノホラ地名は一つもない。

【長洞】

ナガホラ。

この小字はタユウボラ小字とケッタボラ小字の南側にある、広い面積をもった小字である。現在も谷の奥に溜め池のある洞になっている。

ナガホラは文字通りで、「長く伸びている谷」であろう。

全国地図にはナガホラ地名が中・大字として7ヶ所に記載されている。

【通ノ洞】

トオリノホラ。

この小字は、ナガホラ小字の東側にあり、東にあるハッチダイラ小字の間に挟まれている小さな小字である。

トオリ(通)とは「つきぬけること。通じること」をいう(広辞苑)。すな

わち、東隣のハッチダイラ小字にある洞と繋がっている洞であることを意味していると思われる。

トオリノホラとは、「間にある峠が低く、隣の洞と通じやすくなっている洞」をいうのであろう。

全国地図にはトオリノホラ地名は載っていない。

【後ガ洞】

ウシログホラ。

この小字はナガホラ小字の上流側、すなわち南側にあり、田力の龍江との村境に位置している。

ウシログホラとは、神社仏閣などのウシロに位置することを意味しているものと思われる。つまり、ウシログホラとは「主要道路などからみて、神社仏閣の裏側にある土地」であろう。しかし、神社仏閣が具体的にはっきりしない。荻坪の河原澤社(祭神は山神八柱神・大山津見神)か、イドイリ小字にある氏神のどちらかと思われるが、他にあるかもしれない。しかし、やはり村社である河原澤社であろうか。

全国地図にはウシログホラ地名は無いが、ウシロ地名は23ヶ所に中・大字として挙げられている。

【ハッチ平】

ハッチダイラ。

この小字は田力生活改善センターの南側にある側稜の尾根の先端部を含む細長い小字になっている。この小字の南部には大きな崩壊地がある。

ハッチダイラとは何か。三説を挙げておきたい。

①ハッチ←ハチと転訛したもので、ハチは動詞ハツル(削)の語幹ハツから転じた語で「削られたような地形」を

いう（語源辞典）。すなわち、ハッチダイラとは、「崩壊地がある山中の緩傾斜地」をいうか。

②ハッチ←ハリチと転じたと解することもできそうだ。ハリチはハリ（墾）・チ（地）で「開墾地」であろうか。現在も一部に水田や果樹園がある。

③同様にハッチ←ハリチとみるが、ハリチはハリ（張）・チ（地）で、「張り出したところ」をいう。すなわち、ハリチとは「尾根が水平方向に張り出している所」と解することもできそうだ。この小字は側稜の先端部が北側に張り出している。

全国地図には、ハッチ地名もハリチ地名も記載されていない。

【中島】

ナカジマ。

小字が混み合う田力の中心地付近に、この小字はある。木の根川にその支流が合流するところにある。

ナカジマとは「本流と支流に挟まれて島のようにになっている土地」であろう。

ナカジマ地名は各地にあつて、全国地図には262ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【前田】

マエダ。

この小字は田力だけでも三ヶ所にある。

マエダとは、「何かの前の方にある土地」をいうのであろうが、何のマエなのか、はっきりしない。三ヶ所とも木の根川の左岸にあり、富士浅間神社の前の方にはなるが、少し離れすぎているように思えるがどうであろうか。あるいは、この付近には「家ノ上」「家

ノ裏」「家ノ下」といったイエ小字群があるが、このイエ（家）に当たる有力者の家から見た“マエの方”を意味するのであろうか。

マエダ地名も全国には多く、全国地図の中・大字には139ヶ所が挙げられている。

【二ツ田】

フタツダ。

この小字は田力生活改善センター付近にあつて、二つのナガレダ小字に挟まれている。

フタツダとは、二枚の田んぼと考えたいが、ここでは成立しそくない解釈である。他の二説を語源辞典に依りながら挙げてみたい。

①フタは動詞フタグ（塞）の語幹で「塞がれたような地形」という。ツはノに当たる助詞。ダはタ（処）で「場所」を示す接尾語。フタツダとは「塞がれたようになっている土地」であろうか。北東と南西の二つの方角が、崩崖で塞がれたようになっているためであろうか。

②フタは副詞フタフタと関連して「液体のしたたり落ちる様子」をいう。フタツダとは「自然湧水のあるところ」であろうか。現在は居住地になっているので、成立しにくい解釈かもしれない。

全国地図には、中・大字として、フタツダ地名が1ヶ所だけ挙げられており、「二ツ田」の字が宛てられている。

【流田】

ナガレダ。

この小字はフタツダ小字を間にして、二ヶ所に分かれている。

ナガレダとは、「土地が流れるよう

に崩れたところ」であろう。

伊那谷南部には、各地にある小字名である。

全国地図にも、10ヶ所に中・大字として記載されていて、いずれも「流田」の文字が宛てられている。

【ヌキ畑】

ヌキハタ。

この小字は木の根川と県道米川駄科停車場線の間にある氾濫原の平坦地で、現在は主に水田になっている。

ヌキハタとは何を意味しているのであろうか。語源辞典に依りつつ、二説を挙げる。

①ヌキは動詞ヌク（抜）の連用形が名詞化した語。ヌキハタとは「崩れたが耕作地になっている所」か。

②ヌキはヌ（沼）・キ（「場所」を示す接尾語）で、湿地を意味する。ハタはハ（端）タ（処）で、「傍。かたわら」をいう。ヌキハタとは「川のそばにある湿地」をいうか。

全国地図にはヌキハタ地名は記載が無い。

【立ヶ平】

タテガダイラ。

この小字はハッチダイラ小字と木の根川氾濫原との間にある。

タテは動詞タツ（立）の連用形で名詞化した語で「低地に臨んだ丘陵の端」をいう（語源辞典）。タテガダイラとは「低地に臨んだ丘陵の端で山間地の平らになっている所」であろうか。

こうした場所は、砦や館を築く適地であったという。この地に館か砦があったのかどうか。

しかし、全国地図には記載が一件もない。

【八百目】

ハッピークメ。

この小字は田力の中心部にあり、木の根川の氾濫原に位置している。

「八百目」とは、下條氏の知行では「800坪の土地」をいう（龍江村誌）らしいが、この小字はだいたいであるが500坪ぐらいしかない。作物の収穫量なのか、租税を表しているのか、よく分からない。土地の評価にもよるが、ほぼ面積に比例した数値になっているようだ。

ハッピークメとは「800目に相当する土地」であろうか。

全国地図には「八百目」地名は無いが、中・大字になるほどの面積がないからであろうか。

【ヌマ】

この小字は「八百目」小字の南隣にある。現在は水田になっている。

ヌマは「湖の小さくて浅いもの。ふつう、水深5m以下で泥土が多く、フサモ・クロモなどの沈水植物が繁茂する」（広辞苑）という。フマとは「湿地」をいうのであろう。沼は要害としても利用されるというが、この田力のヌマはどうであろうか。

全国地図には、ヌマ地名が、中・大字として22ヶ所に挙げられている。

【家ノ上・家ノ下・家ノ裏】

イエノウエ・イエノシタ・イエノウラ。

田力のイエ小字群は2～3のグループになるほど多いが、いずれも有力者の屋敷を中心にして名付けられた小字と思われる。ウエ・シタは高度の高低を表し、マエ・ウシロ・ウラはほぼ同一平面上の裏表を示しているであろう。

【井戸入】

イドイリ。

千代には各地にイドイリ小字があるが、田力のイドイリは荻坪との境界地にある。

イドイリとは「流水の流れてくる奥の方の土地」をいうのであろうか。このイドイリ小字は、側稜の尾根筋まで達している。イドは掘井戸と限らない、自然の流水についても「井」を宛てているという。

全国地図には、なぜかイドイリ地名は一件の記載も無い。

【安右エ門田】

ヤスエモンダ。

この小字も荻坪境の田力にある。

ヤスエモンダとは「安右衛門さんの所有していた土地」であろう。現在、この小字には水田は見当たらない。

【石原田】

イシハラダ。

この小字は田力に近い荻坪にある。イシハラダとは、「小石混じりの開墾地で田んぼもあるところ」か、「小石混じりの未墾の入会草刈地」であろうか。解釈が二つになるのはハラの解釈による。語源辞典によれば、ハラには①開墾地と②未墾の入会草刈地の意味があるという。

イシハラダ小字は、伊那谷南部の各地にある。

【紙屋田】

カミヤダ。

この小字は県道米川駄科停車場線に沿った低地にある。

カミヤダとは何を意味するのか。解釈を二つ。

①カミヤダとは文字通りで「紙屋があった所」であろうか。カミヤとは「紙を漉き製造する所。また、その職人」

(広辞苑)である。ダはタ(処)が転じたもの。

②カミは動詞カム(噛)の連用形が名詞化した語。ヤタはヤツ、ヤチと同じで「低湿地」をいう(以上は語源辞典)。カミヤダとは「(木の根川の氾濫で)岸の岩や砂が激しく抉られたことのある低湿地」を意味するか。

全国地図にはカミヤダ地名(上谷田)が2ヶ所、カミヤタ地名(上矢田)地名も2ヶ所、中・大字として記載されている。

【サイヤクバ】

この小字もカミヤダ小字の隣にあって、県道米川駄科停車場線に沿っている。

サイヤクバとは何を意味するのか。難しい小字の一つ。仮説を二つ挙げておきたい。

①サイヤクバとは「採薬場」で、「近くの山野で採集してきた薬草の処理をしていた場所」をいうのであろうか。薬草などを採ることを業としたのは採薬師といわれていた。この伊那谷南部にも薬草を買い取る問屋があったのかもしれない。

②神事を行う場所をサイヤ(斎屋)と呼んでいた(国史大辞典)。クバ←クボ(窪)と転訛した。サイヤクボとは「神事を執り行ったことがある有力者のいた窪地」であろうか。

全国地図にはサイヤクバ地名は記載が無い。

【ハザバ】

この小字も県道米川駄科停車場線に沿っており、サイヤクバ小字の南隣にある。

ハザバといえば、伊那谷南部では「稲干場」のことをいう。ハザは「稲

を架ける場所」で、福井・石川・新潟・飛騨の方言であるといわれているが（国語大辞典）、この地方の方言でもある。ただ、この地方では稲干場のことをイナバと呼んでいたようで、イナバ小字が非常に多い。今でも、この地域では、ハザという方言が生きている。

このイナバがハザバに変わっていったと思われるのだが、それがいつ頃であったのか、よく分からない。

また、ハサ木を立てる地方もあり、古くは田の神の祭場であったのではないかともいわれている（民俗大辞典）。

ハザはハサム（挟）が転訛したとも考えることはできるが、これを活かした解釈は、「狭長な谷」とか「二股谷の分岐点」になって、現地の状況には合わないように思えて採用はできなかった。

全国地図にはハザバ地名もハサバ地名も載ってはいない。

【狐塚】

キツネヅカ。

この小字はイシハラダ小字やウシロガホラ小字のある側稜の山中にある。

ツカ（塚）は「土が盛り上がって高くなった所」（国語大辞典）だという。必ず人の手が加わっていない塚もあるということであろう。

キツネヅカとは何か。一般には、「キツネが住んでいる土が盛り上がっている丘」であろう。

しかし、次のような解釈も可能である。キツネはキツ（強。急）・ネ（嶺）で「けわしい峰」をいう（語源辞典）。キツネヅカとは「土が盛り上がった険しい峰のある所」となるが、この解釈

が成立するのは難しいかもしれない。

全国地図はキツネヅカ地名が14ヶ所、キツネヅカ地名が1ヶ所、中・大字として記載がある。

【ガラン】

この小字は側稜の先端部の東側傾斜地にある。

ガランも分かりにくい地名である。ガラン（伽藍）であれば、「寺院のあった所」となるが、寺院があったことは聞かない。ではどう解釈すればいいのか。いずれも怪しげなところがあるが、敢えて仮説を三つ挙げておきたい。

①側稜の尾根にある峰を寺院の伽藍に見立てたことがあったのではないか。ガランとは「寺院のような山の峰のあるところ」であろうか。

②静岡県小笠郡では木のうろのことをガランという（方言大辞典）。ガランとは「大きなうろのある樹木があったところ」か。

③ガランとは「銅または銅貨」のこと（国語大辞典）。ガランとは「銅貨が出土した所」かもしれない。東隣には、モトヤシキという小字があり、大きな有力者の屋敷跡があったと思われる。

全国地図には、ガラン地名が1ヶ所に中・大字として記載がある。

【西垣外】

ニシガイト。

カイト小字は、このニシガイト小字の近くに四ヶ所あるが、いずれも「住居跡」であろう。

①ニシガイトとは何か。一般には「西側にある住居跡」である。しかし一つのカイト小字と西端が揃っているのが気になる。必ずしも、最西端にはなっていないからである。そこで、

②ニシは動詞ニジル（躡）の語幹が清

音化した語で、「崩壊地」の意味がある。すなわち、ニシガイトとは「崩壊したところのある居住地跡」とも解することができる。

全国地図には、ニシガイト地名が6ヶ所にある。

【落・ヲチ】

オチ。

この小字は、木の根川に沿って二ヶ所にある、細長い小字である。谷の最低部にあり、殆どが水田になっている。

オチはオチ（澍池）であろう。「低い土地に水が溜まってできた池」（国語大辞典）である。オチとは「澍池のあるところ」であろう。

全国地図には、オチ小字は10ヶ所に記載されている。

【日谷田】

ヒヤダ。

この小字は県道米川駄科停車場線沿いの低地にあり、現在は荒地になっている。

ヒヤダとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ヒヤダはヒヤ（冷）・タ（田）で、「自然湧水があつて、水の冷たい田んぼ」か。稗が栽培された水田であった可能性がある。

②ヒヤダはヒ（樋）ヤダ（谷田）で、「水が流れている低湿地」であろうか。ヤダはヤチやヤツと同じ系統の語である。

全国地図にはヒヤダ地名は載っていない。

【前田】

マエダ。

この荻坪のマエダ小字はモトヤシキ小字の東隣の低地にある。

マエダとは「(モトヤシキ小字の)

前にある田んぼ」を意味するのである。

【タッチュウバ】

この小字は荻坪の谷の西側斜面にある。

タッチュウ（塔頭）とは、高僧の塔があるところで転じて「一山内にある小寺院。大寺に所属する別坊」（広辞苑）とある。隣のガラン小字に大寺があったとすれば、タッチュウバは「大寺の別坊があったところ」となるが、ガランに大寺があったという気配はほとんどないので、ここでは採り上げない。

では、タッチュウバとは何をいうのか。

タッチュウバとは静岡県の志太郡や加茂郡では、方言で「墓地」を意味するという（語源辞典・国語大辞典）。本来の塔頭から転じたものと思われる。この荻坪のタッチュウバも同様に墓地であろう。

全国地図にはタッチュウバ地名は載っていない。

【大長田・大長田山】

オオオサダ・オオオサダヤマ。

これらの小字も荻坪の谷の西側傾斜地にある、いずれも小さな小字である。

オオオサダヤマ（大長田山）は「オオオサダ（大長田）の近くにある高台」と思われるので、オオオサダについて考えてみたい。

オオはオオ（凡）で「きわ立っていない。普通である」（国語大辞典）であろうか。オサには方言で「水田の一区画。田一枚」（国語大辞典）の意味か。岐阜・静岡などの方言であるから、この地域でも使われていた可能性が

ある。タはタ（田）であろう。

以上から、オオオサダとは「普通の大きさの田んぼ一枚があるところ」であろう。

オオオサダ地名も、全国地図には記載が無い。

【イナバ・中イナハ】

ナカイナバ。

これらの小字も荻坪谷の西側斜面にある。イナバ小字は大きな洞に、ナカイナバ小字は小さな洞にある。

イナバ（稲場）とは、「刈り取った稲を地面に拵げて乾燥させる用地のこと」（民俗大辞典）である。なお、ハセ（稲架）が普及するようになって不要になったが、それでも一日だけイナバで稲束を乾かして稲架にかけていたところもあったという（民俗大辞典）。

ナカイナバは「（荻坪の）中心部に近い稲干場」であろうか。

【俵ナシ】

タワラナシ。

この小字は荻坪谷から側稜にくい込むように入り込む大きな洞になっている。洞の下流側は棚田ないし棚田状の緩傾斜地となって県道米川駄科停車場線に開いている。

タワラナシとは何を意味しているのか。語源辞典によって、二説を挙げたい。

- ①タハラはタ（田）・ハラ（開墾地）で、「田んぼになった開墾地」か。ナシは動詞ナス（成）の連用形が名詞化した語で、「～になった所」をいう。タワラナシとは、「開墾された田んぼになった所がある土地」をいうか。
- ②タハラはタワ（峠）・ラ（「場所」を示す接尾語）で「峠のあるところ」を

いう。ナシはナラシ（平）の転で「緩傾斜地」を意味することもあるという。合わせると、タワラナシとは「峠もある緩傾斜地」となるがどうであろうか。

タワラナシ地名は全国地図には無い。

【カジ洞】

カジボラ。

この小字は荻坪谷の西側側稜の尾根を含む高いところにある。

この尾根に近い山地に鍛冶屋があるとは思われないので、カジボラは次のように考えたい。

カジは動詞カジル（嚙）の語幹で「引っ掻かれたような地形」であろう。カジボラとは、「崩崖のある洞」ではないだろうか。

全国地図には、カジボラ地名もカジボラ地名も無い。

【カジヤ畑・カジヤ田】

カジヤハタ・カジヤダ。

これらの小字は荻坪谷の中心部分を通る県道米川駄科停車場線の両側に分かれて位置している。県道の東側の方が低地になっているのでカジヤダで、西側の少し高いところがカジヤハタになっている。

二つの小字の解釈も二説を挙げる。

- ①「現在は水田や畑になっているが、かつては鍛冶屋のあったところ」とも考えられる。
- ②「鍛冶屋が耕作していた水田や畑」を意味するか。

鍛冶屋は鉄製の農具が普及し始めてから必要とされるようになったと思われるが、「寺社に寄人として属している鍛冶の場合、釘・カスガイをつくっている」（網野善彦）というように、寺社の需要が多かったのであろう。

カジヤダ地名もカジヤハタ地名も、なぜか全国地図には載っていない。

【新木】

アラキ。

この小字は荻坪谷の西側の側稜から谷の中心に向かって伸びる尾根の先端部にあたり、県道米川駄科停車場線に接触するほどに山塊が近くまできている。

アラキとは何か。これも語源辞典に依りながら解釈を二つ。

①アラキは動詞アラク（墾）の連用形が名詞化した語で、「新墾地」をいう。この小字名が発生した時と、この地が開墾された時期が重なっているのではないだろうか。

②アラは動詞アラケル（粗。散）と関連して、「崩壊地形」を表す。キはキ（処）で「場所」を示す接尾語。すなわち、アラキとは「崩れた崖のあるところ」か。

アラキ地名は、全国地図に中・大字として33ヶ所に挙げられている。宛てられている字は「荒木」が最も多く、26ヶ所に及んでいる。

【手白】

荻坪の「手白」は何と呼んでいるかわからないが、米川の「手白」はテジロと仮名が振られている。

この小字も、荻坪谷の西側の側稜傾斜地にある。側稜に東から突っ込んでいる洞で、上流部は現在でも水田が多い。

テジロとは何か。三説を挙げたい。

①テジロ←テシロと濁音化したもの。テ＝タでタエ（絶）の転、「崩壊地」をいう（語源辞典）。シロ（代）は「田」のこと。以上から、テジロとは「崩壊した田んぼのあったところ」か。

②テ＝タ（田）、シロは赤石山地では「緩傾斜地」をいう（語源辞典）。テジロとは「水田地帯で緩傾斜地になっているところ」であろうか。

③テジロ←テンパクと転訛したのかもしれない。シロ（白）＝ハク（白）で、天白をテジロと呼んだ可能性があるからである。米川の「手白」小字の隣には「天白林」小字があることも傍証にはなる。もう一つ、荻坪のテジロ小字内には「米川簡易水道天伯配水池」がある。とすれば、テジロとは「天白神を祀った所」となるがどうであろうか。

さらに、この小字のすぐ南側に大郡のテジョウ（手城）小字がある。これはテシロと呼んでいなかったかどうか、気になる。

全国地図には、当然なことであるが、テジロ地名もテシロ地名も記載は無い。

【米川峠】

ヨネガワトウゲ。

この小字は県道米川駄科停車場線を南下して主要地方道下条米川飯田線に入って最初の峠が米川峠である。

ヨネガワトウゲとは「米川に出る峠」であろう。

ヨネガワとは何か。ヨネ＝ヨナで「砂」をいう（語源辞典）。ヨネガワとは「砂の多い川」ということになりそうだ。

全国地図にはヨネガワ地名が8ヶ所に中・大字として挙げられており、うち7ヶ所は「米川」の字が宛てられている。

【サイヤリバ】

この小字は荻坪の大郡境にある。主要地方道下条米川飯田線が通る荻坪

谷の一つ西側の狭い谷にあり、痩せた尾根が南北方向に走る、細長い小字になっている。

北の方にあるサイヤクバ小字と一字違いで、クとすべきところをリと書いてしまったか、とも思ったが、土地臺帳にはサイヤリバは2ヶ所にありいずれもリになっていたの、記載ミスではないだろうと判断した。

さて、サイヤリバとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依って二説を挙げておきたい。

①サイ←サキ（裂）と転じたもので、ヤリは動詞ヤル（破）の連用形で「引きちぎる」ことか。バはバ（場）で「場所」をいう。サイヤリバとは「裂けたように崩れたところ」をいうのであろうか。

②サイ←サキ（先）と転訛、ヤリはヤリ（槍）のこと。サイヤリバとは、「先が槍のように尖った地形になっているところ」か。水平面でも垂直方向に見ても当てはまりそうで、どちらと言いつ切ることは難しいか。

サイヤリバ地名は全国地図には無い。

【松ヶ洞】

マツガホラ。

この小字は荻坪谷の東側斜面にある広い小字である。

マツガホラの由来について二説挙げる。

①マツガホラとは、字面の通りで、「アカマツが自生している洞のある土地」であらうか。

②マツ←マタ（股）と転じたもので、マツガホラとは「洞が二股に分かれている、その分岐点になっているところ」か。この小字は、荻坪谷ともう一つ、

東に向かう洞の分岐点になっている。

意外なことに、マツガホラ地名は、全国地図には記載がない。

【七洞】

ナナホラ。

この小字は荻坪谷の東側斜面にあり、マツガホラ小字の北隣にある。

ナナホラとは何をいうのか。ナナ（七）は美称でもあり「たくさん」の意であらう。ナナホラとは「たくさんの小さな洞がほぼ直角方向に開口している、大きな洞」の事を表しているものと思われる。

なお、ナナ←ナナメ（斜）の下略形で、「傾斜地となっている洞」とも取れるが（語源辞典）、当たり前すぎて地名にはなりにくいと判断して、この解釈は捨てた。

全国地図には、中・大字としてナナホラ地名が1ヶ所に記載があり、やはり「七洞」の字が宛てられている。

【井戸洞】

イドボラ。

この小字も荻坪谷の東側傾斜地にあり、ナナホラ小字とシロハタ小字に挟まれている。

イドボラとは「湿地になっている洞」を意味するか。イ（井）には「湿地」の意味もある（語源辞典）。ドはト（処）である。

イドボラ地名は全国地図にも、2ヶ所が中・大字として挙げられている。

【城畑】

シロハタ。

この小字は荻坪谷の東側傾斜地にある。木の根川氾濫原から急傾斜地を登ると、ほぼ平坦に近い非常に緩やかな傾斜地があらわれる。そこにこの小字がある。

シロハタとは何に由来するのか。これも語源辞典によりながら二説を挙げる。

①シロはシロ（城）で「城塞」をいう。ハタはハタ（畑）であるが焼畑の可能性もある。シロハタとは「城塞があったところで、畑になっているところ」であろうか。この地に城塞があったとは聞かないが、出城級の砦はあったかもしれない。

②シロは丘上や山腹などで緩傾斜地になっているところを指す。シロハタとは「山中でほぼ平坦地になっている畑地」か。

全国地図にはシロハタ地名は無い。

【池ノ神】

イケノカミ。

荻坪谷の木の根川氾濫原にある小さな小字である。

イケノカミとは何か。インターネットでみると、泣沢女神のことで伊弉諾尊が妻伊弉冉尊の死を悲しんで泣いたときの涙から生まれた神様だという。荻坪のイケノカミは、こうした整った体系には入りにくい神様ではないのではないだろうか。イケノカミの別の顔は「小川の流れの末にある水神」（総合民俗語彙）であるという。この姿の方が真実に近いのではないだろうか。

このイケノカミは水田の水を確保しながら、荒ぶる川を鎮める水神であったと思われる。

【坂アタマ】

サカアタマ。

この小字も荻坪谷の東側傾斜地にある。県道米川駄科停車場線と東の方にある主要地方道下条米川飯田線をつなぐ道路が通っている。

サカアタマとは「急な坂道を登って緩傾斜地になっているところ」をいうのであろう。

一般的な地名と思えるが、全国地図にはサカアタマ地名は一つも載っていない。

【コマダ・駒田】

コマダ。

荻坪谷の西向き斜面にあつて、カイト小字・サカアタマ小字を挟んで2ヶ所にある。かつては一つながりの小字であったかもしれない。

コマダの由来についても、二説を挙げたい。

①コマはコメ（込）の転で「入りこんだ地形」をいう（語源辞典）。ダはタ（処）。コマダとは「谷が入りこんだところ」をいうか。この小字は木の根川氾濫原に開口した深い谷になっている。

②コマは馬のこと、ダはタ（処）。コマダとは「馬のいるところ」をいい、馬を放し飼いにしていた場所であろうか。それであったら、マキバとかババという地名にしたらろうという気もして、やや及び腰か。

全国地図には、コマダ地名が3ヶ所中で中・大字として挙げられている。

【ハマ井バ】

ハマイバ。

この小字も荻坪谷の西向き斜面にあり、コマダ小字の北隣になる。

①ハマイバ（破魔射場）とは「破魔打を行う場所」（広辞苑）である。破魔打とは「正月の遊戯の一つ。もとは年占で、樹皮でつくった丸い輪を一組が投げ転ばし、他の組がさえぎり運勢を占う」（広辞苑）ものだという。神事が子ども達の遊びに転化しているよ

うだ。そして、現在は伊那谷南部で破魔打が行われていると聞いたことはない。江戸時代には禁止されていたということであるが、現在は全く忘れ去られている。破魔打が行われたのは村はずれや浜であったという。

②伊那谷南部のハマイバ小字をみると、必ずしも村はずれや川岸でないところにも残っている。破魔打とは関係のないところでもハマイバの地名がつけられた可能性もある。そこで別の解釈を挙げておきたい。ハマは、「土手、堤、急傾斜面を意味するハバ、ハブ、ハへ、ママと関連する語」（民俗地名語彙事典）であるという。イバは「湿地」を意味する（語源辞典）。ハマイバとは「急傾斜地になっている湿地」も意味するのではないだろうか。

全国地図の中・大字には、ハマイバ地名は13ヶ所に記載がある。

【道上】

ミチウエ。

この小字は、荻坪谷から東方にある主要地方道下条米川飯田線に向かう道路の少し高いところにある。

ミチウエとは文字通り「道路より高い所にある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ミチウエ地名は13ヶ所に中・大字として挙げられている。

【糶谷】

コウジャ。

この小字は、荻坪谷から主要地方道下条米川飯田線に向かう道路に沿った小さな小字である。

コウジャとは、「麴を製造販売する所」であらう。

麴は民間でも、味噌造りや甘酒造りに使われており、室町時代にはすでに

に麴売りが出ていたという（民俗大辞典）。

全国地図にも、コウジャ地名は12件が中・大字として採られている。

【深山口】

フカヤマグチであるが、ミヤマグチという呼び方もあるようだ（長野縣町村地名大鑑）。

この小字は荻坪谷の東側傾斜面にある。

フカヤマグチであるとするれば、その意味は「湧水のある山の入口で山口祭が行われたところ」か。フカはフケ（沮）の転訛した語（語源辞典）。山口祭とは「きこりが山から木を伐り出す時、または狩猟する人が山に入る時、その山の入口で山神をまつる祭」（国語大辞典）である。この小字で山口祭を行うことが多かったと思われる。

ミヤマグチだったら何を意味するのだろうか。ミ（深）はミ（御）が転じたものか。接頭語で尊敬を表す語であろう。ミヤマグチとは「山口祭の神事が行われることが多かったところ」であろうか。

全国地図には、1ヶ所、フカヤマグチ地名が、中・大字として採られている。

【タイザ】

この小字も荻坪谷の東側傾斜地にあり、側稜の尾根にも達している。

タイザとは「本所とは別棟になっていて仏神事に関わって興行した田楽・猿楽などの芸能集団の上演場があったところ」（上久堅の小字）としている。伊那谷南部特有の小字で、全国には少ない地名である。

では、この荻坪のタイザの本所とはどこの寺社であらうか。やや上流側の

麓にある厄除観世音か、東側の谷を越えた隣の側稜で祀られている富士浅間神社か。規模からみると後者の可能性が高いが、共用していたかもしれない。

【カンヲン】

カンオン。

荻坪谷南端にある小字で、厄除観世音が安置されている。

カンオンは「観音様がおわすところ」であろう。

全国地図には、カンオン地名は1ヶ所、カンノン地名が9ヶ所に、中・大字として記載されている。

【岩コバ】

イワコバ。

この小字は、荻坪谷の南端近くにある、東側から山稜が迫っているところにある。

コバは動詞コハス（壊）の語幹が転訛した語で、「崩壊地形、浸食地形」をいう（語源辞典）。

イワコバとは何か。二説を挙げる。

①イワコバとは、「崖が崩れてきて埋まったところ」か。

②イワコバとは、「土石流で埋まった石の多い土地」か。

イワコバ地名は全国地図には無い。

【六郎兵エ田】

ロクロウベエダ。

この小字は木の根川氾濫原である荻坪谷の最低部にある。

文字通り、「ロクロウベエの田んぼのあるところ」であろう。六郎兵衛がどんな人であったのかわからない。

【小八田】

コハチダ。

この小字も荻坪谷の最低部にある。ロクロウベエダ小字の北隣になる。

コハチダとは、「小さな鉢のように凹地になっていた田んぼ」か。

なお、この「小八田」はコヤタであった可能性もある。であればコヤタとは「小湿地となっている水田」となるが、どうであろうか。

全国地図にはコハチダ地名は載っていない。

【丸ツブリ】

マルツブリ。

この小字も荻坪谷の最低地にある。木の根川もこの小字を避けるように反対側に大きく迂回している。

マルツブリは何を意味しているのであろうか。二説を挙げておきたい。

①マルはマル（丸）で円形の地形をいう。ツブリは「頭」の意で「頂上。山頂」のこと（日葡辞書）。以上から、マルツブリとは「円形の独立した峰があるところ」をいうか。この小字の隣に独立峰がある。小字内にないのがこの説の弱点か。

②マルツブリ←マルツブレと転訛したもので、「まるまる崩壊して潰れてしまった所」か。マルは接頭語で「すべて」をいう（広辞苑）。ツブレは動詞ツブル（潰）の連用形が名詞化した語で「崩壊・浸食地形」（語源辞典）をいう。

マルツブリ地名は全国地図には無い。

【影下】

カゲシタ。

この小字も荻坪谷の最低地にあり、木の根川や県道米川駄科停車場線に沿っている。

カゲシタの由来を語源辞典によりながら二説。

①カゲはカケ（欠）の濁音化した語で

「崩壊地」をいう。シタ（下）は「山の麓」のこと。カゲシタとは「崩崖の麓に当たるところ」をいうか。

②カゲはカハ（川）・ゲ（「場所」を示す接尾語）。シタは副詞シタシタから転じた語で「湿地」をいう。カゲシタとは、「川がながれている湿地」を意味するのであろうか。やや当然すぎるきらいがある。

全国地図にカゲシタ地名は載っていない。

【洞】

ホラ。

この小字は荻坪谷と平行する側稜の尾根と麓の谷部からなっている。細長い小字で、いわれているような「小さな谷」ではないように思える。

ホラ（洞）は、一般には「崖や大きな岩・大木などの、中がうつろな穴」（広辞苑）であるが、この小字では成立しそうでない解釈である。

ここでいうホラ（洞）は、「山の崩れたところ」（語源辞典）であろう。この小字のある細長い側稜の北東側斜面は急傾斜地になっており、崩落のありそうな地形になっている。

全国地図にはホラ地名は26ヶ所の挙げられており、すべてに「洞」の字が宛てられている。

【峰】

ミネ。

この小字は側稜の山地にある小さな洞で最上流部には溜め池や墓地がある小平坦地になっている。

ミネとは「高くなっているところ」であるが、ここでは洞の下流部から見て、上流部の高いところをミネと呼んでいたのであろうか。はっきりしない小字の一つか。

ミネ地名は全国には多い。112ヶ所が中・大字として全国地図に記載されている。

【原】

ハラ。

この小字は、木の根川に東から合流する支流と木の根川の間側稜にある。北東に傾斜している斜面にある。

ハラ地名は非常に多く、全国地図には、なんと450ヶ所に中・大字として、ハラ地名が挙げられている。

ハラとは何か。簡単なようで難しい。二説を挙げる。

①ハラはハラ（開）で、「開墾地」をいう（語源辞典）。あるいは「未墾の入会草刈地である可能性もある。

②ハラはハラ（腹）で「山の中腹」をいう（国語大辞典）。人体の腹に見立てているのであろう。

【峰原】

ミネハラ。

この小字はハラ小字の南隣になる側稜の尾根筋にある。

ミネハラ（峰原）という熟語はない。ミネハラとは「ミネとハラ」を意味しているものと思われる。すなわち、ミネハラとは、「側稜の峰と中腹部の傾斜地を含めた土地」をいうのであろう。こう解釈するのは安易すぎるだろうか。

全国地図には、ミネハラ地名が2ヶ所に中・大字として記載されている。

【峰ヶ洞】

この小字は荻坪谷の東側を平行して走る尾根の東側になる。尾根筋から急に落ち込んで洞の最低部になっている。

ミネガハラという語は、この地形を表現しているのであろう。すなわち、

ミネガホラとは「尾根筋から急に落ち込んでいる洞」か。適切に表現できないが。

ミネガホラ地名は全国地図には無い。

【大峰】

オオミネ。

この小字は荻坪谷東側にあつて、荻坪谷に平行して南北に走る側稜の荻坪谷から二列目の側稜尾根筋にある。そこには富士浅間神社も祀られており、長い小字になっている。

オオミネとは「長い側稜の尾根筋になっているところ」か。

全国地図にも、オオミネ地名は48ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

【黒岩洞】

クロイワホラ。

この小字はオオミネ小字の尾根筋に西側から入り込んでいる谷にある。

クロイワホラは何を意味するのだろうか。二説を挙げる。

①クロというのは伊那谷南部の方言で「周辺」を意味する。イワ（岩）は「特に加工せず表面がごつごつしている岩石」（広辞苑）。クロイワホラとは、「周辺が自然の岩石で囲まれている小さな谷」だろうか。

②クロはクリ（涅）に通じ「湿地」をいう。イワは「小石混じりの地」のこと（以上は語源辞典）。クロイワホラとは「小石混じりの湿地になっている洞」か。

全国地図には、クロイワホラ地名は無い。

【隠居田】

インキョダ。

この小字はクロイワホラ小字とミ

ネハラ小字に挟まれた小さな小字である。

インキョダとは「隠居の費用をまかなう田」（国語大辞典）であろうが、具体的にははっきりしていない。隠居した者が耕作する田んぼで、家人の手助けもあったのであろう。

全国地図にはインキョダ地名は無いが、小さな小字では中・大字とはなりえないか。

【サブ屋敷】

サブヤシキ。

この小字は富士浅間神社のある側稜の尾根部分にある。

サブヤシキの由来は何か。二説を挙げたい。

①サブは動詞サブ（荒）の関連で、「荒涼たるさまになる」ことを意味する（広辞苑）。すなわち、サブヤシキとは「荒れた屋敷のあったところ」か。浅間神社関係の屋敷があったのだろうか。

②サブは形容詞サブシ（寒）の語幹で「気温の低いことに由来する」（語源辞典）という。サブヤシキとは「冬になると気温が低くなる屋敷」をいうか。尾根筋の峰になるので、高い所にあり、気温が低下していたのであろう。

サブヤシキ地名も全国地図には記載が無い。

【丸田】

マルタ。

この小字は荻坪谷に東側から開口する大きな洞の中にある。ホラ小字とオオミネ小字に挟まれている。

マルタの由来は何か。二説を挙げる。

①マルタはマル（丸）・タ（処）で、「半円形の形をした丘陵の張り出しがある土地」か。丘陵の麓が半円形に

なっているところがある。

②マルは動詞マルゲル（転）から「地滑り」などをいう（語源辞典）。マルタとは「地滑りなどのあったところ」であろうか。

全国地図にはマルタ地名は10ヶ所にあり、いずれも「丸田」の字が宛てられている。

【畑中】

ハタナカ。

この小字はホラ小字のある尾根とオオミネ小字の峰との間にある。揚排水ポンプ場があり、自然湧水の多いところである。

ハタナカは何を意味するのか。ここにもイエ小字群があるので、焼畑が行われていたとは思えない。そこで仮説を二つ。

①ハタナカとは「はたけのなか」（広辞苑）か。周辺の西側の緩傾斜地は開墾されていたかもしれない。現在は荒れ地になっているが。

②ハタは動詞ハタク（叩）の語幹から「崩壊地形」をいうことがある（語源辞典）。ハタナカとは「崩れ地のある山地」をいうのだろうか。

全国地図には、ハタナカ地名は17ヶ所に記載がある。

【本屋敷】

モトヤシキ。

この小字はイエ小字群とハタナカ小字に囲まれている。富士浅間神社の西隣に当たる。このモトヤシキ小字を中心に、イエノウラ・イエノウエ・イエノシタ小字群が配置されているものと思われる。

モトヤシキとは「有力者の屋敷があったところ」であろう。

全国地図にはモトヤシキ地名が、

中・大字として21ヶ所に挙げられ、「本屋敷」か「元屋敷」の字が宛てられている。

【東・西】

ヒガシ・ニシ。

この二つの小字は、イエノアト小字とイエシタ小字を間にして、東側にヒガシ小字、西側にニシ小字がある。

イエ小字群の中心地が、東と西の中心地にもなっており、イエと呼ばれていた有力者の居住地があったのであろう。その位置は小字名の中には残ってはいない。

全国地図にはヒガシ地名は196ヶ所にあり、いずれも「東」の字が宛てられている。

【フロヤ】

この小字は、東のオオミネ小字の尾根筋と西のサカ小字の尾根筋に挟まれた谷間にある。

フロヤは「風呂谷」であろう。

フロとはモロとかミムロ（ミモロ）と同じで、もともと神のいます所を意味するものとされている。静岡県西部では神社境域の森林を風呂といい、浜松市都田町の明神風呂には須倍神社がある。フロはムロから転じた語で「籠もる所」の総称でフクロとも関連するという（以上は民俗地名語彙事典）。

この萩坪のフロヤの隣には富士浅間神社がある。

フロヤとは「神社境域にあって森林のある谷間」を意味するのではないだろうか。

全国地図には、なぜかフロヤ地名は記載が無い。

【通路】

トオリミチではないかと思うが、ど

う呼んでいるのか、わからない。

この小字はフロヤの南側にあるイエ小字群の中にある。

トオリミチといえば「道路」のことである。それはイエ小字群をつなぐ道路であり、もっと富士浅間神社に達する道路を意味するのではなかったか。

全国地図には、トオリミチ地名は載っていない。トオリミチだけでは地名にはなりにくいのかも知れない。

【ヤクシ】

この小字は、県道米川駄科停車場線とフロヤ小字の間の尾根筋にある。その尾根筋の独立峰のあるサカ小字とニシ小字の間である。

ヤクシの由来がよく分からない。わからないので二説を挙げる。

①ヤクシとは「薬師如来信仰に関わる薬師堂などがあった所」とするのが一般的であるが、事実はどうであったのかはわかっていない。

②クヅシに「薬師」の文字を宛てて読み替えたのか（語源辞典）。クヅシは動詞クヅス（崩）の連用形の名詞化した語とする。とすれば、ヤクシとは「崩れ地のあった所」となる。

全国地図にはヤクシ地名は15ヶ所に中・大字として挙げられている。宛てられている字はすべて「薬師」である。

【坂】

サカ。

この小字はヤクシ小字の北隣にあり尾根筋の峰になっており、頂部には墓地がある。

サカとは、この場合は「傾斜して勾配ある所」（語源辞典）か。しかし、これだけでは地名にはなりにくい。もう一歩進めると、サカとは「サカイ（境）

に関係があり、台地の上と下との二つの空間をつなぐ境の空間として特徴づけられる。坂は、心意的には、異次元の空間をつなぐもので、その中間に位置する崖地（傾斜地）は、きわめて曖昧な、しかもおどろおどろしい空間として、人々の目に映じたようであった」（民俗地名語彙事典）という。これなら分かりやすい。

サカ小字の頂上部には墓地という異次元の世界があって、サカの麓には日常世界の次元が広がっているということであろうか。

全国地図には、サカ地名は20ヶ所に挙げられている。

【竹ノ花】

タケノハナ。

この小字は富士浅間神社のあるオオミネ小字の北端部分にある。

タケノハナとはタケ（高所）・ノ（助詞）・ハナ（端）で、「側稜など丘陵の先端部」をいう（語源辞典）。

タケノハナ地名は、全国地図に28ヶ所が中・大字として記載されている。

【シモ】

この小字はタジカラジリ小字の南隣にある。オオミネ丘陵の西側に麓になる。

シモは何をいうのか。簡単なようではっきりしない地名である。三説、挙げておきたい。

①シモとは「丘陵の麓になる低地」のことか。

②シモは動詞シモル（沈）の語幹で「水が入ってきて沈む」（広辞苑）ことをいう。つまり、「湿地」のことをいうか。

③シモはシモ（霜）で「霜の降りやすい土地」のことか。

全国地図には、100ヶ所にシモ地名があるが、「下」の字は86ヶ所で使われており、「霜」の字は1ヶ所もない。

【田力尻】

タジカラジリ。

この小字はタジカラ中字の下流側にある。

タジカラジリとは「田力中字の下流側にある土地」をいう。ではタジカラとは何を意味しているのか。仮説を二つ。

①タジカラ←タチカラと濁音化したもの。チカは動詞チガウ（違）の語幹で「高さの食い違った地形」をいう。ラは「場所」を示す接尾語。以上から、タジカラとは「段差のある水田のあるところ」をいうか。

②タチはタチ（館）で「屋敷のあった所」をいう。カラはカラ（幹。柄）でクキ（茎）に通じ、「高い所」を表す。タジカラ←タチカラの転で、「屋敷跡のあった丘陵地のあるところ」であろうか。イエ小字群が複数あるので、考えられないことはないが、やや無理気味か。

全国地図にはタジカラジリ地名は無いが、タジカラ地名は1ヶ所にあつて、「田力」の字が宛てられている。

【萩・下萩・前萩】

ハギ・シモハギ・マエハギ。

これらの小字は、田力の上久堅境にあり、面積の大きな小字になっている。

ハギとは何か。語源辞典に依りながら三つの説を挙げる。

①ハギとは、文字通り「植物のハギ(萩)が自生しているところ」か。

②ハギは「焼畑」のことで、「広く焼畑が行われていた土地」か。

③ハギは動詞ハグ（剥）の連用形が名詞化した語で、「崩崖」をいう。ハギとは「崩れ地のある土地」か。

シモハギは「下流側にあるハギ」で、マエハギは「前方にあるハギ」となるが、“前方”とは小字地名発生時のこの地域の中心部から見てのことであろうか。よくわからない。

全国地図にはハギ地名は14ヶ所に中・大字として挙げられている。

【門石原】

カドイシハラ。

この小字は山中の木の根川支流の流域にある、小さな小字である。

カドイシハラとは何か。二説を挙げる。

①カドはカハ（川）・ド（処）で「川辺」を意味するか。イシハラは「石の多い平地」をいう。

②カドはカド（角）で「川や道が曲がっている角にある石の多い平地」か。

全国地図にはカドイシハラ地名は無い。

【与治郎田】

ヨジロウタ。

龍江村境にあつて、広大な面積をもつ小字である。尾根に挟まれた大きな洞になっており、谷には現在でも棚田が連なっている。

ヨジロウタとは「ヨジロウさんが耕作している田んぼのある所」であろう。

【マチバリ】

この小字は側稜の尾根筋にありハギ小字に囲まれている、山中にある小さな小字である。

マチはマチ（襜）で袴の内股の部分をいい、「山間の隠れ地」（語源辞典）をいう。バリは「張り出しているところ」であろう。以上から、マチバリと

は「山間の隠れ地で、尾根が張り出しているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、マチバリ地名は記載されていない。

【花掛洞】

ハナカケホラ。

この小字は上久堅村境に近い、ハギ小字とマエハギ小字の間にある。

ハナカケホラとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①ハナは「先端」のこと。鼻を地形に見立てたものか。カケはカケ（欠）で「崖。崩壊地」をいう（以上は語源辞典）。ハナカケホラとは、「下流側の先端部分が崩れている洞」であらうか。現在は崩壊地には見えないが、地名発生時には崩落があったのであろうか。

②ハナカケホラとは「ハナカケの神事が行われていた洞」か。ハナカケとは「正月 14 日に、子どもたちが土おしろいを紙に包み人の顔に塗ったり、通行人に鍋釜のすすを塗りつけたりする行事。稲の豊作を予祝するため」（国語大辞典）であるという。破魔打神事が行われていたと思われるハマイバ小字は近いところにある。

全国地図には、ハナカケ地名は2ヶ所にあるが、ハナカケホラ地名は無い。

【ハマ井バ】

ハマイバ。

この小字は上久堅村境に沿った細長い小字である。

ここは川からは離れている山中にあり、村境にあることから、ここのハマイバは「破魔打の神事が行われていた場所」であらう。

【雨堤】

アマツツミ。

土地臺帳では「両堤」ともとれるが、

アマツツミであらう。

この小字は田力の二ヶ所にあり、いずれも三蔵院山丘陵の東側斜面にある。

アマツツミとは「自然水などを利用した灌漑用の溜め池」をいう。辞書類には、こうした意味の「雨堤」の記載は無い。しかし全国地図にはアマツツミ地名は2ヶ所に記載があつて、「雨堤」「天堤」の字が宛てられている。

伊那谷南部には、アマツツミ小字は多い。干害に苦しんだ地方であつたかもしれない。

【三蔵院山】

サンゾウインヤマ。

この小字は上久堅村境にあり、村境を越えた隣村にまで伸びている。村境が曖昧であつた時期に発生した小字であらうか。

サンゾウインヤマとは「三蔵院があつた山地」であらう。サンゾウ（三蔵）は仏教の典籍を総称した語で、寺院の一つがこの地にあつたことを意味しているものと思われる。

全国地図には、サンゾウ地名は2ヶ所にあるが、サンゾウイン地名は無い。

【ウハコゼ】

ウバコゼ。

この小字も上久堅村境にあつて、細長い谷の米川地域の最下流側にある。

ウハ＝ウバで、動詞ウバフ（奪）から「崩崖」などをいう。コゼ＝コセで、「一方が山側になっている道」をいう（以上は語源辞典）。したがって、ウバコゼとは「崩崖があり、一方が山側になっている道のあるところ」をいう。コゼは長野県の一部で使われているという。

ウバコゼ地名は全国地図には載つ

ていない。

【下壺貫目・中壺貫目】

シモイッカンメ・ナカイッカンメ。

これらの小字は、ウハコゼ小字の上流部に並んでいる。下流側にシモイッカンメ小字が、上流側にナカイッカンメ小字がある。現在は、いずれも水田になっている。

これらの小字は何を意味しているのか。田んぼの面積だとすれば多すぎるし、米の収穫量にしては少なすぎる。とすれば、種籾の量であろうか。イッカンメとは、「播種量が一貫目の水田」を意味するのであろうか。

全国地図にはイッカンメ地名は無い。中・大字にはなりえない地名だからであろう。

【五百目・六百目・七百目】

ロツピャクメ。

これらの小字はナカイッカンメ小字の上流側にある。

いずれの場合も、収穫量にしても播種量にしても少なすぎるように思えるが、よく分からない。とすれば土地の面積が「500坪・600坪・700坪」であることを意味しているのであろうか。

【茶之木田】

チャノキダ。

この小字も、三蔵院山山稜と横根山稜の間の谷間にある。ロツピャクメ小字の上流側になる。現在は棚田になっている。

チャノキダとは何か。二説を挙げる。

①チャノキダはチャ(茶)・ノ(助詞)・キダ(段)か。つまり、チャノキダとは「茶の木が植えられていた(あるいは自生してた)階段状の土地」か。果たして茶の木が、この地にあったのか

どうか、という疑念は残る。

②チャは動詞ツヤス(潰)の語幹で、「つぶす」の意から、「崩壊地」を意味していると思われる。ノキはヌキ(抜)の転で「崩れ抜けたところ」をいう(語源辞典)。ダはダ(処)で「場所」を示す接尾語。以上から、タヤノキダとは、「崩れて抜け落ちた崖のあった所」となるが、どうであろうか。

全国地図にはチャノキダ地名は載っていない。

【梅ヶ洞】

ウメガホラ。

この小字は三蔵院山の尾根筋からウハコゼ小字のある谷に開口している洞である。

ウメガホラの由来は何か。これも二説を挙げておきたい。

①ウメガホラは字面通りに考えれば、「梅が栽培されている洞」となる。しかし、梅は古代に中国から渡来したもので九州では野生化しているといわれている。果たしてこの地に梅が栽培されていたかどうか。疑問はある。

②ウメは動詞ウメル(埋)の連用形が名詞化した語で、「斜面が崩れて埋まった土地」と見るのが、一般的になっている(語源辞典ほか)。すなわち、ウメガホラとは、「崩落して土砂が堆積した洞」であろう。「梅」は瑞祥地名として後に採用された語と思われる。

全国地図には、なぜかうメガホラ地名の記載は無い。

【早稲田】

ワセダ。

この字は、ウハコゼ小字のある谷の上流部にある。現在は水田地帯になっている。

ワセダとは何か。語源辞典によりながら、敢えて二説を挙げたい。

①ワセダといえば、「早稲を植える田んぼ」である。成長も早い田植えも本田より早く行う。自家用の食料米確保の意味もあるようだ。

②ワセダ←ワサ・タ(処)と転訛したもので、ワサ←ワザで動詞ワザク(割。裂)の語幹で「崩壊地形」をいう。ワセダとは「崩壊したことの土地」を意味する。ワセダ小字には、ウメガホラ小字が開口しており、現地はその通りの場所である。

全国地図には、ワセダ地名が中・大字として9ヶ所に記載されている。

【七斗田】

ナナトダ。

ワセダ小字のある谷のすぐ上流側にある。

ナナトダとは、文字通り「7斗の種粃を播く田んぼ」ということになりそうだが、粃量が多すぎるような気がする。

【エゲ田】

エゲタ。

この小字は、ウハコゼ小字のある長い谷が大きく曲がる場所にある、小さな小字である。

エゲタのエゲ=エグで、動詞エグル(剝)の語幹で、「浸食地形」を示すのであろう。エゲタとは「削られた地形のところ」であろうか。

全国地図にエゲタ地名は無い。

【深田】

フカダ。

ウハコゼ小字のある谷の更に上流部にある。

フカダとは「泥の深い田」(広辞苑)である。この付近は古くに開かれた水

田地帯で全てが湿田であったと思われるが、このフカダは地盤が低くなっていたのであろう。

全国地図には、フカダ地名が15ヶ所もあり、いずれも「深田」の字が宛てられ、中・大字として記録されている。

【上之落・上ノ落】

カミノオチ。

これらの小字は、ウハコゼ小字の谷のフカダ小字の上流側にあり、ブツクメン小字を挟んで二ヶ所にある。

荻坪谷にはオチ小字があるが、この小字に対して山地にあるオチをカミノオチと名付けたのであろうか。すなわち、カミノオチとは「高い山地にあるオチ」か。

では、オチとは何か。すでに荻坪のオチで触れているように、①谷の両側にある崖地、②オチ(洩池)で低い土地で池のある所か。これらのどちらかであろう。

【佛具免】

ブツクメン。

この小字もウハコゼ谷の上流部にある。

ブツク(佛具)は「仏前を飾り、また仏事に用いる道具」(広辞苑)である。

直接的には、「佛具を揃える費用捻出のために租税を免除されている水田」をブツクメンと呼んだと思われるが、もっと広く「寺院の費用に当てるために年貢の免除された水田」であろう。これをジメン(寺免)ともいう。

ブツクメンの対象となる寺院はどこにあるのだろうか。法全寺も考えられるが、もっと近くの三蔵院に関わる寺院であろうか。

全国地図にはブツクメン地名も
ブツグメン地名も記載は無い。

【横根】

ヨコネ。

この小字は、ウハコゼ谷の最上流部
にあり、西側の尾根にも達する広い小
字になっている。

ヨコネとは何を意味しているのか、
語源辞典によりつつ、二説を挙げる。

①ヨコ（横）は「水平方向に長いもの
の形容」という。ネ（根）は「麓。
裾」をいう。すなわち、ヨコネとは「水
平方向に長い麓部分のある土地」を意
味する。

②ネ←ヌ（沼）の転訛した語で、ヨコ
ネとは、「水平方向に長い沼地」をい
う。現地は棚田状の水田が続いている。

全国地図にも、ヨコネ地名が、中・
大字として20ヶ所に記載されてい
る。

【沢口】

サワグチ。

この小字は米川に二ヶ所、野池にも
二ヶ所ある。

米川のサワグチはウハコゼ谷に続
く谷であるが、峠を越えて南へと水が
流れる谷にある。谷の底部は現在、棚
田になっており、西側斜面もこの小字
に含まれている。また、この細長い小
字の上流部にも小さなサワグチ小字
がある。

野池のサワグチ小字は野池神社の
東方、ムカイヤマアシカリ丘陵西側の
傾斜地や谷にある。

サワグチとは何をいうのか。二説を
挙げておきたい。

①クチは人体の口に見立てたもので、
サワグチとは「谷川の上流部」を意味
するか。

②クチは動詞クチル（朽。腐）の連用
形が名詞化した語で「湿地」のことか
（語源辞典）。サワグチとは「谷川が
流れている湿地」であろうか。

全国地図には、サワグチ地名は35
ヶ所に、中・大字として記載されてい
る。

【土林】

ドバヤシ。

この小字は野池神社の西方にあり、
米川の小さい方のサワグチ小字のす
ぐ上流側にある。谷の底部は棚田にな
っており、溜め池もある。

ドバヤシの由来は何か。三説を挙げ
る。

①ドはド（渡）は「沢や谷が合流する
地点」（広辞苑）。バヤシ=ハヤシは「植
物が生えているところ」をいう。ハヤ
シには「急傾斜地」の意味もあるが、
ここはそれほど急な傾斜地ではない。
ドバヤシとは「谷が合流する地点があ
り植物が生えているところ」か。ハヤ
シが「急傾斜地」である可能性は残る。

②ドバはドバ（土場）でドブ（泥）の
転訛した語。ヤシ=ヤジで「ヤチ、ヤ
ツと同じく「湿地」をいう（以上は語
源辞典）。ドバヤシとは、「泥地になっ
ているところ」か。同じ意味の語を重
複させて強めているか。

③ドバはドバ（渡場）で「川を流し下
す材木の受け渡しをする場所」。ヤシ
は「湿地」（以上は語源辞典）。すなわ
ちドバヤシとは、「沢口沢川を下して
きた材木を、いったん引き上げて再び
流すところ」か。バラバラに流れてく
る材木を集めて再び堰を切って流し
たところかもしれない。

【鳥屋根】

トリヤネと呼んでいるが、トヤネの

可能性もある。

沢口沢川左岸にある小字で、右岸のサワグチ小字に沿うように、細長く伸びた西向き傾斜地になっている。

トリアネであれば、トリアネは動詞トル（取）の連用形で「切り取られたような地形」から、「崩壊地形、浸食地形」をいう。ヤネは「日蔭地」のこと。（以上は語源辞典）すなわち、トリアネとは「川の浸食作用を受けた日蔭地」となる。西向きが果たして日蔭地といえるのかどうか。気になるようであれば、ヤネはヤナの転で「斜面」の意があるので、「川の浸食作用を受けた傾斜地」となるが、ぎこちない感じがする。

トヤネであれば、二説。

①トヤ（鳥屋）とは「ツグミなどの小鳥を捕らえるために山中に設けた小屋」（国語大辞典）であろう。トヤネとは、「霞網などが張られている尾根にちかい所」であろうか。

②トヤとは飯田地方にもある方言で「山中で狩をするときに猟師が隠れて待つ小屋」（国語大辞典）であるという。トヤネとは「山中で猟をするための小屋のあるところ」となる。現在、住宅が複数戸あり、上の台地には野池神社や住宅があるので、こうした場所に猟のための小屋を設けたのかどうか、という疑念はある。

全国地図には、トヤネ地名もトリアネ地名も載っていない。

【坊主田】

ボウズダ。

この小字はサワグチ小字とサワグチヒナタ小字に囲まれた小さな小字である。

ボウズ（坊主）は「寺の主である僧。僧侶一般の称」（広辞苑）であるので、

蔑称ではない。

ボウズダとは「寺領地になっている水田」をいうのであろう。ただ、どこの寺に属するのか、というとはっきりしない。法全寺しかないように思えるが、少し距離がありすぎるように思える。

全国地図にボウズダ地名は無い。

【沢口日向・沢口日影】

サワグチヒナタ・サワグチヒカゲ。

これらの小字は、いずれも沢口沢川の沿っており、サワグチ小字に接している。

サワグチヒナタは「サワグチ小字に接している日当たりのいい土地」であろう。沢口沢川右岸の東向きの傾斜地にある。

サワグチヒカゲは「サワグチ小字に接している日当たりの悪い土地」をいう。この小字は沢口沢川左岸の北西向き斜面にある。

全国地図にはサワグチヒナタ地名は記載が無い。

【小洞】

コボラ。

この小字は沢口沢川右岸にあつて、サワグチ小字に囲まれている小さな小字である。

コボラとは、文字通り「小さな谷」である。

全国地図には、小さいながらも、4ヶ所で、中・大字として記載がある。

【向林】

ムカイバヤシ。

この小字は米川の県道米川飯田線の南側にあり、県道をはさんで千代小学校のほぼ反対側にある。

ムカイバヤシとは、「八幡社と向き合っている、樹木の繁っている所」で

あろうか。八幡社は広籬八幡社で、明治5年に米川の村社となっている。祭神は誉田別命になっている（千代村誌）。

全国地図にはムカイバヤシ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【石休場】

イシヤスミバ。

この小字はムカイバヤシ小字の北東側斜面に2ヶ所ある。かつては繋がっていたのであろう。

イシヤスミバは「石屋住み場」ではないだろう。語源辞典によって二説を挙げておきたい。

①ヤスミバは「峠に近い休み場」であろう。イシヤスミバは「腰掛けて休めるような石のあった所」であろうか。西の方から帰ってきた旅人が、米川の家並みを見ながら休んだ所、あるいは米川を離れる旅人が名残を惜しむ休み場であったかもしれない。

②ヤスはヤチ(菴)の転訛した語で「湧水のあるところ」か。ミはミ(廻)で「屈曲している所」。イシヤスミバとは「小石の多い、地形が屈曲している湿地」か。やや回りくどい解釈で、成立しにくい。

イシヤスミバ地名は、全国地図には無い。

【越田】

コエダ。

コエダ小字は三ヶ所にあり、いずれも県道米川飯田線に沿っている。

コエダとは「峠などを越えるところ」(語源辞典)をいう。しかし、三ヶ所のうち一ヶ所はこの通りの場所で、ゆっくりした登り道を急に降りる所にあるが、他の二ヶ所については該当し

ない。コエダの三ヶ所が小字発生時に繋がっていたとすれば、わかりやすい。

そうでないとすれば、後の二ヶ所は別の解釈をしなければならない。それは、動詞コユ(肥)から「肥沃地」とするか、あるいは、動詞コユ(臥)から「崩壊地」と考えるよりほかはなさそう。 (以上は語源辞典)

なお、全国地図には、コエダ地名が中・大字として挙げられているのは、16件に及ぶ。

【越田横田】

コエダヨコタ。

この小字はコエダ小字の南西側にある。

コエダヨコタとは「コエダ小字の傍」を意味するか。ヨコ(横)には「かたわら。そば」の意味がある(広辞苑)。また、タはタ(処)で「場所」を示す接尾語である。

むろん全国地図にはコエダヨコタ地名は無い。

【天白林】

テンパクバヤシ。

この小字の中に、広籬八幡社がある。あるいは八幡社の中に天白神が祀られていたのかもしれない。

この小字は巽の方向(南東)に傾斜しており、巽の強い風を受けるところに位置している。天白神は多くの神格を有する神である。ここでは風神の性格が強いのであろうか。

テンパクバヤシとは、「天白神を祀る傾斜地」か「天白神を祀る林地」のどちらかであろう。

因みにテンパクバヤシ地名は、全国地図には載っていない。

【観音堂・観音堂坂・観音坂】

カンノンドウ・カンノンドウザカ・

カンノンザカ。

これらの小字は米川の西にある丘陵地に固まっている。ムカイバヤシ小字にある峰から尾根伝いに南西に辿ればカンノンザカ小字やカンノンドウ小字にある峰に到達できる。

観音堂がカンノンドウ小字のどこにあったのか、はっきりはしない。観音堂をお参りするには、カンノンドウサカ小字を経ていると思われるので、米川の町並から南側の斜面を登るルートが主な参拝路であったと思われる。ムカイバヤシ小字を経る尾根筋の参拝路もあったかもしれない。

全国地図には、カンノンザカ地名は2ヶ所、カンノン地名は9ヶ所となっているが、カンノウドウ地名になると32ヶ所と多い。

【天ノ窪】

アマノクボ。

この小字は米川地区の一ヶ所の他、近くの大郡地区にも二ヶ所がある。これもかつては繋がっていて、大きな小字だったのかもしれない。

アマ(天)は「高い所」を意味するか。静岡の方言だという(国語大辞典)。従って、アマノクボとは「高い所にある窪地」であろう。三ヶ所をつないだ地域は大きな洞になっていて、低地は現在、棚田になっており、溜め池もある。

全国地図にはアマノクボ地名は載っていない。

【川尻】

カワジリ。

この小字は米川右岸の北側傾斜地にある。

カワジリとは「裾が川になっている土地」を意味するものと思われる。シ

リはシリ(後)であろう。

全国地図には、カワジリ地名は17ヶ所が中・大字として挙げられている。

【梨木洞西・梨ノ木洞東】

ナシノキボラニシ・ナシノキボラヒガシ。

これらの小字は、カンノンドウ小字の南側にある南向き斜面にある。

二つの小字は、かつては一つでナシノキボラと呼ばれていたと思われる。西側の小字がナシノキボラニシで、東側に分かれた小字がナシノキボラヒガシであろう。

ナシノキボラとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ナシノキはナシ・ノキか。ナシはナラシ(平)の転じた語で動詞ナラスの連用形が名詞化したもの。「平坦地」をいう。ノキ←ヌキと転訛した語で動詞ヌク(抜)の連用形が名詞化したもので「崩壊地形」をいう(以上は語源辞典)。ナシノキボラとは「崩崖もあり、稜線の尾根部分に平坦地のある小さな谷」になろうか。

②ヤマナシであれば、各地に自生していたというので、ナシノキボラとは「ヤマナシが生えていた小さな谷」であろうか。

ナシノキボラ地名は全国地図には記載されていない。

【森下】

モリシタ。

この小字は、米川右岸の南東向き傾斜地にある。観音堂小字群の南側に当たる。

モリシタとは「森の下方」をいう。モリとは「頂上のこんもり茂った山頂」(語源辞典)であるが、神聖な場所というニュアンスも含まれているらし

い。観音堂小字群に接しているからであろうか。隣の尾根筋には標高716.3mの頂上がある。

以上から、ここ米川のモリシタは「侵しがたい木立の茂った山頂の下側傾斜地」を意味するか。

全国地図にはモリシタ地名は35ヶ所に中・大字として挙げられている。

【室渡合】

ムロドアイ。

この小字は米川沿いの右岸にある。

ムロドアイとは何か。二説を挙げる。

①ムロとは「山に囲まれた小盆地」をいう（語源辞典）。ドアイは「沢が流れている谷間」か（国語大辞典）。ムロドアイとは「沢が流れている山に囲まれた小盆地」となるか。

②ドアイは静岡の方言で「川の合流点」をいう（国語大辞典）。ムロドアイとは「川の合流点がある山に囲まれた小盆地」を意味するか。米川に谷沢川が合流しているが、その合流点はムロドアイ小字に近いが、小字内にないことがこの解釈の弱点か。

全国地図には、ムロドアイ地名は載っていない。

【山岸】

ヤマギシ。

この小字はムロドアイ小字の下流側にある。

ヤマギシとは、「山の端の水に臨んで岸になっているところ」（広辞苑）をいう。

全国地図には、ヤマギシ地名が37ヶ所も中・大字として記載されている。

【飼付】

カイツケ。

この小字は観音小字群のある尾根筋に繋がる。尾根と米川の間を南向き

斜面にある。

カイツケとは何をいうのか。わかりにくい地名である。二説を挙げたい。
①カイツケ（飼付）とは「馬に食糧を与えること」（広辞苑）であるという。カイツケとは「馬を飼育していたところ」つまり牧場のことをいうのか、あるいは「馬を飼育するための草刈場」であったか。

②カイツは愛知県南設楽郡の方言で「谷間の平地」をいう。ケは「場所」を示す接尾語（以上は語源辞典）。カイツケとは「山中に平坦地のあるところ」であろうか。この小字の尾根の峰部分は平坦地になっている。

全国地図にはカイツケ地名は1ヶ所にあり、「貝付」の字が宛てられている。

【蠶東】

カイコヒガシ。

この小字はカイツケ小字と米川の間にある。

カイコヒガシとは何を意味するか。全くお手上げの地名であるが、仮説を二つ挙げたい。

①カイコはカヒ（峽）・コ（処）で、「谷が狭くなっているところ」としたい。コは「場所」を示す接尾語。ヒガシ（東）は「東の方」をいう。カイコヒガシとは「玉川狭窄部の東の方の土地」をいうのであろうか。

②カイはカイ（開）で「開墾地」をいうか。この場合は、カイコヒガシは「開墾地の東の方の土地」となる。ただ西の方に開墾地があったかどうかは分からない。

全国地図にはカイコヒガシ地名は載っていない。

【下川原・川原・上川原・前川原】

シモカワラ・カワラ・カミカワラ・マエカワラ。

これらの小字は米川氾濫原にある。

カワラ（川原）は、「川辺の、水がなくて砂石の多い所」（広辞苑）に相違はない。

米川の上流側から、カミカワラ（上川原）→カワラ（川原）→シモカワラ（下川原）となっている。マエカワラ（前川原）が、この列から外れることになる。マエとは、「西垣外小字のあるところ」のマエを意味すると思われる。すなわち、マエカワラとは「（ニシガイトの）前方になる川原」であろう。

全国地図にカワラ地名は多く、例えばシモカワラは33ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【垣外・上垣外】

カイト・カミガイト。

これらの小字は、米川右岸にあり、カイツケ小字とシモカワラ小字に挟まれている。

カイトは「居住地跡」をいい、カミガイトは「カイト小字より上の高い所にある居住地跡」であろう。

カミガイト地名は、全国地図に6ヶ所で中・大字として記載されている。

【竹下】

タケシタ。

この小字はサワグチドアイシタ小字を挟んで二ヶ所にある。いずれも小さな小字で、カイト小字と米川に挟まれている。

タケシタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①タケはタケ（岳）で「高くなった所」をいう。高くなった所とは観音小字群の尾根筋をいうのであろうか。あるいは

は、ムカイガイトやカイトなどの上側の居住地跡をいうのか。タケシタとは「（高い所に対して）低い所」をいう。

②タケはタケ（竹）で、「竹が生えている所」をいうか。タケシタとは「竹藪の下のところ」であろうか。

全国地図には、タケシタ地名が9ヶ所に中・大字として採られている。

【沢口渡合・沢口渡合下】

サワグチドアイ・サワグチドアイシタ。

これらの小字は、沢口沢川が米川に合流する地点から下流側にあり、いずれも小さな小字である。サワグチドアイシタ小字はタケシタ小字と入れ違いになっていて二ヶ所にある。

サワグチドアイとは、「沢口沢川が米川に合流するところ」を意味する。

サワグチドアイシタとは、「沢口沢川の米川への合流点の下流側」を意味する。現地もその通りになっている。

【西田・西田上・西垣外・西垣外上】

ニシダ・ニシダウエ・ニシガイト・ニシガイトウエ。

これらの西小字群は、千代地域振興センターや公民館があり、すぐ東隣にはニシノミヤ（西ノ宮）小字もある。これも西小字群に属する。

西小字群のニシとは何か。二つの解釈を示したい。

①ニシとは「西の方」か。野池神社から見たとき、西小字群のある場所を「西の方」と見たのかもしれない。正確には南西方向になるが、地名発生当時、おおざっぱに西方とした可能性はある。

②ニシとは動詞ニジル（躡）と動詞ニジム（滲）のそれぞれの語幹の清音化した語とすることもできそうだ（語源

辞典)。つまり、「崩壊地のあるところ」とか「自然湧水のあるところ」であるかもしれない。

ニシダとはニシ（西）・ダ（処）であろう。先述のニシの解釈と組み合わせれば、三通りの考え方ができそう。すなわち①「（野池神社の）西の方にある土地」、②「崩壊地のある土地」、③「自然湧水のある土地」のどれかであろう。

ニシガイトのカイトは「居住地跡」である。

全国地図には、ニシダ地名が27ヶ所、ニシガイト地名が6ヶ所と、意外に多い数の中・大字として記載されている。

【向垣外】

ムカイカイト。

この小字は観音小字群の尾根筋の南東向き傾斜地にある。

ムカイカイトとは何か。これも二説を挙げる。

①この小字の米川を越えた南東方向の高みにジョウダイラ（城平）小字がある。川手氏三代の居館であったという（千代村誌）。この城平から見て「向こう側にある居住地」であったか。

②この小字の北隣にはムカイバヤシ（向林）がある。これに関連させてムカイと呼んだというのは考えられないだろうか。

【橋場】

ハシバ。

この小字は米川右岸の沢口沢川右岸の沿岸にある。

ハシバとは「橋が架けられていた所」である。米川と少し離れているので、その橋は沢口沢川に架けられていたものと思われるが、米川の架橋であっ

たことも否定はできない。

全国地図にはハシバ地名が38ヶ所に記載されている。中・大字として。

【木下】

キノシタ。

この小字は米川右岸の千代地域振興センターの東方に、二ヶ所ある。

キノシタとは「樹木の下」を意味するが、地名にはなりにくい。そこで次のように考えたがどうであろうか。

キはキ（牙）で、「丘陵の先端部」をいうか。キノシタとは「丘陵の先端の麓にある土地」ではないだろうか。

全国地図にはキノシタ地名が34ヶ所も、中・大字として挙げられている。

【西ノ宮】

ニシノミヤ。

この小字は、すでに触れているように西小字群の一つではないかと思われる。二ヶ所にある。

ミヤ（宮）とは、一般には「神社」のことをいうが、「神社に供された地。神領」も意味する（語源辞典）こともあるらしい。

改めて、ニシミヤとは何か考えてみよう。二説を挙げる。

①ニシノミヤとは「（野池神社の）西の方にある神社」で、かつてはこの地にも山の神などを祀る祠があったのかもしれない。そして野池神社に合祀されたか。

②ニシノミヤとは、「野池神社の西方にあった、野池神社領」ではなかったか。

全国地図にも、ニシノミヤ地名は11ヶ所にもある。

【中谷】

ナカタニ。

この小字は、米川右岸にあって、川原小字群の北側のやや高い方にある、大きな小字である。

ナカタニとは何か。二説を挙げておきたい。

①ナカタニとは「(野池の) 中心地にある谷」のことか。

②タニ←タナ(棚)の転訛した語とみることでもできる(語源辞典)らしい。ナカ(中)は、「丘陵と丘陵の間」をいう。以上から、ナカタニとは「丘陵の間の広い谷で、棚状の地形になっているところ」か。現地はそのとおりで、棚田や畑・荒れ地・住宅地などが棚状に並んでいる。

ナカタニ地名は、全国地図にも25ヶ所に中・大字として記載されている。

【惣造林】

ソウゾウバヤシ。

この小字は米川右岸のニシノミヤ小字の北側にあって、側稜の標高717.7mの峰周辺にある。

ソウゾウバヤシとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①ソウゾウ←ソウソウ(淙淙)と転じたもので、「水の流れそそぐ音。さらさら」(広辞苑)をいう。ソウゾウバヤシとは「川の流れそそぐ音の聞こえる林または傾斜地」か。ハヤシには「樹木の生えている所」と「急傾斜地」の意味がある(語源辞典)。

②ソウゾウ←ソウソウ(蒼蒼)と転じて、「草木があおあおと茂るさま」(国語大辞典)をいう。ソウゾウバヤシとは「樹木があおあおと茂っているところ(傾斜地)」であらうか。語意の重複が気になるが。

全国地図にソウゾウバヤシ地名は記載されていない。

【八丁】

ハッチョウ。

この小字は沢口沢川左岸の山地にある。現在、谷底部は棚田になっている。野池神社も近い。

ハッチョウとは何を表しているのか。一般的には長さか面積を表すのであるが、実際の面積でも長さでも八丁には達していない。ただ小字発生時にはもっと大きかったのではないかということはあるので難しい。

別の解釈を挙げておきたい。

ハッチョウ←バッチョウ←バンジョウと転訛したのではないか。バンジョウ(番匠)は大工のこと。ハッチョウとは番匠田のことで、「租税が免除されていた番匠の田」であらうか。野池神社に関わる大工だったのかも知れない。

全国地図には、ハッチョウ地名は12ヶ所に中・大字として記載がある。

【土林】

ツチバヤシ。

『長野縣町村地名大鑑』によれば、これは野池の「土林」であるが、米川にも「土林」があって、ドバヤシと呼んでいる。

この小字は沢口沢川と野池神社の中間にあり、半分は傾斜地であとの半分は堤つきの水田地になっている。

たぶん、同じ意味であったという可能性は高いが、ここでは別々に扱う。

では、ツチバヤシとは何を意味するのか。ここでも、語源辞典によって、二説を挙げる。

①ツチとは泥のこと、それから転じて「湿地」をいう。古くはツチには泥の意があった(岩波古語辞典)という。ハヤシは「林」か「傾斜地」。ツチバ

ヤシとは、「湿地のある林（傾斜地）」を意味する。湿地は、現在も棚田になっている。

②ツチ←ツキ（尽）の転で「台地の端」をいう。ツチバヤシとは、「台地の端末部にある林（傾斜地）」であろう。

全国地図にはツチバヤシ地名が1ヶ所あり、「土林」の字が宛てられている。

【西】

ニシ。

この小字は野池神社の南西隣にある。先述した西小字群とは少し離れているので、一緒にしないことにした。

ニシとは何か。これも仮説を二つ。

①ニシとは「（野池神社の）西になる土地」を意味するか。

②ニシはニジム（滲）かニジル（躡）の語幹が清音化した語である（語源辞典）。すなわち、ニシとは「湿地帯であるところ」か、「崩壊地のある所」になる。

全国地図にはニシ地名は多く、中・大字として、162件が挙げられている。

【宮ノ後・宮ノ前】

ミヤノウシロ・ミヤノマエ。

これらの小字は野池神社の周辺にある。ミヤノウシロ小字は大きい、ミヤノマエ小字は小さい。

ミヤノウシロ小字は野池神社の境内も含んでおり、「野池神社の裏手も含む広い土地」をいうのであろう。神社は南西方向を向いている。

ミヤノマエとは「神社の前方にある土地」をいう。

面白いのは全国地図で、ミヤノマエ地名は94ヶ所にもあるのに、ミヤノウシロ地名は3ヶ所しかない。ウシロ

は瑞祥地名とはいえないのであろう。

【日影・日陰】

ヒカゲ。

これらの小字も、なぜか野池神社周辺にある。

「日影」小字は二ヶ所にあるがいずれも西向き斜面にあり、「日陰」小字は北向き斜面にある。

ヒカゲとは「日当たりのよくない土地」をいう。土地の評価を下げる意図があるのだろうか。

全国地図にはヒカゲ地名は78ヶ所と非瑞祥地名であるのに少なくはない。

【森垣外】

モリガイト。

この小字はモトミヤ小字の東隣にある。

モリは「樹木の茂り立つ所」（広辞苑）であるが、「神聖な場所」の意味もあり、人が手を入れてはいけない所でもあって、樹木が茂っていることになるのであろう。モリガイトとは「神官などの居住地であったところで、樹木が茂っている土地」をいうか。

野池神社があったと思われるモトミヤ小字がすぐ隣にある。

全国地図にモリガイト地名は1ヶ所にある。

【元宮】

モトミヤ。

この小字は野池神社境内の東側のすぐ近くにある。

モトミヤとは、証拠はないが、「野池神社が、以前にあった所」であろう。なぜ現在の地に移ったのかは不明である。

全国地図にもモトミヤ地名は11ヶ所にあり、遷座が行われていたので

あろう。

【東畑】

ヒガシハタ。

この小字はモトミヤ小字の南隣にある。野池神社の境内の南東側になる。

ヒガシハタとは「(野池神社の) 東の方にある畑」を意味するものと思われる。

これまでのところ、野池神社からの方向は西と東があるだけで、北と南がないのはどうしてであろうか。単なる偶然であろうか。

全国地図には、ヒガシハタ地名が、中・大字として16ヶ所に記載されている。

【カミ】

この小字は野池神社の南隣にある小さな小字である。

カミとは何か。二説を挙げたい。

①カミはカミ(神)で、「野池神社の神のおわす所」を意味するか。

②カミはカミ(上)で、単に「高い所」をいうのであろうか。

全国地図には、カミ地名は110ヶ所と多い、宛てられている字は「上」が96ヶ所と圧倒的に多く、「神」は5ヶ所にすぎない。

【ワデ】

この小字は野池神社境内の南方にあり、参道の傍らにある。

ワデはワデ(上手)で、「上の方、高い所」を意味するか。

全国地図にはワデ地名は18件の記載がある。

【己手】

コデ。

この小字はワデ小字の南側にあり、ここには標高745.3mの峰がある。

コデ←コトが転訛したもので「山頂」

を意味する(語源辞典)。つまり、コデとは「高い峰のあるところ」をいうのであろう。

全国地図にはコデ地名は無い。

【火トモシ畑】

ヒトモシハタ。

この小字は野池神社参道の西側にある。

ヒトモシハタとは何を意味するのであろうか。二説を挙げる。

①ヒトモシハタはヒ(日)・トモシ(乏)・ハタ(畑)であろうか。すなわち、「日当たりの良くない畑」をいう。

②ヒトモシハタはヒ(樋)・トモシ(乏)・ハタ(畑)で、「井水の通ってこない畑」であろうか。やや無理気味か。

全国地図には、当然のことながら、ヒトモシハタ地名は載っていない。

【大久保】

オオクボ。

この小字も野池神社参道の西側にある。

オオは美称を示す接頭語。クボは「山中の平坦地」をいうか。すなわち、オオクボとは「山地にある平坦地」を意味するのではないだろうか。

全国地図には、オオクボ地名が、なんと337ヶ所に、中・大字として記載されている。

【立坂】

タチサカ。

この小字は野池神社参道の東側にある。

タチサカとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら、仮説を二つ。

①タチは動詞タツ(立)の連用形で「高

くなった所」をいう。サカは「坂道」か。タチサカとは、「坂道で少し高くなった所」を意味するか。

②タチはタチ（館）で、「屋敷のあった所」か。すなわち、タチサカとは「坂道で屋敷のあった所」であろうか。

全国地図にはタチサカ地名は無い。

【向手】

ムカイデ。

この小字は野池神社参道の西側にある。

ムカイデとは「(野池神社に) 相対して参拜できる場所」であろうか。何に対してムカイなのか、はっきりはしていないのだが、やはり中心は野池神社であろうか。

全国地図にムカイデ地名は3ヶ所にあるが、宛てられている字はいずれも「向出」である。

【野池】

ノイケ。

この小字は野池神社の参道の東側にある。

ノイケの由来は二つ考えられる。

①ノは「緩傾斜地」をいう(語源辞典)。ノイケとは、「緩い傾斜地にあった池」であろう。

②ノ(沼)と転じたもので「湿地」のこと(語源辞典)。ノイケとは、「湿地にある池」となる。

いずれにしても、このノイケ小字に、現在、池はない。

野池神社の野池は「自然の大池にして、沼の如くなれども底の深さ量り知る可からず、此の池に因みて野池村と云いしなり」(千代村誌)という。旱魃になっても涸れたことがないといわれている野池は、ここノイケ小字には、今はない。野池神社境内にある池

のことであろうか。

全国地図にはノイケ地名は7ヶ所に記載がある。

【中垣外】

ナカガイト。

この小字は野池神社の丘陵の中腹にある。

ナカガイトとは、「野池神社丘陵の中腹付近にあった住居跡のあるところ」をいうか。ナカは神社境内と米川氾濫原との間の中段付近を意味するのでであろうか。

全国地図には、ナカガイト地名は12ヶ所にある。

【中ノ畑】

ナカノハタ。

この小字はナカガイト小字の東隣にある。

このナカも野池神社境内と米川氾濫原との間の中段付近のことを示しているものと思われる。

従って、ナカノハタとは、「野池神社丘陵の中腹付近にある畑」を意味する。

なお、野池神社境内付近にはウエノハタ(上ノ畑)小字があり、このウエと対比してナカになっているのであろう。

全国地図には、ナカノハタ地名は5ヶ所に、中・大字として載っている。

【北垣外】

キタガイト。

この小字はナカガイト小字の南側にある。野池神社丘陵の中腹になる。

キタガイトとは何か。二説を挙げる。①キタガイトとは、一般的には「北の方の住居跡のある所」になる。しかし何に対してキタ(北)になるのかははっきりしない。南の方、米川に接しているテラガイト小字か、あるいは隣にあ

るフルヤシキ小字か。

②キターキダ(階)と清音化した語で、「階段」をいう。すなわち、キタガイトとは「階段状の土地で住居跡のある所」であろうか。

全国地図には、キタガイト地名は10ヶ所に中・大字として挙げられており、「北垣外」「北垣内」「北貝戸」の字が宛てられている。

【古屋敷】

フルヤシキ。

この小字も野池神社丘陵の中腹にある。

フルヤシキとは字面の通りで、「古い屋敷跡のある所」であろう。野池の有力者の居住地であったと思われるが、詳細は不明である。

全国地図には、フルヤシキ地名は67ヶ所に中・大字として挙げられており、全てに「古屋敷」の字が当てられている。

【漆ヶ窪】

ウルシガクボ。

この小字は野池のフルヤシキ小字やナカノハタ小字の北隣にある、緩い傾斜地になっている。

ウルシガクボとは「漆が生えている山中の緩傾斜地」をいう。この小字には平坦部分はない。

ウルシは古くに中国から渡来したもので、竜丘にもウルシバタ(漆畑)小字があって小字発生時には栽培されていたことがわかっている。

この野池でも栽培種があったことを否定することは難しい。近くに人が住んでいたことは確かだからである。

しかし、一方、ヤマウルシが自生していた可能性もある。漆を採取するのではなくて、実を集めて蠟を製したと

いう。

全国地図には、なぜか、ウルシガホラ地名は載っていない。

【坂・坂畑・東坂】

サカ・サカバタ・ヒガシザカ。

これらの小字は野池神社丘陵の中腹にあって、フルヤシキ小字を半周ほど取り囲んでいる。

サカとは「道路の傾斜した部分の名称で、さかい(境)に由来する。坂は上と下という相異なる空間を結ぶ通路であり、その途中は危険な場所とみなされ神仏がまつられた」(民俗大辞典)といわれているが、この野池のサカはどうであろうか。

サカバタは、サカ(坂)・ハタ(端)であろうか。「サカ小字の縁辺にある土地」を意味するものと思われる。現在は畑地はないが、もし小字発生当時は畑であったとすれば、サカバタとは「サカにある畑」の意となるがどうであろうか。

ヒガシザカは「東側にあるサカ」であろうか。サカ小字の南側にあるが、小字の境界が明瞭になってはいないので、許容範囲と考えていいのであろうか。

全国地図には、サカ地名は、20ヶ所に、中・大字として記載されている。

【寺垣外】

テラガイト。

この小字は、米川右岸の野池神社丘陵の麓にあって、米川に接している。比較的大きな小字である。

テラガイトとは何を意味するのか。仮説を二つ。

①テラガイトとは、文字通り、「寺院に関わる居住地のあった所」をいう。寺院そのものか、僧侶の居住地である

のかは明らかではない。

②伊那谷南部にはテエラという方言がある。タイラ(平)が転訛した語で、「平坦地または緩い傾斜地」を意味する。テラガイトとは「緩傾斜地で居住地があったところ」であろうか。この小字内に寺院の痕跡がないとすれば、この解釈に分がある。

全国地図には、テラガイト地名は、6ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【下】

シモ。

この小字は野池神社丘陵の中腹にある。

シモとは何か。これが難しい。三説を挙げたい。

①シモは「低い方」をいう。“高い方”は野池神社境内をいうのであろうか。

②シモは動詞シモル(滲)で「湿地」を意味する(語源辞典)。しかし、これは東北地方の方言である点が弱い。

③シモはシモ(霜)ではないか。シモとは「霜の降りやすいところ」をいうのではないか。現在は果樹園になっているが、小字発生時には桑園であったか。この小字は、霜道であったかもしれない。

全国地図には、シモ地名は100ヶ所に記載がある。当てられている文字は「下」がほとんどで、「霜」は無い。

【大山・小山】

オオヤマ・コヤマ。

これらの小字も野池神社丘陵の中腹にある。面積はコヤマ小字の方がオオヤマ小字より大きい。

オオヤマのオオはヲ(尾)で、「山裾の末端」をいう(語源辞典)。つま

り、オオヤマとは「側稜の末端部の土地」をいうのであろう。“大きな山”ではない。

コヤマは“小さい山”ではないだろう。コはコウ(高)の約で「高い」を意味する(語源辞典)。コヤマとは「側稜末端部の高いところ」をいうのであろうか。

全国地図の中・大字にはコヤマ地名も多く、98ヶ所に及ぶ。

【神田】

ジンデン。

この小字も野池神社丘陵の中腹にある。現在も傾斜地ではあるが、棚田もある。

ジンデン(神田)とは、「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」をいう(広辞苑)。この野池のジンデンも野池神社の諸費に充てられたのであろう。

全国地図にはジンデン地名は15ヶ所に挙げられており、すべて「神田」の字が当てられている。

【カチ畑】

カチハタ。

この小字も野池神社丘陵の中腹にある。

カチハタとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①カチはカヂ(鍛冶)の清音化した語で、鍛冶職を意味する。カチハタとは「鍛冶職人が居住していたところで、畑になっている土地」をいうのであろうか。寺社の近くに鍛冶職人がいたことは、他にも例がある。

②カチは動詞カツ(搗)の連用形が名詞化した語で、「叩き落とす」の意から「崩壊地形」を示す。カチハタとは

「崩崖のある畑」を意味するか。

全国地図には、カチハタ地名は載っていない。

【愛宿】

なんて呼んでいるのであろうか。アイヤドかアイシュクかであろう。

この小字も野池神社丘陵の中腹にあり、コヤマ小字とナカタニ小字の間にある、小さな小字である。

アイ（愛）は動詞アエス（零）の語幹で、「したたらず」の意から「崩崖など」をいう（語源辞典）。「愛宿」が何を意味するのか、語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①アイヤドと呼んでいる場合、ヤドはヤト、ヤツ（菴）と同義で「湿地」を意味する。アイヤドとは「崩崖のある湿地」をいう。

②アイシュクと呼んでいるとすれば、シュクはジユクの清音化した語で、「ジユクジユクであること」を意味するか。つまり、アイシュクとは、こちらにも、「崩崖のある湿地」を意味することになる。

全国地図には、アイヤド地名もアイシュク地名も記載されていない。

【道下・道上】

ミチシタ・ミチウエ。

これらの小字も、野池神社丘陵の中腹にある。

地図で見ると、ミチシタ小字は道路の北側にあって高い所であるように見えるが、窪地になっているためにシタとしたのであろう。

ミチシタとは「道路より低い土地」をいい、ミチウエとは「道路より高いところ」をいうのであろう。

全国地図には、ミチシタ地名が2ヶ所、ミチウエ地名が1ヶ所、中・

大字として挙げられている。

【畑田】

ハタダ。

この小字は、野池神社丘陵の麓に近いところにあり、ナカタニ小字に囲まれた小さな小字である。

ハタダとは何か。仮説を二つ。

①ハタダとは、文字通り「畑と水田のあるところ」であろうか。やや地名らしくないとも思えるがどうであろうか。

②ハタは動詞ハタク（叩。碎）の語幹で「崩壊地形」を表す（語源辞典）。ハタダとは、「崩れ地のある田んぼ」であろうか。

全国地図には、ハタダ地名は12件が中・大字として挙げられている。

【イナバ尻】

イナバジリ。

この小字も、野池神社丘陵の麓部分にある。

イナバジリとは何を意味しているのか。語源辞典によって二説を挙げる。

①イナバ（稲葉）は「稲干場」である。刈った稲をそのまま草地に横たえて干した。イナバジリとは「稲干場の背後の地」という意味か。

②イナバとはイナ（砂）・バ（場）で、「砂地」のこと。スナ→ウナ→イナと転訛したか。ジリは副詞ジリジリから「緩傾斜地」をいう。イナバジリとは「砂地の緩傾斜地」か。この小字には流水もあり湿地でもあるので、「稲干場」にはなり得ないのではないかと考え、この解釈を挙げた。

全国地図にはイナバジリ地名は記載が無い。伊那谷特有の字名かもしれない。

【牧田】

マキタ。

この小字も野池神社丘陵の麓部にある、牧場にはなりにくい小さな小字である。

マキタとは何か。これも語源辞典に依りながら解釈を三つ。

①マキは「傾斜地に囲まれた小平坦地」をいう。タは「水田」。マキタとは「傾斜地に囲まれた小平坦地にある田んぼ」か。

②マキは動詞マク（撒。蒔）の連用形が名詞化した語で、「散らし落とす」の意から「崩崖」をいう。マキタとは「崩れ地のある水田」か。

③マキタ（蒔田）は「苗代田によらず直播法で稲を栽培する田」であったかもしれない。意外であるが、「この稲作法は少なくとも明治時代までは広く行われ、植え田と並んで日本の在来稲作法だったといえる」（民俗大辞典）という。

全国地図には、マキタ地名が、中・大字として、4ヶ所に記載がある。

【壺ツ田】

ヒトツダ。

この小字も野池神社丘陵の麓に近いところにある。

ヒトツダとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

①ヒトツダとは、字面通りに解釈すれば、「田んぼが一枚あるだけの土地」であろうか。しかし、現在、この小字には水田は一枚も無い。

②伊那谷南部では、シ→ヒの転訛が多い。ヒトツダ←シトツダと転じたか。シト（湿地）・ツ（「場所」を示す接尾語）・ダ（処）で、ヒトツダとは「湿地」を意味する。二本の水流もあり、この解釈は現地には合っている。

全国地図には、ヒトツダ地名は1ヶ所にあり「一ツ坦」の字が当てられている。

【北川原・北川原田】

キタガワラ・キタガワラダ。

これらの小字は米川北側の右岸に、一ヶ所ずつある。

キタガワラとは何か。

一般的には、キタは「米川の北側」を意味するのであろう。キタガワラとは「米川の北岸にある川辺の、水がなくて砂石の多い所」であろう。

キタガワラダは「北川原にある水田」ということになりそうだが、現在、この小字は水田にはなっていない。この小字発生時には水田だったということは十分に考えられる。ダ（処）として、キタガワラ＝キタガワラダとすることもできそうだが、やはり別名である以上、意味も異なっているはずではある。

全国地図には、キタガワラ地名は、中・大字として14ヶ所に挙げられている。

【半ノ田尻】

ハンノタジリ。

この小字は野池神社丘陵の麓にあり、米川右岸の北側になる。

ハンノタ←ハンノウタ（半納田）で、「災害により年貢を半減された水田」であろう。ジリは形容詞ジルの略で「湿地」をいう。（以上は語源辞典）以上から、ハンノタジリとは「災害のために年貢が半減された湧水のある水田」であろうか。大雨で米川が氾濫するか、岸が崩落したのであろう。

駄科にはハンノウダ小字があるが、全国地図には、ハンノタ地名もハンノウダ地名も記載は無い。

【カ子スリバ】

カネスリバ。

この小字も米川右岸にある小さな小字である。

カネスリバとは何を意味するのであろうか。これも語源辞典に依りつつ二説を挙げておきたい。

①カネはカハ（川）・ネキ（根際）の約で、「川のすぐ傍」のこと。スリバとは材木を川で流すために「すべり落とした場所」をいうか。カネスリバとは、「川のすぐ傍で、材木をすべり落としたところ」であらうか。ただドバ（渡場）とはいわないで、スリバにしていることが気になる。

②カネ←カナの転訛した語。カナはカンナ（鉋）の古語カナの語源「カク（掻）。ナグ（糞）と同じで、「崩崖」をいう。スリバはスリ（摺）・バ（場）で「崖」のこと。カネスリバとは、「崩れた所もある崖」であらうか。

全国地図には、カネスリバ地名は無い。

【沢口】

サワグチ。

この小字は米川にもあった。ここ野池のサワグチとは少し異なる所もあるので、改めて取りあげることにした。

野池のサワグチ小字は、米川に接してその右岸にある。

サワグチとは、「米川支流の沢が米川に合流しているところ」をいう。

【牧・牧垣外】

マキ・マキガイト。

マキ小字も米川に接して、その右岸にある、比較的大きな小字である。マキガイト小字は、マキ小字に接しているが、高いところにある。

マキとは何か。二説を挙げる。

①マキは「牧場」をいうか。一方が米川で遮られているので、牧場としては都合がよかったのかもしれない。マキガイトは「牧場を管理する住宅兼作業所があったところ」であらう。

②マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「取り巻かれたような土地」であらうか。すなわち、マキとは「山に取り巻かれたような土地」をいうのであらう。そのマキの畑作に従事した家が、マキガイトにあったと思われる。

全国地図には、マキ地名が84ヶ所も、中・大字として挙げられている。

【水ノ口】

ミズノクチ。

この小字は米川上流部の右岸にある。

ミズノクチとは、「流水から水田に水を落とす、その口」をいうのであらう。この流水は米川の近くを米川に並行して流れているので、井水と思われるがはっきりはしない。

全国地図には、ミズノクチ地名が5ヶ所に記載がある。

【大ビラ・大ビラ道上】

オオビラ・オオビラミチウエ。

これらの小字は米川上流部の右岸にあって、川端のカミカワラ小字の上側にある。いずれも小さな小字である。

オオビラとは何か。オオはオオ（大）であるが、「大きい」ことをいうのではなく、接頭語で単なる美称であらう。ヒラはヒラ（平）であるが、「傾斜地」を意味する。古事記の黄泉比良坂のヒラであるという（語源辞典）。

以上から、オオビラとは、「傾斜地」をいう。オオビラミチウエとは、「オオビラ小字の近くで、道上になっている

る所」であろう。

オオビラ地名は、全国地図には2ヶ所にも、中・大字として記載されている。

【大久保松ヶ洞】

オオクボマツガホラ。

米川上流部のオオビラ小字の北側にある広大な小字である。

オオクボに相当するような「大きな窪地」はない。オオクボとはオオク(奥)・ホ(秀)で、「奥地の高い峰のあるところ」をいうのであろうか。標高832.7mの峰がある。

オオクボマツガホラとは、「奥地の高い峰のある近くにある赤松が自生している谷」をいうのであろうか。

【稲場】

イナバ。

この小字は、オオクボマツガホラ小字とマキ小字の間にある。

イナバとは何を意味するのか。先述のイナバヅリ小字の説明を繰り返す。

①イナバとは「稲干場」をいう。しかし、この小字付近に、現在は水田が無い。かつては水田が近くにあったことを否定はできないが、この解釈では弱いことになる。

②イナバとは「砂の多い土地」であろうか。これなら現地に合致するのではないだろうか。

【向山足苺】

ムカイヤマアシカリ。

この小字は野池神社の東方の山地で、広大な面積を持つ小字になっている。

ムカイヤマとは野池神社から見て「東の向の方にある山」という意であろう。アシカリのアシはアス・アズの転訛した語で、カリ(刈)は「刈り払

われたような地形」で、「崩壊地形」を表す(語源辞典)。アシとカリで意味が重複しているが、ありうることと判断した。

ムカイヤマアシカリとは、「東の方の山地であちこちに崩崖のある所」であろう。

全国地図にはアシカリ地名が3ヶ所にあるが、いずれも「芦刈」の字を宛てている。

【下フサ】

シモフサ。

この小字は向山足苺山地の南隣の山地中腹にあり、西側は急傾斜地になっている。

シモフサとは何か。難しい地名である。仮説を二つ。

①シモ(下)は「山地の麓」をいうか。フサはフサ(房)で、「ふくろの形に垂れたもの」(広辞苑)から、「水平方向に袋状に垂れた様になっている尾根の末端部」を意味しているのではないか。シモフサとは「麓の方が袋状に突き出ている尾根の末端部」であろうか。

②シモは動詞シモル(滲)の語幹で「湿地」をいい、フサはボサの転で「やぶ」を意味する(語源辞典)。すなわち、シモフサとは「やぶになっていて湧水のあるところ」であろうか。この小字の西端を沢が流れている。なお、ボサは茨城、神奈川ほかの方言であるという。

全国地図には、シモフサ地名は記載が無い。

【池田】

イケダ。

この小字は野池と芋平にある。

イケダとは、イケ(池)・ダ(処)

で、「湖沼、池、水路、川などのある所」をいう（語源辞典）。

野池のイケダは野池神社境内にあり、「池のあるところ」であろう。芋平のイケダは「川が流れているところ」であろう。

全国地図にはイケダ地名は96件中・大字として挙げられている。

【大桜】

オオザクラ。

この小字は野池神社の北側にある。オオザクラとは何を意味するのか。これも難しい。桜の大樹があったのかどうかは分からないが、それがこの小字の由来ではあるまい。他に、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオはアハ（泡）の転じた語で「湿地」をいう。サクはサクル（劔）の語幹で「えぐる。崩れる」の意。ラは「場所」を示す接尾語。以上から、オオザクラは「崩れ地のある湿地」であろうか。

②オオは動詞ヲヲル（撓）の語幹で「しなった地形」を表す。すなわち、オオザクラとは「しなったように曲がっている湿地」であろうか。

全国地図にはオオザクラ地名が5ヶ所で中・大字として挙げられている。

【栃ノ太】

トチノタ。

この小字は、北に流れるイタチ川と南に行く沢口沢川の分水嶺付近にある。

トチノタとは何か。二説を挙げる。

①ノタ←ヌタと転じた語で「湿地」をいう（広辞苑）。トチノタとは、「栃の木が自生していた湿地」か。

②トチは動詞トチルの語幹で、「まごまごする」ことから「崩崖」を意味す

るか。トチノタとは「崩れ地のある湿地」とも解することは可能ではないだろうか。

全国地図にはトチノタ地名は記載がない。

【野池林】

ノイケバヤシ。

この小字は、イタチ川支流の最上流部にあり、野池神社の北西方向にある尾根の峰（標高781.4m）を含む。

ノイケバヤシとは、これまでのノイケやハヤシの意味から、「麓に流水のある傾斜地で、樹木が茂っていて、神聖な意味もあるところ」であろうか。

【一本松】

イッポンマツ。

野池神社の西方にある芋平中継ポンプ場付近にある。

かつて目標になるような一本の松があった場所であろうか。「朽ちはてた大木の根っ子があったが、それは松の伐株であったかもしれない」（千代風土記）というのは、ここか。

【三面川】

ミオモガワ。

この小字はノイケバヤシ小字続きの尾根を含む西向き傾斜地にある。

ミオモガワとは何を意味するのか、これも難しい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ミは接頭語で美称。オモはオモ（徐）で「ゆるやかな」状態をいう。以上から、ミオモガワとは、「緩やかに流れる川のある所」であろうか。イタチ川支流は緩やかな傾斜地を北に流れている。

②オモはタオモ（田面）の上略で「田地」をいう。ミオモガワとは、「水田地帯を流れる川のある所」であろうか。

ここには、比較的大きな棚田がある。

全国地図には、ミオモガワ地名が1ヶ所にある。

【半ノ木原】

ハンノキハラ。

この小字は、ミオモガワ小字の下流側のイタチ川支流の氾濫原にある。

ハンノキハラとは「榛の木が自生している開墾地」であろう。ハラはハラ（開）で、「開墾地」をいう。低湿地が開墾されるようになったのは近世だという。

榛の木は江戸時代の中頃には植栽が大いに奨励されたという。「甚民用に利あり、所により多くもちゆべし」（宮崎安貞）とある。榛の木があると土地が肥えることもわかっていた。

全国地図には、ハンノキハラ地名は無いが、ハンノキ地名は6ヶ所にある。

【黒石】

クロイシ。

この小字はハンノキハラ小字の下流側の低湿地にある。現在は、ほとんど水田になっている。

クロイシとは何か。クロはクロ（畔）で「田畑の畦」のこと（広辞苑）。イシ（石）は、これも広辞苑によれば「岩より小さく、砂より大きい鉱物質のかたまり」である。

以上から、クロイシとは、「水田の畦に石が積まれている所」であろう。耕作の邪魔になる石があれば、畦に並べて置くようにしていたのであろう。

全国地図には、クロイシ小字が33ヶ所も中・大字として記録されている。

【柿木堀田】

カキノキホッタ。

この小字はクロイシ小字の下流側の低湿地にある。ここも近世の開墾地

であろう。

カキノキホッタとは何を意味しているのか。

カキノキは自生している柿ではないだろう。カキ（欠く）・ノキ（除）で「類義語を重ねた形で崖などの崩壊地をいう」（語源辞典）らしい。ホッタはホリタの促音便化した語。大規模な新田開発が始まる前から「各地の低湿地は私的な単位において埋め立てられ水田化されてきた。そうした開田作業は低湿地に暮らす人々にとって重要な冬場の仕事であった」（民俗大辞典）という。

以上から、カキノキホッタとは「崩れ地のある低湿地で開墾された新田のある所」であろう。

全国地図にはホッタ地名は18ヶ所、ホリタ地名は12ヶ所に記載はあるが、カキノキホッタ地名は無い。

【京ヅカ】

キョウヅカ。

この小字も低湿地のクロイシ小字の下流側にある。

キョウヅカはキョウヅカ（経塚）で、「経典を永く後世に伝えるため、経筒などに入れて地中に埋め納めて塚を築いたもの」（広辞苑）そのものである。

こんな低湿地に経塚がありうるのか、と疑問にも思ったが、低湿地の中にも凹凸はあり、そのやや高い所に埋められたのではないかと思うようになった。

全国地図には、キョウヅカ地名が26ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【稲場堀田】

イナバホッタ。

この小字も、イタチ川支流が開析した低湿地に、二ヶ所ある。

イナバの由来が二説あるので、イナバホッタの解釈も二通りになる。

①イナバは稲干場で、ホッタは「新田」。イナバホッタとは、「稲干場があった所で、開墾された新田」か。現在は殆どが水田で稲干場に使用できるような草地が、西側のイナバホッタには見出せない。

②イナバを「砂地」とすると、イナバホッタは「砂地の低湿地で開墾された新田」となるであろうか。

【東前田・西前田】

ヒガシマエダ・ニシマエダ。

これらの小字も、イタチ川支流の開いた低湿地にある。

東側にあるのがヒガシマエダで、西側にあるのがニシマエダである。

何を基準にしたマエ（前）なのか。おそらくは、南の方にある三蔵院山小字のマエと思われる。しかし村境を越えた上久堅の子之神神社である可能性もないわけではない。まだ村境のはっきりしない時代に、この小字地名が発生したのかもしれない。

【横根・横根畑】

ヨコネ・ヨコネハタ。

これらの小字は、イタチ沢とその支流の間に横たわる低い尾根筋にある。

ヨコネ小字は米川にもあった。

ヨコネとは何を意味するのか。米川のヨコネとは少し異なるので、改めて書きとどめておきたい。

ネはネ（嶺）で、「尾根」をいう（語源辞典）。ヨコネとは「水平方向に伸びた尾根筋」のことであろう。

ヨコネハタは「尾根筋が水平方向に伸びたところにある畑」であろう。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は、上久堅との村境にあるイタチ川に沿った長い小字になっていて、低い尾根筋にある。

イノクチとは「井水の取り入れ口のあるところ」をいう。もちろん井水を取り入れているのはイタチ川からである。

全国地図にはイノクチ地名が35ヶ所に、中・小字として挙げられている。

【アダカ】

この小字はイタチ川左岸の上久堅村境の尾根筋の南西向き斜面に三ヶ所ある。

アダカとは何か。今までのアダカ解釈にもう一つ加えておきたい。

①アダカはア（接頭語）・タカ（高）で、「高所」をいう（語源辞典）。つまりアダカとは「（低地から見たときの）ちょっとした高み」をいう。

②アダカはアタ・カ（処）で、アタは「端」で「台地の先端」をいう（語源辞典）こともあるという。アダカとは「側稜の先端部」をいう。

現地はどちらの解釈にも当てはまりそうな地形になっている。

全国地図にはアダカ地名は5ヶ所にある。

【寺田山・後寺田】

テラダヤマ・ウシロテラダ。

これらの小字は芋平集会所の北方にある。

テラダヤマとは、「寺院所有の田地のある山」（広辞苑）である。所有している寺院は、よく分からないが、法全寺であろうか。距離が離れているように思えるが、他に該当寺院は思いつ

かない。

ウシロテラダは「テラダヤマの後方の土地」をいうのであろう。芋平の中心部から見て、ウシロということであろうか。

全国地図にウシロタラダ地名は無い。

【行身田】

ギョウシンダ。

ギョウシン←キョウシン（供進）と転じた語で、「神に幣帛を供えること」（広辞苑）をいう。

ギョウシンダとは、「その小字から上がる収穫物を、神に幣帛を供える神事を行うための費用に宛てた土地」をいうのであろうか。

全国地図にギョウシンダ地名もキョウシンダ地名も記載は無い。

【金山免】

カネヤマメン。

この小字は芋平のミオモガワ小字の下流側にある。

この付近に金属鉱物があったとは聞いていない。では何を意味するのか。

カネヤマは「金属を扱っていた山」をいうのであるが、転じて、鍛冶職を意味しているのではないだろうか。

カネヤマメンとは、「鍛冶職人が耕作していた免田」としたいが、どうであろうか。番匠免という小字はあるが、金山免の語は今までも見ていないのが、この解釈の弱点であるが、同じ職人だから、免田があっても不思議ではない。

全国地図にカネヤマメン地名は無い。

【後田】

ウシロダ。

この小字は芋平集会所のすぐ北側

にある。野池神社丘陵の北端に近い。

ウシロダとは「後方にある土地」であるが、芋平の中心地の“後方”ということであろう。

全国地図にはウシロダ地名は32ヶ所に中・大字として挙げられている。

【西畑・西林・西垣外】

ニシバタ・ニシバヤシ・ニシガイト。

これらの小字は野池神社丘陵の北部にあり芋平の西小字群を形成しており、集会所の周辺にある。

ニシとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ニシは「西」で、「西の方」をいう。基準にしているのは、西小字群の東隣にあるカイト小字・ヤシキ小字で、そこに有力者が居住していたのであろう。

②ニシは動詞ニジル（躡）の語幹が清音化した語で、「湿地」をいう（語源辞典）。西小字群は野池神社丘陵という自然湧水の多い土地にある。

全国地図には、ニシバタ地名は13ヶ所、ニシバヤシ地名は6ヶ所、ニシガイト地名も6ヶ所に、中・大字として記載がある。

【立道】

タテミチ。

この小字は野池神社丘陵の頂上部の大きな小字である。

タテミチとは何か。二説を挙げたい。

①タテは動詞タツ（立）の連用形が名詞化した語で「台地など高くなった所」をいう（語源辞典）。タテミチとは「台地上に道路のある土地」をいうのであろう。

②タテはタテ（縦）だから、タテミチとは、「（細長い地形のところを）縦の方向に通っている道路のあるところ」

であろうか。

全国地図には、タテミチ地名は1ヶ所にあり、「立道」も字が宛てられている。

【稗田】

ヒエダ。

この小字は野池神社丘陵から東側の山地の間の下る傾斜地にある、小さな小字で二ヶ所にある。

ヒエダ（稗田）とは「稗を栽培する耕作地」（国語大辞典）をいう。ここには沢もあるが、傾斜地の湧水を利用した稗栽培が行われていたのであろう。現在は水田になっていないが、地名が生まれた時には、稗田になっていたものと思われる。野池神社の供米にしていたのかもしれない。

全国地図には、ヒエダ地名は34ヶ所にもある。

【屋敷・垣外】

ヤンキ・カイト。

いずれも野池神社丘陵の北部にある。先述のように芋平の西小字群の東側になる。

ヤンキもカイトも「有力者の居住していた所」としておきたい。

【辻】

ツジ。

この小字は野池神社丘陵の北部で台地状の高みの先端にある。

ツジはツジ（旋毛）で、「物の突起した頂」（国語大辞典）をいう。ここではツジとは「嶺になっているところ」をいうのであろう。

全国地図にはツジ地名は123ヶ所もあり、中・大字として挙げられている。

【大畑】

オオハタ。

この小字も野池神社丘陵の北部にある、小さな小字である。

オオハタは「大きな畑」ではないだろう。オオはヲ（尾）の転で「嶺」をいい、ハタはハ（端）・タ（処）で、「嶺のまわりの斜面」をいうのであろうか。あるいは焼畑が行われていた可能性もないわけではない。

オオハタ地名は多く、全国地図にも75ヶ所に中・大字として挙げられている。

【寄合畑】

ヨリアイハタ。

この小字も野池神社丘陵の北部でオオハタ小字の南東の隣で、やや高い斜面にある。

現在は荒れ地で、かつては常畑であったのか、あるいは焼畑であったのか、わからない。

ヨリアイハタとは、「共同で耕作した畑」であろうか。収穫物は共同の建物の維持管理に宛てられていたのであろうか。これもよくわからない。

全国地図には、ヨリアイハタ地名は載っていない。

【芋平】

イモダイラ。

中字になっている地名である。これも野池神社丘陵の北部でオオハタ小字の北西側にあり、平坦地となっている。

イモダイラとは何を意味するのだろうか。

イモはウモ（埋）の意で「（土砂で）埋もれた地」をいう（語源辞典）。この小字の両側は尾根になっており、過去に崩落があったことは考えられる。

イモダイラとは、「土砂で埋もれて平らになっているところ」となる。

【居廻り】

イマワリ。

この小字も野池神社丘陵の北の末端部に近いところに、二ヶ所ある。

イ(居)は単に語調を調えるだけの接頭語か。マワリ(廻)は「山裾などの屈曲した所」をいう(語源辞典)。

すなわち、イマワリとは、「丘陵の屈曲した麓」を意味する。

全国地図には、イマワリ地名は一つもない。

【下川】

シモカワ。

この小字は野池神社丘陵の北端の谷底で、イマワリ小字の下流側にある。

シモカワとは、「低地にある小さな川」をいう。ここには湧き出たばかりの水が低い方へと流れている。

全国地図には、シモカワ地名は11ヶ所に、中・大字として記載がある。

【下ヲカ】

シモオカ。

これも野池神社丘陵の北端にあって、シモカワ小字と並んでいる。

シモオカとは「低地にある低い丘」をいうのであろう。現地はその通りの地形になっている。

全国地図にはシモオカ地名が15ヶ所に挙げられており、いずれも「下岡」の字が宛てられている。

【石カノ木】

イシカノキ。

この小字は野池神社丘陵の西側にある山地の尾根に、二ヶ所ある。

イシカノキとは何を意味するのであろうか。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①イシ(石)は「小石混じりの土地」をいう。カノはカノ(刈野)で「焼畑」

のこと。キはキ(牙)で「突き出たところ」の意であろう。イシカノキとは「焼畑が行われた小石混じりの土地で、尾根が突き出している所」をいう。野池神社丘陵と西方の山地との間に細い尾根が南下している。

②カノはカケ(欠)・ノ(野)の略で「崩壊地形」をいう。イシカノキとは「崩れ地のある突き出した尾根の小石混じりの土地」であろうか。これだけの山地だから、あちこちに崩崖らしいところがある。

全国地図には、イシカノキ地名は載っていない。

【前田】

マエダ。

この小字は野池神社丘陵とイシカノキ小字のある側稜との間に谷にある。

マエダとは「前の方にある土地」であろう。マエとは野池神社から見て「前の方」と思われるが、どうであろうか。

【条ノ越】

ジョウノコシ。

この小字は野池神社丘陵の東側の浅い谷にある、ちいさな小字である。

ジョウノコシとは何か。

ジョウはジョウ(場)で、「土地を平らに開いて神をまつる所。斎場」(国語大辞典)であろう。コシはコシ(腰)で、人体に見立てた「山の中腹」であろう。ジョウノコシとは、「斎場(野池神社)のある丘陵の中腹あたり」を意味しているのであろう。

全国地図には、ジョウノコシ地名が10ヶ所に中・大字として挙げられている。

【又七田】

マタシチダ。

この小字は芋平の上久堅蛇沢との境界にある。尾根を含めた南向き傾斜地である。

マタシチダとは何をいうのか。二説を挙げる。

①マタシチが固有名詞であれば、マタシチダは「又七さん所有の土地」となる。ダはタ（田）ではなく、ダ（処）で「場所」を示す接尾語である。焼畑耕作が行われていたのであろう。

②マタはマタ（股）で、「尾根が分岐している所」か。シチはフシ（節）と類義で「節くれ立った所。高所」をいう（語源辞典）。マタシチダとは「尾根が分かれていて峰もあるところ」であらうか。

全国地図には、マタシチダ地名は載っていない。

【マセカド】

この小字は、野池神社丘陵の東方にある丘陵の北端部にある。イシカノキ小字の北隣になる。

マセカドとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①マセはマセ（柵）で、「狭い尾根」をいう。柵に見立てているのであろう。カドはカド（門）で、「家の前の空き地」をいうか。マセカドとは「痩せ尾根にあって、家の前に広場のある所」か。現在は確かに四ツ辻になっていて、家の前に広場があるが、地名発生時と変わっていないのかどうか、疑問もある。

②カドはカ（欠）・ド（処）で、「崩壊地のあるところ」から、マセカドとは「痩せ尾根で崩壊地のあるところ」か。

全国地図には、マセカド地名は無い。

【位倉森】

イグラモリ。

この小字はマセカド小字の北隣にある。

イグラモリとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イグラはキ（井）・クラ（谷）で、「自然湧水のある谷」か。クラは「谷」を意味する古語であるという。モリ（森）は小字内には無いようなので、モル（漏）から「水の湧くところ」であらうか。キと重複するが。以上から、イグラモリとは「自然湧水のある所」であらうか。ただ、小字発生時に森があったとすれば、イグラモリとは「湧水のある谷で木が生い茂っている所」か。

②イク・ラで、イクは動詞イク（活。生）の連体形で「水の湧く所」をいう。ラは「場所」を示す接尾語。イグラモリとは「湧水のある湿地で森があった所」とすべきか。

全国地図にはイグラモリ地名は記載が無い。

【平林】

ヒラバヤシ。

この小字は芋平の北端である村境に近いところにある。側稜の末端部の峰（標高 785.4m）もある。

ヒラは「山の一部が平らになっている所」をいい、バヤシはハヤシで「原野」をいう（語源辞典）。平らになっているのは峰の部分である。

以上から、ヒラバヤシとは、「山の一部が平らになっている所がある原野であったところ」であらうか。ここでも焼畑は行われていたのであろう。

全国地図には、ヒラバヤシ地名は、中・大字として、41ヶ所に記載があ

る。

【木ノ根林・木ノ根橋】

キノネバヤシ・キノネバシ。

これらの小字は芋平の上久堅村境付近にある。

キノネのキ(割)は「割れ目」で「谷間」を意味するか。ノネ←ノベと転じた語で、ノベは動詞ノブ(延)の連用形が名詞化したもので、「広くひろがった緩傾斜地」をいう(語源辞典)。以上から、キノネとは「広くひろがった谷間」をいう。この谷間は緩い傾斜地になっていて、現在も棚田が並んでいる。

キノネバヤシ小字は、キノネバシ小字の南側にある急傾斜地である。ハヤシはハヤ(逸。急)・シ(接尾語)で「急傾斜地」をいう(語源辞典)。以上から、キノネバヤシは、「広く広がった谷間につながる急傾斜地」であろう。

キノネバシとは、「広く広がる谷間のあちこちに橋が渡されていた所」としたい。水田地帯であるから、小さな橋がいくつも架けられていたのであろうか。

全国地図には、キノネバヤシ地名もキノネバシ地名も載っていない。

【日ヤケ】

ヒヤケ。

この小字はキノネバシ小字の南隣にある北東向きの傾斜地になっていて、麓を小川が流れている。現在は森と荒地になっている。

ヒヤケとは「早のために池・田などの水が涸れること」(広辞苑)である。この芋平のヒヤケはどうであろうか。念のため二説を挙げる。

①ヒヤケとは「早のときに水が涸れや

すい土地」であろうか。麓を流れる水は、そのままでは利用できないので、このような小字が生まれたのであろうか。

②ヒヤケは動詞ヒヤケル(冷)から「冷たい水の出るところ」(語源辞典)であろうか。傾斜地から冷たい水が湧いていたことも考えられる。

全国地図には、ヒヤケ地名は2ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【山田・山田山】

ヤマダ・ヤマダヤマ。

これらの小字は芋平の東部の山地にある。

ヤマダは「山間の田」(広辞苑)である。この小字は谷間にあり、低地には水田になりうるような平地がある。現在は荒地になっているが、かつては水田であった可能性は十分にある。

ヤマダヤマとは、「近くに山間の田んぼがある山地」をいうのであろう。この小字の最高点は標高960.4mの峰である。

全国地図にはヤマダ地名は296ヶ所に及び、ヤマダヤマ地名も5ヶ所に中・大字として記載がある。

【上ヲサ】

カミオサ。

この小字は野池神社東方の山地にある。

カミオサとは何をいうのか。語源辞典に依りつつ、仮説を二つ。

①カミはカミ(上)で、「川の上流部」をいい、オサはヲ(峰)・サ(「場所」を示す接尾語)で「山稜」のこと。すなわち、カミオサとは「川の上流部にある山の連なり」であろうか。

②カミは動詞カム(噛)の連用形が名詞化した語で「水が岩や砂を激しくえ

ぐる」ことをいう。カミオサとは、「岩や砂が激しくえぐられる崩壊地のある峰続きの山地」であろうか。

全国地図にはカミオサ地名は無いが、オサ地名は5ヶ所に、中・大字として記録されている。

【持穴・子持穴】

モチアナ・コモチアナ。

これらの小字は、芋平東部の山地にあり、カミオサ小字の北隣になっている。

コモチアナとは、「小さいモチアナ」であろう。モチアナとは何を意味しているのか。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①モチはミチ（満）→モチ（望）で満月に見立てて「鏡餅形の土地」をいう。アナ（穴）は「三方を丘陵に囲まれた地」のこと。以上から、モチアナとは「三方を丘陵に囲まれ、峰が鏡餅のようになっている山地」をいう。

②モチはモチ（糺）で、「粘り気のある状態」で「湿地」のこと。すなわち、モチアナとは、「三方を丘陵で囲まれた湿地のある土地」をいうのであろうか。

全国地図には、モチアナ地名もコモチアナ地名も記載は無い。

【伝田沢】

デンダザワ。

この小字も芋平東部の山地にあり、ヤマダヤマ小字の奥地となっている。デンダザワは全国地図には記載が無いが、伊那谷南部には少なくない小字である。

デンダとは、植物のゼンマイのことで、下伊那郡や愛知県北設楽郡の方言であるという（方言大辞典）。デンダザワとは、「ゼンマイが自生している

谷川」であろう。

【先苧】

サキガリ。

この小字も芋平東部の山中にあり、デンダザワ小字の奥地の尾根筋となっている。

サキガリとは何をいうのであろうか。サキガリは「先刈山」のことであろうか。先刈山とは「伊那地方（長野県）に多くみられた入会山の一種。先刈権をもつ村の有力者が一番草を刈りとり、そのあと一般の入会権者が採草する山」（国語大辞典）であるという。

全国地図にはサキガリ地名は載っていない。

【山ノ屋敷】

ヤマノヤシキ。

この小字は芋平東部最奥地の広大な小字となっている。

ヤマノヤシキとは何を意味しているのか。わかりにくい小字である。この山中に有力者の屋敷があったとも思われぬし、山人の小屋を屋敷ということはあるにしても、地名にはなりにくのではないか。

ヤシキ←ヤジ・キ（「場所」を示す接尾語）で、ヤジはヤチ、ヤツと同じく「湿地」をいう（語源辞典）。であれば、ヤマノヤシキとは「深い山地で湿地の多いところ」であろうか。

むろん、全国地図にはヤマノヤシキ地名は記載されていない。

【高根】

タカネ。

この小字は、米川の北東部に山中にある。

タカネとは、文字通りで「高い峰のある山地」であろう。この小字には、

標高 873.6m の峰がある。

全国地図にもタカネ地名は 27ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【大阿らし】

オオアラシ。

この小字は米川右岸にあり、タカネ小字との間に挟まれている、大きな小字である。

オオアラシとは何か。アラシは風の古語であるが、オオアラシは風が強い所という意味ではないだろう。仮説を二つ。

①アラシは「山の急斜面の上から木材などを投げ下す場所、又はそうするために出来た溝。信州や相州などで」(分類山村語彙)であろう。南信濃では転がすことをアラスとっている。その連用形が名詞化した語であろう。オオアラシとは「あちこちに材木落としの場所があった土地」であろう。米川を管流ししたのであるか。

②アラシとは「休耕中の焼畑」の意もある(広辞苑)。ここではかつて焼畑耕作も行われていたのであるか。オオアラシとは、「広い面積で、焼畑が行われていた土地」か。

全国地図には、オオアラシ地名が、中・大字として 3ヶ所に挙げられている。宛てられている字はすべて「大嵐」。

【井戸洞・上井戸洞】

イドボラ・カミイドボラ。

これらの小字は米川上流部の右岸にある。

カミイドボラは「より上流にある井戸洞」を意味する。

イドボラとは、「はしり井のある小さな谷」をいう。イドは井(井)・ド(処)で、井にはいろいろな意味があるが、この場合は米川に流れ込む谷川

のことであろう。ドは「場所」を示す接尾語。

全国地図にはイドバラ地名が 2ヶ所にある。

【大日向】

オオヒナタ。

米川右岸にある、大きな小字である。

オオヒナタとは、字面の通りで、「日当たりのいい、広い土地」をいうのであろう。ほぼ南向きの土地が、現在は果樹園が多いが、かつては養蚕が盛んだったのではないだろうか。

全国地図には、オオヒナタ地名は 20ヶ所にも及ぶ。

【矢平】

ヤダイラ。

この小字も米川右岸にあり、野池山尾根の中腹から麓にかけては、現在も、水田・果樹園・桑畑などがある。

ヤダイラとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ヤダイラはヤ・タイラで、ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」をいい、ダイラは「山の中腹から麓のあたりで平らなところ」か。ヤダイラとは「自然湧水のある、山腹から麓にかけての平らなところ」であろうか。

②ヤダイラはヤタ・イラで、ヤタはヤツ・ヤチと同じように「湿地」をいい、イラはイラ(苛)で「尾根筋の縁辺で、角張って険しい地形」をいう。すなわち、ヤダイラとは「湿地もあり、尾根先端の急傾斜地のあるところ」であろうか。

全国地図には、ヤダイラ地名が、6ヶ所に、中・大字として記載されている。

【今巻】

イママキ。

この小字は、野池山丘陵の尾根を含む北西向き斜面にある。

イママキとは何か。二説を挙げたい。

①イママキはイマ（今）・マキ（牧）で、「新たにできた牧場」を意味するのであろうか。

②イママキはイ（接頭語）・ママ（崩れ地）・キ（崎）で、「崩崖のある尾根の突き出た所のある土地」か。イは「語調を整え、意味を強める」。ママは「崩壊地」をいい、キは「崎」の略である（語源辞典）。

全国地図にはイママキ地名は無い。

【八斗畑】

ハットバタ。

この小字は米川左岸の丘陵地の北側にある緩傾斜地となっている。現在は棚田状の土地に針葉樹が植えられているのだろうか。

ハットバタとは、「八斗の収量を挙げていた畑」であろうが、たぶん、ここでも焼畑が行われていたのであろう。小字の境もはっきりしていないで、面積も全く分からない。ヒエやアワが作られていたのであろうか。

全国地図には、ハットバタ地名は記載が無い。

【姥ヶ懐】

ウバガフトコロ。

この小字は米川左岸にあつて、米川沿いに一ヶ所、米川の南方山地に一ヶ所、小さなものがある。

ウバガフトコロとは、国語大辞典には、「くうばに抱かれていりところの意から>風のこない暖かい場所。とくに南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう。また、このような土地は製陶に適していたところから、

陶土を産する場所の地名として呼ばれた」とある。

ここ米川のウバガフトコロは「風のこない暖かい場所」であろうか。南面はしていないが、巽の風などの強い風は吹かないところと思われる。陶土のことについては、ここでは不明。

【藪ノ上】

ヤブノウエ。

この小字は、米川左岸にあり、ウバガフトコロ小字とオオダイラ小字の間にある。

ヤブノウエとは、文字通り、「雑木か竹などが密生している所の上流側」をいうのであろう。ヤブに何か意味があるとすれば、藪神の祭場があったかもしれない。

ヤブノウエ←ヤブノカミ（藪ノ上）←「藪神」と転じた可能性もあるがどうであろうか。

全国地図には、ヤブノウエ地名は1ヶ所にだけある。

【井枕】

イマクラ。

この小字はヤブノウエ小字の山地側にあり、ちょっとした洞になっている。低地は、現在、棚田状の荒地になっている。

イマクラとは何か。語源辞典に依りつつ三説を挙げる。

①イマクラはイ（接頭語）・マ（真）・クラ（谷）で、「谷らしい谷」をいうか。イは強意の接頭語、マは「真」の意味の接頭語、クラは「谷」の古語である。

②イマクラはイ（接頭語）・マク（撒）・ラ（「場所」を示す接尾語）で、「崩壊地のあるところ」か。

③イマクラはイマ（忌）・クラ（谷）

で、「忌むべき谷」をいうこともあるか。但し、その内容については未確認。

全国地図にはイマクラ地名は無い。

【大平】

オオダイラ。

米川左岸にある。氾濫原の一つ上の段丘にはかなり広い平地があって、現在も住宅がある。

オオダイラとは、「山の中腹から麓にかけての広い平地」をいうのであろう。

【家ノ下】

イエノシタ。

この小字も米川左岸に、二ヶ所ある。

イエノシタとは、「有力者の居住地の下側の土地」をいうのであろう。有力者の居住地とは、オオダイラ小字に住んでいた人であらうか。

全国地図には、イエノシタ地名は、4ヶ所に中・大字として挙げられている。

【南ノ切】

ミナミノキリ。

この小字は米川左岸の氾濫原と南側丘陵の間の傾斜地にある。

キリ（切）はキリ（断）で「断ち切られたような地形」（語源辞典）をいう。ミナミノキリとは「（米川中心部の）南の方の断崖がある所」であらうか。この小字の南西端は米川支流である塩沢川が削った断崖になっている。

全国地図には、ミナミノキリ地名は記載が無い。

【合度寫】

アイドシマ。

この小字は米川左岸の氾濫原にある。南端を米川支流の塩沢川が流れている。

アイドシマのアイはアヒ（合）で

「（二つ以上のものが）合う所」（語源辞典）で、ド（渡）は「沢や谷が合流する地点」（広辞苑）である。すなわち、アイドシマとは「沢の合流点で島のようにになっていた所」を意味する。米川に支流の塩沢川が合流する上流側にあり、二本の沢に囲まれて島状になっていた土地であらう。

アイドシマ地名は全国地図には無い。

【亀角坊】

キカクボウ。

この小字は、塩沢川右岸の急傾斜地に、ジャバミ小字を間にして二ヶ所にある。小字内には標高 743.4m の側稜の峰がある。

ボウ（坊）は「僧侶の住居」（広辞苑）である。キカクボウとは、法全寺に関わるような僧坊をいうのであらう。この尾根伝いには山道もあり、坊がかって存在したことをうかがわせる。

全国地図にはキカクボウ地名は載っていない。

【塩沢】

シオザワ。

この小字は、塩沢川上流部のジャバミ小字の周辺に、三ヶ所ある。

シオザワとは何を意味しているのか。川路では「塩分が混じった湧水の入る川」であったが、米川ではどうであらうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シオは動詞シボル（搾）の語幹で「楔形の谷の奥」を意味する。シオザワとは「楔形の谷の奥地に流れている谷川」であらうか。ここには越坪沢川が急傾斜地を流れている。

②シオは動詞シホル（霑）の語幹で「湿

地」をいう。シオザワとは「湿地のある谷川」となる。塩沢川は上流部でも曲流点で川幅が広がり、湿地帯になっている所がある。

全国地図では、中・大字としてシオザワ地名は3 4ヶ所に挙げられている。

【蛇喰】

ジャバミ。

この小字は、米川左岸に二ヶ所あり、一つは塩沢川上流と、もう一つは越坪沢川が米川に合流する地点にある。

ジャバミは「山野で、円形に草木が生えない所」（広辞苑）となっているが、伊那谷南部では、もう少し具体的に「岩崩れ地」（語源辞典）をいうことが多い。

塩沢川上流は急傾斜地になっているので、流域の各地で崖崩れがあったと思われる。

また、米川との合流点では小さな小字になっているが、二つの川が増水時に左岸を削ったのではないだろうか。

全国地図には、ジャバミ地名は8ヶ所に、中・大字として記載されている。

【矢落】

ヤオチ。

この小字は、塩沢川左岸でミナミノキリ小字の反対側の川岸にある。

ヤオチとは何か。これも語源辞典に依りつつ二説を挙げておきたい。

①ヤオ・チで、ヤオは「やわらか」の語根ヤハ（柔）から「土地の固くない場所。湿地」をいい、チは「場所」を示す接尾語である。以上から、ヤオチとは「湿地になっているところ」をいう。

②ヤ・オチで、ヤはヤツ（菴）の略で「湿地」をいい、オチはオチ（落）で

「崖」のこと。つまり、ヤオチとは「崖地のある湿地」ということになろうか。

全国地図には、2ヶ所にヤオチ地名が中・大字として記載されている。

【道上】

ミチウエ。

この小字は、米川左岸の主要道路に接している。

ミチウエとは「主要道路より高いところにある土地」であろうか。この小字は道路と側稜の峰の間にある。

ミチウエ地名は、全国地図に、13ヶ所が中・大字として記録されている。

【赤椰】

アカナギ。

この小字も米川南方の丘陵地の北向き傾斜地にある。

アカナギとは何か。これも二説を挙げたい。

①アカはアカ（赤）で、表土の色をいう。赤土を意味しているのであろう。アカナギとは「土の色が赤い崩れ地のあるところ」を意味するか。

②アカはアカ（垢）で「湿地」のこと。アカナギとは「崩崖のある湿地」（語源辞典）をいうのであろうか。

全国地図には、アカナギ地名は1ヶ所にしか、記載が無い。

【老平・老平田】

オイダイラ・オイダイラタ。

これらの小字は、米川左岸にあって氾濫原の上の段丘上にある。やや大きなオイダイラタ小字の北西－南東方向に一つずつの小さなオイダイラ小字がくっついている。

オイダイラとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①オ・イは接頭語が二つ重なっている。

ヲは「小さい」の意を示し、イは「語調を整え、意味を強める」接頭語。オイダイラとは「ほんのちょっとした平地」であろうか。しかし、かつてのオイダイラが二ヶ所の小字を繋いだような、広い地籍をもっていたとすれば、この説は成立しない。

②オイ←オキ（沖）と転訛した語で、「山寄りに対して川に面する低い方」をいう。オイダイラとは、「川に近い平坦地」であろうか。これらの小字は米川とジャバミ山地の間にあるので、曖昧なところもあるが、信州の方言であるという強みもある。

③オイ←オシ（押）と転じたもので、「押し出された地形」のこと。オシダイラとは、「南側の山地から土砂が押し出されて平地になっているところ」であろうか。

オイダイラタとは、「オイダイラ小字の近くにある水田」を意味していると思われる。

全国地図には、オイダイラ地名は、11ヶ所に中・大字として挙げられている。

【家造垣外】

ヤヅクリカイト。

この小字は米川左岸の二ヶ所にある。一つは米川に接し、もう一つは主要道路に接している。

ヤヅクリカイトとは何であろうか。「建築に関わる職人の住んでいた所」ではあるまい。少しぎくしゃくとした名称になってしまう。ではヤヅクリカイトとは何を意味しているのか。これも語源辞典に依りつつ、二説を挙げたい。

①ヤツ・クリで、ヤツはヤ・ヤチと同じく「低湿地」をいい、クリは動詞ク

ル（刳）の連用形が名詞化した語で「抉られたような地形」をいう。以上から、ヤヅクリカイトとは、「崩れ地のある低湿地の住居跡」か。

②クリは副詞クルクルの関連で「回転」を意味し、「海岸などの湾曲」をいう。ヤヅクリカイトとは「湾曲している湿地にある住居跡」であろうか。この解釈、やや持って回った感じがぬぐえないか。

むろん、全国地図にはヤヅクリカイト地名は載っていない。

【半場】

ハンバ。

この小字は、米川支流である塩沢川左岸にある。アイドシマ小字の対岸になる。

ハンバとは、「川べりの緩傾斜地」をいい、長野・島根の方言であるという（国語大辞典）。ハンバはハバ（岨）の変化した語ではないかともいう。

2500分の1の全国地図には、ハンバ地名は、10ヶ所に中・大字として記載されている。

【平十畑】

ヘイジュウハタ。

この小字は米川左岸の氾濫原の上の段丘にある、小さな小字である。

ヘイジュウは固有名詞で、ヘイジュウハタとは「ヘイジュウが耕作している畑」であろうか。

全国地図にはヘイジュウハタ地名は無い。

【川原・上川原】

カワラ・カミカワラ。

これらの小字は米川左岸の下流側にあり、米川の上流側にあるカワラ（川原）とは別の小字群であろう。カミカワラ小字の上流にカワラ小字が

あることになってしまふからである。

これらの小字は米川氾濫原とその上段にわたって、長い小字になっている。

前にも述べたように、カワラは「川辺の水がなくて砂石の多い所」であり、カミカワラは「カワラ小字の上流側にある土地」をいう。

【藪上】

ヤブウエ。

これは小さな小字で、米川左岸の氾濫原の上の段に先端部にある。米川に向かって降りる斜面がヤブに当たる。

前に触れているように、ヤブとは竹・雑草・雑木などの密生している所である。このヤブにはヤブガミの祭場があった可能性もある。そうした場所は草を刈ったり樹木を切ったりすると、祟りがあると怖れられていた。

ヤブウエとは、「竹、草、樹木が密生している場所の上の段」であろう。

全国地図に、ヤブウエ地名は載っていない。

【家ノ上・家ノ下】

イエノウエ・イエノシタ。

これらの小字は米川左岸にある。イエノシタ小字は氾濫原に、イエノウエ小字はすぐ上の段丘上にある。

イエがあったのは、カミカワラ小字にあった有力者の家であろう。現在はJA千代支所がある。

【団子免・團子目】

ダンゴメン・ダンゴメ。

これらの小字は米川左岸にあり、氾濫原の上の段丘上にある。ダンゴメンは小さな小字で二ヶ所にある。

ダンゴメ←ダンゴメンと転じたものであるであろう。団子に目を連想したと思われるがどうであろうか。

ではダンゴメンとは何を意味しているのか。タンゴには「撓んだ地形」（語源辞典）の意もあるが、ここでは当てはまらない。国語大辞典に依りながら二説を挙げる。

①律令制で雑戸の中にタンコ（鍛戸）がある。宮内省の鍛冶司に属していたという。ダンゴ←タンコと濁音化した語で、「鍛冶職」のことをいうのであろう。タンゴメンとは、「鍛冶職人が耕作していた田畑で、租税が免除されていたところ」であろうか。

②ダンゴ←タンコウ（鍛工）と転訛した語で、「鍛冶屋」のことをいう。①と同じになるが、ダンゴメンとは「鍛冶屋が耕作していた田畑で租税は免除されていたところ」である。

全国地図にダンゴメン地名は載っていない。

【樽下】

タルシタ。

この小字は米川の支流である越坪沢川が奔流する、小さな洞になっている。

タルはタル（垂）で、「滝」のこと。飯田地方の方言であるという（国語大辞典）。山岳信仰では滝の周辺に神を祀り汚れを清める行事の場として滝行や水行などの荒行が行われたという（民俗大辞典）。

タルシタとは、文字通り「滝の下」であろう。

意外と思われるが、タルシタ地名も、全国地図には無い。

【稲場・外稲場】

イナバ・ソトイナバ。

これらの小字は米川左岸にあって側稜の西向きの先端部にある。

イナバとは、伊那谷南部には多い小

字で「稲干場」を意味し、ソトイナバとは「イナバ小字の外側すなわち周辺部にある土地」をいうのであろう。

ソトイナバ地名はあまり聞かない地名であるが、全国地図には無い。

【根ノ神】

ネノカミ。

この小字はジャバミ小字の西側にあり、越坪沢川が流れている、小さな小字である。

ネノカミ(子ノ神)は十二支の北方にある子を神格化したもので、子の権現、あるいはキノエネサマ(甲子様)ともいう。関東地方では子の神をまつる鎮守や小祠、子の神の神号を刻んだ石造物などが多くみられるという。子の権現は天台系修験道と深い関係にあり、修験者によって伝播されたことが知られている。火伏や足腰の病に効験があるといわれている(以上は日本民俗語彙と民俗大辞典による)。

米川のネノカミ小字では子の神が祀られていたと思われるが、痕跡はあるのだろうか。

全国地図にはネノカミ地名が、中・大字として、5ヶ所に採られている。

【越坪】

コエツボ。

この小字は越坪沢川が開析した二つの谷を含む大きな小字である。

コエツボとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら、仮説を二つ挙げたい。

①コエはコシに通じ、「崩壊地形」を示すことがある。コシは動詞コズ(掘。抉)の連用形の名詞化した語とみる。ツボは動詞ツボム(窄)の語幹で「窄んだ地形。窪地」をいう。以上から、コエツボとは「崩壊地のある窪地」を

意味するか。

②コエはコ(単なる接頭語)・エ(江)で、「川」をいう。コエツボとは「川が流れている窪地」であろうか。

意外であるが、コエツボ地名は、全国地図に記載が無い。

【百目】

ヒヤクメ。

この小字は越坪沢川の最上流部にあり、コエツボ小字の上流側になる。

ヒヤクメは面積か、播種量かは分からないが、作物に関する小字であろう。現在は谷部分が畑地になっている。

ヒヤクメ地名も全国地図には無い。

【日蔭坂】

ヒカゲザカ。

この小字はコエツボ小字とヒヤクメ小字に挟まれている。

ヒカゲザカとは「日当たりの悪い坂道」であろうか。側稜の北西向きの傾斜地になっており、現在も山道になっている。

全国地図には、ヒカゲザカ地名は1ヶ所が中・大字として記載がある。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は米川の最東部にあり久保田沢川の最上流部にもなっている。

イドイリとは何か。

イドは井(井)・ド(処)で「流水のある所」としたい。イリはイリ(入り)で、「川の上流部」をいう。すなわち、イドイリとは「谷の奥地で川が流れているところ」であろうか。

全国地図には、なぜか、イドイリ地名は載っていない。

【井坪】

イツボ。

この小字は、米川の奥の山地にあり

三方をイドイリ小字に囲まれている。米川の第7集会所もある。

イツボのイは井（井）で、「堤」をいうか。ツボは「窪地」であろう。つまり、イツボとは「堤のある窪地」をいうのであろうか。

全国地図には、3ヶ所が中・大字として挙げられており、いずれも「井坪」の字が宛てられている。

【高洞】

タカホラ。

この小字も米川東部の山地にある。タカホラとは、「上流の高いところにある小さな谷」をいう。米川の東部に山地にある洞を指している。

全国地図には、タカホラ地名が1ヶ所にだけある。

【向峠】

ムカイトウゲ。

この小字は米川の東部山地にある。久保田沢川上流部の左岸丘陵地にある。

ムカイトウゲとは何か。二説を挙げたい。

①ムカイトウゲとは「向こう側で峠のあるところ」であろうか。「向こう側」とは、久保田沢川の対岸の北側にある、ヒナタ・イナバジリ小字のある集落からみた時の方向になる。

②ムカイは動詞ムク（剥）の連用形メケから転じた語で、「剥かれたような地形」をいう（語源辞典）。ムカイトウゲとは、「崩壊地のある峠」か。久保田沢川の谷から西の南沢へ抜ける峠である。

全国地図には、ムカイトウゲ地名は記載されていない。

【向田】

ムカイダ。

この小字は、久保田沢川の谷にある。ムカイトウゲ小字より低いところになる。このムカイもムカイトウゲのムカイと同じで、ヒナタ・イナバジリ小字のある集落から見て「向にある田んぼ」か、あるいは、「崩壊地にある田んぼ」を意味するものと思われる。

ムカイダ地名になると、意外なことに、全国地図には41ヶ所ものムカイダ地名が、中・大字として記載されている。

【樋ヶ入】

トヨガイリ。

この小字は米川左岸の山地にあり、幅のある谷になっている。

トヨガイリ＝トイガイリで、伊那谷南部の方言。トヨガイリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トヨ（樋）は「川」のこと。古くは人工のものに限らず、水の流れるところをトイといたらしい。イリは「上流」のこと。以上から、トヨガイリとは「川の上流部になっている所」か。久保田沢川の上流になる。

②トイは動詞ドエル（崩）の語幹ドエの転で「崩壊地、浸食地」をいう。トイガイリとは「川の上流部で崩壊地のあるところ」をいう。

全国地図にはトヨガイリ地名もトイガイリ地名も記載は無い。

【稲葉尻】

イナバジリ。

この小字は米川東部の丘陵中腹部の集落の中にある。

イナバジリとは、「稲干場の先端部」をいうのであろう。

イナバジリ地名も全国地図には無い。

【日向・日向畑】

ヒナタ・ヒナタバタ。

これらの小字も米川東部の丘陵中腹部にある集落の中にある。

ヒナタは「日当たりのいいところ」、ヒナタバタは「日当たりのいいところにある畑」であろう。

全国地図にはヒナタ地名は141ヶ所と多いが、ヒナタバタ地名は記載が無い。

【元宮下】

モトミヤシタ。

この小字も米川東部の丘陵中腹部にある。

モトミヤシタとは、字面通りで、「以前にあった神社の下方」をいうのであろう。元宮があったのは、モトミヤシタ小字の50mほど北東にあるミヤヤシキ小字であろうか。

当然であるが、モトミヤシタ地名は全国地図には無い。

【下垣外】

シモガイト。

この小字は久保田沢川中流域の右岸にある。トウザガイト小字の西隣になる。

下垣外とは「有力者の居住地の下側にある住居跡」か、あるいは「地蔵堂の下側にある住居跡」であろうか。有力者の居住地があったのはトウザガイト小字と思われる。

【地蔵堂】

ジゾウドウ。

この小字は、シモガイト小字に二方向で接している。

ジゾウドウとは「地蔵堂があった所」であろう。

地蔵信仰が民衆の間に広く浸透したのは平安時代中期以降。地蔵縁起の地獄の責苦を罪人に代わって受ける

地蔵の献身は中世以降、あらゆる階層の人々の渴仰するところとなり、民衆の現世利益への期待は各地に地蔵霊場を出現せしめ、地蔵像の造立が相次いだ。民間には個人祈願と併行して講組織による地蔵信仰が行われてきた。ムラの地蔵堂や講宿に会し、地蔵和讃や念仏を唱えて地蔵菩薩や画像を拝み、共同飲食をする。寺院を離れた地域社会における女人中心の信仰集団である。(民俗大辞典)

米川の地蔵堂でも、そうした地蔵講が行われていたのかもしれない。

全国地図に挙げられているジゾウドウ地名は、25ヶ所と多い。

【当座垣外】

トウザガイト。

この小字は、米川氾濫原と南方の丘陵地の中の段丘上にある。

トウザガイトとは何を意味しているのか。苦し紛れに二説を挙げる。

①ドウザガイトとは「堂座講が行われた住居跡」か。堂座講とは祭祀組織のことで、ホトケをまつる堂を中心に正月行事の修正会・おこないなどの関係することが多かったという(民俗大辞典)。和歌山や奈良で盛んだったというが、米川にもあったのであろうか。
②ドウザ←トウザ(頭座)と転じたもので、「神事頭人(とうにん)たりうる者の仲間のこと」をいう。兵庫で使われているという(民俗語彙)。米川に果たして頭座があったのかどうかは不明である。トウザガイトとは「神事の世話役が住んでいたところ」であろうか。

全国地図にはトウザガイト地名は記載されていない。

【池ノ窪】

イケノクボ。

この小字は、米川南方の丘陵と氾濫原の間の緩傾斜地にある。

イケノクボとは、文字通りで、「水が溜まった池のある窪地」であろう。

全国地図には、イケノクボ地名は9ヶ所にあり、中・大字として記載されている。

【宮屋敷】

ミヤヤシキ。

この小字はモトミヤシタ小字の北東 50m ほどのところにあり、イケノクボ・タルシタ・コエツボの小字に囲まれている、小さな小字である。

ミヤヤシキとは「お宮があった所」を意味していると思われる。この神社は、モトミヤシタ（元宮下）の宮とも重なると思われるが、詳細は不明である。

全国地図には、ミヤヤシキ地名は載っていない。

【東】

ヒガシ。

この小字の西側には、シモガイト・トウザガイト・トノガイト・ジョウダイラなどの小字がある。

ヒガシは「東の方になる所」であるが、何の東であろうか。ジョウダイラ小字には川手氏三代の居館が合ったという（千代村誌）。とすれば、「ジョウダイラの東の方」ということになるがどうであろうか。

全国地図には、ヒガシ地名が196ヶ所にも、中・大字として記載されている。

【久保】

クボ。

米川左岸の氾濫原の上の段にある。クボは「窪地」を意味する。この小

字の半分近くが、現在は水田になっている。窪地であることがわかる。

【垣外尻】

カイトジリ。

この小字は米川左岸の氾濫原の上の段にあり、段丘の先端部になっている。

カイトジリとは「垣外小字群の末端部の土地」であろうか。これより下側にはカイト系小字はないということだろうか。

全国地図には、カイトジリ地名は載っていない。

【中島】

ナカジマ。

この小字は米川左岸の氾濫原にあり米川に沿っている。

ナカジマとは、「かつて米川の中洲であった所」を意味する。

どこにでもある地名で、全国地図には、ナカジマ地名がなんと262ヶ所も中・大字として挙げられている。

【押廻シ】

オシマワシ。

この小字は、米川左岸の氾濫原の高みにある。

オシマワシとは動詞オシマワスの連用形が名詞化した語であるが、分かりにくい小字名である。分からないながらも、敢えて仮説を二つ挙げておきたい。

①マワシはこの小字の地形を、腰に巻くまわしに見立てたのかもしれない。とすると、オシマワシとは「ほぼ円形の背の低い台地」をいうのであろうか。
②かつて米川の分流が岸を洗っていた場所で、オシマワシとは「川に押されて円弧のような岸になっていた所」だろうか。

あるいは、近くには、トノガイト小字やタイザ小字があるので、お宮か寺院に関わる小字とも思えるが、不明である。

全国地図には、中・大字として、2ヶ所にオシマワシ地名が記載されている。

【島ノ田】

シマノタ。

この小字は米川左岸の氾濫原にあるが、ナカジマ小字を挟んで、米川の反対側になる。

シマノタとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①シマノタはシマ（島）・ノ（助詞）・タ（処）で、かつては「米川の中洲であったところ」であろうか。中洲だから田んぼではないだろう。

②シマノタはシマ（島）・ノタ（野田）でノタはヌタと同じで「湿地」を意味する。シマノタは「中洲で湿地になっている所」であろうか。

全国地図にはシマノタ地名は記載が無い。

【松葉沢】

マツバザワ。

この小字は、米川の左岸に二ヶ所あり、一つは久保田沢川左岸で久保田沢川に沿う細長い小字で、もう一つは少し西に離れて主要地方道下条米川飯田線に沿っている。

マツバサワとは何を意味しているのか、はっきりしない小字である。

沢が合流する地形を、二股になっている松葉に見立てたのであろうか。マツバサワとは「二つの沢が合流しているところ」であろうか。現地では久保田沢川に越坪沢川が、ここで合流している。

全国地図にはマツバザワ地名も載っていない。

【田中】

タナカ。

この小字は、丘陵の先端部の緩傾斜地にある。

タナカとは一般的には「田んぼの中の集落」であろうが、ここには当てはまらない。ではタナカとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

①タナカはタナ（棚）・カ（処）で、「棚状の地形になっている所」をいうか。

②タナカはタ（接頭語）・ナカ（中）で、「二つの平坦地の間にある傾斜地」をいうのだろうか。タは意味を持たない接頭語、ナカは「二つのものの間」をいう（以上は語源辞典）。やや無理気味か。

タナカ地名はどこにでもある。全国地図に、中・大字として取りあげられているタナカ地名は339ヶ所と非常に多い。

【畑田】

ハタダ。

タナカ小字の続きにあるが、現在は大部分が水田になっている。

ハタダとは何か。二説を挙げておく。
①ハタダとは、当然に「畑と水田のある耕作地」ということになりそうだが、どうであろうか。

②ハタダはハタ（端）・ダ（田）で、「丘陵の先端部にある水田」か。現地は棚田になっている。

全国地図には、ハタダ地名は、12ヶ所が中・大字として挙げられている。

【久保田】

クボタ。

この小字は米川左岸の氾濫原の上

の段にある、大きな小字である。現在は一部が水田になっており、大部分は住宅地である。

クボタはクボ（窪）・タ（処）で、「窪地」を意味するものと思われる。

【殿垣外】

トノガイト。

この小字はジョウダイラ小字の西隣になるが、丘陵の麓に近い傾斜地にある。

トノガイトとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①トノガイトといえば、「貴人の邸宅があった所」となりそう。しかも隣は三代にわたる支配者の居館のあったところである。しかし、ここは傾斜地になっており、ここが貴人の居住地跡とは考えにくいと思うのだがどうであろうか。

②トノはタナ（棚）の転訛した語で、「棚状の地」をいう（語源辞典）。カイトは「垣の外」をいう（広辞苑）。居館の垣の外側を意味するのであろう。すなわち、トノガイトとは、「棚状になっていて、居館の垣の外になっていた所」であろうか。

全国地図には、トノガイト地名は10ヶ所に中・大字として記載されている。

【城平】

ジョウダイラ。

側稜の末端部で高い所にある。千代村誌には川手氏三代の居館があった所であるという。

ジョウダイラとは「城塞のあった、山頂の平地」であろうか。

千代村誌には、城平城にまつわる伝説が採録されている。

全国地図にはジョウダイラ地名は

載っていない。

【稗田入】

ヒエダイリ。

この小字は米川東部の山地にある広い小字である。

ヒエダイリとは何か。二説を挙げる。

①ヒエダイリとは「稗田のある谷の奥地」をいう。田稗は水温が低くても育つ作物なので、山間地の田んぼで栽培されることが多かったと思われる。

②ヒエは動詞ヒウ（聳）の連用形で名詞化した語、「削り取られた地形」をいう（語源辞典）。タはタ（処）で、「場所」を示す接尾語。以上から、ヒエダイリとは、「崩崖のある谷の奥地」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒエダイリ地名は記載が無い。

【一本木】

イッポンギ。

この小字は米川東部の山地にあり、ミナミサワ小字とヒエダイリ小字に囲まれている。

イッポンギとは、「一本の大きな樹木があった所」であろう。古い樹木でその樹種を決めることができなかったのではないだろうか。

全国地図にもイッポンギ地名は39ヶ所にも、中・大字として記載されている。

【姥ヶ入】

ウバガイリ。

この小字も米川東部の山地にあり、イッポンギ小字の更に奥地にある。

ウバガイリとは何か。山姥伝説があれば別であるが、次のように考えたい。

ウバは動詞ウバウ（奪）から「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ウバガイリとは「崩崖のある、さらに奥地」を

いうのであろう。

全国地図にはウバガイリ地名は無い。

【熊造連】

クマゾウレ。

この小字は、法全寺東北部の山地にある。

ゾウレ二は①「焼畑が行われた所」と②「急傾斜地」の二つの意味がある。「ゾレ、ゾウレはソリ、ソラ、ソウリなどと共に焼畑という地名だが、これも、もともと崖地や急傾斜面を指す地形語から出たもの」（民俗地名語彙事典）という。

またクマにも①ツキノワグマのこと②クマ（隈）で「奥まって隠れた所」（広辞苑）と、二つの解釈がかのうである。

これらのクマとゾウレの由来を組み合わせると四つの解釈が可能である。それを並べてみると、次のようになる。クマゾウレとは、

- ①ツキノワグマが出没する焼畑耕作地。
- ②ツキノワグマが出没する急傾斜地。
- ③山地の奥で焼畑が行われていた所。
- ④山地の奥で急傾斜地になっている所。

全国地図には、クマゾウレ地名は記載が無い。

【南沢】

ミナミザワ。

この小字は法全寺の米川との境を南から北流する沢の、細長い谷になっている。

ミナミザワとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

- ①ミナミザワとは「南の方から流れてくる谷川」をいうのであろうか。

②ミ（美称の接頭語）・ナミ（ナメの転で緩傾斜地）で、「緩い傾斜地」（語源辞典）をいう。すなわち、ミナミザワとは、「緩い傾斜地を流れる谷川」を意味するか。

全国地図には、ミナミザワ地名は、40ヶ所に中・大字として挙げられている。

【南原】

ミナミハラ。

この小字は、二ヶ所にある。一つは米川左岸の沿岸にあり、もう一つはクマゾウレ小字に囲まれていて、クマゾウレ小字を挟んでミナミザワ小字の東奥にある。いずれも小さな小字である。

ミナミハラとは何か。どういう地名だろうか。はっきりしないが、次のように考えたい。

ミンミハラとは、「ミナミザワの近くにある入会草刈り地」ではないだろうか。

全国地図には、ミナミハラ地名も多く、42ヶ所に記載されている。

【榎田峠】

エノキダトウゲ。

この峠はミナミザワ小字を通る、米川—法全寺の間の脇街道にある。

エノキダとは、「エノキが自生していたか植えられていた所」を意味するか。ダはダ（処）であろう。すなわち、エノキダトウゲとは、「榎が茂っていた峠」と思われる。

エノキダトウゲ地名は、全国地図には無い。

【関ノ方】

セキノカタ。

この小字は、ミナミザワ小字に囲まれている。

セキノカタとは何を意味するのか。セキは固有名詞であれば「関の領地」ともなるが、そうではあるまい。ではセキノカタとは何か。二説を挙げたい。①セキはセキ（関）で、「関所」をいう。カタ（方）は「場所」のこと（広辞苑）。セキノカタとは「関所があった所」か。中世の関所では交通路の修理費に当てるために交通税を徴収したという。参詣者の多い通路や社寺門前には多くの関所が設けられ、織豊時代まで続いた（国史大辞典）。

②セキはセキ（堰）か。セキノカタとは「川に堰があった所」だろうか。ミナミザワ小字を流れる谷川から水を谷底部の水田に引いていたことも考えられる。現在は、このセキノカタ付近の谷の平坦部に水田がある。

全国地図には、セキノカタ地名は記載が無い。

【一本木】

イッポンギ。

この地名は米川にもあった。法全寺のイッポンギ小字は、米川左岸の氾濫原にあり、主要地方道下条米川飯田線が貫いている。

ここにも樹種不明の老木があったのだろうか。村人や旅人たちの目標になっていたのかもしれない。

イッポンギとは、「目立つほどに大きな一本の老木があったところ」であろう。

【大座】

タイザ。

この小字は、東方にあるジョウダイラ小字から直線距離にして 200m も離れていない。

伊那谷南部にはタイザ小字は多い。上久堅のタイザ小字については、次の

ように書いた。「本所とは別になっていて、物神事に関わって興行した田楽・猿楽など芸能集団の上演場のあった所」（上久堅の小字）としたが、この時点で訂正することは考えていない。

【三廻し】

サンマワシ。

谷沢川に沿う主要地方道下条米川飯田線の谷と南沢の谷の間にある尾根の山中に、この小字はある。

サンマワシとは何をいうのか。難しい地名である。

サンは数字の「三」であろう。マワシは動詞マワス（廻）の連用形が名詞化した語で、マワルと同じ意味に使っているのではないだろうか。すなわち、サンマワシとは「(ほぼ等高線沿いの)道を行くのに三回もぐるっと曲がる場所」と考えたがどうであろうか。

当然なことであるが、サンマワシ地名は全国地図には無い。

【向山・向畑・上向畑】

ムカイヤマ・ムカイバタ・カミムカイバタ。

これらの小字は米川左岸の山地にある。

ムカイは米川対岸の尾根筋にある観音小字群から見たムカイと思われる。

ムカイヤマは「(観音小字群の)対岸にある山地」をいうのであろう。

ムカイバタは「(観音小字群の)対岸にある畑あるいは山地の先端部」となる。畑であれば焼畑であろう。畑でなければハタ（端）である。

カミムカイバタは「ムカイバタの上流側にある土地」をいうか。

全国地には、ムカイヤマ地名は10

4ヶ所、ムカイバタ地名は5ヶ所に、中・大字として記載されている。

【三廻し向山】

ミマワシムカイヤマ。

この小字は、ムカイヤマ小字とミマワシ小字に接している。

ミマワシムカイヤマとは「ミマワシ小字とムカイヤマ小字の近くにある土地」か。

さすがに、前項地図にはミマワシムカイヤマ地名は載っていない。

【芝原】

シバハラ。

この小字は、米川左岸沿岸の急傾斜地にあり、主要地方道下条米川飯田線が中を通っている。

シバハラといえば「芝の生えた野原」(広辞苑)となりそうだが、ここでは合わない。語源辞典に添いながら二説を挙げたい。

①シバは「雑木」のこと。ハラはハラ(腹)で、「中腹」をいう。すなわち、シバハラとは、「雑木の林となっている、山の中腹部」をいうのであろうか。

全国地図にはシバハラ地名が38ヶ所に中・大字として記載されている。

【銭神】

ゼニガミ。

この小字は、米川支流の谷沢川と主要地方道下条米川飯田線の中の急傾斜地にある。

ゼニガミとは何か。二説を挙げたい。

①ゼニガミは「蛇の異称」(広辞苑)だという。足がなくても走る意で銭にたとえたらしい。ゼニガミとは「蛇の多く棲息する所」であらうか。

②ゼニガミ←ゼニガメと転訛したと考えることはできないだろうか。ゼニガメとは「銭瓶が埋まっていた所」で

あろう。発掘されたという言い伝えはないであらうか。

全国地図には4ヶ所に、ゼニガミ地名が中・大字として記録されている。

【瀧下・瀧上】

タキシタ・タキウエ。

タキシタ小字は谷沢川右岸の急傾斜地にあり、タキウエ小字はさらに西側に広がり、側稜の尾根に達する。

タキシタ小字の近くには不動明王碑があり、熊野のように瀧行が行われていたのかもしれない。タキ(瀧)は「高いがけから流れ落ちる水」(広辞苑)をいうのであろう。

タキシタとは「瀧の下で瀧壺のあるところ」をいうのであろう。瀧行が行われたとすれば、この小字のかなであらう。

タキウエは「瀧の上流部」をいうのであろう。しかし、ここで瀧行が行われたかどうかは分からない。

不動明王は種々の煩惱を焼き尽くし、悪魔を降伏し、行者を擁護して菩薩を得させる明王として信仰され、不動尊が大日如来の忿怒像であるとされたので、ことに東密の僧によって護持された、という(民俗大辞典)。

全国地図には、タキシタ地名は16ヶ所に挙げられており、タキウエ地名は1ヶ所にしかない。

【中尾・中尾峠・中尾日陰】

ナカオ・ナカオトウゲ・ナカオヒカゲ。

これらの小字は、主要地方道下条米川飯田線とその東方の谷にある脇街道の間の側稜の尾根と西側斜面になる。

ナカオはナカ(中)・オ(峰)で、「二本の南北に走る道路の間にある

尾根」をいうのであろう。

ナカオトウゲは「ナカオの尾根を越える峠」であり、ナカオヒカゲは「尾根の北西向きの斜面で日当たりのよくない所」をいう。

全国地図には、ナカオ地名は148ヶ所があり、ナカオトウゲ地名も2ヶ所ある。

【川尻】

カワジリ。

この小字は、谷沢川右岸にあり、ナカオ小字の上流側にある。谷沢川に開口する洞になっている。

カワジリとは「谷沢川に合流する小さな沢の川下の地域」をいうのであろうか。この沢の川上はナカオ小字になっている。

全国地図には、カワジリ地名は、中・大字として、17ヶ所に記載されている。

【藤内田】

トウナイダ。

この小字も谷沢川右岸にあり、カワジリ小字の上流隣になる。

半分は急傾斜地で水田は作れなかったと思われる。

トウナイは固有名詞であろう。トウナイダとは「藤内の所有地であった所」であろう。あるいは、焼畑が行われていた可能性もないではない。

【川原】

カワラ。

この法全寺のカワラ小字は谷沢川の右岸にあり、トウナイダ小字の上流隣にある。カワラ小字の六割ほどは急傾斜地になっているが、氾濫原には水田もあり、住宅もある。

ここのカワラとは「川辺の、水がなくて砂石の多い所」（広辞苑）である

う。

【坂裾】

サカスソ。

この小字は谷沢川右岸にあり、カワラ小字の上流隣にある。

サカとは「一方が高く一方は低く、傾斜している道」をいう（広辞苑）。サカスソとは「坂道の麓部分」をいう。

全国地図には、サカスソ地名は無い。

【坂ノ下】

サカノシタ。

この小字は、中尾丘陵の中腹部にあり、サカスソ小字より高い所になる。

サカノシタとは「エノタザカという坂道の下側にある所」を意味する。

坂は上と下という相異なる空間を結ぶ通路であり、その途中は危険な場所とみなされ、神仏がまつられたという。

全国地図には、サカノシタ地名が57ヶ所も、中・大字として記載されている。サカに何らかの意味があったということをおうかがうことができる。

【天白】

テンパク。

この小字は谷沢川の谷と南沢の谷との間の中尾丘陵の尾根付近にある。

テンパクとは「天白神を祀っていた所」をいう。

天白とは三遠南信地方に分布する。種々の神格をもった神であるが、ここでは山の神か風神か。

全国地図にはテンパク地名は4ヶ所にある。

【恵ノ田・衛ノ田・衛ノ田坂】

エノタ・エノタザカ。

これらの小字も南沢の脇道の峠付近にあり、エノキダトウゲ小字の南隣になる。

エノタとは何を意味するのだろうか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①エノタはエ(江)・ノ(助詞)・タ(処)で、「湿地のあるところ」か。現在は一部が田んぼになっているが、大部分は荒地になっている。

②エは動詞エル(彫)の語幹で「掘られたような地形」をいう。ノタはノタ(野田)で「湿地」をいう。以上から、エノタは、「掘られたような形になっている湿地のある所」であろうか。

エノタザカは「エノタ小字付近にある坂道」であろう。

全国地図には、エノタ地名は載っていない。

【古リトリバ】

コリトリバ。

この小字は、南沢の谷をたどる脇道の東の山地に入ったところにある。

コリトリバとはコリトリバ(垢離取場)で、「垢離の行をする場所」である。垢離は神仏に祈願するとき、冷水を浴びて身体の穢れを除き、心身を清浄にすること。真言宗や修験道からおこったものという。(以上は国語大辞典)

コロトリバから出て、祈願のためにどこへ行ったのであろうか。法全寺か熊野神社か、それとも近くにあるドウ小字に関係する御堂か。

不思議なことに、全国地図にはコリトリバ地名は載っていない。

【なき田】

ナキダ。

この小字は、南沢脇道の東側にある。ナキダはナギ(薙)・ダ(処)で、「崩壊地のある所」であろう。現在は荒地になっているが、地名発生時は棚

田だった可能性はある。そうなれば、ナキダは「崩壊地のある水田」になる。

全国地図には、ナキダ地名は記載が無い。

【堂・堂ノ上・堂ノ下】

ドウ・ドウノウエ・ドウノシタ。

これらの堂小字群は、南沢脇街道が主要地方道下条米川飯田線に合流する直前の道の東側にある。

ドウ(堂)は「神仏を祭る建物」(広辞苑)であろう。どんな御堂であったのかは分からない。

ドウノウエは「御堂のある所より上の地」をいい、ドウノシタは「御堂のある場所の下の土地」であろう。

全国地図には、ドウ地名は9ヶ所、ドウノウエ地名は4ヶ所、ドウノシタ地名は8ヶ所に、それぞれ中・大字として記載されている。

【垣外・大垣外】

カイト・オオガイト。

これらの小字は、堂小字群より傾斜地の上にある。

カイトは「居住地跡」、オオガイトは「大きな屋敷跡」か。いずれも御堂と関係のある有力者が住んでいたところであろう。

【ゼガンボ・上ゼガンボ】

カミゼガンボ。

これらの小字は法全寺の東部丘陵にある。堂小字群や垣外小字群のさらに奥の山地になる。

ゼガンボとは何か。はっきりしない小字の一つである。

ゼ←セと濁音化した語で、セ(背)は「物のうしろ側の部分」(国語大辞典)をいうか。ガンボ←ガンボウと転訛したもので、ガンボウはガンボウ(看坊)で、「中世末期から近世にか

けての寺院前姿形態としての堂場」である。これが仏道修業を行う場であった。(以上は民俗大辞典)

以上から、ゼガンボとは、「(堂小字群・垣外小字群の) 後側の山地に看坊があった所」としておきたい。

カミゼガンボとは「ゼガンボより高い土地」をいうのであろう。

全国地図にはゼガンボ地名は記載が無い。

【又兵エ畑】

マタベエハタ。

この小字は法全寺東方の山地にある、大きな小字ではない。

マタベエハタとは「又兵エが所有する土地」としておきたい。焼畑するには少し狭いように思えるが、どうか。

【新ヶ沢】

シンガサワ。

小字図には、シンガサワ小字は法全寺の東方丘陵の二ヶ所にあるが、この二つが繋がっている広大な小字なのかもしれない。

シンガサワとは何か。これもよく分からないが、「新開地のある谷川の流れているところ」であらうか。焼畑が行われていたのであらうか。

全国地図にはシンガサワ地名が3ヶ所に挙げられている。

【シキビ】

この小字は堂小字群の南隣からずっと東の山地に続く長くて大きな小字になっている。

シキビ←シキミと転訛した語と思われる。シキミとは何を意味しているのか。語源辞典に添いながら二説を挙げる。

①シキミはシギ(棧)・ミ(「場所」を示す接尾語)で、「階段状の地形」を

いう。この小字の北側半分は谷底部で棚田になっている。

②シキ・ミで、シキは動詞シク(頻)の連用形で「(何かが)重なった所」であるという。すなわち、シキミとは「平坦な谷底部に山稜の末端部の急傾斜地が被さって重なっているところ」であらうか。

全国地図には、シキビ地名は記載が無い。

【前田】

マエダ。

この小字は谷沢川に沿った右岸の三ヶ所にある。

マエダは「前の方にある田んぼ」を意味するものと思われる。どこから見てのことかということ、谷沢川対岸のキタノカイト小字付近とみていいのではないであらうか。

【丸早】

マルマチ。

この小字は谷沢川右岸にあつて、マエダ小字に囲まれている。

マルマチとは何か。これも分かりにくい地名であるが、二つ挙げておく。

①「丸い形の地形になっていて、建物がいくつもある所」であらうか。

②あるいは、「市場」があつたかもしれない。マチには市場の意味もある(語源辞典)。すなわち、マルマチとは「丸い土地で市場があつたところ」か。

全国地図には、マルマチ地名は1ヶ所に記載がある。

【荒垣外】

アラカイト。

この小字は谷沢川右岸にある。

アラは動詞アレケル(粗。散)から「崩壊地形」をいう(語源辞典)。ア

ラカイトとは、「崩れた所もある住居跡地」であろうか。

全国地図にはアラカイト地名は無い。

【郷ノ沢】

ゴウノサワ。

この小字は、アラカイト小字から東方の熊野神社まで続く、長い小字である。

ゴウノサワとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りつつ、解釈を二つ。

①ゴウはゴウ（合）で「川の合流点」をいう。ゴウオサワとは「同じくらいの二つの谷川が合流する土地」か。同じくらいの川であれば目につきやすいか。

②ゴウ←コウ（神）と転じた語で、「神域を流れる沢」を意味するのであろうか。熊野神社が上流側にある。

全国地図には、ゴウノサワ地名は記載が無い。

【松葉ヶ洞】

マツバガホラ。

この小字はゴウノサワ小字の北側にあり、熊野神社の近くになる。

マツバガホラとは何か。二説を挙げる。

①マツバガホラとは文字通り、「松葉が多く落ちている所」であろう。焚きつけに使うために集めることがあったのではないか。子どもの頃、数人の仲間と一緒にゴカキといって松葉集めに山に入ったことがある。

②マツバは二股に分かれているところから、「松葉のように二股になっている谷」をいうのであろうか。

全国地図にはマツバガホラ地名は載っていない。

【登林】

ノボリバヤシ。

この小字は谷沢川右岸にあって、氾濫原にあるカワラ小字の東隣になる。

ノボリは「上り坂になっている所」であり、ハヤシは「樹木の茂ったところ」であろう。すなわち、ノボリバヤシとは、「上り坂になっている樹木の茂ったところ」であろう。

全国地図には、ノボリバヤシ地名は記載が無い。

【野池作】

ノイケヅクリ。

この小字はノボリバヤシ小字の南東の隣になるが、谷沢川からは少し離れている。

ノイケヅクリとは何を意味しているのか。語源辞典に添いながら二つの解釈を挙げたい。

①ノは「緩傾斜地」、イケは「水気のある所」、ツクリは「耕作」をいう。以上から、ノイケヅクリとは「自然湧水のある緩傾斜地で耕作地もある土地」であろうか。現在でも、一部は水田になっている。

②ノは「入会草刈場」で、ツ（津）・クリ（刳）で、ノイケヅクリとは「湧水のある湿地で、入会の草刈り地になっているところ」であろうか。ツとイケで意味が重複するのが、やや気になる。

ノイケヅクリ地名も、全国地図には記載が無い。

【市ノ瀬】

イチノセ。

この小字は谷沢川右岸に三ヶ所ある。本来は一体の小字であったと思われる。

イチノセとは何か。これも語源辞典

に依りながら、仮説を二つ。

①イチーイツ(巖)の転訛した語で「けわしい地形」をいう。ノセは「緩傾斜地」のこと。以上からイチノセとは「険しい所もある緩傾斜地」をいうのであろう。

②イチは「市場」をいう。すなわち、イチノセは、「市場も開かれる緩い傾斜地になっているところ」か。

全国地図にはイチノセ地名は91ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【松屋】

マツヤ。

この小字は、イチノセ小字に挟まれている。

マツヤとは、「松の自生していた湿地」であろうか。現在も七割ほどが水田になっている。この地の居住者が瑞祥地名としてマツヤと名付けたのではあるまい。

全国地図には、マツヤ地名は4ヶ所中で中・大字として挙げられている。

【崩岩】

ナギイワ。

この小字は谷沢川左岸にある。

ナギイワとはナギ(籬)・イワ(岩)であるが、イワ(岩)は「大きさが石と土との間のもの」をいう(国語大辞典)。すなわち、ナギイワとは「崩れ地もある砂利地」であろうか。

全国地図には、ナギイワ地名は無い。

【カジヤ】

この小字は谷沢川の両岸にわたっている。

カジヤとは「鍛冶職人が住んでいたところ」であろう。鍛冶屋とは、鉄を打ち鍛えて刀剣・刃物・馬具、農具・釘、カスガイなどを製作し、あるいは

修理にあたる職人のこと。寺社の仕事が多かったと思われるが、農鍛冶もあったので農村を回って直し仕事をするが多くなってきたのではないだろうか。林業地域では、材木運搬に必要な鳶口の修理再生が必要であったし、山鋸も絶えず目立て・刃焼を繰り返す必要があった。

全国地図には、カジヤ地名が中・大字として、82ヶ所にも挙げられている。

【柳立間】

ヤナギタテマ。

この小字は、谷沢川右岸にある、比較的大きな小字で、大部分が急傾斜地になっている。

ヤナギタテとは何をいうのであろうか。ヤナ(「斜面」)・ギ(「場所」を示す接尾語)・タテ(立)・マ(「場所」の接尾語)で、ヤナギタテマとは、「斜面の多い所で、丘陵の先端部」となるか。タテ(立)は「岡の尾崎で、低地に臨んだ丘陵の端」をいう。(以上は語源辞典)

全国地図にはジャナギタテマ地名は無い。

【馬道】

ウマミチ。

この小字は谷沢川を跨ぐようにして、ヤナギタテマ小字の上流側にある。

ウマミチも二説を挙げる。

①ウマミチとは字面通りで、「馬の通る道」(国語大辞典)である。材木などの荷物運搬用の馬が通っていたのであろう。

②あるいは、材木を運び出すキンマ(木馬)が通る道があったのかもしれない。そうならば、ウマミチとは「木馬の通路があった所」となろう。

【高林】

タカバヤシ。

この小字はウマミチ小字の北隣の高いところにある。

タカバヤシとは文字通り、「高い尾根につながる急傾斜地となっているところ」であろう。ハヤシには「急傾斜地」の意味もある。

全国地図には、タカバヤシ地名は6ヶ所にあつて、中・大字として挙げられている。

【捨地ヶ窪】

ステチガクボ。

この小字はタカバヤシ小字の北東側に張り付いている、小さな小字である。

ステチガクボとは、「(何かを)捨てる場所であった窪地」のことと思われるが、何を捨てていたのかは、わからない。なにか、他に意味があるのであるか。

全国地図にもステチガクボ地名は記載が無い。

【荒木】

アラキ。

この小字はタカバヤシ小字の北東側こうちにあり、尾根筋まで含んでいると思われる。

アラキとは何を意味するのか。二説を挙げておく。

①アラキはアラキ(新墾)で「新たに開墾した地」(広辞苑)をいうか。

②アラキとは「焼畑の一年目のもの」(語源辞典)をいう。水窪で使われている語だという。つまり、アラキとは「焼畑が行われていた土地」となるか。

全国地図には、アラキ地名が33ヶ所も、中・大字として挙げられている。

【中ノ平】

ナカノタイラ。

この小字はウマミチ小字の上流側にある。

ナカ(中)は「山地と平地の間」をいうのであろうか。タイラ(平)は「山の中腹から麓あたり」(語源辞典)を意味するという。以上から、ナカノタイラとは「山の中腹から麓にかけて平坦地もある所」であろうか。麓には、現在でも水田がある。

全国地図には、ナカノタイラ地名は6ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【曾倉沢】

ソグラザワ。

この小字は、ナカノタイラ小字の北隣になる側稜の尾根筋にある。

ソはソ(背)でセ(背)と同じ、グラ=クラで「断崖」のこと。すなわち、ソグラザワとは、「切り立った断崖のある尾根筋から流れ出る谷川」を意味するのであろう。

全国地図にはソグラザワ地名は2ヶ所、ソグラ地名は1ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【入道平】

イリミチダイラ。

この小字は、ナカノダイラ小字の更に上流側に接近して二ヶ所尾にある。この道路は谷沢川に沿って遡ると、行き止まりになっている。

イリミチダイラとは、「道路の奥地にある山中の平坦地」であろう。現在でもわずかな水田がある。

しかし、この小字はニュードウダイラではないかという気がしてならない。もしそうだとすれば、ニュードウダイラとは、この小字の北部にある標

高841.5mの独立峰を入道に見立てたのではないだろうか。つまり、ニュードウダイラとは「入道のような独立峰もある山中の平坦地」となるが、どうであろうか。

全国地図にはイリミチダイラ地名もニュードウダイラ地名も記載は無い。

【下川原】

シモガワラ。

この小字はナカノダイラ小字とイリミチダイラ小字の間にある。

シモガワラとは、「下流側にある川原」をいうのであろうが、基準がわからない。すぐ上流側にある、法全寺第5集会所であろうか。

シモガワラとは「低地にある川原」でもあるが、当然すぎて地名にはなりにくいかもしれない。

【横手】

ヨコテ。

谷沢川上流部で、林道千遠線に沿っている小字である。

ヨコテとは「横に当たる方向」（広辞苑）から、「山腹」をいう。すなわち、ヨコテは「側稜の中腹部分の土地」をいう。

全国地図にはヨコテ地名は、中・大字として、38ヶ所に挙げられている。

【山葵野】

ワサビノ。

谷沢川の上流部にあり、中を林道千遠線が通っている。

ワサビ（山葵）は日本原産のアブラナ科多年草。ノ（野）は「山すその傾斜地」（広辞苑）をいう。すなわち、ワサビノとは、「ワサビが自生している山すその傾斜地」であろう。

全国地図には、ワサビノ地名は記載

が無い。

【山口】

ヤマグチ。

この小字は谷沢川上流部で、林道千遠線が通っている。

ヤマグチとは、山への入口であろうが、年明けの初山などの時に、簡単な神事が行われたところと思われる。

全国地図には、ヤマグチ地名は233ヶ所も、中・大字として挙げられている。

【峠】

トウゲ。

この小字はヤマグチ小字の北東隣にある。現在も途中で切れているが、山中に向かう山道がある。かつては野池に通じる山道があったのであろうか。その山道のトウゲ（峠）であろうか。途中には、石灰岩地帯である大屋敷とか土嵐という集落があったはずである。

【山神ノ上】

ヤマノカミノウエ。

ヤタケ小字の北隣で、谷沢川を離れた山地に、この小字はある。

ヤマノカミノウエとは、「山の神を祀っている場所より高い所にある土地」をいうのであろう。

山の神を祀っている場所はどこにあるのだろうか。ワサビノ小字にあるお宮か、ヤマグチ小字に祭祀場があるのかどうか。

山の神の名で小祠・磐座・大木または特徴のある樹木を依代としてまつているほか、幣帛または常磐木をもって山中の随所でまつる。その神観念や信仰様態は地域により職能により特色はあるが、共通のものもある。通常定期的な山の神の祭は年頭の初山

入りと年間一度ないし春秋両度の山の神の日に行われる。山の神の日には、地域住民が集落の山の神の社において祭事を営み、そのあと講宿で酒宴を催す。(以上は民俗大辞典)

法全寺のヤマノカミはどのような祭事になっているのであろうか。

【矢竹】

ヤタケ。

この小字は、法全寺の居住地の谷沢川最奥地になる。ヤマノカミノウエ小字とワサビノ小字の南隣になる。

ヤタケとは「ヤダケ(矢竹)が自生している土地」であらう。

ヤダケ(矢竹)は「ササの一種。高さ約3m、節間は長く節は低い。稈(かん)で矢・かごなどをつくる」(広辞苑)という。

全国地図には、ヤタケ地名は、9ヶ所に、中・大字として記載されている。

【グミヶ平】

グミガダイラ。

この小字は法全寺南西部にあり、フドウボウトウゲ小字の南隣になる。谷沢川左岸の側稜の北向き傾斜地にある。

グミガダイラとは何か。ダイラ(平)は「山の中腹から麓のあたり」をいう(語源辞典)。とりあえず、二説を挙げておく。

- ①グミガダイラとは、「グミ(茱萸)の自生している山稜の中腹から麓あたり」を意味するか。千代境の蛇沼で自生していた茱萸を見たことがある。
- ②グミ←クミと濁音化した語。伊那谷南部の方言で、「崩る」という意味の動詞クムの連用形が名詞化したものであろう。グミガダイラとは「くんだ所(崩壊地)のある山稜の中腹から麓の

付近の地」をいうのであろうか。

全国地図にはグミガダイラ地名は一つも載っていない。

【入大久保】

イリオオクボ。

この小字は法全寺の谷沢川左岸にあり、オオクボ小字の南側になる。北向きの緩傾斜地と麓の平坦地とからなる。

イリオオクボとは、「オオクボ小字の谷の奥に平坦地も含む緩い傾斜地」をいうのであろうか。オオは美称の接頭語と思われるが、窪地になっていないのが気になる。地名発生時には、もっと広い小字で窪地を含んでいたのかもしれない。

全国地図にはイリオオクボ地名は無い。

【小屋ノ平】

コヤノタイラ。

この小字は、法全寺南東部の山地で、蛇沢川の谷の東側の側稜にある。

コヤノタイラとは「開墾あるいは耕作のために造られた仮小屋のある緩傾斜地」をいうのであろうか。焼畑が行われていた可能性もある。

全国地図には、コヤノタイラ地名は2ヶ所にある。

【不堂坊峠】

フドウボウトウゲ。

この小字は、林道千遠線に沿っている。ヨコテ小字とミズカミ小字の間にある。

この峠は林道曾倉沢線に向かう山道の峠をいうのであろう。

フドウボウトウゲとは何を意味しているのだろうか。語源辞典によって二説を挙げたい。

- ①フドウボウトウゲとはフドウボウ

トウゲ（不動坊峠）であろうか。すなわち、「不動明王を祀る御堂のあった峠路」を意味することも考えられる。②フドウ←ブドウと清音化した語で、「連嶺」をいう。ボウは動詞ボウケルの語幹から「そそけ乱れた様子」のこと。以上から、フドウボウトウゲとは「崩壊地もある側稜の連嶺で峠路のある土地」か。

全国地図には、フドウボウトウゲ地名も、フドウボウ地名も記載は無い。

【芝ノ沢】

シバノサワ。

法全寺の主要地方道下条米川飯田線に添う谷となっている。

シバノサワとは何か。二説を挙げる。

①シバは動詞シバル（縛）の語幹で「徐々に萎んでゆく地形」という（語源辞典）。シバノサワとは「上流に行くほど萎んでいく谷」であろうか。あまりにもありふれた解釈か。この谷は水田と荒地が棚田状に並んでいる。

②シバノサワは「柴の沢」で、「斜面が柴山になっている谷」をいうか。柴山とは入会草刈地であろう。

全国地図には、シバノサワ地名は、2ヶ所にあつて、中・大字として記載されている。

【松葉古沢】

マツバコザワ。

この小字は、法全寺の谷沢川左岸に添っている。谷沢川の南にある丘陵の北向きの傾斜地から麓までの、広い範囲にわたっている。

マツバについては、次のどちらかであろうと、マツバガハラ小字の所で考えた。①二股に分かれているものか②焚きつけになる落ち葉の松葉のことか、と。

しかし、この小字は広いということもあるので、上記とは別の解釈を示したい。

マツバコザワはマ（接頭語）・ツバ（端）・コ（接頭語）・ザワ（沢）で、接頭語は、いずれも語調を整えるものか。ツバ（端）は帽子のツバに見立てた語で、「台地の端など、ある地形の端」だという。（以上は語源辞典）以上から、マツバコザワとは、「丘陵の北側の先端部になっている土地」であろうか。

【京塚原】

キョウヅカハラ。

この小字は谷沢川左岸にあつて、南の丘陵地の中腹から麓にかけた所にある。

キョウヅカ（京塚）はキョウヅカ（経塚）であろう。経塚とは「経典を永く後世に伝えるため、経筒などに入れて地中に埋め納めて塚を築いたもの」（広辞苑）という。その上に五輪塔などを建てることもあるという。

キョウヅカハラとは「経筒などを埋めた経塚のある山腹」であろうか。塚があるのかどうかは未確認。

全国地図にはキョウヅカハラ地名はないが、キョウヅカ地名は26ヶ所に中・大字として記載がある。

【大久保】

オオクボ。

法全寺のオオクボ小字は、谷沢川左岸の平坦に近い緩傾斜地にある。

オオクボとは「大きな窪地」であるが、一方だけは谷沢川の自然堤防である。

【中島】

ナカジマ。

この小字は法全寺の蛇沢川右岸に

ニヶ所ある。

ナカジマとは、「蛇沢川の中洲があった所」と思われる。蛇沢川が改修される前に、この中島はあったのであろう。

【水かみ】

ミズカミ。

この小字は法全寺の蛇沢川中流部の右岸にある。

ミズカミにはミズカミ（水上）で、「川の上流部」の意味もあるが、ここには適応できない。

ミズカミとはミズカミ（水神）であろう。水伯のことで、いまはスイジン（水神）の方が分かりやすい。水神とは「水、特に飲用水・灌漑用水などをつかさどる神。また、火災を防護する神」（広辞苑）という。ここに蛇沢川からの水の取り入れ口があったのかもしれない。

全国地図には、ミズカミ地名は39ヶ所にも及ぶ。中・大字名である。

【半六畑】

ハンロクハタ。

この小字は蛇沢川右岸の丘陵の尾根から川岸にまで及ぶ広い面積を持つ。現在も氾濫原にはわずかではあるが、水田がある。

ハンロクは固有名詞であろう。すなわち、ハンロクハタとは、「半六が所有していた畑のあった土地」であるが、このハタケは焼畑であったと思われる。南西向きの急傾斜地になっているので、常畑は現在でもごく一部にしかない。

全国地図には、当然ながら、ハンロクハタ地名は載っていない。

【古根口】

コネクチ。

法全寺の南西部の産地にあり、蛇沢川最上流部となる小字である。

コネクチとは何か。

コネは動詞コヌ（捏）の連用形が名詞化した語で、「泥地。湿地」であろうか。クチはクチ（口）で、「川の合流点」（語源辞典）をいう。以上から、コネクチとは、「湿地を下る谷川の合流点があるところ」であろうか。

全国地図にコネクチ地名は記載がない。

【蛇沢】

ヘビサワ。

この小字は、蛇沢川左岸の広大な面積をもつ、側稜の尾根を含む山地になっている。

ヘビサワとは何をいうのか。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①ヘビサワとは、字面の通りで、「蛇が多い谷のある所」か。

②蛇沢川の支流が何本か流れている。ヘビサワとは「蛇のように曲がりくねった谷川のある土地」であろうか。

③ヘビはハブと同義で、「崩壊地」をいう。ヘビサワとは、「崩壊地があちこちにある谷川が複数ある所」であろうか。

全国地図にはヘビサワ地名が10ヶ所に、中・大字として記載されている。

【野田ノ平・野田平峠】

ノダノタイラ・ノダダイラトウゲ。

ノダノタイラ小字は、蛇沢丘陵の西側にある幅の広い谷になっており、ノダダイラトウゲ小字は、主要地方道下条・米川・飯田線が法全寺から泰阜へ抜ける峠路にある。

ノダ＝ノタで、ヌタが転訛した語で「湿地。低湿地」をいう（広辞苑）。

ノダノタイラとは、「湿地帯となっている、緩傾斜地があるところ」であろう。現在、山間の緩傾斜地の殆どが棚田になっている。

ノダダイラトウゲとは、①「ノダノタイラ小字の近くにある峠」をいうか、あるいは②「山間の緩傾斜地で湿地になっている峠」か。

全国地図にはノダ地名は155ヶ所もあるが、ノダノタイラ地名は一つも無い。

【安ヶ平】

ヤスガダイラ。

この小字は、蛇沢川左岸の氾濫原にある。

ヤスはヤ(菴)・ス(州)で「湿地」(語源辞典)をいう。ヤスガダイラとは、「湿地にある山間の平坦地」をいうのであろう。

【木切ヶ坂】

キキリガサカ。

この小字は谷沢川と蛇沢川が合流するところにある。

キキリガサカとは何を意味するのか。キキリとは「木を切ること」をいうが、静岡や諏訪では「きこり」を意味することがある(方言大辞典)。二説を挙げる。

①キキリガサカとは、「木樵が住んでいた坂道」をいうか。

②キキリガサカとは、「木を切って運ぶために、材木を落とした坂」であろうか。こうした場合、一般にはアラシを使うが、使わないことがあってもおかしくはない。

【寺山】

テラヤマ。

この小字は、ホウゼンジ小字に接しており、谷と尾根を含む広い小字にな

っている。

テラヤマとは文字通り、「法全寺所属の山」であろう。あるいは、単に「法全寺のある山」である可能性もある。

【不動坊】

フドウボウ。

この小字は主要地方道下条米川下条線の近くにある。

フドウボウとは、「不動明王を祀る御堂のある場所」であろう。

不動信仰は平安末期から山伏を通して地方に広まったという。法全寺の不動信仰についても同じことがいえるのではないだろうか。

全国地図にフドウボウ地名は載っていない。

【梨木之平】

ナシノダイラ。

主要地方道下条米川飯田線の泰阜境界地に近いところにある小字。東向きの急傾斜地にある。

ダイラは「山の中腹から麓のあたり」をいう。ナシは動詞ナシル(擦)の語幹で、「擦られたような地形」をいう。

(以上は語源辞典)

すなわち、ナシノダイラとは、「崩壊地のある山の中腹から麓となっているところ」であろうか。

【鍋倉・鍋倉坂】

ナベクラ・ナベクラザカ。

この小字は法全寺の南西部で泰阜境の山地にある。

ナベクラとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ナベは動詞ナブ(並)の連用形で「並んだ地形」。クラはクラ(座)で「物をのせる台」(広辞苑)か。すなわち、ナベクラとは、「物を載せるような台が二つ並んでいるように見える所」を

いうのであろうか。

②ナベは「谷」を意味する古語で、クラはクラ（鞍）で「馬の背に載せる鞍の形」をいう（以上は語源辞典）。ナベクラとは「谷の多い馬の鞍型の尾根になっている所」か。

ナベクラザカとは、「ナベクラ小字の近くにある坂道」か。

全国地図にはナベクラ地名が25ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【カナクボ】

この小字は法全寺の泰阜境の山中にある。中腹には小平坦地もあるが、大部分は急傾斜地となっている。村境は谷川である。

カナクボとは何か。カナサビに関係することも考えられるが、未確認。他に語源辞典によりながら二説を挙げたい。

①カナはカンナ（鉋）の古語カナで「掻き難がれたような地形」をいうか。カナクボとは「崩崖のある小さな谷」か。

②カナはカハ（川）・ナ（「土地」）で「川のあるところ」か。カナクボとは「谷川に開いている小さな谷」を意味するのであろうか。

全国地図には、5ヶ所にカナクボ地名が、中・大字として挙げられている。

【青木洞】

アオキボラ。

この小字も泰阜境の山中にあり、カナクボ小字の北隣になる。

アオキボラとは、「樹木が青々と茂っている小さな谷」を意味するが、もう少し詰めて「常緑針葉樹の茂っている小さな谷」（広辞苑から）かもしれない。現在は針葉樹林になっているが、小字発生当時はどうであったのか。

全国地図にアオキボラ地名は記載が無い。

【ゴンゲン・権現】

ゴンゲン。

これらの小字は泰阜村境にあり、ゴンゲン小字は大きな面積をもつ小字であるが、その北東側にある「権現」小字は小さい。

ゴンゲン（権現）とは、「仏、菩薩が仮に人身などの姿に現れ、衆生済度する。山岳信仰としての修験の山々では、いずれも権現が中心であった。明治初年、復古神道が用いられ、権現号は廃止されて、すべて何々神社とあらためられた」（仏教民俗辞典）という。

いずれにしても、この中山のゴンゲンも山岳信仰の行が行われたところと思われる。

全国地図にはゴンゲン地名は18ヶ所に残っている。

【深洞】

フカボラ。

この小字は、米川の支流が開いた谷に添っている。

フカ←フケと転じた語で、フケは動詞フケル（更）で「低い湿地」をいう（国語大辞典）。フカボラとは「低湿地のある谷」の意であろう。

全国地図には1ヶ所にだけ、フカボラ地名が中・大字として挙げられている。

【中ノ洞】

ナカノホラ。

この小字はフカボラ小字の北隣にある。

ナカノホラとは、「二つの洞の間にある洞」を意味するか。東側にはカマガホラ、西側にはイドホラがあり、このナカノホラは、それらの間にある。

ホラというのは、北に標高 792.7m の峰と南には標高 775.9m の峰があるので、その間にある谷を指しているものと思われる。

全国地図にはナカノホラ地名は無い。

【垣外田・垣外田坂】

カイトダ・カイトダサカ。

これらの小字は山中のほぼ中心部にある。カイトダ小字は二ヶ所に分かれている。

カイトダのダは「耕作地」か「場所」を示す接尾語である（語源辞典）。

つまり、カイトダとは①「居住地跡」か②「居住地跡で耕作地になっているところ」である。

カイトダサカとは、「カイトダで坂道になっている所」か。

全国地図には、カイトダ地名も、カイトダサカ地名も記載は無い。

【狐塚】

キツネヅカ。

山中のキツネヅカ小字は二ヶ所にある。

キツネヅカとは「狐の住む丘」である（国語大辞典）が、これだけではないように思える。

民俗大辞典は狐塚について次のように記してある。

「狐を神としてまつた祭場としての塚。狐塚のなかには実際に狐の棲家である穴が存在し、その入り口に供物を供えると狐がくわえていったと伝える例が多くみられ、狐に対する信仰が基礎になっていることが知られる。しかし近世になって狐塚には稲荷社がまつられるようになり、動物としての狐に対する信仰が薄れた。柳田國男は狐塚が本来は田の神の祭場であっ

たと推測している」と。

山中のキツネヅカがどうであったのかは、不明である。

全国地図には、キツネヅカ地名は 14ヶ所に、中・大字として記載されている。

【上山中】

カミヤマナカ。

この小字の中に法全寺第9集会所がある。

カミヤマナカとは、「山中集落の上流の方にある土地」をいうのであろうか。

全国地図にはカミヤマナカ地名は 1ヶ所にだけあり、「上山中」の字が宛てられている。

【家ノ上・家ノ浦】

イエノウエ・イエノウラ。

これらの小字はカイトダ小字の北隣に並んでいる。

カイトダには有力者の居住地だったと思われる。そのカイトダ小字の裏側に当たる北側に並んでいる。

イエノウエとは「有力者の居住地の上のところ」をいい、イエノウラは「有力者の居住地の裏側になるところ」をいう。

【坂】

サカ。

この小字はゴンゲン小字と家小字群の間にある。

サカは坂道であり、境界地であるという。ここでは神聖なゴンゲン小字と日常の生活の場である家小字群との境目を意味しているのであろうか。

【ヲリチ】

オリジ。

ゴンゲン小字とサカ小字の間にある小さな小字。

オリはヲリ（折）で「傾斜地」をいう。ジはジ（地）で「場所」のこと。以上から、オリジとは「傾斜地」をいう。オリジと表現する傾斜地に何らかの意味があるのかどうかはわからない。

全国地図には、オリジ地名は2ヶ所にあり、「折地」の字が宛てられている。

【井戸洞】

イドボラ。

この小字は山中の南部山地にあり、ゴンゲン小字とナカノホラ小字に挟まれている。

イドボラとは井（井）・ド（処）・ホラで、「わずかな流水のある小さな谷」を意味する。

全国地図には、イドボラ地名は1ヶ所にあり、「井戸洞」の字が宛てられている。

【鎌ヶ洞】

カマガホラ。

この小字も山中の南部山地にある。カマは「えぐったような崖地」をいう（語源辞典）。カマガホラとは、「抉られたような急傾斜地になっている小さな谷」であろう。

全国地図にはカマガホラ地名は、中・大字として1ヶ所に挙げられているが、宛てられている字は「釜ヶ洞」。

【林野越】

ハヤシノコシ。

この小字も山中の南部山地にある。側稜の中腹部の緩傾斜地と麓までの急傾斜地からなる。

ハヤシは「傾斜地」のこと（語源辞典）。コシはコシ（腰）で、人の腰に見立てたものであろう。ハヤシノコシとは、「山稜の中腹部に緩い傾斜地の

ある土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ハヤシノコシ地名は記載が無い。

【日向畑】

ヒナタバタ。

テラヤマ小字に囲まれた小さな小字である。側稜の南東向き斜面にある。

ヒナタバタとは、字面の通り、「日当たりのいい畑」となるが、現在、畑地にはなっていない。小さな小字だが、焼畑でも行われていたのであろうか。

全国地図には、ヒナタバタ地名もヒナタバタ地名も記載されていない。

【田ノ入】

タノイリ。

この小字は法全寺の南方にある。

タノイリとは何か。

タノ←タナ（棚）の転じた語で、「棚状の土地」をいう（語源辞典）。イリは「入口」であろう。以上からタノイリとは、「棚状の土地の入口」であろうか。

全国地図には、タノイリ地名は9ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【稲荷洞・稲荷屋敷】

イナリボラ・イナリヤシキ。

これらの小字は法全寺の南方にあって、テラヤマ小字に囲まれている。

イナリボラとは「稲荷神を祀っていた小さな谷」で、イナリヤシキは「稲荷神を祀っていた有力者の屋敷があった所」であろう。この有力者は市場に関わった商人だったのであろうか。

稲荷神は稲荷・茶枳尼天・狐が集合したものといわれている。各地の民俗的稲荷神は山の神・野神・田の神・水神・祖霊神・御霊神・農耕神・福神・蚕神などの神格を有するという（民俗大辞典）。ここの稲荷神はどのようなのか

は分からない。

イナリボラ地名は全国地図には記載が無い

【大門】

ダイモン。

この小字に法全寺参道がある。

ダイモン(大門)とは、「大きな門。特に寺などの総門」(国語大辞典)を意味する。ここではダイモンは「法全寺の総門があるところ」となる。

全国地図には、ダイモン地名が9ヶ所にも挙げられている。

【アイノ田・アイノ畑】

アイノタ・アイノハタ。

これらの小字は法全禅寺の東側の川原と傾斜地にある。谷沢川左岸である。

アイノタとは、「河川の跡が水田になったもの」(広辞苑)である。

アイノハタは、同様に、「河川の跡が畑になったもの」とすべきかもしれない。しかし、畑になっているのは、ゆるい傾斜地なので、アイノハタとは「河川の跡が畑になっているところもある土地」とすべきか。

全国地図には、アイノタ地名は2ヶ所に中・大字として記載があるが、アイノハタ地名は無い。

【カジャ畑】

カジャバタ。

この小字はアイノタ小字の山側にある。

カジャバタとは何か。二説を挙げる。

①カジャバタとは、「鍛冶屋が耕作していた畑で免租地になっていた土地」であろうか。

②カジャバタとは、「かつて鍛冶屋が住んでいて現在は畑地になっているところ」か。主に法全禅寺関係の仕事

に携わっていたと思われるが、もう一ヶ所にも鍛冶屋跡と思われる小字があるので、躊躇もある。

全国地図にはカジャバタ地名は載っていない。

【元屋】

モトヤ。

法全寺のダイモン小字の北隣にある小さな小字でほぼ法全禅寺境内にある。

モトヤとは何か。分かりにくい地名であるが、三説を挙げる。

①モトヤとは「一門中の本家」(広辞苑)を意味する。しかし、どういう一門なのかははっきりしない。法全禅寺境内にあると考えられるので、法全禅寺住職すなわち知久氏の一門ということであろうか。

②モトはモト(許)で、「そば」の意。従って、モトヤとは「(法全寺の)近くにある屋敷」であろうか。

③モトはモト(下)で、「山の麓」のこと。ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」をいう(以上は語源辞典)。以上から、モトヤとは「山稜の麓にある湿地」をいうか。

全国地図に、モトヤ地名は載っていない。

【竹下】

タケシタ。

この小字もほぼ法全禅寺境内にある。

タケシタとは何を意味しているのか、これも分かりにくい小字である。二説を挙げたい。

①タケはダケと同じく、崖などの「崩壊地形」(語源辞典)をいう。タケシタとは、「崩崖の下流側の土地」のことか。

②タケは「信仰と関係ある山の称」(国語大辞典)という。タケシタとは「法全寺の下側にある土地」のことか。法全寺には、「瑞衍山」、「信南山」、「信山」などの山号がある。

全国地図には、タケシタ地名は、9ヶ所に中・大字として記載されている。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は、山中の家小字群の東側の山地にある。

イドイリとは、イ(井)・ド(処)・イリ(入)で、「流水の上流付近の土地」か。二本の小さな谷川が東流している。

全国地図にはイドイリ地名は載っていない。

【西】

ニシ。

この小字は法全禅寺の北側にある。

ニシとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①この小字は熊野神社の西の方角になる。ニシとは「熊野神社の西方の土地」をいうのであろうか。

②ニシは動詞ニジル(躪)かニジム(滲)の語幹が清音化した語で、「崩壊地」か「湿地」をいう(語源辞典)。以上から、ニシとは、「崩崖のある所」あるいは、「湿地のあるところ」を意味するか。

【北ノ垣外】

キタノカイト。

この小字は法全寺のモロヤ小字の北側傾斜地にある。

キタノカイトとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①キタノカイトとは、「(法全禅寺の)北の方にある居住地跡のある所」か。

②キタ←キダと清音化した語で、キダハシ(階)をいう。ノは助詞。以上から、キタノカイトとは、「住居跡があり階段状になっているところ」か。

全国地図には、キタノカイト地名は無い。

【モロヤ】

この小字は、キタノカイト小字とニシ小字に挟まれている。

モロヤとは何か。これも二説。

①モロはモロ(室)で「土間などに掘った穴。野菜を貯えたり、麴をつくったりする」ところ。モロヤとは「モロのある家のあった所」か。

②モロは形容詞モロシ(脆)から「崩崖」をいい、ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」をいう(語源辞典)。

全国地図にはモロヤ地名は記載が無い。

【シャグチ】

この小字は谷沢川左岸の沿岸の二ヶ所にある。

シャグチ←ジャクチと転訛した語で、ジャはザレ、ゾレに通じ「崖地」をいい、クチはクチ(口)で、「川の合流点」をいう(語源辞典)。

以上から、シャグチとは、「川の合流点で、崩崖のあるところ」となる。ここでは、谷沢川に東西から二本の支流が流れ込んでいる。

全国地図には、シャグチ地名は載っていないが、ジャグチ地名は3ヶ所にある。

【鳥ノ入】

トリノイリ。

この小字は谷沢川の谷と主要地方道下条米川飯田線が通る谷の間の丘陵地にある広い面積をもった小字である。谷や尾根が東西に延びている。

イリ（入）は「外から、ある建物や場所の内に移動すること」（国語大辞典）をいう。トリノイリとは、「小鳥たちが移動して向かってくる尾根筋のあるところ」であろうか。

現在は禁止されている霞網などを使って小鳥を捕獲した場所と思われる。

全国地図には、トリノイリ地名は載っていない。

【外ノ平】

ソトノタイラ。

これも、谷沢川と主要地方道の間山地にある。緩急の傾斜地になっている。

ソトノタイラとは何だろうか。二説を挙げる。

①ソトノタイラとは、「(山中の) 中心部から外れたところにあり、山地の間に平坦地がある土地」か。

②ソトノとは、ソ（背）・ト（処）・ノ（ヌの転）で、「背のような尾根も沼地もあるところ」か。ソトノタイラとは、「平坦地に尾根や沼もあるところ」だろうか。やや苦し紛れか。

全国地図には、ソトノタイラ地名は記載が無い。

【カク畑】

カクバタ。

この小字は山中の谷沢川左岸の傾斜地にある。

カクバタとは何を表しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①カクはカ（欠）・ク（処）で「崖」をいう。バタは「焼畑」のことか。すなわち、カクバタとは「崖のある焼畑耕作をした土地」であろうか。

②カクはカハ（川）・ク（処）で「川

のあるところ」、バタはハタ（端）をいう。カクバタとは、「縁になっている麓を川が流れているところ」か。

全国地図にはカクバタ地名は無い。

【カスダレ・カスダレシリ】

カスダレシリ。

これらの小字は山中の谷沢川左岸にある。谷沢川から側稜の尾根にいたる広大な面積になっている。カスダレシリ小字は、カスダレ小字に包まれている。

カスダレとは何を意味しているのであろうか。

カスダレとは何を意味しているのであろうか。ダレは動詞タル（垂）の連用形が名詞化した語で、「傾斜地」をいう（語源辞典）。カスダレの解釈を二つ。

①カスは動詞カス（浸）の連体形で「湿地」をいう。カスダレとは「湿地もあり、麓まで長く傾斜しているところ」であろうか。

②カス←カサ（嵩）の転で、「高い所」をいう。すなわち、カスダレとは、「高い峰から川まで長く傾斜している所」か。標高781.8mの峰から谷沢川まで、垂れるように傾斜が続いている。

カスダレシリとは、「カスダレ小字の裾に当たる土地」をいうのであろう。

全国地図には、カスダレ地名は記載されていない。

【竹ノ上】

タケノウエ。

この小字は山中のカクバタ小字より高い所にある。現在は針葉樹が茂っている。

タケはダケと同様、「崖」を意味する（語源辞典）。すなわち、タケノウエとは、「崖の上にある土地」をいう

のであろうか。現在は竹藪になってないことから、「竹藪の上」というのは採りにくい、小字発生時には竹藪があったかもしれない。

全国地図には、タケノウエ地名は11ヶ所に、中・大字として記載されている。

【治郎畑】

ジロウバタ。

この小字は山中のタケノウエ小字より高くなっている。

ジロウは固有名詞であろう。すなわち、ジロウバタとは「治郎の所有する土地」になる。あるいは焼畑にしていた可能性もある。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は山中集会所の南東側にある頂上の丸い山である。

さしずめ山中の甘南備であろうか。山の神のおわす山であったかもしれない。

全国地図には、マルヤマ地名が、なんと352ヶ所に、中・大字として記載されている。

【矢打】

ヤウチ。

この小字も山中集会所の南東隣にある。マルヤマ小字やハマイバ小字に接している、小さな小字である。

ヤウチとは何か。二説を挙げる。

①ヤウチはヤ(菴)・ウチ(内)で、ヤは「湿地」をいい、ウチは「山谷の小平地」をいう(語源辞典)。すなわち、ヤウチとは「自然湧水のある山間の小平地」をいうのであろうか。

②ヤウチは「矢打」で、「破魔矢を射て、ハマを打った場所」とも考えられる。ハマイバ小字と接していることが

傍証となるか。

全国地図には、ヤウチ地名は1ヶ所にあり、「矢内」の字が宛てられている。

【濱井場・濱井場焼田】

ハマイバ・ハマイバヤキダ。

これらの小字は山中の春日神社の北東側にある。その間には谷があって小川が流れている。

ハマイバとは、「ハマを転がして、破魔矢で打つ正月行事が行われ、吉凶を占ったところ」であろうか。

ハマイバヤキダは、①「ハマイバ小字の近くにあった焼畑を行った土地」か。あるいは②「湿地にあり、水田もあるところ」か。ヤキはヤ(菴)・ギ(接尾語)で「湿地」をいう(語源辞典)。ギ=キで「場所」を示す接尾語であるという。

【新兵衛畑】

シンベエバタ。

この小字は、山中のハマイバ小字の南隣にある。

これも固有名詞で、「新兵衛の所有する耕作地」であろう。

当然のことながら、シンベエバタ地名は、全国地図には無い。

【伝三畑】

デンゾウバタ。

この小字はシンベエバタ小字のさらに南隣にある。

これも固有名詞で、「伝三が耕作している畑」であろうか。

【外ノ・下外ノ】

ソトノ・シモソトノ。

ソトノ小字は山中の山地にあり、周辺には、ソトノタイラ・デンゾウバタ・キツネヅカ・カミヤマナカ等の小字がある。また、シモソトノ小字は、

ソトノ小字の谷の下流側にある。

ソトノとは何を意味しているのだろうか。語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①ソトノはソ（背）・ト（処）・ノ（ヌの転）で、「人の背のような高いところと湿地のあるところ」であろうか。

②ソトは「中心部から外れた」という意味か。ノはヌ（沼）の転で、ソトノとは、「山中地区の中心から外れて沼地のある所」か。

シモソトノとは、「ソトノ小字の下流側にある土地」であろう。

全国地図にはソトノ地名は9ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【山中峠】

ヤマナカトウゲ。

これはソトノ小字とトリノイリ小字に挟まれた小さな小字である。そして、主要地方道下条米川飯田線が通っている。

ヤマナカトウゲとは、「山中を通る主要街道にある峠」をいうのであろう。

ヤマナカトウゲ地名は、全国地図に、23ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【清ノ洞】

キヨノホラ。

この小字は山中地域の山地にあり、ソトノ・ヒャクメ・ゴンゲンの小字に囲まれている。

キはキ（限）で「区切り」のこと、ヨはヨ（節）で、「二つのものに区切られた土地」をいう（以上は語源辞典）。

キヨノホラとは、「緩い傾斜地の平坦地が半分に区切られている洞」であろうか。ひとまとまりの洞になっており、半分に区切られた経緯があるに相違ないが分かってはいない。

全国地図にはキヨノホラ地名は記載が無い。

【百目・下百目】

ヒャクメ・シモヒャクメ。

山中地区にある小字である。

〇〇メという小字は多いが、意味ははっきりしない。知行面積なのか、年貢額か、収穫量か播種量のいずれかであろうが、不明である。

シモヒャクメは当然ながら「ヒャクメ小字の下流側にある土地」であろう。

【中山】

ナカヤマ。

山中地区にあるナカヤマ小字とはややこしい。側稜の北東側半分が、ナカヤマ小字になっている。

ナカヤマとは「山に入った中」（語源辞典）だというのが、どうもしっくりとしない。これで地名になるのであろうかという疑問がある。しかし、これ以上は何もわかっていないので、このままにしておく。

全国地図にはナカヤマ地名が、なんと、295ヶ所にも挙げられている。

【神田】

ジンデン。

この山中地区のジンデンはハマイバ小字の西側にある。すぐ南側のは山中の春日神社がある。

ジンデンとは既に触れているように、「神社に付属して、その収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」（広辞苑）を意味する。

全国地図にはジンデン地名は15ヶ所に、中・大字として記載がある。

【柳坪】

ヤナギツボ。

山中の南西部の山地にある。

ヤナギツボとは何か。二説を挙げた

い。

①ヤナギツボは、「ヤナギが自生していた窪地」をいうか。ツボは動詞ツボム(窄)の語幹で「深くえぐられたような地形。窪地」(語源辞典)をいう。

②ヤナギはヤナ(斜面)・ギ(接尾語)で「傾斜地」をいう(語源辞典)。ヤナギツボとは、「傾斜地になっている窪地」か。

全国地図には、ヤナギツボ地名は記載が無い。

【新井・外新井・外新井田】

アライ・ソトアライ・ソトアライダ。

これらの小字は、山中の西部山地のあちこちに散在している。

アライはアライ(荒井)で、「大雨の時に荒れる小川のある土地」であろう。アライ小字は三ヶ所ほどあるが、いずれも晴天時には水量がほとんど無いような小川である。

ソトアライとは、「アライ小字の周辺にあって、同じように荒れやすい土地」か。やや大きな小字になっている。

ソトアライダ小字は、ソトアライ小字に包まれている、小さな小字である。ソトアライダとは「ソトアライにある耕作地」であろうか。現在は水田にはなっていない。

全国地図には、アライ地名は133ヶ所に、中・大字として記載がある。

【上ヤ根】

カミヤネ。

この小字はアライ小字やソトアライ小字に接している。

カミヤネとは何か。分かりにくい小字の一つ。二説を挙げる。

①ヤネ=ヤナで「斜面」をいう(語源辞典)。カミヤネとは「高い所にある傾斜地」か。はっきりしない解釈では

ある。

②カミヤネはカミヤ(紙屋)・ネ(根)で、「尾根の先端部で紙を漉いていた家があった所」だろうか。

全国地図には、カミヤネ地名は載っていない。

【前田】

マエダ。

山中地区のマエダは、コボラ小字の南隣にあり、洞口の所にある。現在は果樹園になっている。

マエダは「前の方にある所」であろうが、何のマエなのかは分からない。あるいは、コボラ小字かカミヤネ小字にあった住居を指すのかもしれない。

【二ツ田】

フタツダ。

これも山中地区にある。マエダ小字のある洞の西隣の袋状の洞にある。

フタツダとは何か。語源辞典に依って三説を挙げる。

①フタツダとは文字通りで、「二枚の田んぼがあった土地」か。小字発生時のことであるが、現在は田んぼが一枚、ほとんどが果樹園になっている。

②フタは動詞フタグ(塞)の語幹で「塞がれたような地形」をいう。ツ=ノ。ダはダ(処)。フタツダとは「袋状になった洞」をいうのだろうか。

③フタ←フダと清音化した語で、フカダ(深田)の略。フタツダとは「深田のあるところ」か。

全国地図には、フタツダ地名は1ヶ所にあり、「二ツ田」の字を宛てている。

【ひらみ】

ヒラミ。

この小字は、山中地区コボラ小字の下流側の洞にある。

ヒラミは「平らな所」をいい（国語大辞典）、ミは「場所」を示す接尾語。

以上から、ヒラミとは、「緩い傾斜地になっている所」をいうのであろう。現地は、傾斜地を挟んで、二面の緩傾斜地になっていて、現在も水田や果樹園になっている。

全国地図には、ヒロミ地名は13ヶ所に中・大字として挙げられている。

【薬師ノ下】

ヤクシノシタ。

この小字は、山中地区の南西部、泰阜境に近いところにある。

ヤクシノシタとは、文字通り、「薬師堂の下の方の土地」であろう。ただ、この薬師堂がどこにあったのかがはっきりしていない。東隣のナカヤマ小字には墓地があるが、その付近にあったのか。それとも、考えにくい。東にある山中の春日神社の境内にあったのかどうか。

【家下・家ノ下】

イエシタ・イエノシタ。

これらの小字は、ヤクシノシタ小字の南側に並んでいる。

どちらも「有力者の居住地に下側にある土地」を意味するものと思われる。ここでも、その有力者の居住地がどこにあったのか、はっきりしない。ナカヤマ小字は有力な候補地ではあるが。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

この小字は山中地区の春日神社南側の傾斜地にある。

ミヤノマエとは、「春日神社の前方の土地」をいう。

全国地図には、ミヤノマエ地名は94ヶ所が挙げられている。

【上垣外・中垣外・下垣外】

カミカイト・ナカガイト・シモガイト。

これらの小字は山中の春日神社南面の谷に沿って、ほぼ並んでいる。

谷の上流から下流に向けて、上→中→下となっているはずであるが、あるいはナカには春日神社があるので、重要視されてナカが名付けられている可能性もある。

全国地図に中・大字として、カミガイト地名が6ヶ所、ナカガイト地名が12ヶ所、シモガイト地名が7ヶ所と記載されている。カミカイト地名は無い。ナカガイトが多いのは、なにか意味があるのだろうか。

【若宮】

ワカミヤ。

この小字は、春日神社の南東方向にあり、ゴンゲン小字の北隣にある。

若宮様は屋敷神であり、また墓地にもある。分かりにくい神であるが、激しく崇る神に関わっていることだけは確かなようだ。

ワカミヤとは、「はげしく崇る無縁の霊を斎（いわ）い込めるために、大きな神格の支配下においてまつり始めたもの」（国語大辞典）とするのが妥当か。

全国地図には、ワカミヤ地名は85ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【栃沢】

トチザワ。

この小字は山中地区の南西部にあり、泰阜村境に接している、大きな洞である。

トチザワとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①トチザワとは、「トチノキが自生し

ている谷」をいうか。トチノキは日本各地の温帯あるいは低山帯にはえる落葉高木で高さは 30m ほどにもなり、実は食用（牧野植物図鑑）。

②トチは動詞トヅ（閉）と関係し、「山などがとり囲んだ所」（語源辞典）。トチザワとは、「枝状に分岐している側稜の間の谷川」であろうか。

全国地図には、トチザワ地名は、9ヶ所に、中・大字として記載されている。

【山ノ田】

ヤマノタ。

この小字は、山中の泰阜村境近くにある。側稜の南西側斜面になる。

ヤマノタトハ、ヤマ（山）・ノタ（野田）で、「森林の中にある湿地」をいう。ノタはヌタが転訛した語。猪が身に泥を塗りつけるところでもある。

全国地図には、13ヶ所に中・大字として記載されている。

【外出】

ソトデ。

この小字は、山中の春日神社の南方、ミヤノマエ小字の南隣にある。

ソトデとは何を意味するのか。これもはっきりしない小字である。

ソトデとは、「新たに開墾した耕作地」をいうのであろうか。日常生活場所から外へ出た土地で耕作を始めたことを地名に残したものと思われるが、どうであろうか。

全国地図には、中・大字として、ソトデ地名が2ヶ所に挙げられており、いずれも「外出」の字が宛てられている。

【漆ヶ久保】

ウルシガクボ。

この小字は、山中地区の南西部、泰

阜村境に近い洞の北向き斜面にある、小さい小字である。

ウルシガクボとは、「ウルシを栽培していた洞」か、「ヤマウルシが自生していた洞」のどちらかと思われる。しかし、ヤマウルシの自生地であれば、どこにでもあるはずで、地名にするほどのことはないと思われるがどうであろうか。

全国地図には、なぜか、ウルシガクボ地名は記載が無い。

【田ノ尻】

タノシリ。

この小字は、山中地区の南西部、泰阜境にある。大部分が針葉樹と広葉樹の森林で、わずかに細い谷が南側と西側に開けているだけである。現在、水田は、そのわずかの谷底部のごく一分あるにすぎない。

タノシリとは、「水田のある谷の末端部のある土地」であろうか。

全国地図には、タノシリ地名は、中・大字として、23ヶ所が挙げられている。

【大石】

オオイシ。

この小字も、山中地区南西部の山地にあり、タノシリ小字とヤマノタ小字の間にある。

オオイシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①オオはヲ（峰）の転で、「連峰」をいう。イシは「石の多い土地」のこと。すなわち、オオイシは「尾根が飛び出している石の多い土地」をいうのであろうか。

②オオ←アフ←アバで、「崩崖」のこと。動詞アバク（暴）の語幹。よって、オオイシとは、「崩崖のある石の多い

土地」か。

オオイシ地名は、全国地図に、中・大字として65ヶ所にも記載されている。

【堀通シ】

ホリトオシ。

この小字も山中地区南西部の泰阜村境にある。

ホリトオシとは何か。動詞ホリトオス（堀通）の連用形が名詞化し語で、「えぐり取られたような谷を川が通して流れているところ」であろうか。この小字には標高711.2mの独立峰があり、その両側を分岐した谷川が流れて米川に合流している。

全国地図には、ホリトオシ地名は記載が無い。

【小洞】

コボラ。

この小字も、山中地区南西部の泰阜村境にある。

コボラは「小さな谷があちこちにある山地」としておきたい。

全国地図には、コボラ地名が4ヶ所に、中・大字として記載されており、いずれも「小洞」の字が宛てられている。

【西ノ又】

ニシノマタ。

この小字は、山中地区の新井小字群丘陵の中にある。

ニシノマタとは何か。二説を挙げる。

①ニシノマタとは、「(新井小字群丘陵の中心からみて)西方にあり谷が分岐しているところ」か。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化した語で、「湿地」のこと（語源辞典）。ニシノマタとは「湿地が二股に分かれているところ」であろうか。

ニシノマタ地名は、全国地図に5ヶ所、記載されている。

【西ノ尻】

ニシノシリ。

この小字は、山中南西部の泰阜村境にある。ニシノマタの谷の下流部になる。

ニシノシリ of 解釈についても二説を挙げておく。

①ニシノシリとは、「山中地区の西方末端部」の意か。

②ニシは前にも述べたように「湿地」のこと。ニシノシリとは、「湿地帯の末端部」を意味しているか。

全国地図には、ニシノシリ地名は記載が無い。

【井林】

イバヤシ。

山中地区の泰阜境にあり、米川右岸沿岸になる。

イバヤシ（井林）＝イミズバヤシ（井水林）で、「江戸時代の保安林の一つ。山林の荒廃と水田の増加による灌漑用水の不足を補う目的で設けられた保護林。地方により水林、用水林（山）、水野目林、水元林、水持山などといった。現在の水源涵養林にあたる。井根林、井林」（国語大辞典）という。

全国地図には、イバヤシ地名は2ヶ所に、中・大字として挙げられており、いずれも「居林」の字が宛てられている。

【矢平】

ヤダイラ。

この小字も山中地区の泰阜境にあり米川右岸沿岸となっている。広大な小字で新井小字群丘陵の西部の末端部になる。

ヤは、何回も触れているように、ヤ

ツ（菴）の略で「湿地」を意味する。

ヤダイラとは「山の斜面に小平坦地や湿地のあるところ」であろうか。

全国地図には、ヤダイラ地名は6ヶ所に中・大字として記載されている。

【大畑】

オオハタ。

新井小字群丘陵の側稜から千栄境に下る傾斜地の急傾斜地にある。

オオハタは字面通りに考えれば「大きな畑」になるが、常畑はあり得ない。ではオオハタは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①オオハタとは「広い焼畑であったところ」か。急傾斜地が多いところで、常畑はありえない。

②オオ←アハ（アバ）の転で動詞アバク（暴）の語幹、「崩れたところ」をいう（語源辞典）。ハタはハタ（端）で、「（新井小字群丘陵の）先端部」をいうか。以上から、オオハタとは「新井小字群丘陵の先端部」を意味すると考えることもできる。

全国地図には、オオハタ地名は、中・大字として75ヶ所に記載がある。

【かぶ路】

カブロ。

山中地区の西端で、米川に接している。二ヶ所にあるが、小字発生時には繋がっていたのであろう。

カブロ（禿）＝カムロ（禿）で、頭に毛髪のないことであるが、ここでは「山に樹木のないこと」（国語大辞典）をいう。樹木が無いというのは、崩壊地であるためである。もともとカムロはカム（嶮）・ロで「崩壊地形、露出地形」をいう語である（語源辞典）。この山地は、地名発生時には、あちこちに崩壊地があったと思われる。

以上から、カブロとは「あちこちに崩崖のある山地」を意味するものと思われる。

全国地図には、なぜか、カブロ地名は一つも載っていない。

【法ノ木洞】

ホウノキホラ。

この小字も山中地区のカブロ小字の丘陵よりにある。

ホウノキホラとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ホウノキホラとは、文字通り「ホオノキが自生している谷のあるところ」か。ホオノキは日本の各地に自生しており、葉に食物を盛って香りを楽しんだり、材質は柔らかくきめ細かいので刃物の鞘や版木、下駄等に使われたという。

②ホウ←ホ（秀）と転じた語で、「突き出たもの」をいい、ノキ←ヌキ（抜）と転訛したもので「崩壊地形」をいう（語源辞典）。以上から、ホウノキホラとは、「崩崖もあり尾根筋の峰もある洞」か。標高726.5mの高所がある。

全国地図には、ホウノキホラ地名は無いが、ホウノキ地名は7ヶ所にある。

【山ノ神根】

ヤマノカミネ。

この小字は、新井小字群丘陵の尾根にある。

山ノ神の神格も多岐にわたるが、この山ノ神は山民の祀る神か。山民の信仰する山の神は年間を通じて山に常在し自然神に近い神格を帯びる（民俗大辞典）。

ネはネ（峰）で、ヤマノカミネとは「山の神を祀る峰」であろうか。この峰の標高は746.3m。

全国地図には、ヤマノカミネ地名は

載っていない。

【山ノ神洞】

ヤマノカミホラ。

この小字は、ヤマノカミネ小字から急傾斜地を下って米川に達する、尾根や谷のある土地である。

ヤマノカミホラとは、「ヤマノカミネ小字の近くにある洞」か、あるいは「山の神を祀っている場所のある洞」か。

ヤマノカミホラ地名も全国地図には無いが、ヤマノカミ地名は70ヶ所に記載がある。

【市道】

イチミチ。

この小字は、山中地区の新井小字群丘陵の尾根から中腹にかけて広がる。ヤマノカミホラ小字の北東隣になる。

イチミチとは何を意味しているのか。難しい小字であるが、語源辞典によりながら二説を挙げておきたい。

①イチ←イツ（巖）と転じた語で、「険しい地形」をいう。すなわち、イチミチとは、「険しい道になっている所」であろうか。しかし、現在、その道の痕跡は無い。

②イチ←イツ（稜威）の転で「厳粛な」の意、ミチは動詞ミツ（満）の連用形で、「満ちること」をいう。以上からイチミチとは、「厳粛な雰囲気にも満ちている場所」となるか。山の神の霊地であることを意味しているのだろうか。

全国地図には、イチミチ地名が、中・大字として4ヶ所に挙げられている。

【川尻】

カワジリ。

山中地区の新井小字群丘陵の裾の

部分で米川に接している。

カワジリとは、一般には、川下のことをいうが、ここでは当てはまらない。カワジリとは、「末端が川に接する土地」をいうのであろうか。

全国地図には、カワジリ地名は17ヶ所に中・大字として挙げられている。

【川尻向】

カワジリムコウ。

この小字は、同じ米川左岸のカワジリ小字の上流側にある。

カワジリムコウとは何か。語源辞典によりつつ二説を挙げる。

①カワジリムコウとは、「(丘陵の中心部から見て)カワジリ小字の前方にある土地」をいう。

②ムコウ←ムカ（剥）・フ（生）で、「剥かれたような地形になっている所」をいうか。すなわち、カワジリムコウとは、「山稜の末端部が川になっており、崩崖のある土地」であろうか。フ（生）は、「～になっている所」をいう。

全国地図に、カワジリムコウ地名は載っていない。

【恵ぼし岩】

エボシイワ。

この小字は、新井小字群丘陵の北向き斜面の麓に近いところにある。

エボシイワとは、「烏帽子に見立てた岩のあるところ」であろうが、まだその岩を確認していない。

全国地図には、エボシイワ地名は31ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【大日蔭】

オオヒカゲ。

この小字は、山中地区の新井小字群丘陵の尾根筋から米川に到る北向き

の広大な面積になっている。

オオヒカゲとは、字面の通りで、「広大な面積の日蔭地」を意味する。

全国地図には、オオヒカゲ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【をいの洞】

オイノホラ。

この小字は、新井小字群丘陵の尾根付近にある。

オイノホラとは姨捨洞ではあるまい。ではオイノホラとは何か。

オイ←オキと転じた語で、「オク(奥)」の意(国語大辞典)。オイノホラとは、「谷の上流側」をいうのである。

全国地図には、オイノホラ地名は記載が無い。

【歩行平】

ホギョウダイラ。

この小字は、が主要地方道下条米川飯田線から分かれて山中へ入る街道がヘアピンカーブする所にある。

ホギョウダイラとは何か。これがよく分からない。ホギョウダイラ←歩行平←ホコウダイラ←ホコダイラと転訛したと考え、解釈は可能になる。

以下は、語源辞典に依る。

①ホコダイラはホコダイラ(矛平)で、道がヘアピンで曲がった所を矛に見立てて、「道が矛のようになっている中腹の平坦地」とする。しかし、小字発生時に道路がこのように曲がっていたかどうか、という疑問は残る。

②ホコ←ボコ(凹)の清音化した語で、「窪んでいる所」をいう。ホコダイラとは、「窪地もある山腹の平坦地」になるが、どうであろうか。

全国地図にはホギョウダイラ地名

もホギョウ地名も無い。

【若宮】

ワカミヤ。

下村のワカミヤ小字は紅葉川の支流である若宮沢川の谷にある。

このワカミヤがどのように祀られていたかは不明である。

若宮について法全寺地区で触れているので省く。

【城ヶ腰】

ジョウガコシ。

この小字は下村地区の主要地方道飯田富山佐久間線を南下するとき、紅葉川を越えたすぐのところにある。この小字の南東 150m ほどの所に鶯ヶ城跡がある。

ジョウガコシとは、「鶯ヶ城の中腹部あたり」であろうか。人体の頭部を城とすると、コシ(腰)の位置に相当する部分に名付けられたものと思われる。

全国地図には、ジョウガコシ地名は載っていない。

【道上】

ミチウエ。

この小字はジョウガコシ小字の南東隣にある。

ミチウエとは、文字通り、「道路の上の土地」であろうが、その道はどこを通っていたのか、はっきりしない。恐らくは、現在、この小字の近くを北西-南東に通っている主要地方道ではないだろう。ミチウエにならないからである。とすれば、この主要地方道を横切る道、それは若宮峠や出張峠を越えてくる道路であろう。

全国地図にもミチウエ地名は13ヶ所に、中・大字として記載されている。

【樋ヶ入】

トヨガイリ。

この小字は下村地区の西の前沢川の沿岸にある長い小字である。

トヨ＝トイで「水路。川」のこと、イリは「谷あい」をいう（語源辞典）。

以上から、トヨガイリとは「川が流れている谷」をいうのか。やや単純すぎるであろうか。

トヨガイリ地名も、トイガイリ地名も、全国地図には記載されていない。

【出張・出張峠】

デハリ・デハリトウゲ。

デハリ小字は八ノ倉集会所がある、大きな洞になっており、デハリトウゲ小字はその西側の尾根の峰に近いところにある。

デバリとは何を意味するのか。国語大辞典には「用務のため他の地域、場所へ出向くこと」とある。デバリ＝デハリで、「居住地と離れた新たな開墾地」をいうのであろうか。この小字は下村地区の中心部から北東方向にあり、現在の谷底は水田や果樹園になっている。

デハリトウゲとは、「デハリ小字に近い峠のあるところ」か。

全国地図にはデハリ地名は2ヶ所に、中・大字として挙げられているが、デハリトウゲ地名は無い。

【尺口洞】

シャグチボラ。

この小字は、デハリ小字のある洞の北側の丘陵地にある。

シャグチボラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シャグチ＝ジャクチ（蛇口）で、ジャクはザレ、ゾレに通じ、「崖地」をいう。クチは動詞クチル（朽）の連用

形の名詞化した語で「湿地」のこと。以上から、シャグチボラとは、「崖地と湿地のある谷」となるか。

②ジャクチはジャク・チ（接尾語）で、ジャクは「崩れた所」でチは「場所」を示す。すなわち、シャグチボラとは「崩崖のある谷」となる。

全国地図にはシャグチ地名は載っていない。

【当祖】

トウソ。

この小字は、デバリ小字の北側にあり、広大な面積になっている。北端は紅葉川に接し、龍江村境となっている。

トウソ（当祖）←ドウソ（道祖）と清音化したものか。ドウソ（道祖）とは「道祖神を祀った所」（国語大辞典）という。

道祖神とは、サイノカミ、サエノイカミ、ドウロクジンなどとも称する。村の境や辻・峠などに祀られ、外部から侵入する疫病悪霊から安全を守る神としての信仰に、青面金剛、庚申信仰が混合して複雑な信仰が形成されたという（仏教民俗辞典）。

村境や峠とあるが、この広大なトウソ小字のどこに石像などがあつたのか、まだ確認していない。

全国地図には、トウソ地名もドウソ地名も記載されていない。

【外洞】

ソトボラ。

下村地区の主要地方道飯田富山佐久間線の沿線にあり、デハリトウゲ小字やトヨガイリ小字の上流側にある。

ソトボラとは何か。デハリトウゲ小字とトヨガイリ小字は洞になっているが、それらの洞より一段上にソトボラ小字がある。ソトボラとは、「下段

の洞に対して、その上の段にある洞」をいうのではないだろうか。

全国地図にはソトボラ地名は載っていない。

【子ノ神】

ネノカミ。

この小字は紅葉川に沿った左岸にあり、龍江村境にある小さな小字である。

子の神は十二支の北方にあたる子を神格化したもの。天台系の修験道と深い関係があるといわれている。キノエネ（甲子）様ともいい、現世の福を祈願する。嶋地区でも年6会、婦人達が集会場に集まり、床の間に大黒天の掛軸をかけて、お祭りを行っている。

下村地区のネノカミ小字でどんな神事が行われていたのかは、まだ確認していない。

全国地図には、ネノカミ地名は、5ヶ所に、中・大字として記載がある。

【若宮峠】

ワカミヤトウゲ。

下村地区のワカミヤ小字とミチウエ小字に挟まれた小さな小字である。この小字を主要地方道飯田富山佐久間線が貫いている。

ワカミヤトウゲとは、「ワカミヤ小字に続く峠」を意味するものと思われる。現在は、はっきりしないが、この主要地方道を横断する峠路があったのではないだろうか。

全国地図には、ワカミヤトウゲ地名は無い。

【菖蒲沢・菖蒲沢峠】

ショウブザワ・ショウブサワトウゲ。

ショウブサワ小字は、下村地区の北東部でデハリ小字の東側にある洞で、その更に東隣にショウブサワトウゲ

小字はあるが、小さい。

ショウブサワとは何か。二説を挙げる。

①ショウブサワとは、「サトイモ科の菖蒲が自生している沢」か。菖蒲は温帯から暖帯にかけて広く分布し湿地に群生するという。

②ショウブ＝ショウズで、「水の湧き出る所。泉」（国語大辞典）をいう。ショウブサワとは、「自然湧水のある洞」であろうか。現在は、果樹園や畑になっている。

ショウブサワトウゲは「ショウブサワの近くで峠のあるところ」か。

全国地図にはショウブサワ地名が、16ヶ所に中・大字として記載されている。

【鷹巣】

タカノス。

この小字は、北は紅葉川で龍江村境に接し、東側では丘陵地で龍江に接している、長くて広い小字になっている。

タカノスとは何か。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①素直に解釈すれば、タカノスとは「鷹が住んでいた所」となる。ス（巢）は「住処」をいう。

②タカ（高）・ノ（助詞）・ス（砂）でタカノスとは、「側稜の尾根から押し流されて、砂が堆積しているところ」か。ス（砂）は「押し流されて堆積した土砂」をいう。

全国地図には、タカノス地名は58ヶ所に、中・大字として記載がある。

【蟻腰】

アリコシ。

この小字は下村地区の北部、龍江村境の紅葉川左岸の急傾斜地にある。

アリコシは何を意味しているのか。

語源辞典によりながら二説を挙げる。

①アリは動詞アリ（有）の連用形の名詞化した語で「目立つ。突出する」の意。コシは動詞コス（漉）の連用形で「水が湧き出る所」か。以上から、アリノコシとは、「小さな台地があって、自然湧水のあるところ」か。

②アリ←アラ（荒）と転じた語で、「荒々しいこと」を示す接頭語、コシは尾根の中腹部で、人体の腰に見立てたもの。アリコシとは、「崩崖のある丘陵の中腹部」であろうか。

全国地図にはアリコシ地名は無い。

【嶋原】

シマバラ。

この小字も下村地区の北端部、紅葉川左岸に二ヶ所ある。いずれも小さな小字である。

シマは「川の曲がり目や川端の低地などにできた耕地」（語源辞典）か。ハラはハラ（腹）で「山腹」をいうか。以上から、シマバラとは、「川原には耕地もあり、山腹もある土地」を意味するか。

全国地図には、シマバラ地名は、4ヶ所に挙げられている。

【川原田】

カワラダ。

これも下村地区最北部の紅葉川左岸にある。

カワラダとは、米川地区でも触れたように、「川原で田んぼのある所」か。この下村のカワラダには、今でも田んぼがある。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は下村地区北東部の龍江村境にある。

イノクチとは、「流水が湧き出る泉

があるところ」であろう。この地区には、紅葉川支流が二本あり、流れ出す場所がこの小字内にある。

【大屋倉】

オオヤグラ。

この小字は下村地区北東部の龍江との村境にある大きな小字で、中を西の前沢川が流れている。

ヤグラとは「静岡で山の峻険な所」（民俗語彙地名事典）という。オオヤグラとは、「面積の大きな、断崖など山の峻険で寄りつきがたい難所のある土地」であろう。

全国地図には、オオヤグラ地名は記載が無い。

【二郎五郎】

ジロウゴロウ。

この小字は、オオヤグラ小字の南隣の谷になる。現在は、谷底部が水田・果樹園や畑地になっている。

ジロウゴロウとは「二郎と五郎が所有している土地」であろう。二人は兄弟か。

全国地図には、ジロウゴロウ地名は載っていない。

【門松】

カドマツ。

下村地区東部にあって、オヤノタイラ小字とオオヤグラ小字の間にある。

カドマツとは何か。正月飾りの門松ではあるまい。何を意味しているのか、難しい地名の一つ。仮説を三つ。

①カドは「道などの曲がり目の所」（国語大辞典）をいう。カドマツとは「西の前沢川や道が屈曲している場所に松が生えていたところ」か。

②カド←カトで、カトはケテと同じく「崖などの崩壊地」をいう。マツ←マタの転じた語で「分岐していること」

をいう(以上は語源辞典)。以上から、カドマツとは「崩崖もあり、二股になった川の流れている土地」か。

③マツは動詞マツハル(纏)から「巻いたような地形」(語源辞典)をいう。すなわち、カドマツとは、「川の曲がり角で、山稜の麓を巻いたような地形になっている所」であろうか。

全国地図には、カドマツ地名が3ヶ所に中・大字として記載されている。

【細洞】

ホソボラ。

この小字は、下村地区東部のニロウゴロウ小字とスギガマ小字の間にある。

ホソボラとは文字通り、「谷底部の幅が狭い洞」であろう。

全国地図にはホソボラ地名は載っていない。

【親ノ平】

オヤノタイラ。

この小字は、カドマツ小字の西隣にある。側稜の尾根部分と中段の緩傾斜地を含む。その中段を西の前沢川が流れている。

オヤノタイラとは何を意味するのか。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①オヤはヲ(語調を和らげる接頭語)・ヤ(菴)で、タイラは長野県では「盆地」をいう。以上から、オヤノタイラとは、「湿地のある盆地」をいうのであろうか。

②オヤはヲ(峰)・ヤ(菴)である。すなわち、オヤノタイラとは、「峰と湿地のある盆地」か。

全国地図には、オヤノタイラ地名は記載が無い。

【蟹田】

カニダ。

この小字は下村地区の東部、コガイト・スギガマ・デハリの三つの小字に囲まれている。小さな小字で、現在はほとんどが水田になっている。

カニダとは何か。語源辞典に依りつつ二説を挙げたい。

①カニ←カナ(搔薙)と転じたもので、カニダとは「崩壊地のある田んぼ」であろうか。

②カニ←ハニ(埴)と転訛した語で、「粘土」のこと。すなわち、カニダとは、「粘土が出ている田んぼ」であろうか。まだ確認はしていない。

全国地図には、カニダ地名は無いが、カニタ地名は6ヶ所に記載がある。

【小垣外】

コガイト。

これも下村地区東部で、デハリ・キツネヅカ・スギガマの小字に囲まれる小さな小字である。

コガイトとは、文字通り、「小さな居住地跡」であろうか。

全国地図には、3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【杉釜】

スギガマ。

下村地区の東部にある大きな小字である。

スギガマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ガマは「絶えず水の湧き出る所」をいう。スギガマとは「杉が自生している、自然湧水の多いところ」か。ここを西の前沢川が流れている。

②スギ←スキと転じた語で、ス(砂)・キ(「場所」を示す接尾語)。ガマは「崖がえぐれている所」をいう。すなわち、スギガマとは、「崖がえぐれて崩れて

いる所がある砂礫地」をいうか。

全国地図にはスギガマ地名は記載が無い。

【狐塚】

キツネヅカ。

下村地区東部の尾根の先端部にあり、デハリ・コガイト・カミスキダ・ヌマダ・スギガマ等の小字が、まわりにある。

キツネヅカについては、法全寺地区等で触れているので、ここでは省く。

【月ノ木田】

ツキノキダ。

この小字は下村地区中心地の北部にある。現在、水田は見当たらない。

ツキノキダとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ツキノキとはケヤキ（榎）のこと。ダはダ（処）。つまり、ツキノキダとは、「榎が自生していたところ」か。

②ツキノキはツキ（尽）・ヌキ（抜）の転で「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ツキノキダとは、「崩壊地のあるところ」をいうか。

全国地図にはツキノキダ地名は一つも無い。

【梨ノ木田】

ナシノキダ。

下村地区の鶯ヶ城跡のあるところ。城跡と麓の平坦地からなる。

ナシノキダは何を意味しているのか。ナシはナラシ（平）の転で「緩傾斜地」をいう（語源辞典）。ノキはヌキ（抜）の転で「土石流があった所」か。ダはダ（処）。以上から、ナシノキダとは、「土石流で埋まって平坦地になった所もある土地」であろうか。

全国地図には、ナシノキダ地名は記載が無い。

【井ヶ田】

イカダ。

この小字は、ナシノキダ小字の北隣で鶯ヶ城跡の麓にある。現在でも田んぼは無い。

イカダとは何か。イはキ（井）で、「水」をいう。すなわち、イカダとは「水のあるところ」であろうか。この小字には北沢川がある。

全国地図にはイカダ地名が6ヶ所にあるが、内5ヶ所は「筏」の字が宛てられている。

【下カリ】

サガリ。

下村地区のジョウガコシ小字の南隣にある小さな小字である。

サガリとは「上から下へ位置がかわること」（広辞苑）をいうが、ここでのサガリとは、「傾斜地」をいう（語源辞典）。

全国地図には8ヶ所にサガリ地名が、中・大字として挙げられている。

【濱井場】

ハマイバ。

下村地区の下村公会堂があるところに、この小字はある。

ハマイバは「破魔打を行う場所」（広辞苑）である。この付近には浜もないし、村はずれでもない。ただ西の方にタンパクシャ小字やミヤノマワリ小字があるので、そのお宮の近くで破魔打が行われたのであろうか。

【日焼田】

ヒヤケダ。

この小字は、ハマイバ小字の南隣にある。

ヒヤケダとは、「早になると水が潤れ易い田んぼ」であろう。現在は水田がない。あるいは、ヒヤケダとは、「早

になると水が涸れてしまう場所」であろう。

全国地図には、ヒヤケダ地名は1ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【矢矧】

ヤハギ。

この小字は、下村地区のジョウガコシ小字の南西隣にある。

ヤハギとは何か。二説を挙げる。

①ヤハギとは「竹に羽根をつけて矢をつくる仕事をしていた人の住居跡」（広辞苑）か。近くには鶯ヶ城跡があるので、可能性は高い。

②ヤハギとはイハ（岩）・ハギ（剥）で、「崩崖」をいう（語源辞典）。このヤハギが「崩崖のあるところ」を意味することも考えられる。

全国地図には、ヤハギ地名は、中・大字として18ヶ所に挙げられている。

【矢内】

ヤウチ。

この小字は、天竜川の岸にあり、半分ほどは岸壁の急傾斜地になっている。

ヤウチとは何を意味しているのか。語源辞典によりながら解釈を二つ。

①ヤは「流水」をいい、ウチはフチ（縁）の転で「川べり」をいう。ヤウチとは「流水の川べり」であろうか。まさに現地は天竜川の川べりになっている。

②ヤはヤツ（菴）の略で「湿地」のこと。ウチはウツ（打）の連用形で名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう。以上から、ヤウチとは「断崖の麓には湿地になっている所」か。

ヤウチ地名は、全国地図には1ヶ所だけ、「谷内」の字が宛てられている。

【前田】

マエダ。

この小字は下村地区の寺小字群の南隣にある。

マエダとは「寺院の前にある土地（あるいは水田）」であろう。現在は、田んぼになっているところは一部。

【清岡】

キヨオカ。

この小字は下村地区の寺小字群の南東側にあり、ヤハギ小字の西隣になる。

キヨオカとは何か。

キヨ（清）は「清浄。神聖」の意（語源辞典）。キヨオカとは、「神聖な丘」で、寺社に関わる仏事か神事が行われたところであろうか。寺であれば、寺小字群の中心となる寺院であり、お宮であれば、天伯社か。

全国地図にはキヨオカ地名は2ヶ所にある。

【垣外・下垣外】

カイト・シモガイト。

これらの小字は、寺小字群の周辺にある。

カイトは「居住地跡」であり、シモガイトは、「カイト小字の下流側にある居住地跡」であろう。

【寺前・寺ノ前】

テラマエ・テラノマエ。

テラノマエ小字は、下村地区の天竜河畔の台地上にあり、ここに中心になる寺院があったと思われる。テラマエ小字はテラノマエ小字の西隣にある小さな小字である。いずれも寺小字群に属する。テラノマエ小字内には、下村第3小組合集会所がある。

全国地図には、テラマエ地名が14ヶ所にもある。

【寺ノ後・寺ノ浦】

テラノウシロ・テラノウラ。

テラノウシロ小字は、テラノマエ小字の西側と北側の天竜川沿岸の崖地に二ヶ所ある。テラノウラ小字は、小さな小字でテラノマエ小字の北隣にある。いずれも、寺小字群に属する。

テラノウシロ・テラノウラは、いずれも「寺のあったテラノマエ小字の北側か傾斜地の下側にある所」を意味するか。

全国地図には、テラノウラ地名は1ヶ所だけあり、テラノウラ地名はゼロである。

【墓下・墓前・墓浦】

ハカシタ・ハカマエ・ハカウラ。

これらの小字は、下村地区の寺小字群の北東側に固まっている。

いずれもテラノマエ小字にあった寺院関係の墓地に関わる小字であろう。ただ前後関係はよくわからない。

全国地図には、ハカシタ・ハカマエ・ハカウラのいずれの地名も記載は無い。

【下畠】

シモハタ。

この小字は下村地区の二ヶ所にある。一つはキヨオカ小字やカイト小字の斜面の下方にあり、もう一つはテンパクシャ小字の南側になる。

シモハタとは、「神聖な場所の斜面下方にある畠」を意味しているのであろう。一つはテラマエ小字かキヨオカ小字の下方にあり、もう一つはテンパクシャの下方になる。

全国地図には、25ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

【西ノ前】

ニシノマエ。

この小字は下村地区のオオヤシキ

小字に三方を囲まれた窪地にある。

ニシノマエとは何か。二説を挙げる。

①ニシノマエとは、「有力者の居住地の前になる西隣の土地」であろうか。ニシとマエと重なるので説得力は落ちるかもしれない。

②ニシは動詞ニジム(滲)の語幹で「湿地」をいう(語源辞典)。ニシノマエとは、「有力者の居住地の前で湿地になっている所」か。

全国地図には、ニシノマエ地名は、5ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【大屋敷】

オオヤシキ。

下村地区のジョウノコシ小字とニシノマエ小字に挟まれている。

ヤシキ(屋敷)とは武家屋敷のことか。オオヤシキとは「鶯ヶ城の城主の関係者等有力者の住居跡」であろう。

全国地図にも、オオヤシキ地名は28ヶ所に、中・大字として記録されている。

【地震崩】

ジシンクズレ。

下村北部の龍江境にあり、テラノウシロ小字とオオヤシキ小字に挟まれている。

ジシンクズレとは、「地震によって崩れたところ」をいうのであろう。

この地震は、おそらく享保3年7月26日(西暦では1718年8月22日)に発生した、通称、遠山地震であろう。理科年表によれば、信濃・三河の地震で「伊那遠山谷で山崩れ、せき止められた遠山川が後に決壊し、死50余。飯田長久寺の唐門倒れた」とある。

全国地図にはジシンクズレ地名は

載っていない。

【櫃岩】

ヒツイワ。

この小字は下村地区の北西隅にある。紅葉川が天竜川に合流する地点で、JR 飯田線の天竜川鉄橋がある。対岸の川路にも「ヒツ岩」小字がある。

ヒツイワ←シツイワと、伊那谷の方言様に転訛したもの。ヒツイワとは、「湿り気を帯びた岩のある所」であろう。段丘の麓で湧水が多いところと思われる。

全国地図には、ヒツイワ地名は記載が無い。

【細田】

ホソダ。

この小字は下村地区のテラノマエ小字にある台地の北東側にある小さな洞にある。

ホソダとは何をいうのか。分からない小字の一つ。二説を挙げたい。

①ホソダとは、文字通りに解釈すれば、「細い土地」となるが、どうであろうか。

②ホソとは三重・和歌山・富山などの方言で、コナラのことだという（国語大辞典）。日本の各地で自生する植物で植栽もするらしい。材は建築・道具・薪炭などに用いられるという。ホソダとは、「コナラが自生しているところ」であろうか。三遠南信の方言になっているのかどうか、気になる。

全国地図には、ホソダ地名は、中・大字として、35ヶ所にも記載され、全て「細田」の字が宛てられている。

【構木】

ハンノキ？

下村地区の天竜川河畔の斜面にある。「構」の字が分からない。大漢和

辞典にも出ていない。そこで、仮にハンノキとした。

ハンノキであれば、「焼畑耕作が行われた所」ではないだろうか。焼畑はかなりの勾配の斜面でも行われたという。

【鍛冶屋】

カジヤ。

この小字は、下村の寺院があったと思われるテラノマエ小字の南隣にある。

カジヤ小字の近くには寺院があるということは、寺院の釘や鋸を造る仕事があったためであろうという。法全寺に近くにも鍛冶屋はあった。

カジヤとは、「鍛冶職人が住んでいた所」であろう。

【落】

オチ。

下村地区のテラノマエ小字の南隣の窪地にあり、その南端を谷川が流れている。

荻坪地区にもオチ小字があり、「沓地のある所」とした。ここ下村地区のオチとは何か。二説を挙げておく。

①荻坪のオチと同様にオチ（沓地）で、「低い土地に水が溜まってできた沓地があった所」か。現在も窪地であるが、池はない。かつてはあったものとして、この仮説を挙げる。

②オチ（落）は「傾斜地」をいう（語源辞典）。オチは「傾斜地があちこちにあるところ」か。

【梅ノ木】

ウメノキ。

この小字は下村地区のオチの谷川を挟んだ対岸の左岸傾斜地にある。

ウメノキとは何を意味するのか。

ウメはウメ（埋）、ノキはヌキ（抜）

の転で「崩壊地形」（語源辞典）をいう。ウメノキとは、「崩れた斜面や堆積した土砂のあるところ」であろうか。

全国地図には、ウメノキ地名は、中・大字として40ヶ所に記載がある。

【籠田】

カゴタ。

この小字は下村地区の寺院のあった台地の西端にある。

カゴタとは何か。二説を挙げたい。

①カゴ←カ（欠）・コ（処）と転じた語で、「崩壊地」をいう（語源辞典）。すなわち、カゴタとは、「崩れ地のある所（あるいは水田）」か。現在でも一部に水田がある。

②カゴ←カコ（水手）と濁音化したもので、カゴタとは、「船頭が耕作していた田畑」であろうか。現在の道を天竜川の方へ下っていくとフナバ小字に着く。

全国地図には、カゴダ地名は2ヶ所にあり、いずれも「籠田」の字が宛てられている。

【長畑】

ナガハタ。

これも、下村地区の寺院のあった台地の西端にある小さな小字である。

ナガハタとはナガ（長）・ハタ（端）で、「台地の縁にあたる所」であろうか。

全国地図には、ナガハタ地名が、中・大字として、21ヶ所に挙げられている。

【滝場】

タキバ。

この小字は下村地区にあって、天竜川から、上の台地縁に達する広大な面積になっている。緩急の傾斜地があり、南北は谷川でほぼ区切られている。

タキバとは山伏や験者が滝行をする所と思われるが、単に「滝のあるところ」の意味もあるようだ。

全国地図には、なぜかタキバ地名はわずか1ヶ所と少ない。

【舟場】

フナバ。

下村地区の天竜川沿岸にあり、タキバ小字の南隣になる。

フナバは「船着き場。渡船場」である。対岸の上流側になるが、川路のイカダバ小字と行き来していたと思われる。また、通船の船着き場であった可能性もある。

全国地図には、フナバ地名が26ヶ所に中・大字として挙げられている。

【天伯浦】

テンパクウラ。

これも下村地区の天竜川沿岸の急傾斜地にある。この小字の東方の尾根にはテンパクシャ（天伯社）小字がある。

ウラ（浦）とは「水のほとり」（広辞苑）で、天竜川の沿岸をいう。

テンパクウラとは、「天伯神が祀られている天竜川の水辺」ということになる。天白神の神格は多様であるが、ここでは水神として祀られているものと思われる。

全国地図には、テンパクウラ地名は載っていない。

【和城・和城沢】

ワジョウ・ワジョウザワ。

ワジョウザワ小字は和城沢川が天竜川との合流点の手前を、天竜川に並行に細長く延びている。もう一つ泰阜村境にも、小さなワジョウザワ小字がある。

ワジョウ小字は和城沢川の上流部

にあり二本の支流に挟まれた尾根頂部の平坦地にある。

ワジョウはワ（輪）・ジョウ（城）で、「輪のように丸い砦」をいうのであろう。

このワジョウ小字から和城沢川が生まれ、ワジョウザワ小字が名付けられたのではないだろうか。

全国地図には、ワジョウザワ地名は、記載が無い。

【新井洞】

アライボラ。

下村地区のアライボラ小字は二ヶ所にある。いずれも、和城沢川とその支流に開口する谷にある。

アライボラとはアラ（荒）・キ（井）・ホラ（洞）で、「勢いの激しい流水に接している谷」であらう。

全国地図には、アライボラ地名は載っていない。

【水半場】

スイハンバ。

この小字は、テンパクシャ小字と丘陵部の峰を折半している。小字の北部は急傾斜地を経て谷川に接している。

スイハンバとは何か。二説を挙げたい。

①スイはスエ（末）の転で「末端」をいい、ハンバ（半場）は「崖下を流れる谷川」のこと（以上は語源辞典）。以上から、スイハンバとは、「丘陵の末端部を谷川が流れている場所」であらうか。

②スイハン（水畔）・バ（場）で、「水のほとり」をいう（広辞苑）。すなわち、スイハンバとは「谷川のほとり」をいうか。

全国地図には、スイハンバ地名は無い。

【天伯社】

テンパクシャ。

この小字も、天竜川に最も近い丘陵部にある。

テンパクシャは「天白神を祀る社があった所」であらうか。天竜河畔にあるテンパクウラ小字の天伯様との関係は不明である。

全国地図には、テンパクシャ地名も記載が無い。

【宮ノ廻り】

ミヤノマワリ。

この小字は下村地区のテンパクシャ小字の北隣にあり、北端は谷川に接している。

ミヤノマワリとは、字面の通りで、「お宮（天伯社）の周辺部」をいうのであらう。

全国地図には、ミヤノマワリ地名も記載が無い。

【惣力】

ソウリキ。

この小字は、天伯社丘陵の台地上にある。

ソウリキとは何を意味するのか。はっきりしない小字の一つ。語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①ソウ（惣）は中世の自治組織が置かれた所か。リ（里）は農民の居住地であったところで、キは「場所」を示す接尾語。以上から、ソウリキとは、「惣組織に関連する御堂などがあった場所」か。

②ソウリは「焼畑の跡地」のこと。キは「場所」をいう接尾語。すなわち、ソウリキとは、「焼畑の跡地であった所」か。

全国地図には、ソウリキ地名は記載が無い。

【屋敷】

ヤシキ。

下村地区の天伯社丘陵にあり、ソウリキ小字の東隣になる。

ヤシキとは、「有力者の居住地跡」か。

全国地図には、ヤシキ地名は、中・大字として、73ヶ所が挙げられている。

【桶屋・桶屋森】

オケヤ・オケヤモリ。

オケヤ小字は、天伯社丘陵の南部の麓から尾根続きの東側の丘陵頂部に及ぶ、広くて細長い地形になっており、オケヤモリ小字は、オケヤ小字の南東端に接している。

オケヤとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①オケ←オギと転じたものか、「湿地」を意味する。ヤはヤ（谷）であろう。オケヤとは「湿地となっている谷」をいうか。和城沢川支流の細長い谷になっている部分を名付けたのであろうか。やや無理気味の解釈か。

②オケヤは「桶屋」で、独立した職人で、江戸時代には風呂桶や井戸側（いどがわ）や樽を作ったり修理するなど、製造と販売を業とする居職が成立していたという（民俗大辞典）。尾根の頂上部に仕事場があったのであろう。

オケヤモリ小字は小さい面積で、「オケヤ小字の近くにある神聖な森」を意味しているのかもしれない。

全国地図には、なぜか、オケヤ地名もオケヤモリ地名もは記載が無い。

【洞】

ホラ。

下村地区にはホラ小字が二ヶ所にあり、いずれも小さい。一つはオケヤ

小字に取り囲まれ、もう一つハハチノクラ小字の西隣になる。

ホラは「小さな谷」のことであろう。

全国地図にはホラ地名は、26ヶ所に中・大字として挙げられており、全てに「洞」の字が宛てられている。

【平畑】

ヒラハタ。

下村地区の天伯社丘陵のヤシキ小字の南隣にある。

ヒラハタとは「丘陵頂部の縁にあり、平坦部と傾斜地のあるところ」であろうか。ヒラは「平坦部と傾斜地」をいい、ハタはハタ（端）である。

全国地図には、ヒラハタ地名は、中・大字として、12ヶ所に記載がある。

【尺口】

シャグチ。

この小字は天伯社丘陵の尾根続きである東側の頂上部にある。

シャグチ←ジャグチ（蛇口）と濁音化した語で、ジャク（崩崖）・チ（「場所」を示す接尾語）をいう（語源辞典）。すなわち、シャグチとは「崩崖のある所」となろうか。

全国地図には、シャグチ地名は無いが、ジャクチ地名は1ヶ所、ジャグチ地名は3ヶ所に、中・大字として記載がある。

【九郎平畑】

クロベエハタ。

この小字は下村地区の天伯社丘陵の南麓付近にある。小さな面積の傾斜地である。

クロベエハタとは「丘陵の麓にある九郎兵衛の所有地」か。ハタはハタ（端）であろう。

【火池浦田】

ヒイケウラタ。

下村地区のタキバ小字とオケヤ小字に挟まれた小さな小字である。やや緩い傾斜地になっており、和城沢川とその支流の畔にある。

ヒイケウラタという複雑な小字は何を意味するのであろうか。

ヒイケ←ヒケ（曳）と転じた語と判断したがどうであらうか。ヒケは動詞ヒク（退）の連用形が名詞化した語で「（谷奥に）引っ込んだ奥の所」をいう（語源辞典）。ウラは「水際」で、タはタ（処）。

以上から、ヒイケウラタとは、「谷奥に引っ込んでおり、川が流れているところ」をいうのであろう。

全国地図には、ヒイレウラタ地名は載っていない。

【茶道】

チャミチ。

この小字は下村地区の三ヶ所にある。いずれも丘陵の頂上部から麓までを含んでいる。この三ヶ所はかつては繋がっていたものと思われる。

チャミチとは何か。これもよくわからない地名である。二説を挙げたい。
①チャミチとは「茶畑とそこへ行く道のあるところ」か。現在は、一部ではあるが果樹が栽培されている。

②チャはチ（フチの上略）・ヤ（菴）で「縁が湿地になっている所」（語源辞典）をいう。すなわち、チャミチとは「縁である麓が湿地になっている山地」か。

チャミチ地名も全国地図には記載が無い。

【札場】

フダバ。

下村地区の住宅地で、丘陵の頂上部

にある。

フダバとは、「立て札を立てた所」である。札場は「江戸時代、人通りの多い辻や橋のたもとなどにあつた、種々の布告や禁令の制札を立てておく場所」（国語大辞典）。

全国地図にもフダバ地名は18ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【横畑】

ヨコハタ。

この小字は、フダバ小字の南隣にある住宅地。

ヨコハタとは何をいうのであろうか。

ヨコハタは、文字通り、「尾根筋の中腹から麓までの傾斜地にある畑」であらうか。

全国地図には、ヨコハタ地名は、7ヶ所に中・大字として記載がある。

【入垣外】

イリカイト。

下村地区のワジョウ小字の北東側にある小字。

イリは「外から、ある場所の内に移動すること」（国語大辞典）の意か。イリカイトとは、「外から和城に入るところにある居住地跡」か。

全国地図には、イリカイト地名は載っていない。

【家上・家ノ後】

イエウエ・イエノウシロ。

これらの小字は下村地区のワジョウ小字の東方にある。「家上」小字と「家ノ後」小字は、ドウウエ・ドウノマワリ小字を挟んでいる。

ウエ・ウシロの基準になっているのは、ドウ（堂）であらう。堂には「賓客に接し、また礼楽を行う建物」の意もあり（広辞苑）、堂を「家」と表現

しているものと思われる。

以上から、イエウエとは「堂の上にある土地」をいい、イエノウシロとは「堂の裏側にある土地」をいうのであろう。

【上手】

ワデ。

この小字は、ワジョウ小字の二面、北側と西側に接している。

ワデとは何か。二説を挙げる。

①ワデ(上手)とは、「台地の高い所」であろうか。

②ワデはワ(曲)・デ(手)で、「(等高線が)曲がっているところ」であろうか。テは「場所」を表す。

全国地図には、ワデ地名は、18ヶ所に中・大字として記載がある。

【外垣外】

ソトガイト。

この小字は和城台地の麓にある。

ソトガイトとは、「(和城の)城域より外側にある居住地跡」であろうか。

全国地図に、ソトガイト地名は載っていない。

【榎尾】

トガオ。

この小字は、和城台地から西に延びる尾根の頂上部にある。

トガオとは何か。語源辞典に依って二説を挙げたい。

①トガは動詞トグ(研)と関係し、「崩壊地形、浸食地形」をいう。オはヲ(尾)で「峰」のこと。以上から、トガオとは「崩壊地のある峰をもつ丘陵」をいうのであろうか。

②トガとは「川沿いの野」をいう。トガオとは、「川沿いで、峰のある山地」か。

全国地図には、トガオ地名もトガノ

オ地名も記載は無い。

【樽脇】

タルワキ。

この小字には、トガオ小字の東隣にある尾根筋の頂上部がある。

タルワキとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①小字内にある独立峰をタル(樽)に見立てたもので、タルワキとは「樽のような独立峰の傍らの地」をいうか。

②タルとは「谷川の滝となっている所」をいう(語源辞典)。下伊那地方の方言であるという。急流を滝とする場合もあるようだ。タルワキとは、「急流のある傍」か。

全国地図には、タルワキ地名も記載が無い。

【矢半沢】

ヤハンザワ。

この小字は、下村地区の尾根が天竜川に接する部分にある、尾根の北東側の急傾斜地になっている。

ヤハンザワとは何か。語源辞典に依りつつ二説を挙げたい。

①ヤハン←ヤハギの転訛した語で、イハ(岩)・ハギ(剥)から「崩崖」のこと。ヤハンザワとは「崩崖のある谷川」か。

②ヤハンザワはヤ(菴)・ハン(焼畑)・サワ(沢)で、「谷川が流れている焼畑耕作地」であろうか。

全国地図には、ヤハンザワ地名は載っていない。

【佛具免】

ブツグメン。

この小字は下村地区のソトガイト小字の南隣にある。

ブツグメンとは、「収穫物を仏事を行うに必要な佛具を維持管理する費

用に宛てるために免租されている耕作地」であろうか。

全国地図には、ブツクメン小字もブツグメン小字も記載は無い。

【又木田】

マタギダ。

この小字はワジョウ小字の南隣にある。

マタ（又）は和城沢川に支流が合流していることを意味する。ギダ＝キダ（階）で、「棚田状の地形」をいう（以上は語源辞典）。

以上から、マタギダとは、「川の合流点がある棚田地帯」をいうものと思われる。

全国地図には、マタキダ地名も、マタギダ地名も記載はされていない。

【皿田】

サラダ。

この小字は、下村地区のワジョウ小字の南隣、マタギダ小字の西隣にある。

サラダとは「排水のできる田」（国語大辞典）をいう。米と麦を作っていた田んぼであろう。下伊那で使われることが多いという。

全国地図には、2ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【道珍】

ドウチン。

この珍しい小字は下村地区のマタギダ小字の南隣にある。和城沢川に支流が流れ込んでいるところである。現在は、大部分が水田になっている。

ドウチンとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①ドウは川音による音響地名で、チンはチン←チヌと転じた後でチ（接頭語）・ヌ（沼）となり、「湿地」をいう。

以上から、ドウチンとは「川音が聞こえる湿地」をいうか。

②ドウは北安曇地方で「川の合流点」をいう。ドウチンとは「川の合流点のある湿地」か。

全国地図には、ドウチン地名は1ヶ所にあり、「道珍」の字が宛てられている。

【麥田】

ムギタ。

この小字は、ドウチン小字の南隣にある。現在は水田地帯になっている。

ムギタとは「米麦二毛作で麦をつかってある田」（広辞苑）である。

前にはサラダもあった。山間の沼田が多かった時期に、二毛作田は目立つ存在であったのかもしれない。

全国地図には、ムギタ地名は、3ヶ所に、中・大字として記載がある。

【向田】

ムカイダ。

この小字はムギタ小字とシラスナ小字の間にある。

ムカイダとは、「向こうにある田んぼ」であろうが、どこからみてムコウになるのか。北側にある和城小字か、それとも南側にある城ヶ山小字か、それとも他の小字なのか。

【城ヶ腰】

ジョウガコシ。

下村地区にはジョウガコシ小字は二ヶ所にある。一つは鶯ヶ城の近くであり、これについては先に触れた。このジョウガコシ小字は、城ヶ山小字の近くにある。

ジョウガコシとは、鶯ヶ城のジョウガコシと同じで、「城ヶ山丘陵の腰の部分に相当する場所」をいう。

【宮後・宮ノ前】

ミヤウシロ・ミヤノマエ。

この小字は下村地区の諏訪社小字の前後、ミヤウシロ小字は北隣に、ミヤノマエ小字は南隣にある。

ミヤウシロとは、字面の通りで、「諏訪神社の裏側にある土地」をいう。諏訪社は南面して建てられているのだろう。

ミヤノマエとは、当然ながら、「諏訪神社の前方に当たる南側にある土地」をいう。

全国地図には、ミヤウシロ地名は8ヶ所に中・大字として記載されている。

【城ヶ山】

ジョウガヤマ。

下村地区にはジョウ（城）のつく小字が多い。このジョウガヤマ小字もその一つ。西に向かって尾根を一つ越えると、そこは天竜川になっている。

ジョウガヤマとは、「砦があった山」であろう。

鶯ヶ城－和城－城山と、ほぼ南北に並んでいるのは、竜西の下条氏を意識したための布陣であろうか。

全国地図には、ジョウガヤマ地名は3ヶ所にあり、いずれも「城ヶ山」の字が宛てられている。

【一ツ登屋】

ヒトツトヤ。

この小字は、下村地区ミヤウシロ小字の谷の西側の尾根にある。

ヒトツトヤとは何か。

ヒトツはヒト（均）・ツ（接尾語）で、ヒトは形容詞ヒトシ（均）の語幹で「凹凸がないさま」をいい、「台地の上」をいう（語源辞典）。

トヤは「ツグミなどの小鳥を捕らえるために山中に設けた施設」をいうのであろう。今は禁止されているが、霞

網を張ったり、小屋があつたりしたのであろう。

以上から、ヒトツトヤとは、「小鳥を捕らえるために設けられた施設のある台地の上」であろうか。

全国地図には、ヒトツトヤ地名は記載が無い。

【登ヤ平】

トヤダイラ。

この小字は、ヒトツトヤ小字の南隣にある小さな小字である。

トヤダイラとは、「鳥屋が設置されている山中の緩傾斜地」をいうのである。

トヤダイラ地名も、全国地図には載っていない。

【打越】

ウチコシ。

下村地区の小字で、天竜川と並行する東側の最初の谷にある。

一般的には、ウチコシ（打越）といえば、「中世において、所領の境界を越えて横領すること」（国語大辞典）となるが、ここの近くには境界らしいところはないので、次のように考えたい。

つまり、ウチコシとは、「谷から山頂への道を登った向う側」（国語大辞典）としたい。基準になっているのは諏訪神社か城ヶ山の東側付近であろうか。

全国地図には、ウチコシ地名は、55ヶ所が中・大字として記載されている。

【白砂】

シラスナ。

この小字は、尾根の先端部にあり、ムカイダ小字の西隣になる。山の神か氏神のお宮が、頂上部にある。

シラスナとは、文字通り、「白い砂地の土地」であろうか。風化した花崗岩の砂地になっているのであろう。

全国地図には、シラスナ地名は2ヶ所にあり、「白砂」の字が宛てられている。

【砂田】

スナダ。

この小字は、シラスナ小字の北隣にある。

スナダも字面の通りで、「砂地の田」をいう（国語大辞典）。

全国地図には、スナダ地名は16ヶ所と多い。すべてに「砂田」の字が宛てられている。

【赤坂】

アカサカ。

スナダ小字の西側にある、小さな小字である。

アカサカは、一般的には、「粘土など赤褐色の土肌が見えている坂道」であろう。未確認である。

全国地図には、アカサカ地名は、中・大字として、135ヶ所にも記載がある。

【山寄】

ヤマザキ。

下村地区の西端の丘陵の広い台地にある。

ヤマザキとは、「尾根の先端部」をいうか。

全国地図でも、ヤマザキ地名は、中・大字として125ヶ所に挙げられている。

【井戸神】

イドガミ。

この小字は、下村地区のヤマザキ小字の南隣にある。洞になっており、現在は溜め池もある。

井戸神とは、井戸に祀る水神で井の神ともいう。祠その他の祭祀施設はなく、井戸神としての祭りもないのが通例。井戸は他界（異界）とつながる神聖な境界領域としての場所と観念されていた。泉や川は神聖な禊ぎの場でもあった。神道では伊弉諾神の第24子、水波売神を、仏教信仰の影響が強い場合は蛇を伴った弁財天の女神像が当てられている。（国語大辞典、民俗大辞典）。

イドガミとは、ここにある溜め池に祭られている水神をいうのであろうか。

全国地図には、イドガミ地名は4ヶ所に挙げられている。

【天狗山】

テングヤマ。

下村地区の最西端の尾根の頂上部とその西側斜面にある。イドガミ小字の南隣になる。

テングヤマとは「天狗がいるといわれていた山」であろう。

天狗は山の神でもある。天狗伝承の隆盛は修験道の隆盛と時期を同じくしており、清浄を愛する・執着心の強さ・復讐を好む・任侠の気質が天狗の気質といわれているが、これは中世修験道のもつ気質が反映されているという。古代において山の妖怪の主役であった鬼の位置を天狗が奪ったことを意味しているともいう（民俗大辞典）。

全国地図には、テングヤマ地名は、42ヶ所と多い。

【押場】

オシバ。

天竜川河畔のコシキヤマ小字とイツネヅカ小字に挟まれた小さな小字

である。

オシバとは、「押し出されたような地形になっている所」であろう。丘陵の末端部にあり、押し出されたような形になっている。

全国地図には、オシバ地名は1ヶ所にあり、「押場」の字が宛てられている。

【越危山】

コシキヤマ。

天竜川河畔に細長く伸びる広い小字である。

コシキヤマとは、「甑（こしき）に見立てた独立峰のある所」であろう。米川が天竜川に合流する地点にその独立峰はある。

全国地図には、コシキヤマ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「甑山」の字が宛てられている。

【上松】

ウエマツ。

下村地区の最西端の丘陵地の台地上にある。現在は果樹園が多く、桑畑や畑が続いている。

ウエマツとは「高い台地上で、アカマツが自生していたところ」であろうか。

全国地図には、ウエマツ地名は34ヶ所と多い。

【凧路屋】

タコジヤ。

この小字も、下村地区最西端の丘陵の台地上にある。

タコジヤとは何か。分かりにくい地名である。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①タコ←タカ（高）の転訛した語で、ジヤ=ジャでザレ、ゾレに通じ「崖地」

をいう。タコジヤとは、「崖地があちこちにある高い台地」をいうか。

②タコは動詞タゴウ（違）と関係し「段差のある地形」をいう。タコジヤとは、「崖地もあり階段状になっている土地」をいうのであろうか。

全国地図にはタコジヤ地名は載っていない。

【梶屋・梶屋山】

カジヤ・カジヤヤマ。

これらの小字も凧路屋丘陵の中腹部の緩傾斜地にある。

カジヤはカジヤ（鍛冶屋）である。「鍛冶を職業とする人の居住地があったところ」であろう。

寺社の釘や鋸（かすがい）を製造することが主な仕事であったが、農具の製造もするようになって、村々を巡る出職の鍛冶屋と居職の鍛冶屋もあったようだ。ここでは諏訪社が需要の中心だったかもしれない。

カジヤマは、「鍛冶屋が炭などを焼いた山」であろうか。

全国地図には、カジヤ地名は82ヶ所に中・大字として挙げられている。

【西ヶ久保】

ニシガクボ。

この小字は凧路屋丘陵の西側斜面にある。

ニシガクボとは、「(神社の) 西の方にある谷」をいうものと思われる。神社とは諏訪社であろう。

【米川坂】

ヨネガワザカ。

この小字も凧路屋丘陵の西向き傾斜地にある。

ヨネガワザカとは、「米川の近くでその右岸にある坂道」をいうか。米川沿岸から丘陵頂部を通る道がある。

全国地図には、ヨネガワザカ地名は記載が無い。

【漆畑】

ウルシバタ。ソエバタとする資料もあるが間違いであろう。

この小字は諏訪社の南になる。南向き傾斜地となっている。

ウルシバタとは漆をとるように、「本漆を植えた畑」を意味する。竜丘にもウルシバタがあり、現在、漆畑から逸出した本漆が鷲流峡で確認されている。

全国地図には、ウルシバタ地名が3ヶ所に中・大字として記載されている。

【下屋】

シモヤ。

この小字は、カジヤ小字の南隣の緩傾斜地にある。現在は果樹が植えられている所が多い。

シモヤはシモ（下）・ヤ（菴）で、「丘陵の低い方にあり自然湧水のあるところ」か。

全国地図にはシモヤ地名は12ヶ所に中・大字として挙げられている。

【横前】

ヨコマエ。

この小字も、カジヤ小字の南隣にある。諏訪社の南西方向に当たる。

ヨコマエとは「(諏訪社の)前方脇にある土地」をいうのであるか。

全国地図には、中・大字としてのヨコマエ地名は5ヶ所にある。

【大砂】

オオスナ。

下村のウルシバタ小字の南側にある小さな小字である。

オオスナとは「多くの砂が出たところ」の意であろうか。

少し行き過ぎかもしれないが、砂が

吹き出したところではないかと考えたがどうであろうか。下村の北方にはジシンクズレ（地震崩）小字があり、恐らく1718年の遠山地震によるものではないかと推測したが、このオオスナ小字も遠山地震で顕れた砂地としたいが、どうであろうか。川路にもオオスナバ（大砂場）小字があり、遠山地震によるものと考えている。

【大垣外】

オオガイト。

この小字は下村地区の諏訪神社のほぼ南方にあり、ウルシバタ小字の東隣になる。

オオガイトとは、「有力者の居住地跡」と思われる。

【岩倉】

イワクラ。

諏訪社の南麓にある小字で、ここには下村第4小組合集会所がある。南向きの斜面であり、現在も一部は畑になっている。

イワクラはイハ（岩）・クラ（割）で、「岩の切り立っている場所がある土地」であろうか。

全国地図には、イワクラ地名は中・大字として、44ヶ所に挙げられている。

【久保】

クボ。

下村地区諏訪社の南東側にある緩傾斜地で、丘陵の中腹に当たる。現在は住居と畑地が多い。

クボとは、「中腹部の平坦地」であろう。

【堀頭】

ホリガシラ。

この小字も諏訪社の南東方にあり、緩い南向き斜面で、現在は桑園と竹藪

になっている。北隣はクボ小字になっている。

ホリ（堀）は、動詞ホル（掘）の連用形が名詞化したもので、「地を細長く掘り、水を通したもの」（広辞苑）という。人工的なニュアンスが強い。上隣にあるクボ小字に水が溜まりやすく、水はけを良くするために一部、人の手で掘って排水をよくした、と考えるのが順当であろうか。

ホリガシラとは、「水を通した堀の上流部」を意味する。

全国地図には、ホリガシラ地名が1ヶ所あり、「堀頭」の字を宛てている。

【空久保】

ソラクボ。

この小字は、クボ小字を挟んで南北に二ヶ所ある。この二ヶ所、小字名発生当時には、繋がっていたものと思われる。

ソラクボとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、二説を挙げておきたい。

①ソラは「上の方」をいう。ソラクボとは、「高い所にある窪地」であろうか。

②ソラは動詞ソラス（反）の語幹で、「傾斜地」をいう。すなわち、ソラクボとは、「傾斜地の間にある窪地」をいうのであろうか。

全国地図には、2ヶ所にソラクボ地名が、中・大字として挙げられている。

【溝垣外】

ミゾガイト。

この小字は二ヶ所にあり、和城沢川支流が解析した谷となっている。一つは、その上・下流にイドイリ小字があって挟まれている。二つ目は、上流側にあるイドイリ小字の更に上流側に

ある。このあたりは複数のミゾガイト小字とイドイリ小字が交錯している。

カイトは、今までは多くの場合、「住居跡」としてきたが、ここではこの解釈が当てはまりそうにない。ここではカヒ（峽）・ト（処）で、「山間の小平地」（語源辞典）と解するのがより適切であろう。ミゾはミズ（水）・ホソ（細）・ガハ（川）で、「細流」をいう（語源辞典）。

以上から、カイトとは「小さな川が流れている山間の小平地」であろう。

全国地図には、なぜか、ミゾガイト地名は記載が無い。

【焼畑】

ヤキハタ。

下村地区南部の山間地にあり、ソラクボ小字に隣している。緩傾斜地が8割ほど、急傾斜地が2割ほどの土地で、現在は竹藪と山林になっている。

ヤキハタは、文字通り「焼畑耕作が行われていたところ」であろう。

全国地図には、なぜかヤキハタ地名の記載が無い。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は、和城沢川の支流周辺に三ヶ所もある。

イドイリとは、キ（井）・ド（処）・イリ（入）で、「川が上流部に当たる土地」を意味するものと思われる。

イドイリ地名も、全国地図には載っていない。

【諏方社】

スワシャ。

この小字は、尻路屋丘陵の最頂部にある。標高 580.5m の峰である。

スワシャというまでもなく、「諏訪神社」のこと。

全国地図には、スワシヤ地名は、1ヶ所にしか記載がない。

【沢入】

サワイリ。

この小字はイドイリ小字群の下流側にある。

サワイリとは、「沢の上流部」を意味する。ここではイドとサワを流水量で決めているようにも見える。すなわち、サワはイドよりも大きな流水をみているのかもしれない。

全国地図には、サワイリ地名は、中・大字として、7ヶ所に記載がある。

【吉田】

ヨシダ。

この小字は和城沢川とその支流の間にある丘陵となっている。現在でも標高 535.5m の頂上部に崩崖がある。

ヨシダとは何か。ヨシ←アシと「悪し」を嫌って変化させた語で、アズ、アシなどと同じ「崩崖」系の語だという（語源辞典）。ダはダ（処）。

以上から、ヨシダとは、「崩崖のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、中・大字として記載されているヨシダ地名は、134ヶ所にものぼる。

【林ノ越】

ハヤシノコシ。

この小字は、ホラ小字を挟んで、二ヶ所にある。大きい方の上流側にあるハヤシノコシ小字は袋状の小盆地になっていて、北西側の口からは和城沢川が流れ出している。小さい方のは、南西向きの傾斜地になっていて、中腹部から和城沢川に達している。

ハヤシノコシとは何をいうのだろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ハヤシとは水窪では「植林した所」をいう。ハヤシノコシとは、「植林地の中腹にあたる土地」をいう。コシは人体の腰部に、この小字を見立てたものの。

②ハヤシには、「傾斜地」の意味もあるという。ハヤシノコシとは、「傾斜地の中腹部に当たる土地」であろうか。

全国地図には、ハヤシノコシ地名は、一つも無い。

【岩下】

イワシタ。

この小字は和城沢川右岸にあつて、雉子山丘陵の南西向き斜面にある。

イワシタとは、字面通りに解釈すれば、「岩の出ているところより下側の土地」となる。雉子山の頂上部に浸食から取り残された岩でもあるのだろうか。

全国地図には、イワシタ地名は中・大字として48ヶ所にも記載がある。

【権平治】

ゴヘイジ。

雉子山丘陵の北西側傾斜地にあつて、大きな洞になっていて、現在は果樹・桑園・水田などがある。

ゴヘイジは固有名詞と思われるので、「ゴヘイジ所有の土地になっているところ」であろうか。あるいは「ゴヘイジが居住していた所」か。

全国地図にはゴヘイジ地名が1ヶ所ではあるが、中・大字として記載されている。宛てられている字は「御幣田」となっている。

【地蔵免】

ジゾウメン。

この小字は下村地区北部にあり、主要地方道飯田富山佐久間線に添って細長く延びている。またこの小字の二

方向はソウガヤシキ（僧ヶ屋敷）小字に接している。

ジゾウメンとは、「地蔵堂や地蔵講を維持するために、その費用に収穫物を当てる。そのために免租されていた耕作地」をいうのであろう。

中世以降、地獄の責め苦を代わって受ける地蔵菩薩に対する渴仰が深まり、民間でも講組織による地蔵信仰が行われるようになった。ムラの地蔵堂や講宿に会し、地蔵和讃や念仏を唱えて地蔵菩薩像や画像を拝み、共同飲食する。寺院を離れた地域社会における女人中心の信仰集団であったという（民俗大辞典）。

全国地図にはジゾウメン地名は、1ヶ所に中・大字として記載がある。宛てられている字は「地蔵面」。

【雉子山】

キジヤマ。

この小字は、主要地方道飯田富山佐久間線を挟んで、ジゾウメン小字の反対側にある。

キジヤマとは何か。二説を挙げたい。

①キジヤマとは、「木地師が住んでいたか、あるいは木地師が仕事をしたことのある山」か。

②キジヤマとは、単に、「鳥のキジのいた山」であろうか。

全国地図には、キジヤマ地名は、中・大字として、10ヶ所に挙げられている。

【僧ヶ屋敷】

ソウガヤシキ。

この小字は、主要地方道飯田富山佐久間線の両側にわたる。

ソウガヤシキとは何をいうのだろうか。仮説を二つ。

①ソウガヤシキとは、文字通り、「僧

侶が住んでいた屋敷跡」であろうか。この付近に寺院があったのか、それとも御師などの宗教関係者がいたのか、はっきりはしていない。

②ソウガヤシキ（沢）・カ（処）の転で、「川のある所」を意味するか（語源辞典）。ソウガヤシキとは、「川の傍に屋敷のあった所」か。和城沢川の最上流部が、この小字から出ている。

全国地図には、ソウガヤシキ地名は1ヶ所にあり、「惣ヶ屋敷」の字が使われている。

【溝ノ前】

ミゾノマエ。

この小字はゴヘイジ小字の北隣にある。細長い小字である。

ミゾノマエとは、字面の通りで、「細流の前にあるところ」か。この小字の平坦地と山稜の麓の間を小さな川が流れている。

全国地図には、ミゾノマエ地名は記載が無い。

【西田】

ニシダ。

この小字は、下村第1小組合集会所付近にある。

ニシダといえば、「西の方にある田」ということになるが、何の西なのか、はっきりしないので、ここでは別の解釈を挙げておきたい。

ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化で「湿地」の意（語源辞典）。従って、ニシダとは、「湿地になっているところ」であろう。タは現在、水田がないので、タ（処）とした。この小字で、小さな谷川が合流している。

全国地図には、ニシダ地名は、27ヶ所に中・大字として挙げられている。

【堂ノ回り・堂上】

ドウノマワリ・ドウノウエ。

これらの小字は和城の東方にある。

ドウ（堂）とは何か。「神仏を祭る建物」とするのが、最も妥当と思われるが、「賓客に接し、また礼楽を行う建物」（広辞苑）という解釈にも惹かれる。

ドウノマワリとは、「御堂の周辺」のことであろう。ドウノウエとは「御堂の上に当たるところ」か。

全国地図にはトウノウエ地名は4ヶ所にあるが、ドウノマワリ地名は記載が無い。

【富士山】

フジヤマ。

この小字はフダバ小字の東隣にある。

フジヤマとは、「富士講が行われた場所」と思われる。小字自体が高地になっている。富士山に見立てた山が近くにあるはずと思うのであるが、それがはっきりしない。

富士講は江戸中期に爆発的に広がったが、幕府の弾圧で、何種類かの教団に分かれていったらしい。伊那谷南部にも富士講はかなり浸透していることは、小字をみてもわかる。

全国地図にはフジヤマ地名は30ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【北田】

キタダ。

この名の小字は、主要地方道飯田・富山・佐久間線に沿った細長いのと、それより南の方にある小さな二つの小字がある。

キタダとは何か。二説を挙げる。

①キドノソト小字からみると、ニシダ小字は西の方にある。同じようにキド

ノソト小字からみると、三ヶ所のキタダは「北の方」にある。ただ、キド（木戸）を中心とすることができるのかどうか、という疑問は残る。しかし、キタダとは「下村地区の一つの中心からみて、北の方にある土地」であろうか。②キタダとは、キタ（階）・ダ（処）としたい。キタはキダハシすなわちキザハシをいう。つまり、キタダとは「階段状になっている土地」をいうのではないか。

全国地図には、キタダ地名は29ヶ所に、中・大字として記載されている。

【紙漉田・紙漉山】

カミスキダ・カミスキヤマ。

これらの小字は下村地区のハチノクラ小字の東方の丘陵地と谷部に、カミスキダ小字が二ヶ所、カミスキヤマ小字が一ヶ所にある。

カミスキダは「紙漉き作業が行われていた所」で、カミスキヤマとは「紙漉き作業が行われていた山」であろう。いずれにしても、紙漉きに関する地名と思われる。丘陵の麓で自然の湧水に恵まれていて、その湧水を使って紙漉きが行われていたのであろう。地名発生時には水田があったかもしれないが、現在はないので、ダはダ（処）とした。

慶長16年(1612)の伊久間村では紙を年貢として納めており、上納した紙の8割は南山郷・遠山地方から買い入れて上納していたという（下伊那史第8巻）。

全国地図には、カミスキダ地名もカミスキヤマ地名も記載は無い。

【沼田】

ヌマタ。

この小字は、二つのカミスキダ小字

に挟まれている。現在は上流部に水田があり、下流部は果樹園になっている。

ヌマタは「泥ぶかい田」（広辞苑）をいう、ここのヌマタもまた、「泥ぶかい田んぼのあるところ」だろうか。初期の水田を思わせる土地である。

全国地図にもヌマタ地名は37ヶ所と多い。

【大洞】

オオボラ。

この小字には、カミスキダ・カミスキヤマ小字の南東隣の尾根と谷底部がある。

オオボラとは「大きい谷」ということになる。別の意味がありそうにも思えるが、わからない。

全国地図には、オオボラ地名は20ヶ所に中・大字として挙げられている。

【日向畑】

ヒナタバタ。

この小字はオオボラ小字の東隣にある。ほぼ平坦地で日当たりは悪くはない。

ヒナタバタとは「日当たりのいい土地」であろう。

全国地図には、ヒナタバタ地名もヒナタバタ地名も記載は無い。

【三百田・三百田山】

サンビヤクダ・サンビヤクダヤマ。

これらの小字は、いずれも下村地区東部の山地にある。

サンビヤクダヤマは「三百田小字の近くにある山地」であろう。

サンビヤクダは「三百目の土地」を意味するものと思われる。緩傾斜地になっていて、現在はほとんどが果樹園になっている。

全国地図にはサンビヤクダ地名が1ヶ所だけ中・大字として記載されて

いる。

【白砂】

シロスナ。

この小字はサンビヤクタ小字の東隣にある峰をもった山地になっている。

シロスナとは、「花崗岩の風化した白い砂地になっている所」と思われる。全国地図にはシロスナ地名は無い。

【神田山・神田】

カンダヤマ・ジンデン。

カンダヤマ小字は二ヶ所にあり下村地区に所属、隣のジンデン小字は毛呂窪地区にあり、二つのカンダヤマ小字の間にある。不思議な位置関係である。

カンダは「田の神を祭る田」（語源辞典）。カンダヤマとは「田の神を祀っている山」か。田の神はすなわち、山の神か。

ジンデンは「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」（広辞苑）であるという。どの神社に所属するジンデンであるのかは、未調査。

全国地図には、カンダヤマ地名は、2ヶ所に記載がある。

【大鳥ヤ】

オオトヤ。

この小字はサンビヤクタヤマ小字の西隣にある。側稜の尾根から北側に広がる緩い傾斜地にある。

オオトヤとは、「トヤのある広い山地」であろう。トヤとは先に触れているように、「ツグミなどの小鳥を捕らえるために山中にもうけた施設」であろう。霞網とか小屋のことをいうものと思われる。

【琴ヤ】

コトヤ。

この小字は、千栄小学校北方の丘陵地の頂上部に近い北西向きの緩傾斜地にある。

コトヤはコ(小)・トヤ(鳥屋)か。すなわち、コトヤとは、「小さな鳥屋場」か、コ(古)・トヤで、「以前の鳥屋跡」かであろう。コトヤ小字に接して東側には広いオオトヤ小字がある。

全国地図にはコトヤ地名は記載が無い。

【林掛】

ハヤシカケ。

コトヤ小字の北隣にある小さな小字である。

カケはカケ(欠)で、「崖」をいう(語源辞典)。従って、ハヤシカケとは、「崖のある樹木の茂ったところ」をいうのであろう。

【東】

ヒガシ。

この小字は下村地区のカンノン・カンノンマエ小字の東側になる。

ヒガシとは「神聖な場所のヒガシの方」ということか。神聖な場所とは、もちろん観音様が祀られていた場所をいうのであろう。

【中オ畑・中ナ畑】

ナカオハタ。

「中ナ畑」のナはオを読み間違えたのではないかと解した。

ナカオハタは、ナカ(中)・ヲ(尾)・ハタ(畑か端)で、「三本並んだ尾根筋の中の尾根で焼畑であった所」あるいは、「三つの尾根筋の真ん中の尾根の先端部」を意味するものと思われる。

全国地図には、ナカオハタ地名は記載が無い。

【町張】

マチバリ。

この小字は、二つのタキバ小字に挟まれている。

マチバリとは何か。語源辞典に依りながら、解釈を二つ。

①マチはマチ(襠)で袴の内股の部分のこと、「山間のかくれ地」をいう。バリはハリ(墾)で「開墾地」。以上から、マチバリとは、「新たに開墾された山間のかくれ地」をいうか。

②マチ←マツと転じた語で、動詞マツハル(纏)から「巻いたような地形」をいう。バリはハリ(張)で、「張り出した所」のこと。マチバリとは、「丘陵の先端部が巻いたように張り出しているところ」か。谷部も同じように巻いたように張り出している。

【柿ノ木田】

カキノキダ。

この小字は下村地区の八ノ倉の東部に丘陵にある。頂部から谷部まで続く細長い小字になっている。現在は、頂部が果樹園になっているが、斜面は広葉種樹林に、谷は湿地である。

カキノキダとは何か。三説を挙げたい。

①カキノキはカキ(欠)・ノキ(除)で類義語を重ねて「崩壊地形」をいう(語源辞典)。ダはダ(処)であろう。カキノキダとは、「崩壊地がある土地」であろうか。

②カキノキダはカキ(柿)・ノ(助詞)・キダ(階)で、「柿が植えられている階段状の土地」であろうか。

③カキノキダとは、「崩崖のある階段状の地形」をいうか。

全国地図には、カキノキダ地名は、1ヶ所に中・大字として挙げられている。

【北座】

キタザ。

この小字は下村地区の八ノ倉に二つあるカンノン小字のうち東側ののに接している。小さな小字である。

キタザとは何をいうのだろうか。三説を挙げたい。

①ザ(座)には、「(貴人、神仏の)御座所」の意味がある(語源辞典)。キタザとは、「集落の北の方にある神仏の御座所」か。

②キタ=ギダ(階)。キタザとは「階段状になっている御座所」か。

③あるいは、伊那谷南部には多いタイザを言い換えている小字かもしれない。すなわち、「猿楽などが上演される場所」である。

全国地図にはキタザ地名は載っていない。

【一ツ田】

ヒトツダ。

この小字は八ノ倉集落の北側にある。谷底部の湿地になっていて、現在は荒地になっている。

ヒトツダとは何か。三説を挙げたい。

①ヒトツダとは、文字通り、「一枚の田んぼがあった所」であろうか。現在は水田がなくとも、地名発生時にはあったかもしれない。

②ヒトは形容詞ヒトシ(均)の語幹で、「山中の緩傾斜地」をいう。ツは助詞でダはダ(処)。以上から、ヒトツダとは、「山中の緩傾斜地」をいう。

③ヒトはシトから転じた語で、「湿地」をいう。ヒトツダとは、「湿地になっているところ」か。

全国地図にはヒトツダ地名は1ヶ所だけで、「一ツ坦」の字が宛てられている。

【又度】

マタド。

八ノ倉集落の北東側にあるカンノン小字の西隣にある小字で、側稜の先端部になっている。

マタドとは何か。分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①マタドは、マ(接頭語)・タド(高くなった所)。マは語調を整える接頭語。すなわち、マタドとは「高くなっているところ」であろうか。

②タド←タダの転で動詞タダル(爛)の語幹で「荒れて崩れる」の意。つまり、マタドとは、「崩壊地のあるところ」か。

全国地図には、マタド地名は記載が無い。

全国地図には、マタド地名は無い。

【砂尻】

スナジリ。

この小字は八ノ倉集落の北部にある。

スナジリとは「砂地になっている谷の末端部」であろう。

全国地図にはスナジリ地名も記載が無い。

【大門】

ダイモン。

この小字も八ノ倉集落の北部にある。小さな小字で、丘陵の北向き斜面になっている。

ダイモンといえば、「寺院の総門」のこと。ここでの寺院といえば、今はないが、近くにあるテラマエ小字やカンノン小字にかかわるような寺院があったと思われる。その寺院の「総門があったところ」がダイモンであろう。

【寺前】

テラマエ。

この小字は八ノ倉集落のダイモン小字の東隣にある。これも小さな小字である。

テラマエとは字面のとおりで、「寺院の前方」をいう。どんな寺院があったのだろうか。

全国地図には、中・大字として記載されているテラマエ地名は52ヶ所にものぼる。

【寺林】

テラバヤシ。

八ノ倉集落にある。

テラバヤシとは、「寺院の所有する林地」と考える。ダイモン小字に近いが、やや離れているので、境内ではなかったと思われる。

全国地図にはテラバヤシ地名は6ヶ所にある。

【観音】

カンノン。

八ノ倉集落には、二ヶ所にカンノン小字がある。一つは北部の寺小字群の中にあり、もう一つは八ノ倉集落の中にある。集落の中のカンノンには観音堂があるようだ。

カンノンとは「観音堂があった所」であろうか。

集落（観音堂）の中の観音堂には津島神社があり、地藏菩薩・馬頭観音・庚申塔（青面金剛像）・蚕玉神・日待塔（子ノ神）・聖観音・権現等が祀られている。

【西ノ平】

ニシノタイラ。

八ノ倉北部のカンノン小字の南隣にある。

ニシは動詞ニジル（躡）の語幹の清音化で、「崩壊地形」をいう（語源辞

典）。ノは助詞、タイラは「山中にある平らなところ」をいう（語源辞典）。

ニシノタイラとは、「崩壊地もある山中の平らな所」を意味すると思われる。

全国地図には、ニシノタイラ地名は5ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【八ノ倉】

ハチノクラ。

八ノ倉集落の南部にハチノクラ小字がある。

ハチノクラとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、三説を挙げる。
①ハチはハチ（鉢）を伏せたような高地をいい、クラはクラ（座）で「座所」を意味するという。ハチノクラとは、「高い所で有力者の座所があるところ」であろうか。有力者とは、城郭か寺社の関係者と思われるが、小字発生時のハチノクラの範囲がはっきりしていないので、判断は難しい。あるいは、ウシロジョウ小字に関係するのだろうか。

②ハチは動詞ハツル（削）の語幹ハツが転訛した語で、「削られたような地形」をいう。クラは「山の岩の多い所」か。すなわち、ハチノクラとは、「山の岩の多いところで、削られた崖地のあるところ」であろうか。

③ハチ←ヤチ（菴）の転で、クラは「谷」を意味する古語という。つまり、ハチノクラとは、「湿地になっている谷」のことか。

全国地図には、ハチノクラ地名は1ヶ所に記載がある。

【瀧場・滝場】

タキバ。

下村地区東部には、タキバ小字が二

ヶ所にある。いずれも小さな小字である。

タキバとは、「滝修行が行われた場所」と思われるが、はっきりはしない。

【中山】

ナカヤマ。

この小字は下村地区八ノ倉集落の東にある。

ナカヤマとは、「二本の尾根筋の間にある小さな尾根の先端部」をいうのであろうか。大きな二本の丘陵の間に小さな丘陵の末端部が覗いている地形になっている。

全国地図には、ナカヤマ地名は、中・大字として、295ヶ所に挙げられている。

【北田山】

キタダヤマ。

八ノ倉集落には三ヶ所にキタダ小字があるが、その一つのキタダ小字の北隣にある小さな小字である。

キタダヤマとは「キタダ小字の近くにある山地」であらうか。

【井戸下・井戸上・井戸山】

イドシタ・イドウエ・イドヤマ。

これらの小字は八ノ倉集落の南東側にある。

イドは井(井)・ド(処)で、「流水のある所」か、「掘り井戸があった所」のどちらかであらうが、地形からみて前者と思われる。

イドシタとは「流水の下側」、イドウエとは「流水の上側の高い所」、イドヤマとは「麓に流水のある山」であらう。

全国地図にはイドシタ地名は記載が無い。

【後・後城】

ウシロ・ウシロジョウ。

これらの小字は八ノ倉集落北部で、集落(観音堂)台地の北側(ウシロ)と台地上東部(ウシロジョウ)にある。いずれも小さな小字である。

ウシロというのは、この場合、「八ノ倉集落台地の北側」を指すのであらう。

ウシロジョウというのは、普通に考えれば、「台地の東部にある砦跡」となる。ここに砦があったのかどうかは未確認。

全国地図には、ウシロ地名は23ヶ所が中・大字として挙げられており、ウシロジョウ地名も1ヶ所ある。

【家ノ下・家ノ上】

イエノシタ・イエノウエ。

イエノシタ小字は八ノ倉集落(観音堂)台地の北側にあり、イエノシタ小字は、集落の南側にある。

イエノシタとは、「有力者の居住地の下側」をいい、イエノウエとは有力者の居住地の上側の土地をいうのであらう。有力者とは、ウシロジョウが砦であれば、その主ということになる。

【クネキハ】

クネキワ。

この小字は、八ノ倉集落(観音堂)台地の西部にある。

クネはクネクネから「曲がりくねった」様子をいい、キハはキワ(際)で「台地の縁」をいうのであらう。

以上から、クネキワとは、「台地の曲がりくねった縁になっている所」を意味するものと思われる。

【木戸ノ外】

キドノソト。

この小字は八ノ倉集落(観音堂)台地南麓にある。

キド(木戸)とは、「防備のために

柵に設けた門」(広辞苑)をいう。キドノソトとは、「防備用の柵にある門の外側の土地」をいう。

この小字があるので、ウシロジョウが砦であった可能性は高い。

【観音・観音前】

カンノン・カンノンマエ。

これらの小字は、八ノ倉観音堂集落にある。カンノンについては、既に触れている。

カンノンは「観音堂がある場所」であり、カンノンマエは「カンノン小字の前で南側に当たる場所」をいう。

【秋畑】

アキバタ。

この小字は観音堂集落台地の南方にあり、丘陵中腹の緩傾斜地にある小さな小字である。

アキバタとは何を表しているのか。これも分かりにくい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①アキはアキ(開)で、アキバタとは「開墾地」をいうか。現在は荒地と森林になっているが、地名発生時には焼畑を含めた畑になっていた可能性もある。

②アキ←アカ(赤)で、アキバタは「赤土の畑」であったかもしれない。

全国地図には、アキバタ地名は無い。

【原】

ハラ。

観音堂台地の南方に二ヶ所あり、アキバタ小字とシンバタ小字のまわりにある。小さな小字である。

ハラとは①「未墾の入会草刈地」か、②「開墾地」であろう。

【新畑】

シンバタ。

この小字のまわりには、アキバタ・ハラ・ソウガヤシキの小字がある。丘陵中腹の平坦地にある。

シンバタとは、「新しい開墾地」をいうのであろう。

全国地図には、11ヶ所に中・大字として挙げられている。宛てられている字は全て「新畑」である。

【若林】

ワカバヤシ。

シモケロクボ小字の北隣にある。

ワカバヤシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ワカ←ワカイ(若)は「みずみずしい」の意から、「湿地」をいう。ワカバヤシとは「湿地にある樹木の茂った所」か。

②ワカ←ハカ←ハガ(剥)と転じたもので、「崩崖」をいう。すなわち、ワカバヤシとは、「崩崖のある樹木の茂ったところ」であろうか。

全国地図には、ワカバヤシ地名は中・大字として、36ヶ所に記載されている。

【ツカ山】

ツカヤマ。

この小字は、オオトヤ小字やアオキ小字のある丘陵の先端部にある。

ツカヤマとは何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ツカ(塚)で「盛り上がって高くなっているところ」なので、ツカヤマとは、「盛り上がって高くなっている山」をいうか。

②ツカ←ツガと転じた語で、ツギ(継)と関係して、「段差のある地形」をいう。従って、ツカヤマとは、「段差のある山」であろうか。尾根近くの緩傾

斜地なので、段差はある。

全国地図には、ツカヤマ地名は4ヶ所に、中・大字としてえ挙げられている。

【大島屋】

オオシマヤ。

この小字は、ツカヤマ小字のさらに丘陵の先端部になる。

オオシマヤとは何か。二説を挙げておきたい。

①オオシマヤは、オオ(尾)・シマ(シバクから「崩崖」)・ヤ(菴)で(語源辞典)、「尾根付近に崩崖があり自然湧水のあるところ」であろうか。

②「大島屋」は「大鳥屋」を写し間違えたのではないかと考えられる。とすれば、近くにあるオオトヤ小字とも繋がる。オオシマヤとは、「鳥屋のあるところ」となるが、どうであろうか。

【青木】

アオキ。

千栄小学校のある大きな丘陵地になっている。

アオキとは、「青緑に樹木の茂ったところ」(語源辞典)をいうか。

全国地図には、アオキ地名は79ヶ所に中・大字として挙げられている。

【下毛呂窪】

シモケロクボ。

アオキ小字の南隣にあり、和城沢川と主要地方道飯田富山佐久間線が貫いている。

ケロは、語源辞典によれば、次の二通りに解釈できる。

①ケロは「薪などを採る共有の山地」をいう。三重県で使われているという。

②ケロ←クエ(潰)・ロ(接尾語)で、「地滑り跡の小平地」をいう。和城沢川による浸食堆積した小平地が、ここ

にはある。

以上から、シモケロクボとは、「下流側にあつて、共有の山地となっている窪地」か、「川下にあつて、川が浸食堆積して形成した窪地」であろう。

全国地図には、ケロクボ地名は、ここだけが、中・大字として挙げられているだけである。

【樋ヶ入】

トヨガイリ。

この小字は千栄保育園のある谷の上流部で尾根にまで達する。

トヨ=トイで「流水」をいう。トヨはこの地方の方言である。トヨガイリとは、「谷川の上流部の付近の地」をいう。

全国地図には、トヨガイリ地名もトイガイリ地名も挙げられてはいない。

【岩下】

イワシタ。

イワシタ小字は、下村地区には二ヶ所にある。一つは千栄小学校のある谷の南側の丘陵にある大きな小字で、もう一つは小さい小字でキジヤマ(雉子山)の頂上部から南西向き傾斜地の中腹までの土地にある。

イワシタとはありふれた地名であるが、何を意味しているのか。二説を挙げる。

①イワシタとは、「大小の岩のある下方の土地」をいうのであろう。尾根や山頂付近に岩の露出しているところがあるのだろう。

②シタは副詞シタシタの関連で「しっとりと湿っている様子」をいう(語源辞典)。イワシタとは、「小石混じりの土地で自然湧水のあるところ」であろうか。

イワシタ地名は全国地図にも48

ヶ所が中・大字として挙げられている。

【松ヶ洞】

マツガホラ。

下村地区には、マツガホラ小字が二ヶ所にある。一つは和城沢川の支流が開析した谷に沿う大きくて長い小字であり、もう一つは、すぐ南側の谷の最上流部にある小さな谷である。

マツガホラとは何か。三説を挙げたい。

①マツ←マタ(股)の転で(語源辞典)、マツガホラとは「沢があちこちで分岐している谷」であろうか。

②マツはマツ(末)で、「谷の最上流部」をいうか。

③マツはマツ(松)で、「赤松の多い谷」かもしれない。

全国地図には、なぜかマツガホラ地名は起債されていない。

【溝垣外】

ミゾガイト。

この小字は、下村地区南部に、二ヶ所ある。一つは、和城沢川支流の開析した谷にあり、もう一つはその最上流部にある。

ミゾガイトとは何か。二説を挙げる。

①ミゾは「流水」のこと。ミゾガイトとは「近くに流水のある居住地跡」か。

②カイトは「山間の小平地」(語源辞典)をいう。ミゾガイトとは、「流水のある山間の小平地」であろうか。

全国地図には、ミゾガイト地名は記載が無い。

【鳥ヤノ平】

トヤノダイラ。

この小字は下村地区南部の二つのマツガホラ小字の間にある尾根の頂上部～中腹部にある。

トヤノダイラとは、「小鳥を捕らえ

るための施設のある山間の小平地付近」を意味するか。

全国地図には、トヤノダイラ地名もトヤノタイラ地名も、載っていない。

【樋井タタキ】

ヤリイタタキ。

この小字は、ミゾガイト小字のある谷の北側で南向きの傾斜地にある。小さくて長い小字になっている。

ヤリイタタキとは何を意味するのであろうか。

ヤリは動詞ヤル(遣)の連用形が名詞化した語で、「その場の勢い・なりゆきにまかせて他方へ行かせる」(広辞苑)の意で、イはキ(井)のこと。ヤリイとは「谷川の流路を向へ行かせる」となる。

タタキは動詞タタク(叩)の連用形で、「崩壊地」をいう(語源辞典)。

以上から、ヤリイタタキとは「土砂の崩落によって、谷川の川筋が変わったところ」としたいが、どうであらうか。

和城沢川の支流は、谷の北側を流れていたのが、この小字の崩落で流路を谷の南側に変えたと思われる。この小字を過ぎたところで、支流は再び北側に流路を戻している。

全国地図には、ヤリイタタキ地名は載っていない。

【樽下】

タルシタ。

この小字は毛呂窪の南部に二ヶ所ある。大きな方は米川の支流に沿う長い面積をもっており、小さな方は小さな米川支流の最上流部にある。

タル(垂)＝タキ(滝)で「谷川が激しく流れているところ」か「谷川が激しく落ちるところ」であろう。

タルシタとは、「滝の下」をいう。ここで滝行が行われていた可能性は高い。タルシタは「滝行が行われていたところ」と解してもいいように思われる。

全国地図にはタルシタ地名は記載が無い。

【牧ノ洞】

マキノホラ。

この小字は、大きな方のタルシタ小字の北隣にある。小さな小字で側稜の末端部になっている。

マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「山で取り巻かれた地」をいう（語源辞典）。

以上から、マキノホラは、「山で取り巻かれた小さい谷のあるところ」であろう。

全国地図には、マキノホラ地名は載っていない。

【瀬戸】

セド。

下村地区南西部の泰阜境に、二ヶ所ある。いずれも米川の支流沿いにある。

セド＝セト（瀬戸）は、「川の瀬の幅が狭くなった所」をいうが（国語大辞典）、二ヶ所とも峡谷を谷川が流れている。セドとは「両側の山が迫った狭間を川が流れているところ」であろうか。

全国地図には、セド地名は、10ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【松久保】

マツクボ。

毛呂窪のマツクボ小字は二ヶ所にある。

マツクボとは何か。これも二説を挙げたい。

①マツ←マタ（股）と転訛した語で（語

源辞典）、マツクボとは、「二股に分かれた窪地のあるところ」であろうか。②あるいは、マツクボとは「赤松の自生している窪地」であろうか。

全国地図には、マツクボ地名は11ヶ所に中・大字として記載されている。

【見田】

ミタ。ケンダとする見方もあるようだが、ここではミタとした。

この小字はミヤシタ小字の北隣にある。小さな小字で、頂上から谷底部に到る傾斜地になっている。

ミタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ミタはミタ（御田）で「神社領」をいうのか。現在は一部だけが水田になっているが、地名発生当時は水田が多かった可能性はある。神社の祭祀を維持するために収穫物を当てるための耕作地であろうか。

②ミタはミ（水）・タ（田または処）で「湿地。湿田」をいう（語源辞典）。ミタとは「湿田のあったところ」か。

全国地図にはミタ地名は、25ヶ所に中・大字として記録されているが、ケンダ地名は二ヶ所にだけあり、「見田」と「検田」の字が宛てられている。

【井戸尻】

イドジリ。

この小字は毛呂窪のマツクボ小字に、ほぼ包まれている。

イドジリは井（井）・ド（処）・ジリ（先）で、イドジリとは、「谷川の最上流部」をいう。

全国地図には、イドジリ地名が、5ヶ所、中・大字として挙げられている。

【間祢加保良・間祢加洞・摩根ヶ洞・摩根加洞】

マネガホラ。

これらの小字は毛呂窪に六ヶ所、散在している。いずれも、米川の大きな支流に接するか、その近くにある。

マネガホラとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①マ（ママ）・ネ（嶺）・ガ（助詞）・ホラ（洞）で、マネガホラとは「崩壊地のある尾根で囲まれた谷」であろうか。ママはマブ・アブ・マミ・ハバ・ババと同系の語で、崩壊地をいう。

②ネはネ（音）で、「川音」をいうか。マネガホラとは、「崩崖があり川音のする谷」か。

全国地図には、マネガホラ地名は一ヶ所も無い。

【小久保・小久保北向】

コクボ・コクボキタムカイ。

コクボ小字は、毛呂窪のミヤシタ小字を挟んで東西にあり、コクボキタムカイ小字は、西のコクボ小字の北東側に接している。

コクボとは、「小さな窪地」で、洞を窪地としているようだ。

コクボキタムカイとは、「コクボ小字の北向かいにある土地」をいう。

全国地図には、コクボ地名は13ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【光田】

ヒカリダ。コウデンではないかと思えるがどうであろうか。

この小字は、ほぼ二つのタルシタ小字の間にある。

ヒカリダ（コウデン）とは何か。語源辞典に依りつつ、三説を挙げておきたい。

①ヒカリダであるとすれば、ヒカンは動詞ヒカル（光）の連用形で「周囲より秀でること」をいう。この地が秀でているとすれば、南側より高いことか。

どうも説得力はないのではないか。

②コウデンであるとすれば、コウデン（講田）かコウデン（荒田）である。講田とは「中世、寺社で行った経典の講筵や祖師讃仰の講会の費用にあてるために定められ、貢納を免除された田」であるという（広辞苑）。お宮のあるミヤシタ小字はそれほど遠くではないが、どうであろうか。現在、ここには水田はないが、小字発生時には田んぼがあったのかもしれない。

③コウデン（荒田）であれば、「荒廃田」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、ヒカリダ地名は無いが、コウデン地名は4ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【箕田・箕田尻】

ミノダ・ミノダジリ。

ミノダ小字は、コウデン小字より高い所にあり、ミノダジリ小字はコウデン小字の下方にある。

ミノダとは、ミ（美称の接頭語）・ノ（野）・ダ（田）で、「緩傾斜地にある水田」であろうか。ノ（野）は「山沿いのわずかに高低のある地」（柳田國男）で、ダは「水田」か「処」であるが、ここでは水田にしておく。

ミノダジリとは、「ミノダ小字の下流側にある土地」をいう。

全国地図には、ミノダ地名が4ヶ所に中・大字として記載されている。

【宮下】

ミヤシタ。

この小字は毛呂窪の二ヶ所にある。北側のミヤシタ小字にはお宮がある。おそらく氏神と思えるが、かつては山の神であったか。未確認。

ミヤシタとは、「お宮の下の方の土

地」を意味する。

全国地図には、ミヤシタ地名は中・大字として84ヶ所にも記載されている。

【経塚】

キョウヅカ。

この小字はミヤシタ小字の南西隣にあり、丘陵の先端部にある小さな小字である。

キョウヅカとは「経典を永く後世に伝えるために経筒などに入れて地中に埋め納めて塚を築いたもの。上に五輪塔などを建てることもある」（国語大辞典）。この経塚がどうなっているのかは未確認。

全国地図でキョウヅカ地名が中・大字になっている所は26ヶ所ある。

【大平】

オオダイラ。

この小字は、毛呂窪に二ヶ所ある。一つは大きな面積をもち米川と二本の支流に囲まれた尾根筋と南向き斜面からなる小字であり、もう一つは、最上流部にあるマネガホラ小字に囲まれている小さな小字で、頂上部が崩壊している傾斜地にある。

オオダイラとは何か。語源辞典に従って考えてみたい。

オオは、「大きい」を意味し、ダイラは「山頂または中腹の平らな所」をいう。

以上から、オオダイラとは、「山頂の平らな広い場所のあるところ」となる。小さな方のオオダイラ小字は、小字発生時には、大きな方に繋がっていたと考えたい。

全国地図には、103ヶ所のオオダイラ地名が、中・大字として挙げられている。

【蜂狩】

ハチガリ。

この小字は毛呂窪の谷にあって、二つのマツクボ小字に挟まれている。

ハチガリとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①ハチはハチ（鉢）で、谷部を鉢形に見立てたものか。ガリはカリ（刈）で「刈り払われたような地形」を、さらに「崩壊地形」をいう（以上は語源辞典）。以上から、ハチガリとは、「鉢形の谷で崩崖のあるところ」をいうのであろうか。

②ハチガリといえば、この地域では「スガラ追い」に思いつく。ハチガリとは、「ジバチ採集をしたところ」ではないか、と考えたくなる。これもありうると判断して、ここに挙げた。

全国地図には、ハチガリ地名もハチカリ地名も記載は無い。

【胡麻畑・ゴマバタ・胡麻畑平】

ゴマバタ・ゴマバタダイラ。

これらの小字は毛呂窪の泰阜境に固まっている。

ゴマバタとは何を表しているのか。分かりにくい地名で、三説を挙げたい。

①ゴマバタとは、「ゴマを栽培したことのある焼畑が行われたところ」か。この急傾斜地で耕作が行われたとすれば、焼畑しかない。焼畑の輪作の中にゴマは見出せなかったが、エゴマは静岡県の焼畑で栽培されていたという。エゴマはゴマの代用食品でもあったし、荳油（えのあぶら）は雨傘などに塗られたというのは、この地でエゴマ（荳胡麻）が栽培されたことの傍証になるかどうか。

②ゴマ←ゴウマと転じた。ゴウマはゴウ（川）・マ（間）で、「川のある所」

をいうか(語源辞典)。ハタはハ(端)・タ(処)。以上から、ゴマハタとは「川が近くに流れている所」であろうか。米川とその支流が近くを流れている。しかし、川から少し離れすぎているところもあるのが気になる。

③ゴマ(護摩)で、「真言密教の秘法、またそれを行う護摩壇、護摩堂に因む」(語源辞典)地名であろうか。ゴマバタとは、「近くに護摩壇があったところ」か。果たして、この地に護摩壇があったのであろうか。

ゴマバタダイラとは、「ゴマバタ小字の近くで、山頂や中腹に小平地のあるところ」をいう。

全国地図には、ゴマバタ地名は記載が無い。

【乳母懐】

ウバフトコロ。

毛呂窪の二つのゴマバタダイラ小字の間にある、小さな小字である。全国各地に散在する地名で、伊那谷南部でも珍しくはない小字になっている。

ウバフトコロとは、「風のこない暖かい場所。とくに南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう。また、このような土地は製陶に適していたところから、陶土を産する場所の地名として呼ばれた」(国語大辞典)という。

この地に陶土がでるのかどうかは未確認。

【白砂】

シロスナ。

毛呂窪南部の主要地方道飯田富山佐久間線に沿った山地に、この小字はある。

シロスナとは、文字通り「白い砂地になっているところ」であろう。

全国地図には、なぜか、シロスナ地名は記載が無い。

【作藏渚】

サクゾウブチ。

この小字はカンバサワ小字の下流側にある。米川支流の深い谷になっている。

フチ(渚)にはフチ(縁)で「川べり」の意味がある(語源辞典)。サクゾウブチとは、「作藏所有の川べり」であろうか。焼畑耕作が行われたのであろう。

【峠下】

トウゲシタ。

この小字はカンバサワ小字の上流側にある。主要地方道飯田富山佐久間線としての西側にも街道が通っており、いずれも二ヶ所ずつ峠のある道になっている。

トウゲシタとは、文字通り、「峠の下側の所」であろう。二つの峠の間に挟まれた土地をいうのであろうか。

全国地図には、トウゲシタ地名は、7ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【長畑平】

ナガハタダイラ。

毛呂窪南部のマルヤマ小字の南隣にある。丸山よりは低いが、標高592.2mの峰がある。

ナガハタダイラとは何をいうのか。語源辞典に依って二説を挙げる。

- ①ナガは動詞ナガル(流)の語幹で、「傾斜地」をいう。静岡の榛原郡で使われているという。ナガハタダイラとは、「傾斜地や小平地のある畑だったところ」か。焼畑だったと思われる。
- ②ナガ←ナギ(薙)と転訛した語で、「崩崖」の意。ナガハタダイラとは、

「崩崖のある小平地で焼畑が行われていた所」か。

語源辞典には、ナガハタ地名は2ヶ所に記載されているが、ナガハタダイラ地名は無い。

【丸山】

マルヤマ。

毛呂窪南部の円錐形の峰のある所。

マルヤマとは、「円錐形の山のあるところ」をいう。毛呂窪の甘南備の一つであろうか。山の神が祀られていたのであろう。

全国地図には、マルヤマ地名は、中・大字として、352ヶ所に挙げられている。非常に多いといえる。信仰の対象として崇められてきたのであろうか。

【神馬沢】

カンバサワ。

毛呂窪の丸山の東側の山地にある。尾根の頂部から谷を含む、広い小字になっている。

カンバザワとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①カンバとは「錦帯花。箱根山に生ずるをハコネウツギといふ。土名カンバ。三四月葉を採り、細挫して日に晒し飯にまじえ食す」(分類山村語彙)とあるが、植物図鑑には「箱根山中にはない」とある。ウツギのことには間違いないと思われる。カンバには「山桜の皮」(国語大辞典)の意もある。飯田付近の方言であるという。この地域では山桜の皮を何に使ったのか分からないが、需要はあったのだろう。

カンバサワとは、「山桜の皮かウツギの自生していた沢」か。

②カンバとはカマ(嚙)・バ(場)で「えぐられたような地形」をいう(語

源辞典)。カンバサワとは、「崩壊地のある谷」だろうか。

全国地図には、カンバサワ地名は2ヶ所に、中・大字として記載されている。

【摺木田】

スリキダ。

この小字は、毛呂窪東部の山地にある。トウゲシタ小字の東隣になる。

スリーズリと清音化した語、動詞ズルの連用形で、「崖」を意味する(語源辞典)。キダはキダハシ(階)であろう。以上から、スリキダとは、「階段状の地形で崖のあるところ」と思われる。

全国地図には、スリキダ地名は一つも無い。

【編張・編張田】

アミハリ・アミハリダ。

アミハリ小字は、山稜のほぼ北向きの傾斜地にある。

アミハリとは何か。二説を挙げる。

①アミ←アビの転で「浸食作用」をいい、ハリは「張り出したところ」を意味する(以上は語源辞典)。以上から、アミハリとは、「山稜の先端部が張り出して、浸食作用を受けたところ」ということになるか。アミハリダも同じように解釈できる。

②アミは霞網のこと。すなわち、アミハリとは、「小鳥を捕らえるために霞網を張ったところ」ではないだろうか。傾斜の向きから霞網には適した場所と思われる。もちろん、現在は禁止されているが。アミハリダは「霞網を張った場所」であろう。ダはダ(処)。

全国地図には、アミハリ地名もアミハリダ地名も載っていない。

【小茂石】

コモイシ。

毛呂窪和城沢川の北流する支流が開析した谷に沿う小字である。現在、水田になっているところもあるが、多くは荒れ地も多い。

コモイシとは何か。語源辞典によりながら、三説を挙げる。

①コモは動詞コモル（籠）の語幹で「(山丘などの陰に) 入り込んだ地」のことか。コモイシは、「山間に入り込んだ石の多い土地」であろうか。毛呂窪は主要地方道飯田富山佐久間線に沿う谷が中心になっているので、このような南北に開けた谷は目立たないのかもしれない。

②コモ←ゴモク（ごみ。あくた）から転じた語で、「沼地」をいう。コモイシとは、「沼地で石の多い土地」であろうか。

③コモ←カマ（嚙）の母韻転換で「崩壊地形、浸食地形」をいう。コモイシとは、「崩崖と堆積地のある、石の多い土地」か。

全国地図には、コモイシ地名は無い。

【飛石】

トビイシ。

毛呂窪のコモイシ小字を流れる支流が、本流の和城沢川に合流するところにある小字である。現在は、ほとんどが荒れ地・森林で、水田はほとんど無い。

トビイシとは何か。語源辞典によりながら二説。

①トビはトブ（飛）の連用形で「崩壊地形」をいう。トビイシとは、「崩崖のある石の多い地」か。

②トビはドブ（泥）と関係し、「湿地」の意。トビイシとは、「湿地で石の多いところ」を意味するか。

全国地図にはトビイシ地名は8ヶ所に中・大字として記載されている。

【下田・下田山】

シモダ・シモダヤマ。

シモダ小字には、現在、千栄保育園とグラウンドがある。シモダヤマ小字は、その北側の側稜末端部で尾根にまで達している。

シモダとは何か。二説を挙げたい。

①シモダはシモ（下）・ダ（田または処）で、「低地にある田んぼ」または「低い土地」か。小字発生当時には、グラウンドは田んぼであった可能性が高い。

②シモはシモ（霜）か。シモダとは、「霜が降りやすい田んぼ」あるいは「霜が降りやすい所」であろうか。放射冷却によって低温化した気流がこの小字に開口している谷を流れ下ることは想像できるが、実際はどうであろうか。

シモダヤマとは、「シモダ小字に繋がる山地」の意か。

シモダ地名は、全国地図には77ヶ所も、中・大字として挙げられている。

【須賀平】

スガダイラ。

この小字は、主要地方道飯田富山佐久間線の北側の丘陵にある。

スガダイラとは何を意味するのか。語源辞典よりながら二説を考えたい。

①スガは、ス（砂）・ガ（処）で「砂地」をいう。ダイラは「山頂の平らな所」をいう。以上から、スガダイラとは、「山頂の平坦地で砂地になっているところ」か。

②スガは動詞スガフ（次）の語幹で、「食い違う」から「段差のある地」をいう。スガダイラとは、「山頂は平坦

地になっているが、山腹は段差のある傾斜地になっているところ」を意味するか。

全国地図には、スガダイラ地名は、中・大字として5ヶ所にある。

【源二前・前畑・家ノ上】

ゲンジマエ・マエバタ・イエノウエ。

これらの小字は一ヶ所に固まっております、相互に関連があると思われるので、まとめて取りあげることにはしたい。

これらの小字はスガダイラ小字の北東隣にある。

ゲンジマエは、「ゲンジという人の居住地前」。マエバタは「(ゲンジ宅)前の畑」であり、イエノウエとは「ガンジという人の家の上」を意味するものと思われる。

【洗田・外新井田・下洗田】

アライダ・ソトアライダ・シモアライダ。

これらの小字は、毛呂窪公民館の北側にまとまっている。

アライダ小字は二ヶ所にある。アライダとは、アラ(荒)・井(井)・ダ(田あるいは処)であろうか。意味するところは、「荒れやすい谷川が流れているところ」であろうか。あるいは、「荒れやすい谷川のそばの田んぼ」か。谷川は和城沢川である。

シモアライダ小字は、アライダ小字に挟まれている。下流側のアライダからみれば、シモアライダというのは矛盾しているが、この場合は、上のアライダに対してのシモアライダとしておく。小字変遷の経過が隠されているのであろうか。

ソトアライダとは、「アライダの外側にある土地」をいう。この小字は、アライダ小字のある谷の西側にある

峰つきの側稜である。直接、荒井に関係しているわけではないので、このような小字名になったと思われる。

全国地図には、アライダ地名は、1ヶ所にしかない。

【下落・霜陥】

シモオチ。

「下落」小字は、和城沢川支流の最上流部にあり、カジ小字の下方に当たる。「霜陥」小字は、近くのヒアライダ小字に接している。いずれも少し高いところであり、霜が降りないところだと、地元ではいう。

シモオチとは何か。難しい地名である。二説を挙げておきたい。

①オチはオチ(落)で「傾斜地」をいう(語源辞典)。シモオチとは、「下流側の傾斜地」か。しかし、何にたいして“下流”になるのか、はっきりしない。

②シモはシモ(霜)、オチ(落)には「入れるはずのものが漏れること」という意がある。周辺に霜が降りても、ここには降りない、ということの意味しているか。シモオチとは、「霜が降りないところ」をいう。やや無理気味か。

全国地図には、シモオチ地名は、1ヶ所にだけ中・大字として挙げられており、「下落」の字が宛てられている。

【鍛冶】

カジ。

毛呂窪のシモオチ(下落)小字の高いところ、山稜の頂上部にある。

カジとは、「鍛冶職の居住地であったところ」であろう。需要が多かったといわれている社寺であるが、アミダ小字やオオヤマズミシャ小字は近くにある。

全国地図には、カジ地名が、中・大字として18件挙げられている。

【瓢田】

ヒョウダ。

この小字は、カジ小字の斜面北西側の下方隣にある。

ヒョウダとは何か。分かりにくい地名の一つ。それでも二説を挙げておきたい。

①ヒョウはヒヨの長音化した語で、ヒヨは動詞ヒヨメクの語幹から「弱々しい様子」をいう。これは「湿地」系の地名用語か、という（語源辞典）。この解釈が成立するとすれば、ヒョウダとは、「湿地になっている所」となる。現在は田んぼがないので、こうした表現にした。あるいは小字発生時には水田であったとすれば、「湿地帯の水田のあるところ」であろう。しかし、弱々しい様子から湿地へと繋がるのだろうかという疑問は残る。

②ヒョウとはヒサゴ（瓢）のこと。この小字の形を瓢に見立てたのではないだろうか。ヒョウダとは「瓢に似た形の土地」あるいは「瓢形をした水田地帯」か。

全国地図にヒョウダ地名は無い。

【北垣外】

キタガイト。

この小字は和城沢川が開析した谷にあり、ドウノヒガシ小字はアミダダイラ小字の北側にある。

キタガイトとは何か。二説を挙げる。

①キタガイトとは、「(御堂の)北側にある住居跡」か。有力者の住んでいた所であろうか。

②キタはキダ(階)で「階段状の地形」をいい、カイトはカヒ(峡)・ト(処)で、「丘陵に挟まれた狭い谷」である

うか。以上から、キタガイトとは、「丘陵に挟まれた狭い谷で階段状になっている所」であろうか。

全国地図には、キタガイト地名は中・大字として、10ヶ所に記載がある。

【亀屋】

カメヤ。

この小字は、キタガイト小字の北隣にあり、丘陵の南西向き傾斜地になる。

カメヤとは何か。これも二説を挙げておきたい。

①カメ←カミの転で、カミは動詞カム(噛)の連用形で「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ヤ(谷)は「低湿地」(広辞苑)をいう。カメヤとは、「崩壊地のある低湿地」か。この小字のあちこちに崩壊地形がある。

②カメヤはカメヤ(瓶屋)か。カメヤとは、「水瓶や摺鉢などを焼く職人のいたところ」であろうか。後に瑞祥地名として「亀」の字に変わったのかもしれない。

全国地図には、1ヶ所にだけカメヤ地名があり、「亀屋」の字が宛てられている。

【佐加利】

サガリ。

この小字は丘陵の北東向き傾斜地にあり、二方をジンデン小字に接している。

サガリとは、動詞サガル(下)の連用形が名詞化した語で、「下がった地形」すなわち「傾斜地」を意味する(語源辞典)。

全国地図には、サガリ地名は、中・大字として、8ヶ所に記載がある。

【家ノ向】

イエノムカイ。

この小字は神田丘陵の北端の傾斜地にある。現在はほとんどが果樹園になっている。

イエノムカイとは、「アラヤ小字の向かい側になる土地」であろうか。アラヤは小字発生当時には、新築した家であったのだろうか。

【鮑田】

カンナダ。

この小字は、キタガイト（北垣外）の洞の周辺に五ヶ所もある。いずれも丘陵の麓部分になる。現在は、ほとんどが果樹園で水田は無い。

カンナダといえ、すぐに、槍鉋や台鉋を扱った職人である番匠や鍛冶屋ではないかと考えるが、それにしてもこの小字数は多すぎるし、広すぎるという問題がある。そうではないだろうと結論づけざるをえない。またカンナといえ、中国地方では砂鉄の鉱床ということになるが、この場では考えられない。

ではカンナダとは何か。カンナは動詞カム（噛）・ナ（場所を示す接尾語で「土地」のこと）だという（語源辞典）。すなわち、カンナダとは、「崩壊地のあるところ」となるが、どうであろうか。

全国地図には、カンナダ地名は載っていない。

【又き田】

マタギダ。

この小字は、キタガイト（北垣外）の谷の一つ南側の谷にある。

マタギダ小字は各地にある。マタは「二股に分かれた谷の分岐点」であり、ギダはキダ（階）で、「階段状の地形」をいう。以上から、マタギダとは、「谷が二股に分かれているところで、階段

状の地形になっている所」であろう。

【向垣外】

ムカイガイト。

この小字は、コモイシ小字とマタギダ小字に挟まれた尾根にある。

ムカイガイトとは、「向かい側にある居住地跡」であろうか。向かい側にはここでもアラヤ（新屋）小字があるので、この新屋の向側ということになるのであろう。

全国地図には、ムカイガイト地名は1ヶ所にある。

【松久保坂】

マツクボザカ。

サカ小字の東隣にある小さな小字で、サカ小字の向こう側にはマツクボ小字がある。

マツクボザカとは何か。二説を挙げる。

①「サカ小字とマツクボ小字の近くにある小字」をいのであろうか。

②あるいは、「アカマツが自生している窪地にある坂道」かもしれない。

全国地図には、マツクボザカ地名は載っていない。

【坂】

サカ。

主要地方道飯田富山佐久間線が南北に通る所で、その西側の道路に沿った小字である。

サカとは「坂道のあるところ」であるが、サカは境であるという民俗的な意味については、ここでは不明。

全国地図にはサカ地名は20ヶ所で、中・大字として挙げられている。

【西・西ノ前・西ノ平】

ニシ・ニシノマエ・ニシノタイラ。

ニシ小字は、主要地方道飯田富山佐久間線の東側に、ニシノマエ小字は主

要地方道の西側にある。ニシノタイラ小字は、ニシ小字とアミダダイラ小字の間にある。

ニシノタイラとは、「ニシ小字の近くで、斜面の中腹から麓のあたり」をいうのであろうか。

ニシとは「西の方にある土地」であろうが、基準になっているのは、御堂（ドウノヒガシ小字やアミダダイラ小字がかかわる）と思われる。しかし、もっと東方にある、大祇神社である可能性も残されているかもしれない。

ニシノマエとは、「ニシ小字の前の土地」か。この場合も、マエの基準は何か、という問題があるが、今のところわからない。

全国地図には、ニシノマエ地名は中・大字として5ヶ所に記載がある。

【下切】

シモギリ。

主要地方道飯田富山佐久間線に沿った谷底部の平坦地になっていて、現在は人家になっている。東西の両端を小川が流れている。

シモギリとは何か。三説を挙げたい。

①キリはキリ（断）で、「断崖」をいうか（語源辞典）。シモギリとは、「下流側で断崖のあるところ」か。

②キリはキリ（切）で「谷間」をいう（語源辞典）。シモギリとは、「下流側にある谷間」であろうか。

③シモはシモ（霜）で、シモギリとは「霜が降りる境目のところ」かもしれない。ここから下流側には、霜は降らない、ということはないだろうか。気になるので、挙げた。

全国地図には、シモギリ地名は、中・大字として、16ヶ所に挙げられている。

【庚申】

コウシン。

主要地方道飯田富山佐久間線の三叉路近くにあり、シモギリ小字の西隣にある小さな小字である。

コウシンとは「庚申様が祀られていたところ」であろう。

庚申は60年、または60日ごとに、夜を徹して語り合い、酒食の宴を催す。近世にいたると青面金剛を碑に刻むようになり、庚申供養塔は60年ごとに建てることを原則とした（仏教民俗辞典）。

全国地図には、中・大字として、コウシン地名が7ヶ所に記載されている。

【福田屋】

フクダヤ。

これも主要地方道に沿った小さな小字である。二方向をサカ小字に接している。

フクダヤとは何を意味するのか。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①フクダはフケ（沮）・タ（処）の転で「湿地」をいう。ヤはヤ（谷）。つまり、フクダヤとは、「低湿地」をいう。

②フクは「金属を吹く」意から、フクダヤとは「鍛冶屋」をいう。これもあり得ると考えるがどうであろうか。

全国地図には、フクダヤ地名もフクダヤ地名も記載は無い。

【細入】

ホソイリ。

この小字はサカ小字の上流部にある。

ホソとは「細くせばまった」意（語源辞典）である。ホソイリとは、「谷の上流部で細くせばまったところ」を

意味する。

全国地図には、中・おおあざとして、ホソイリ地名は4ヶ所にあり、いずれも、「細入」の字が宛てられている。

【札辻・札辻下】

フダツジ・フダツジシタ。

主要地方道飯田富山佐久間線沿った谷底部にあり、シモギリ小字とカミノキ小字に挟まれている。

フダツジとは、フダバと同じで、「高札場」をいう。

フダツジシタ小字は、フダツジ小字より上流側にある。とすれば、シタ(下)は「下方」を意味しない。シタは副詞シタシタやシトシトに通じ、「しっとりと湿っている様子」で「湿地」をいう(語源辞典)。以上から、フダツジシタは、「高札場で湿地になっている所」か。

高札場は、主に江戸時代に、一般の人に知らせるために、法度・禁令・犯罪人の罪状などを記して掲げた板である高札を掲示した場所。高札場は村では名主の家の前など人通りが多く、同時に管理しやすい場所に設けられた。領主の権力を示す場所であるが、村にとって高札場を持つことは独立した村であることになり、村の広場としても利用された(民俗大辞典)。という。

全国地図には、なぜか、フダツジ地名は一つも無い。

【長手下】

ナガテシタ。

この小字はフダツジ小字とニシ小字の間にある。北東隣のニシ小字は尾根筋から中腹までの長い傾斜地になっている。

ナガテとは「長く延びた地形になっ

ているところ」をいう。テ(手)は「場所」を示す接尾語。(以上は語源辞典)ナガテとはニシ小字のことを指す。ナガテシタとは、「長く延びた地形のところの下流側の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ナガテ地名は4ヶ所にあるが、ナガテシタ地名は無い。

【新屋】

アラヤ。

ナガテシタ小字の北西となりになり、ニシ小字とシモギリ小字に挟まれている小さな小字である。毛呂窪には二ヶ所にある。

アラヤは「新築した家」か、「分家」をいう(広辞苑)。

全国地図には、中・大字として、127ヶ所に、アラヤ地名が挙げられている。うち、「新屋」の字が宛てられているのは43ヶ所になる。

【家後】

イエノウシロ。

キタガイト小字の西隣にある小さな小字である。

イエノウシロとは、「北垣内にある家の裏の方の土地」をいうのであろう。

全国地図には、イエノウシロ地名は記載が無い。

【盛松】

モリマツ。

ニシ小字とシモギリ小字の間の傾斜地にある、小さな小字である。

モリマツとは何を意味しているのか。語源辞典によりながら二説を挙げたい。

①モリ(盛)は「丘」のこと、マツは動詞マツハル(纏)の関連で「巻いたような地形」をいう。以上から、モリマツとは、「麓が巻いたようになって

いる丘」か。

②モリは「神の祀ってある森」の可能性もある。すなわち、モリマツとは「アカマツが自生しており、神が祀られている森」か。未確認。

全国地図には、モリマツ地名は、1ヶ所にある。

【堂ノ東・堂ノ脇】

ドウノヒガシ・ドウノワキ。

位置は特定できていないが、近くには、ドウシタ（堂下）小字がある。さらに、近くには、アミダ小字やアミダダイラ小字がある。

ドウノヒガシとは、「阿弥陀堂の東側の土地」をいうのであろう。

ドウノヒガシとは、「阿弥陀堂の脇になる土地」をいうのであろう。

全国地図には、ドウノヒガシ地名が、1ヶ所、中・大字として挙げられている。

【阿弥陀平】

アミダノタイラ。

この小字は、キタガイト小字の谷の南側の尾根筋にあり、西端隣にはアミダ小字がある。

アミダノタイラとは、「阿弥陀堂の近くの頂上の平坦地」をいうのであろう。

全国地図にはアミダノタイラ地名は、記載が無い。

【保地藏】

ヤスジゾウ。

この小字の中を主要地方道飯田富山佐久間線が南北に通っていて、毛呂窪米峰生活センターがある。

ヤスジゾウとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ヤスはヤ（沼地）・ス（洲）で「沼

地」をいう。ジゾウは「地藏菩薩を祀る所」であろう。以上から、ヤスジゾウとは、「沼地で地藏菩薩を祀っているところ」であろうか。現在でも地藏菩薩の石像が四ツ辻にはある。

②ジゾウ←シソウ←シサワと転訛したきた語で、シ（石）・サハ（沢）で、「石の多い谷川」をいう。ヤスジゾウとは、「沼地で石の多い谷川が流れている所」か。

全国地図には、ヤスジゾウ地名は記載が無い。

【アミダ】

アミダダイラ小字の北西隣にある小さな小字である。

アミダとは、「阿弥陀堂のあったところ」ではないだろうか。

千栄にはアミダダイラ小字が二ヶ所に、南無阿弥陀仏の六字名号碑は三ヶ所ほどにある。

全国地図には、アミダ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられており、全てに「阿弥陀」の字が宛てられている。

【オノ神】

サイノカミ。

この小字は毛呂窪にあり、米峰神社の南の方で米川支流の左岸になる。

サイノカミとは、文字通り「サイノカミを祀ったところ」である。

オノ神は自分たち仲間の生活の安全を守るべく、そのムラに邪霊悪鬼の類が立ち入らぬようにさえぎり、はね返すため祀られている。通常は村境にあって、虫送りや疫神送りも、ここで行われた。

【宮ノ向・宮向】

ミヤノムカイ・ミヤムカイ。

これらの小字の北側の谷にあるカ

ミノキ小字やマエダ小字の向こう側にオオヤマズミシャ小字がある。

ミヤノムカイもミヤムカイも、「お宮の向こう側にある土地」を意味する。お宮とは、大山祇神社をいうのであろう。現在は小字名として残っているだけで、神社の痕跡はないのだろうか。

全国地図には、ミヤノムカイ地名は無いが、ミヤムカイ地名は、1ヶ所にだけ、中・大字として記載されている。

【井戸入】

イドイリ。

毛呂窪のカミノキ小字やオオヤマズミシャ小字の北隣にある。

イドイリとは、「大きな支流に小さな谷川が合流するところ」をいうのであろうか。

全国地図には、なぜかイドイリ地名は記載が無い。

【前田】

マエダ。

この小字は、ミヤムカイ小字とオオヤマズミシャ小字に挟まれている。

マエダとは、「お宮の前で水田のあるところ」であろう。お宮は大山祇神社をいう。

【東】

ヒガシ。

この小字はイドイリ小字やオオヤマズミシャ小字の東側にある。

ヒガシとは、「お宮の東の方の土地」をいうのであろう。お宮とは、むろん、大山祇神社である。

【坪津良】

ツボツラ。

ツボツラ小字は毛呂窪の二ヶ所にある。ヒガシ小字丘陵のそれぞれ南北に隣り合っている。

ツボツラとは何か。分かりにくい地

名であるが、語源辞典に依りながら考えてみたい。

ツボは動詞ツボム(窄)の語幹で「つぼんだ地形。窪地」をいう。ツラはツラナル(連)と同源で「連なった状態」をいう。

以上から、ツボツラとは「窪地が連なった状態、すなわち谷をいう」と解したがどうであろうか。

ツボツラ地名は、全国地図には記載が無い。

【虚空蔵免】

コクゾウメン。

この小字は、毛呂窪のカンナダ小字とマスミダ小字に挟まれている。

コクゾウメンとは「収穫物を虚空蔵菩薩を祀る費用に宛てるために租税が免除されている耕作地」であろうか。現在でも一部は畑地になっている。

虚空蔵求聞持法に関連する十三参り・星宮、また密教的浄土観の発現である十三仏とその最終仏としての虚空蔵菩薩の定着などの信仰は、真言系修験・寺僧と民間との交渉の内に醸成されてきたと考えられる、という(民俗大辞典)。

ここの虚空蔵菩薩信仰については、はっきりしていないが、虚空蔵菩薩の石像は複数存在するようだ。

全国地図には、コクゾウ地名は8ヶ所にあるが、コクゾウメン地名は無い。

【狐洞】

キツネボラ。

四ヶ所の小さなヨコマエ小字に囲まれた、細長い谷に沿った小字である。

キツネボラとは何か。二説を挙げる。
①キツネボラとは、字面のとおりで、「イヌ科の動物である狐が生息している小さな谷」か。

②キツネはキツ(急)・ネ(嶺)で「けわしい峰」をいう(語源辞典)。キツネボラとは、「けわしい峰がある小さな谷」であろうか。

全国地図には、意外にも、キツネボラ地名は、1ヶ所もない。

【横前】

ヨコマエ。

キツネボラ小字の周辺に、この小字は四ヶ所もある。小字発生時には広い小字であったかもしれない。

ヨコマエとは、「(山住神社の)前方横手にある土地」であろう。

【摩澄田】

マスミダ。

この小字は、米川支流が横断しており、北はジンデン小字、南はナガハタ小字に接する広い面積になっている。

マスミダとは何を意味しているのか。分かりにくい地名の一つ。語源辞典に依りつつ、二説を挙げたい。

①マスはマス(増)から「高く秀でている所」で、ミダは動詞ミダレル(乱)の語幹で「くだけた状態」をいう。すなわち、マスミダとは、「崩壊地もある、高い尾根筋になっている所」か。

②マスはマ(接頭語)・ス(砂)で、「砂地」をいい、ミタはミ(水)・タ(処)で、「湿地」をいう。以上から、マスミダとは、「湿地もあり、砂地になっている土地」を意味するか。

全国地図には、マスミダ地名は記載が無い。

【長田】

ナガタ。

この小字はマスミダ小字の南西側の麓にある傾斜地になっている。

ナガタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ナガは動詞ナガル(流)の語幹で「傾斜地」をいう。静岡県榛原郡で使われているという。タハタ(処)。すなわち、ナガタとは、「傾斜地になっているところ」か。

②ナガ←ナギ(薙)の転で、「崩崖」をいう。ナガタとは、「崩崖のあるところ」であろうか。

全国地図には、ナガタ地名は、中・大字として、108ヶ所に挙げられている。

【流田】

ナガレダ。

この小字は、毛呂窪のナガタ小字とノボリタテ小字の間にある。

ナガレダとは、大雨の時などで、「土石流で土砂が堆積したところ」であろうか。

【登立】

ノボリタテ。

キツネボラ小字を挟んで、二ヶ所にある。

ノボリタテとは何をいうのか。語源辞典によりながらみていきたい。

ノボリは「上り坂になった所」をいい、タテは「低地に臨んだ丘陵の端」を意味する。すなわち、ノボリタテとは、「尾根の側面に沿って上がり坂になっている谷」をいうのであろうか。

全国地図には、ノボリタテ地名は、9ヶ所に中・大字として載っている。うち、「登立」の字が宛てられているのは5ヶ所になる。

【日影田】

ヒカゲダ。

この小字は、ノボリタテ小字の北隣にあり、北東向きの傾斜地になっている。

ヒカゲダとは、「日当たりのような

い所」であろう。現在は、谷底部も荒れ地になっているが、かつては田んぼがあったのかもしれない。

【道近】

ドウキン。

この小字は、大祇神社のあるダイジングウ小字の南隣にある。

ドウキンとは何か。分からない小字で全くのお手上げであるが、何とか二説を挙げたい。

①ドウキン←トウキンと濁音化した語で、トウキン（陶均）で「陶器を造る器具。またそれで陶器をつくること」（国語大辞典）という。ドウキンとは「陶器を造っていたところ」であろうか。これは、あるいは、トウキ（陶器）が転じた語と考えることもできそうだ。

②ドウキンはドウ（堂）・キン（近）で、「御堂の近くの土地」であろうか。御堂は北隣の大祇神社の御堂をいうのであろう。

全国地図には、ドウキン地名は、2ヶ所に記載があり、「道金」「堂近」の字が宛てられている。

【長畑】

ナガハタ。

毛呂窪のマスミダ小字の東隣にある広い小字である。緩傾斜地で、現在は大部分が果樹園になっている。

ナガハタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいう。ナガハタとは、「傾斜地にある畑地」か。

②ナガ←ナギ（薙）と転訛した語で、「崩壊地形」を表す。ナガハタとは、「崩壊地もある畑地」であろうか。

全国地図には、ナガハタ地名は、

中・大字として、21ヶ所にある。

【猪切】

シシギリ。

この小字は、ナガハタ小字の東隣にある、これも広い面積を有している。

シシギリとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①シシギリは動詞シシギルの連用形が名詞化した語で、「何度も切る」（国語大辞典）ことを意味するか。ここでのシシギリとは、「何回も崩壊したことがある土地」をいうのであろうか。
②シシ←シジと清音化したもので、動詞シジク（縮）の語幹、「小さく縮んだ状態」をいう。ギリ＝キリ（切）で、「開墾地」をいう。（以上は語源辞典）
以上から、シシギリとは「山麓線が褶曲して縮んだようになっている開墾地」とも考えられる。

全国地図には、シシギリ地名は記載が無い。

【藤尾】

フジオ。

毛呂窪のシシギリ小字に囲まれた、小さな小字である。傾斜地の中腹にあって、現在は住宅地にもなっている。

フジオとは何か。これも分からない小字の一つ。分からないなりに二説を挙げたい。

①フジオとは「富士山に見立てた独立峰の尾根続きの場所」とはならないだろうか。この小字の東方には独立峰があり、この峰を対象にした富士講があったかもしれない。

②フジ←フシ（麩師）と濁音化した語で、「麩の製造を業とする人」（国語大辞典）をいう。オはヲ（峰）で「丘」をいう（語源辞典）。以上から、フジオとは、「麩の製造職人が住んでいた

ところ」か。江戸時代になって焼酎が作られるようになり、特に寺院では精進料理に多用され、一般には仏事法用以外では常用されなかったという（民俗大辞典）。

全国地図には、フジオ地名は、中・大字として9ヶ所に記載があり、いずれも「藤尾」の字が宛てられている。ということは、上記の二つの説以外に、適切な解釈があるのかもしれない。

【和取沢】

ワトリザワ。

毛呂窪のシシギリ小字と新田小字に囲まれた、小さな小字である。谷底部にあつて、ほとんどが、現在でも田んぼになっている。

ワトリザワとは何か。理解しにくい小字が続く。二説を挙げておきたい。

①ワ＝ハ(端)で、トリは動詞トル(取)の連用形で「切り取られたような地形」をいう(以上は語源辞典)。すなわち、ワトリザワとは、「両端が切り取られたようになっている所を流れている谷川」であろうか。

②ワトリ←ワドリと清音化した語で、ワドリは動詞ワドル(輪取)の連用形が名詞化した語である。ワドルとは「輪の形になる」ことをいう(国語大辞典)。以上からワドリサワとは、「輪の形に切って流れる谷川」をいうか。輪の形は円にはなっていないが、その土地を見たときに、それほど矛盾を感じない程度だったのではないかと思われる。どうであろうか。

全国地図には、ワトリザワ地名は載っていない。

【神田】

ジンデン。

毛呂窪には、ジンデン小字が三ヶ所

にある。一つは和城沢川左岸の山地にあり、谷底部には現在も水田が多い。もう一つは南部のチャガダイラ小字を挟んだ二ヶ所にある。

ジンデン(神田)とは「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」(広辞苑)である。

和城沢川左岸のジンデン小字が付属した神社は南の大山住社か、東方の大祇神社か。そして、南方のジンデン小字に対応する神社は大祇神社であろう。距離的には米峰神社の方が近いが、村が異なるのではないだろうか。村境がはっきりしないが。

全国地図には、シンデン地名は15ヶ所に、中・大字として挙げられており、全てに「神田」の字が宛てられている。

【千屋ヶ平】

チャガダイラ。

毛呂窪の小字になっているが、南隣にはハマイバ小字があつて、米峰になっているので、村境であることに相違はない。

チャガダイラとは何か。これもまた難しい小字である。語源辞典によりつつ、二説を挙げたい。

①チはフチ(縁)の上略、ヤはヤ(菴)で、ダイラは「山頂の平らな部分」をいう。以上から、チャガダイラとは、「村境近くで、湿地もある谷で、山頂部分が平らな土地」をいうか。

②チはイネ科の多年草であるチガヤのこと。チャガダイラとは、「シガヤの生えた湿地があり、山頂部に平坦地もあり谷」であろうか。チガヤは、「穂をツバナ、チバナといい、強壯剤とし、また古くは成熟した穂で火口を作った。茎葉は屋根などを葺くのに用いた」

(広辞苑) という。

全国地図には、チャガダイラ地名は載っていない。

【中ノ洞】

ナカノホラ。

この小字は、和城沢川上流部の左岸にある小さな小字である。

ナカノホラとは、「和城沢川に開口する二つの大きな洞の間にある洞」を意味していると思われる。上流側のホラがハンノキボラ小字で、下流側がシンデン小字の洞である。

全国地図には、なぜか、ナカノホラ地名は記載が無い。

【大牧・大牧向】

オオヒラ・オオヒラムカイ。この小字に「大牧」の字を宛てるのは、信じがたいのであるが、このまま長野縣町村字地名大鑑に従うことにする。オオヒラムカイ小字は、和城沢川上流部を挟んで、オオヒラ小字の対岸にある小さな小字である。

オオヒラとは、「大きな面積をもち、山地の一部が平坦になっているところ」か。

オオヒラムカイとは、「オオヒラ小字の向かい側の土地」であろう。

オオヒラ地名は、全国地図に、中・大字として、137ヶ所も挙げられているが、宛てられている字は「大平」が136ヶ所で、「大牧」の字は見当たらない。

【半ノ木洞】

ハンノキボラ。

毛呂窪の米峰境にある谷で、現在は、一部が果樹園に、大部分は林地になっている。

ハンノキボラとは、「榛の木があった洞」であろう。焼畑には榛の木が植

えられることもあったという。この小字でも焼畑耕作が行われていたのであろうか。

【天馬久洞・天白洞】

テンパクボラ。

これらの小字はハンノキボラ小字の東側に並んでいる。米峰神社丘陵の北側の北向き斜面にある。

テンパクボラとは、「天白神を祀っている洞」であろう。

天白神の神格は多様であるが、ここでは風神であろうか。米峰神社丘陵の南面にはカザハラ小字があるからである。

全国地図にはテンパクボラ地名は無い。

【白地】

シロジ。

毛呂窪の和城沢川最上流部に、二ヶ所ある。

シロジとは何か。三説を挙げておきたい。

①シロジとは、「白い砂地のところ」をいうか。風化した花崗岩の砂であろうか。

②シロは赤石山地では「傾斜地」をいい、丘の上や山腹の平坦地も含むという(語源辞典)。シロジとは、「丘上の平坦地を含む傾斜地になっている所」をいうのだろうか。

③シロは動詞シロム(窄)の語幹で「しぼられたような地形」をいう(語源辞典)。シロジとは、「絞られたような地形になっている洞のあるところ」か。

全国地図には、シロジ地名は、中・大字として一ヶ所にあり、「白地」の字が宛てられている。

【家向・家上・家下】

イエムカイ・イエウエ・イエシタ。

イエムカイ小字は毛呂窪で二ヶ所、イエウエ小字・イエシタ小字は米峰になる。イエウエ小字はイエムカイ小字に挟まれている。これらの一群を家小字群の一つとしておく。それほど遠くない米峰神社南西方向にもう一つ、別の家小字群がある。

イエムカイは「家の向こう側の土地」、イエウエは「家の上の方の土地」、イエシタは「家の下の方の土地」をそれぞれ意味しているのであろう。

それらのイエ（家）とはどこか。それは、モリシタ小字かクボ小字にあったイエ（家）と思われるが、どうであらうか。

【西ヶ洞】

ニシガホラ。

毛呂窪のシシギリ小字に囲まれた一ヶ所と、米峰のナガボラ小字の北側に一ヶ所ある。

ニシガホラとは何を意味するのか。一般には、ニシは「西方」を意味するが、「東方」に対応できる目的物が見当たらず、ここでは適当ではないと判断して取りあげないことにした。他に、語源辞典に依りながら二説を挙げる。①ニシは動詞ニジル（躓）の語幹の清音化した語で、「崩壊地形」をいう。従って、ニシガホラとは「崩壊地のある洞」をいうか。

②ニシとは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化したもので、「湿地」をいう。すなわち、ニシガホラとは「湿地になっている洞」のことか。

全国地図にはニシガホラ地名は記載が無い。

【大神宮】

ダイジングウ。

大祇神社のある小字である。

大神宮といえば、伊勢神宮であり、祭神は天照大神である。現在でも天照大神が祀られているとすれば、小字発生時には伊勢神宮が勧請されていたことになる。恐らくは、伊勢神宮の御師によるものであろう。2,500分の1地図には「大祇神社」になっており、この神社名を用いることにしている。大神宮勧請前は山の神を祀っていたと思われる。千代村誌（明治44年）にも「山神社」となっている。山の神は神道では大山祇神である。

全国地図には、ダイジングウ地名は、8ヶ所、中・大字として挙げられている。

【大林】

オオバヤシ。

毛呂窪のナガタ小字とナガハタ小字の間にある、小さな小字である。北側の丘陵の南向き裾部分にある。

オオバヤシとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。①オオ←ヲ（尾）の転訛した語で、「山裾の末端」をいい、バヤシ＝ハヤシは「樹木の茂ったところ」である。以上から、オオバヤシとは、「山裾で樹木の茂ったところ」をいうのであろうか。②ハヤシはハヤ（逸）・シ（接尾語）で、「傾斜地」をいう。オオバヤシとは「山裾の傾斜地」のことか。

全国地図には、オオバヤシ地名は、中・大字として46ヶ所に挙げられている。

【小皿田】

コサラダ。

毛呂窪地籍になるが、百巢川（和城沢川）左岸で、大小二つの小字になっている。大きい方は兩岸の尾根まで達する谷になっているが、小さい方は側

稜末端の西向き傾斜地にある。どちらにも、現在、水田は無い。

コサラダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コは意味をもたない接頭語。サラは動詞サラフ（掠）の語幹で、「崖地」をいう。ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語。以上から、コサラダとは、「崖地」をいうか。

②サラ（皿）から、もしかしたら、コサラダとは、「陶器を焼いていたところ」かもしれない。

全国地図には、コサラダ地名は載っていない。

【梶屋敷】

カジヤシキ。

この小字は、二つのコサラダ小字の間にある。大祇神社の北隣になる。

カジヤシキとは何か。これも語源辞典に依りつつ二説を挙げたい。

①カジはカジ（鍛冶）で、「鍛冶職人が住んでいたところ」である。カジヤシキとは、「鍛冶に関係する人が住んでいた屋敷」か。

②カジは動詞カジル（搔）の語幹で「引っ搔かれたような地形」をいう。カジヤシキとは、「崩壊地もある、有力者の屋敷があった所」か。

全国地図には、カジヤシキ地名は、19ヶ所が、中・大字として記載されている。

【森下】

モリシタ。

毛呂窪のモリシタ小字で、ダイジングウ小字の北東隣にある。

モリシタとは、「神聖な場所の下側にある土地」をいう。神聖な場所とは、大祇神社の境内ということになるか。

全国地図には、モリシタ地名は、中・大字として、35ヶ所に挙げられている。

【宝ノ入・保ノ入】

ハウノイリ。

毛呂窪の百巢川（和城沢川）左岸にある。丘陵の尾根にまで達する北向きの斜面になっている。

ハウノイリとは何か。語源辞典によりつつ、二説を挙げたい。

①ハウは動詞ホホム（含）の語幹から「（山などに）包み込まれたような地形」をいう。イリは「谷あい」のこと。以上から、ハウノイリとは、「側稜に包み込まれたような谷あい」をいうのであろうか。

②ハウ←ホ（秀）と長音化した語で、「（水平に）突き出ているところ」をいう。ハウノイリとは、「側稜が末端にまで突き出ている谷あい」であらうか。

全国地図には、ハウノイリ地名もホノイリ地名も記載は無い。

【万田・番田・番田上・番田下】

バンダ・バンダウエ・バンダシタ。

これらのバンダ小字群は毛呂窪にあり、百巢川（和城沢川）氾濫原から右岸丘陵の尾根筋にいたる傾斜地に分布している。八ヶ所のバンダ小字群の内、バンダ小字は五ヶ所、現在水田になっているのは二ヶ所にすぎない。

バンダとは何を意味しているのか、分かりにくい小字の一つ。

バン（番）は、結いのように「労働相互扶助の順番」（語源辞典）のことか。ダはダ（処）であらう。つまり、バンダとは、「相互扶助の対象になっていた耕作地」であらうか。バンダ小字群の分布の状況から、水田や焼畑も

混じっていたと思われるが、どうであろうか。

バンダウエとは、「バンダ小字の上の方」であり、バンダシタとは「バンダ小字の下の方」ということになる。

全国地図には、バンダ地名は、中・大字として10ヶ所にある。

【池ノ上】

イケノウエ。

この小字は、情巢川（和城沢川）とその支流に挟まれた氾濫原にあり、かつてはこの下流側にはあったのであろう。

イケノウエとは、文字通りで、「池より上流側の土地」か。

【道上】

ミチウエ

ミチウエとは、これも字面の通りで「道路の上側にあるところ」をいう。この道路は百巢川の谷から北の方の西の前沢川の谷に抜ける山越えの道になっている。

全国地図には、チウエ地名は13ヶ所に中・大字として挙げられている。

【市ノ瀬】

イチノセ

この小字も百巢川（和城沢川）の氾濫原にある。

イチノセとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イチーイツ（巖）と転じた語で、「険しい地形」をいう。すなわち、イチノセとは、「険しい岸のある川」か。

②もしかしたら、イチには「市場」の意味があるかもしれない。とすれば、イチノセとは「市が立つことがあった川原」であろうか。中世、市が立つのは川原や辻であったという。この小字の両側に道があり、すぐ上流には辻も

ある。

全国地図には、イチノセ地名は91ヶ所に中・大字として記載がある。

【深田】

フカダ。

百巢川（和城沢川）の氾濫原にあり、イチノセ小字の下流側になる。

フカダは「泥の深い田。沼田」（広辞苑）である。現在でも小字の全地が水田になっている。

全国地図には、フカダ地名が、中・大字として、15ヶ所に挙げられている。

【稲葉垣外】

イナバガイト。

この小字は、峠丘陵の南側山麓にある。

イナバガイトとは、「稲干場になっていた住居跡」であろう。南隣にはフカダ小字があって、今でも水田地帯になっている。

【西ノ垣外】

ニシノカイト。

この小字も毛呂窪にあって、峠丘陵の尾根から百巢川氾濫原までの広い小字になっている。

東の方に寺社など目立つ施設は見当たらないので、ニシカイトのニシは方角の「西」ではないであろう。

では、ニシカイトとは何をいうのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ニシは動詞ニジル（躡）の語幹が清音化した語で、「崩壊地形」をいう。ニシカイトとは「崩崖もある、居住地であったところ」か。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語で、「湿地」をいう。ニシカイトとは、「自然湧水のある居住地跡のあったところ」であろうか。

全国地図には、ニシノカイト地名は記載が無い。

【峠・峠畑】

トウゲ・トウゲハタ。

これらの小字は、峠丘陵の尾根周辺にある。

トウゲ小字は二ヶ所にあるが、いずれも峠道があり、トウゲハタ小字は頂上部が平坦になっていて、今でも果樹を栽培している。もう一ヶ所に小さいトウゲハタ小字があるが、峠丘陵の中腹部にある。

トウゲは「山の山の上りから下りにかかる境」（広辞苑）であり、トウゲハタは「山の峠付近にある畑地」であろう。

全国地図にはトウゲ地名は、88ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【下切・下切平】

シモギリ・シモギリダイラ。

シモギリ小字は百葉川氾濫原に、シモギリダイラは峠丘陵の尾根付近にある。

シモギリとは何か。既に128～129頁で触れているので、繰り返さない。先とほぼ同じ状況と考えている。

シモギリダイラとは、「シモギリ付近にあって頂上部に平坦地のあるところ」か。

【家ノ下】

イエノシタ。

この小字は峠丘陵の南向き斜面にある。

イエノシタとは、字面の通りで、「家の下の方」をいう。イエとは、シモガイト小字か、ナカジマヤ小字にあったと思われる屋敷ではないだろうか。

【前田・前畑】

マエダ・マエハタ。

いずれも、峠丘陵の南面の傾斜地に

ある。

マエダとは、「前の方にある田んぼ」であり、マエハタとは「前の方にある畑」であろう。何のマエかといえ、ナカジマヤ小字にあったと思われる有力者の居住地ということになりそうだが、どうであろうか。

全国地図には、マエダ地名は、中・大字として、139ヶ所も挙げられている。

【長才】

チョウサイ。

この小字は百葉川氾濫原にあり、シモギリ小字のすぐ下流側にある。

チョウサイとは何か。これも分かりにくい小字である。二説を挙げる。

①チョウはチ（フチ縁）・ヤ（菴）・フ（～になっている所）で、サイはサ（接頭語）・キ（井）で「水のある所」（以上は語源辞典）。以上から、チョウサイとは、「丘陵の縁になっていて流水のあるところ」であろうか。やや無理気味か。

②チョウはチャ（茶）・フ（生）で、チョウサイとは、「湧水があり、お茶が茂っているところ」であろうか。

チョウサイ地名は、全国地図には無い。

【前畑】

マエハタ。

峠丘陵の南向き傾斜地にある。

マエハタとは、「前方にある畑」であるが、基準になっているのは、ナカジマヤ小字にあった屋敷であろうか。

【中屋】

ナカヤ。

百葉川の氾濫原と北側の峠丘陵の麓にかかっている小字である。

ナカヤとは、「地域の中心になって

いた有力者の住居があったところ」だろうか。

全国地図には、ナカヤ地名は64ヶ所が、中・大字として挙げられており、うち35ヶ所は「中屋」の字を宛てている。

【中島屋】

ナカジマヤ。

この小字は、峠丘陵の南側斜面の中腹にある。

ナカジマヤとは、「ナカジマという屋敷」をいうか。固有名詞の可能性が高い。

全国地図に、ナカジマヤ地名は吉舎が無い。

【大屋倉】

オオヤグラ。

大きな面積の小字で、峠丘陵の尾根から北側の西の前沢川を越えて北側の丘陵の尾根に達している。一つの大きな谷が、オオヤグラ小字になっている。もう一つ、小さなオオヤグラ小字があり、百巢川氾濫原の片隅にあって、ダイコクヤ小字の南隣になる。

オオヤグラとは何か。すでに92頁にあるので、繰り返さない。小さなオオヤグラ小字は、かつては大きな方に繋がっていたのであろう。

【姥畑】

ウババタ。

峠丘陵の南向きの傾斜地にある。

ウババタとは何か。山姥伝説にかかわっているかもしれないが、可能性は薄いのではないか。この地方ではあまり聞かない。

ウバは動詞ウバウ(奪)の関連で「崖地」をいう(語源辞典)。ウババタとは、「崖地のある畑」であろうか。

全国地図には、ウバハタ地名は、1

ヶ所に記載があるが、ウババタ地名は載っていない。

【百ス】

ヒヤクスという資料もあり、長野縣町村字地名大鑑では、「ヒヤク(百久)」となっているが、いずれも疑問で、この小字名はモモスとしたい。この小字内を流れている川が「百巢川」だからである。

この小字は、百巢川の氾濫原にある。モモスとは何か。

モモはママ(壙)の転で、「崖地」をいい、スはス(砂)のこと(語源辞典)。モモスとは、「崖地もある砂地の川原」をいうのであろう。スには「川原」の意もあるようだ。

全国地図にはモモス地名は載っていない。

【火地里神】

ヒジリガミ。

この小字は、モモス小字の下流側にある。

ヒジリとは「既成の教団の周辺や外部にあって独自の価値観にもとに活動を行っていた宗教者をいう。半僧半俗の修行者、修験者などがある。

ヒジリガミとは、「聖にかかわる神聖な地」をいう。修験者が修行した所なのか、あるいは聖の墓地なのか、その具体的な内容までは、はっきりしていない。

全国地図にヒジリガミ地名は記載されていない。

【大石】

オオイシ。

この小字は、峠丘陵の南西向き斜面の中腹にある。

オオイシとは、オオ(尾)・イシ(石)で、「側稜の尾根の末端部で小石混じ

りの土地」をいうのであろうか。

全国地図には、オオイシ地名は、中・大字として、65ヶ所に挙げられている。

【洗イ田・外あらい田・ひあらい田】

アライダ・ソトアライダ・ヒアライタ。

これらの小字は、和城沢川の氾濫原から北側の峠丘陵の山地にある。

アライダとは、「大雨の時などに荒れる所」であらうか。

ソトアライダとは、「アライダ小字の外側にある土地」か。

ヒアライタのヒはヒ（樋）で「川」をいう。ヒアライタとは、「川が流れており、その川が荒れるところ」であらうか。

全国地図には、ヒアライタ地名もアライダ地名も載っていない。

【霜陥】

シモオチ。

ヒアライダ小字の南西隣にある小さな小字である。

ここには霜はめったに降らないという。シモオチとは、「霜が降らないところ」としておきたい。

全国地図には、シモオチ地名は、1ヶ所、中・大字として挙げられており、「下落」の字が宛てられている。

【家ノ上】

イエノウエ。

この小字は龍江との村境にあり、百巢川右岸の傾斜地にあり、尾根筋にまで達している。

イエノウエとは「有力者の居住地の上の方の土地」をいうか。

【大黒屋】

ダイコクヤ。

峠丘陵の南向き傾斜地中腹にある。

ダイコクヤとは、「大黒天を祀っていた屋敷」であらうか。

大黒信仰が広まったのは、天台宗や真言宗が習合を推し進めたことや近世における民間陰陽師による。町屋では福神として祀られ、農村では農神としてだいにされたという。

全国地図にはダイコクヤ地名は記載が無い。

【紙屋】

カミヤ。

峠丘陵の南向き斜面の中腹で、ナカヤ・ナカジマヤなどの小字の近くにある。

カミヤとは、「紙を製造していた家」をいうのであろう。江戸時代の初期に、伊久間村では上納した紙の約8割を南山郷・遠山地方から買い入れて領主に納めていたという（「下伊那史」第8巻）。毛呂窪でも紙漉きは行われていたのであろう。

全国地図にはカミヤ地名が、中・大字として、43ヶ所に挙げられており、うち、15ヶ所に「神谷」、12ヶ所に「紙屋」の字が宛てられている。

【後】

ウシロ。

龍江村境にある大きな小字で、側稜に挟まれた谷になっている。西の前沢川最上流部が開析した谷である。

ウシロとは「背後」のこと。毛呂窪中心部からみれば、「後の方にある土地」ということになる。

全国地図には、23ヶ所に、中・大字としてウシロ地名が挙げられている。

【神田】

ジンデン。

毛呂窪の和城沢川（百巢川）左岸に

ある。

ジнден=シンデン(神田)で、「神社に付属して、その収穫を神社の祭典や造営、または神職の給料などの諸費にあてるための田地。不輸租田とした」(国語大辞典)であろう。

ここで、神社とは、南の方にある大祇神社であろうか。

【鶴根】

ツルネ。

百巢川右岸の峠丘陵の南西向きの傾斜地にある。

ここでのツルネは「峰つづき」(広辞苑)にはなっていない。

ツルはツル(蔓)のように「曲がりくねっている地形」をいい、ネはネ(根)で、「裾。麓」(語源辞典)をいうのであろう。従って、ツルネとは、「(等高線が)曲がりくねっている丘陵の裾部」をいうのであろうか。

【庚申堂】

コウシンドウ。

毛呂窪の百巢川右岸の丘陵の麓にある。

庚申堂は「庚申青面をまつてある堂。三遠の像や、他に梵天・帝釈・猿田彦などを祀ってあることが多い」(国語大辞典)というが、この庚申堂はどうであらうか。庚申待が60日おきに、この御堂で行われていたと思われる。現在は、庚申塔が、その地に建てられている。

全国地図には、コウシンドウ地名は、1ヶ所に中・大字として挙げられている。

【市道・市道峠】

イチミチ・イチミチトウゲ。

毛呂窪の百巢川右岸にあり、峠丘陵の南向き傾斜地にある。

イチミチとは何か。

イチはイツ(巖)の転で「けわしい地形」をいう(語源辞典)。従って、イチミチとは、「険しい道」を意味するか。

イチミチトウゲとは、「険しい道に繋がる峠のあるところ」か。

全国地図にはイチミチ地名は4ヶ所に中・大字として記載されており、全てに「市道」の字が宛てられている。

【小倉・小倉山・小倉向・下小倉・小倉峠】

コグラ・コグラヤマ・コグラムカイ・シモコグラ・コグラトウゲ。

これらの小字は百瀬川流域にあり、西側にはバンダ小字群がある。コクラ小字は二ヶ所にあり、一つは百瀬川氾濫原に、もう一つは万時山丘陵の尾根近くにある。

コグラ=コクラとは何を意味するのか。語源辞典によりながら二説を挙げたい。

①コクラはコク(扱)・ラ(「場所」を示す接尾語)で「はぎ取られたような地形」をいう。コグラとは、「崩崖のあるところ」か。

②木地師には小椋姓が多かったことから、コグラとは「木地師の住んでいたところ」だろうか。

コグラヤマとは、「コクラ小字のちかくにある峰」であろう。

コグラムカイは「コクラ小字の向かい側の土地」であろう。

シモコグラは「コクラ小字の下の方の土地」をいう。

コグラトウゲとは「コグラの尾根道にある峠」か。万時山丘陵の尾根道に繋がる山道が、今でもある。

【冷田】

ヒエダ。

大郡地籍になる。百瀬川と一つ南の和城沢川のあいだにある丘陵の北向き傾斜地にあり、谷が一つある。

ヒエダとは何か。湧水の自然水を使う田んぼだから水温の低い「冷田」ではあるまい。

ヒエダとは、「稗を栽培する耕作地」(国語大辞典)であろう。

神祭に稗酒を供える所があちこちにあり、稗田の地名が各地にあることから、古くは日本でひろく稗が栽培されていたと思われる。その後、稗は水田を追われて畑作物に転じた。現在の主産地は東日本の北部と高冷地。また伊那地方には稗だけを計る特殊な枡が用いられたという(民俗学辞典1951)。

大郡のヒエダでも焼畑が行われて稗も栽培されていたのかもしれない。

【長洞】

ナガボラ。

大郡には、四ヶ所にナガボラ小字がある。うち二つのナガボラ小字の間にはナガボラジリ小字がある。

ナガボラとは何か。語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①ナガは動詞ナガル(流)の語幹で「傾斜地」をいう。静岡県榛原郡で使われているという。すなわち、ナガボラとは、「傾斜地になっている谷」となるが、当然すぎるであろうか。

②ナガ←ナギ(薙)の転じた語で、「崩壊地形、浸食地形」をいう。ナガボラとは、「崩崖のある谷」か。これも一般的すぎるか。

全国地図には、ナガボラ地名は、1ヶ所にだけ中・大字として記載がある。

【道ヶ洞】

ミチガホラ。

この小字は小倉小字群の東方にある。

ミチ(道)には「特に大路、大通りに対して、小路、路地などをいう」(国語大辞典)の意もある。

ミチガホラとは、「山道のある谷」であろうか。

全国地図には、ミチガホラ地名は記載が無い。

【新田】

シンデン。

この小字は、大郡の龍江村境に近い谷にあり、百瀬川の流域になる。

シンデンとは何か。二説を挙げる。
①シンデン(新田)は「新たに開墾した田地。特に江戸時代のものをいい、中世以前には、墾田という」(広辞苑)。開墾した土地であれば、江戸時代に発生した小字ということになる。

②もしかしたらシンデン(神田)かもしれない。とすれば、シンデンとは「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」(広辞苑)であるという。この大郡のシンデンは「収穫物を神社関係の諸費に充てる田のあるところ」であろうか。

【家ノ向】

イエノムカイ。

ミチガホラ小字の北隣にある。

イエノムカイとは、「有力者の家の向こう側にある土地」をいう。有力者の家がどこにあったのか、それはヒガシ(東)小字にあったと思われる。

【道下】

ミチシタ。

主要地方道下条米川飯田線の南側にある。

ミチシタとは、「主要道の下側にあ

る土地」であろう。

【万時山】

マンジヤマ。

龍江村境にある大きな小字と百巢川最上流部の右岸の裾の小さな小字の二ヶ所にある。

マンジヤマとは何か。これが分からない。思い切って三説を挙げておきたい。

①マンジは卍だとすれば、小字の形が卍形になっているはずである。しかし大きい方のマンジヤマ小字は、似ていなくもないが、小さい方は全く似ていない。それに小字発生時からかなりの変形もあったと思われるので、この解釈は妥当とはいえないかもしれない。

②マンジヤマ←マジヤマと転じたか。マジとはマジ(交)で「川、谷筋、尾根筋などの交わる地」(語源辞典)をいう。マンジヤマとは、「谷筋が交わる山地」であろうか。

③もしかしたら、マンジ←マミジと転訛したか。マミは「窪地」をいう(語源辞典)。ジはジ(地)か。以上から、マンジヤマとは、「窪地のある山地」あるいは「窪地のある山」であろうか。

全国地図には、マンジヤマ地名は記載がない。

【石原畑】

イシハラバタ。

龍江村境に近く、三方をトキジヤマ小字に囲まれている。村境の尾根にも近く、川原にはなっていない。

イシハラバタとは、「小石混じりの畑地」か。傾斜地になっているので、焼畑が行われた場所であろう。

全国地図には、イシハラバタ地名も載ってはいない。

【落尻】

オチジリ。

この小字は大郡の龍江村境の谷にある。

オチジリとは何か。語源辞典依りつつ二説を挙げたい。

①オチはオチ(落)で「崖」をいう。ジリは形容詞ジルの略で「水気が多い状態」を表す。遠江・愛知・岐阜で使われているらしい。以上から、オチジリとは、「崖地があり、湿地にもなっている土地」を意味する。谷川が流れていて湧水もある。

②オチ←オンヂ(隠地)と転じたもので、「日蔭地」のこと。すなわち、オチジリとは、「日蔭地になっている湿地」かもしれない。

全国地図には、オチジリ地名は、中・大字として1ヶ所に挙げられており、「落尻」の字が宛てられている。

【挟石】

ハサミイシ。

大郡の龍江村境にあり、県道米川飯田線の沿線にある。大きい小字と小さい小字の二ヶ所にあるが、かつては繋がっていたと思われる。

ハサミイシとは何か。

ハサミは動詞ハサム(挟)の連用形が名詞化した語。語源辞典にあるように、「二つの谷(川)の分岐点」であろう。紅葉川にその支流が合流するところに、大きなハサミイシ小字がある。小さな方には、分岐点はないが、地名発生時には大きな方の小字と繋がっていたためであろう。

全国地図には、ハサミイシ地名は、中・大字として、2ヶ所に採られている。

【足沢】

アシザワ。

これも大郡の龍江村境にある。谷川に沿った長い小字になっている。

アシザワとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①アシはアシ（悪）で、「交通困難な所」をいう。アシザワとは、「道もなくて入りにくい沢」か。

②アシはアシ（葦）。アシザワとは、「葦が自生している沢」かもしれない。

③あるいは、アシはアス・アズ（崩）といった「崩崖」を意味する語の転じたもの。アシザワとは、「崩れ地のある沢」か。

アシザワ地名は、全国地図に、中・大字として、39ヶ所に挙げられていて、宛てられている字は、「芦沢」が29ヶ所、「足沢」は5ヶ所となっている。

【貉戸】

ムジナド。

この小字も、大郡の龍江村境にあり、山地の洞の先端部に当たる。アシザワ小字の東隣になる。

ムジナドとは何か。語源辞典依りながら、二説を挙げる。

①ムジナ←ムシ・ナと濁音化した語。ムシは動詞ムシル（塗）の語幹で「もぎ取られたような地形」をいい、ナは「場所」を示す接尾語。ド（戸）は「谷の狭くなったところ」をいう。以上から、ムジナドとは、「崩壊場所のある谷の先端部で狭くなったところ」をいうのであろうか。

②ムジナは穴熊か狸のこと。ドは「場所」を表す接尾語。すなわち、ムジナドとは、「穴熊か狸の棲息するところ」か。

全国地図には、ムジナド地名はなぜ

か、1ヶ所しか記載が無い。

【破田】

ヤブレダ。

大郡の龍江村境の近くで、ムジナド小字の東隣にあり、キダノイリ小字に南北から挟まれている。

ヤブレダとは何か。

ヤブレは自動詞ヤブル（破）の連用形が名詞化した語で、「形がこわれる。くだける」（広辞苑）の意。ダはタ（田）かダ（処）のどちらか。

以上から、ヤブレダとは、「崩れ地のある場所」あるいは「崩れ地のある田んぼ」であろう。

現在は、谷底部の湿地は荒れ地になっているが、小字名発生当時には田んぼであった可能性はある。

ヤブレダ地名は、なぜか全国地図には記載が無い。

【乳母懐・乳母足】

ウバフトコロ・ウバアシ。

これらの小字は大郡のイドリ小字の東側にあり、互いに接している。

ウバフトコロとは、「日当たりのよい暖かい所」（国語大辞典）をいう。奈良県天川の方言というが、伊那谷南部には多い小字名である。

なお、ウバガフトコロについては、その昔、遠山土佐守の一族の乳母と幼児の伝説があるという（千代風土記）。千代小学校のスケート場のあるところというのはこのことか。

ウバアシについては、よく分からない。使用例も見当たらない。ウバアシとは、「乳母が足を洗ったところ」から、単に「水くみ場」を表しているのかもしれない。

ウバアシ地名は全国地図にも載っていない。

【木田・木田ノ入・木田ノ向】

キダ・キダノイリ・キダノムカイ。

これらの小字は、大郡の貴楽田沢の右岸にある。キダ小字が三ヶ所、キダノイリ小字が二ヶ所、キダノムカイ小字も二ヶ所にある。

キダとは「段」（国語大辞典）のことで、ここでは「階段状の地形になっているところ」をいうものと思われる。

キダノイリとは、「階段状の谷の奥」をいう。

キダノムカイとは、「キダ小字の向かい側」である。

【北垣外】

キタガイト。

大郡の貴楽田沢川右岸にあり、諏訪社が鎮座する。

キタガイトとは「（諏訪社の）北側にある住居跡」をいうのだろうか。

【家ノ前・家ノ入】

イエノマエ・イエノイリ。

これらの小字は、県道米川飯田線の北東側にあり、丘陵の麓になる。

イエノマエとは、「有力者の居住地の前方」をいい、イエノイリとは、「有力者の居住地の奥、山地側の地」をいう。

有力者のイエ（家）というものは、この場合は、ニシノカイト小字かアラヤ小字にある屋敷を指しているものと思われる。

全国地図には、イエノイリ地名は記載が無い。

【岩林】

イワバヤシ。

この小字は、大郡の木田小字群の近くにある。

イワバヤシとは、「小石まじりの土地で、樹木の茂っているところ」か。

イワバヤシ地名も、全国地図には載っていない。

【家ノ上・家ノ後】

イエノウエ・イエノウシロ。

これらの小字は大郡の諏訪社南方にある。

イエノウエとは「有力者の居住地跡の上の所」であり、イエノウシロとは「有力者の居住地跡の裏側」をいうのであろう。

有力者の居住地があったところというのは、隣のオオガイト小字にあった屋敷のことであらうか。

【吉田屋】

ヨシダヤ。

この小字は大郡の諏訪社の西方にある。

ヨシダヤとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

①ヨシは瑞祥語。ダはタ（田）で、ヤはヤ（菴）を意味するか。すなわち、ヨシダヤとは、「田んぼのある湿地」であらうか。

②ヨシは動詞ヨス（寄）から「（川などの）合流点」（語源辞典）であるという。ダはダ（処）、ヤはヤ（菴）。以上から、ヨシダヤとは、「道が交差している湿地」をいうか。

③ヨシダは瑞祥語も含むので、固有名詞の可能性もある。ヤはヤ（家）をいう。つまり、ヨシダヤとは「ヨシダさんの家」ということになるが、どうであらうか。

全国地図には、ヨシダヤ地名は載っていない。

【棚田】

タナダ。

大郡諏訪社の南の方にある小さな小字である。

タナダだから「棚田」であろうとも思うのであるが、面積が小さいのが気になる。

そこで、語源辞典によって、タナ(棚)を「割合狭く、やや凹凸のある山腹の緩やかな所」と解したい。つまり、タナダとは、「狭い所で、やや凹凸にある緩やかな傾斜地」としておく。

【大垣外】

オオガイト。

この小字は、大郡の諏訪社の南に一ヶ所、諏訪社の北西方向に一ヶ所ある。

オオガイトとは、いずれも「有力者の屋敷のあったところ」であろうか。

全国地図にも、オオガイト地名は、中・大字として、13ヶ所に記載されている。

【家ノ上・家ノ下】

イエノウエ・イエノシタ。

これらの小字は千代・千栄のあちこちにあるので、紛らわしい小字になっている。ここで取りあげるのは、大郡地区の県道米川飯田線に沿った大郡第二生活改善センター付近にある家小字群の中にある。

イエノウエとは「有力者の居住地だった所の上の方」であり、イエノシタとは「有力者の居住地だった所の下の方」となる。

では、有力者の居住地がどこにあったのだろうか。はっきりとした結論にはならないが、「家ノ上」小字と「家ノ下」小字の間に挟まれているシモゴオリ(下郡)小字に有力者の屋敷があったとすれば、問題はない。しかし、それがはっきりしない。

【下郡】

シモゴオリ。

この小字は、大郡地区の家小字群の

中にある。二ヶ所にあつて、二つのシモゴオリ小字の間には、イエノシタ小字がある。

シモゴオリとは何を意味しているのか。これも難しい。語源辞典を見ながら二説を挙げてみたい。

①ゴオリはゴウ(郷)・リ(「場所」を示す接尾語)で、ゴウは中世末～近世の地方区画単位で、ここでは南山郷のことであろうか。シモは「下の方」をいうか。シモゴオリとは、「(南山)郷南部の中心となるような所」としたい。この解釈であれば、前項のイエノウエ・イエノシタの有力者もはっきりする。

②シモは動詞シモル(滲)の語幹で「湿地」をいい、コオは動詞コホツ(壊)の語幹で「崩壊地形」のこと。リは接尾語。以上から、ソモゴオリとは、「崩壊地のある湿地」となる。

全国地図にはシモゴオリ地名が6ヶ所、シモゴウリ地名が1ヶ所、それぞれ中・大字として挙げられており、宛てられている字は一ヶ所を除き「下郡」となっている。

【和田屋敷】

ワダヤシキ。

大郡の側稜の尾根の鞍部にある。

ワダヤシキとは何か。これも二説を挙げたい。

①ワダは固有名詞か。とすれば、ワダヤシキとは「和田という有力者の屋敷」となる。

②ワダとは、「窪地」をいう(語源辞典)。ワダヤシキとは「尾根の窪地にある有力者の屋敷跡」か。

珍しいことであるが、全国地図には、ワダヤシキ地名が1ヶ所、中・大字として記載されている。

【鳶垣外】

シマガイト。

大郡の家小字群の中にある。

シマガイトとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①シマはシ（石）・マ（間）で、「小石混じりの土地」のこと。すなわち、シマガイトとは、「小石混じりの土地で住居があった所」であろうか。

②シマはシ（石）・マ（ヌマの上略）で、「小石混じりの湿地」をいう。従って、シマガイトとは、「小石混じりの湿地で、居住地であったところ」か。

シマガイト地名は、全国地図に1ヶ所に記載がある。

【菓子屋】

カシヤ。

大郡の家小字群の中にある小さな小字である。この小字の中を県道米川飯田線が通っている。

カシヤとは何か。すぐに思いつくのはお菓子屋さんではないかということ。主要道路にも面しているので、なおさらである。しかし、菓子は砂糖がないとできないという。砂糖が地方に普及し始めたのは台湾から砂糖が輸入されるようになった明治35年（1902）以降である。とすれば小字発生よりかなり遅れていることになる。また、菓子とはもともとは栗・シイの実など山野に実る草木の実のことだったという。大郡でこれらを販売することは考えにくい。では、カシヤとは何か。三説を挙げておく。

①カシは動詞カシグ（傾）の語幹で「山麓などの傾斜地」をいう（語源辞典）。ヤはヤ（菴）か。以上からカシヤとは「山麓の傾斜地にあり湧水のある所」か。

②ヤはイハ（岩）の約で「小石混じりの地」をいう（語源辞典）。すなわち、カシヤとは「山麓の傾斜地で小石が混じっている土地」をいうか。

③あるいは、カシヤ←カジヤ（鍛冶屋）と清音化したか。とすれば、カシヤとは「鍛冶職人が住んでいたところ」となる。大郡地区にはカジに関わる小字がみえないので、可能性はある。

全国地図には、カシヤ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「柏谷」の字が宛てられている。

【西ノ垣外】

ニシノカイト。

大郡地区の家小字群の中にある。

ニシノカイトとは何か。二説を。

①ニシノカイトとは、「西の方にある有力者の住居跡のあるところ」か。大郡諏訪社の西の方に当たる。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹で「湿地」を意味する（語源辞典）。すなわち、ニシノカイトとは、「自然湧水のある、有力者の住居跡のあるところ」であろうか。

全国地図にはニシノカイト地名は載っていない。

【カンバク】

この小字も、大郡の家小字群の中にある。

カンバクとは何か。

カンバはカム（嚙）・バ（場）の転訛した語で「えぐられたような地形」を意味するか。ク（処）は「場所」を示す接尾語（語源辞典）。以上から、カンバクとは、「えぐられたような崩れ地のあった所」であろう。

全国地図には、カンバク地名は載っていない。

【稲場】

イナバ。

この小字も、大郡の家小字群の中にある。

イナバは「収穫した稲穂を干すために、農民が共同使用した特定の草原、また空地。今日でも東北方面に地名として残っていることがある」（国語大辞典）である。地名として多く残っているのは伊那谷南部であろう。

イナバとは「稲干場」をいう。

全国地図には、32ヶ所にイナバ地名が、中・大字として挙げられている。

【堂・堂ノ上】

ドウ・ドウノウエ。

これらの小字も、大郡の家小字群の中にある。

ドウとは何か。広辞苑に依りながら二説を挙げたい。

①一般的には、ドウ（堂）は「神仏を祭る建物」である。この家小字群の御堂が何を祀ったのかは、今のところ不明である。

②ドウ（堂）には、「賓客に接し、また礼楽（れいがく）を行う建物」の意もある。とすれば、この堂は有力者の所有するものであろう。それはすぐ南隣にあるアラヤ小字に住む有力者であったと思われる。

ドウノウエとは、「御堂のあるところの上の土地」をいう。

全国地図には、ドウ地名は9ヶ所、ゴウノウエ地名は4ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【新屋】

アラヤ。

この小字も大郡の家小字群の中にある。大郡の家小字群は二ヶ所にあるが、今まで述べてきた家小字群は諏訪社の西方にある。

アラヤとは何か。広辞苑に依りながら、念のため二説を挙げておく。

①アラヤは文字通り「新築した家」であろう。ここでは、アラヤとは「有力者の新築した家のあったところ」か。

②アラヤはアラ（荒）・ヤ（谷）で、「崩崖のある低湿地」の意味も否定はできないような気がするが、どうであろうか。

全国地図にはアラヤ地名は127ヶ所に中・大字として挙げられている。

【餅田】

モチダ。

大郡諏訪社西方の家小字群の中に、この小字はある。ドウ小字とドウノウエ小字に挟まれている。

モチダはミヤモチダ（宮持田）の上略で（語源辞典）、「宮の所有地」を意味するか。

ミヤ（宮）とは、一般には神社をいうが、仏堂や御堂を指すこともある（広辞苑）。ここのモチダを所有するのは、南隣にあるドウ小字の御堂であろう。どんな御堂であったのかは未確認。

全国地図には、モチダ地名は、23ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【一ノ瀬】

イチノセ。

大郡のドウノウエ小字の西隣にあり、県道米川飯田線が通り紅葉川が流れている。

イチノセとは何か。イチは「市場」の意もあるが、地形が険しくて市が開かれていたことは考えにくい。

イチはイツ（巖）の転訛した語で、「けわしい地形」をいう（語源辞典）。セ（瀬）は「川の流れ」（国語大辞典）

である。以上から、イチノセとは「険しい地形のところで、川が流れている場所」か。

全国地図には、イチノセ地名が、中・大字として、91ヶ所にも挙げられている。

【西畑】

ニシバタ。

この小字は県道米川飯田線に沿っており、イチノセ小字の西隣にある。

ニシバタとは何か。二説を挙げる。

①ニシバタとは字面の通りで「西の方にある耕作地」をいう。現在は荒地になっているが、かつては耕作地であったかもしれない。方角の基準になっているのは、ドウ小字かアラヤ小字であろう。

②ニシ←ニジの清音化した語、ニジは動詞ニジム（滲）の語幹で「湿地」をいう（語源辞典）。以上から、ニシバタとは「自然湧水のある耕作地」であろうか。

全国地図には、中・大字としてニシバタ地名は13ヶ所に記載がある。

【山田】

ヤマダ。

県道米川飯田線沿いの急傾斜地にある。

水田は無いので、ダはダ（処）であろう。

ヤマダとは、「山の急傾斜地になっているところ」か。

ヤマダ地名は、全国地図に、中・大字として、なんと296ヶ所にも挙げられている。

【中ノ切】

ナカノキリ。

大郡の紅葉川の流域にある小さな小字である。

ナカノキリとは何か。

ナカは二つの尾根にはさまれた場所をいい、キリは「刻み目」（語源辞典）を意味するか。すなわち、ナカノキリとは、「谷の中で切れ目（土手になっている所）のあるところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ナカノキリ地名は2ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【阿多賀】

アタラと送り仮名をしてある資料（長野縣町村字地名大鑑）もあるが、ここではアタカとしておきたい。

この小字は、大郡のナカノキリ小字とアラヤ小字に挟まれており、県道米川飯田線が通っている。

アタカとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①アタカはア（意味の無い接頭語）・タカ（高）で「高所」をいう。すなわち、アタカとは「（三方より）少し高いところ」をいうのであろうか。

②アタカはアタ（川岸）・カ（処）。アタは「端」から「川岸」の意が生じた。アタカとは「川岸になっているところ」か。

③アタには「日当たりのよい土地」の意があるという。となると、アタカとは「日当たりのいい土地」となろうか。

【皿田】

サラダ。

大郡の県道米川飯田線沿いにある。

サラダとは何か。二説を挙げる。

①サラダとは、下伊那の方言で「水をほすことのできる田」（国語大辞典）であるという。サラダとは「乾田」をいうのであろうか。

②サラダとは、皿に見立てた語で、「皿のように少し低くなっている土地」を意味するか。

全国地図にはサラダ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【廻り田】

マワリダ。

大郡のサラダ小字の南隣と、さらに紅葉川の上流側の二ヶ所にある。紅葉川下流側の小字は、現在は水田になっている。

マワリは「河川などの屈曲した所」（語源辞典）であるという。すなわち、マワリダとは「川が曲がっているところにある水田地」か。下流側のマワリダ小字は兔畑沢川が合流するところで紅葉川が曲がっており、上流側のも少し屈曲している。

全国地図にも1ヶ所だけ、マワリダ地名が、中・大字として挙げられている。

【日影田】

ヒカゲダ。

マワリダ小字の隣にあり、南側にある丘陵の北向き傾斜地になっている。

ヒカゲダとは、「日当たりのよくない田んぼのある所」か。

【オノ神】

サイノカミ。

大郡のサイノカミ小字は三ヶ所にある。一つは県道米川飯田線沿いに、あとの二つは米川簡易水道大郡配水池付近にある。

オノ神は村境に祀られることが多いといわれている。しかし、ここの村境がはっきりしない。二つのサイノカミ小字は龍江村境で、一つのサイノカミ小字は米川との村境なのであろうか。

【坂尻】

サカジリ。

サカジリ小字は大郡に二ヶ所ある。一つは紅葉川沿いのヒヤクダ小字の東隣に、もう一つは県道米川飯田線と紅葉川の間ニシノヤ小字の西隣にある。

サカジリとは何か。二説を挙げる。

①サカ（坂）は「一方は高く一方は低く傾斜している勾配のあるところ」（国語大辞典）をいう。ジリ＝シリ（尻）で、「裾」のこと。以上から、サカジリとは「斜面の裾部分に当たる土地」をいうか。

②ジリは形容詞ジルイの略で「水気が多い状態、すなわち湿地」をいう（語源辞典）。サカジリとは「自然湧水のある傾斜地」であろうか。

全国地図にはサカジリ地名は4ヶ所に、中・大字として記載がある。

【上中田】

カミナカダ。

これも紅葉川と県道米川飯田線の間にあつて、ニシノヤ小字の西隣になる。

カミナカダとは何か。簡単なようでいて、意外に難しい。毛呂窪にも場所を特定できないが、ナカダ小字がある。その「上の方にあるナカダ」と解せないこともないが、無理か。天竜川に沿ってカミの方ということになるので。

では、大郡のカミナカダとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カミ（上）は「川の上流」をいう。この場合は、紅葉川の上流ということになる。ナカ（中）は、「二本の尾根の間の谷」か。タはタ（処）かタ（田）であろう。現在は果樹園になっている。

以上から、カミナカダとは「(紅葉)川上流の尾根筋の間の谷部あるいは田んぼ」か。

②カミは動詞カム(嚙)の連用形で「水などが岩や砂を激しくえぐる」状態をいう。大雨の時の紅葉川のことである。すなわち、カミナカダとは「尾根筋の間の谷部で、大雨の時に激しく川が岸をえぐったところ」であろうか。

カミナカダ地名は、全国地図に4ヶ所が中・大字として挙げられている。

【西野屋】

ニシノヤ。

大郡の県道米川飯田線と紅葉川に挟まれている。カミナカダ小字の上流側になる。

ニシノヤとは何をいうのか。三説を挙げる。

①ニシノヤとは「西の方にある屋敷」か。基準になっているのは、ダイモン小字にかかわる建物と思われる。

②ニシは動詞ニジル(躓)の語幹が清音化した語(語源辞典)で、ヤはヤ(菴)。すなわち、ニシノヤとは、「崩壊地となっている湿地」か。現在は荒地と果樹園になっている。

③ニシは動詞ニジム(滲)の語幹が清音化したもので(語源辞典)、ヤはヤ(谷)。従って、ニシノヤとは「湿地になっている谷部」かもしれない。

全国地図には、ニシノヤ地名は、中・大字として11ヶ所に記載されている。

【庚申堂】

コウシンドウ。

この小字は、ニシノヤ小字の一角にあり、県道米川飯田線に面している。

コウシンドウとは「庚申講が行われた場所(宿)」である。う近世に入っ

ては僧侶だけでなく神道による独自の庚申信仰の展開をみせ全国に拡大していったという(民俗大辞典)。最近は公民館などが利用されている。

この大郡の庚申堂がどのようなようになっていったのかは、まだ確認していない。

【大浜屋】

オオハマヤ。

この小字は大郡のニシノヤ小字の東隣にある。

オオハマヤとは何か。大郡にも「〇〇屋」の小字が多い。これだけ多いと、〇〇は固有名詞と思いたくなる。二説を挙げる。

①オオハマヤとは「大浜さんが住んでいた屋敷」ということはないだろうか。〇〇を固有名詞とした場合である。

②ハマはハマ(岨)で、「山などの険しい所。崖」をいう(語源辞典)。山梨の使われている語だという。オオは美称で、ヤはヤ(菴)か。すなわち、オオハマヤとは「崖のある湿地」か。現在でも田んぼがある。

全国地図には、オオハマヤ地名は載っていない。

【荒木】

アラキ。

大郡のオオハマヤ小字の近くに2ヶ所ある。

アラキとは何か。

アラは動詞アラケル(散去)の語幹で「崖」をいう。キは「場所」を示す接尾語。(以上は語源辞典)従って、アラキとは「崖のあるところ」か。

その他にも、「新墾地」とか「焼畑」の解釈も可能であるが、この地にはそぐわないように思えるので、取りあげないことにした。

【通り洞】

トオリボラ。

大郡の荻坪境にある。

トオリボラとは、「尾根の鞍部を通して、向こう側の洞につながっているこちら側の洞」であろうか。

三穂と川路の間にもトオリボラ小字があった。この大郡の洞も、低い鞍部を経て峠の向こうの荻坪の洞に繋がっている。トオリボラ小字は村境にあるといえそう。わずかに二例にすぎないが。

しかし、全国地図には、トオリボラ地名は記載が無い。

【外出・そとで】

ソトデ。

この小字は三ヶ所にある。二つは大郡の荻坪村境に近いところにあり、ほぼ繋がっている。もう一ヶ所は大郡地区内はかなり入ったオオヤ小字の東隣にある。

ソトデとは何か。

ソトデとは出作または出作りのことであろうか。とすれば、ソトデとは「他村にある耕作地に出向いて耕作したところ」(広辞苑)である。しかし、この場合、他村とは大郡であり、本村が荻坪になってしまうが、小字発生時にはこの小字は荻坪地籍に入っていたと思われる。

以上のことを考えながら、言い直すと、ソトデとは「かって他村から出作りに出てきていたところ」であろう。

全国地図には、ソトデ地名が2ヶ所中で大・大字として挙げられている。

【若林】

ワカバヤシ。

この小字はソトデ小字の南隣の傾斜地にある。

ワカバヤシとは何か。語源辞典に依

りながら二説を挙げたい。

①ワカは動詞ワカル(分)の語幹で「分岐したところ」をいう。すなわち、ワカバヤシとは「尾根が分岐していて樹木が茂っている土地」であろうか。

②ワカは形容詞ワカイ(若)の語幹で、「みずみずしい」意から「湿地」を示す。ワカバヤシとは、「樹木の茂っていて自然湧水のあるところ」を意味するのでであろうか。

全国地図には、ワカバヤシ地名は、中・大字として36ヶ所が挙げられている。

【浜井場・はまい場・濱井場】

ハマイバ。

大郡のハマイバ小字は、荻坪の村境が見えるワカバヤシ小字の東隣に一ヶ所と米峰に近い二ヶ所にある。

ハマイバとは何か。語源辞典によりながら、二説を挙げておきたい。

①ハマイバとは「破魔打ち神事が行われていたところ」であろう。ハマは藁や樹皮などで円座のように丸く組んだもので、このハマを射る、あるいはハマを棒や竹で打つという神事があったといわれている。神社の近くや村はずれにハマイバ地名は残っているともいう。

②ハマイバはハマ(岨)・井(井)・バ(場)で、「山などの険しいところで、流水のあるところ」であろう。村境の近くでも無く、お宮からも離れている場合は、この解釈が生きてくるように思えるが、どうであろうか。

【神手】

ジンデ。

この小字は大郡地区の小さな谷にあり、荻坪に境を接する。

ジンデとは何を意味するのか。これ

も語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ジンデ←シミ（浸）・デ（出）と転じた語で、「湧泉」をいう。ジンデとは、「湧水のある谷」であろう。湿地に多い地名という。

②ジンデ←ジンデン（神田）と転訛したもので、ジンデとは「神社に付属して、その収穫物を神社の祭典や造営、または神職の給料などの諸費にあてるための田地。不輸租田とした」（国語大辞典）である。現在、この谷は荒地になっているが、小字発生時には田んぼであった可能性はある。

ジンデ地名は、全国地図に、中・大字として14ヶ所に記載がある。

【足柄山】

アシガラヤマ。

大郡の萩坪境近くの南向きの谷にある。

アシガラヤマとは何を意味しているのか。語源辞典に撚りつつ二説を挙げる。

①アシはアス、アズの転で「崩崖」をいう。ガラは「小石混じりの地」。すなわち、アシガラヤマとは、「崩崖のある小石混じりの土の多い山地」か。

②アは特に意味の無い接頭語で、シカラは動詞シガラム（柵）の連用形の名詞化した語で、「さえぎられた所」をいう。以上から、アシガラヤマとは、「山間の小盆地になっている山地」か。

アシガラヤマ地名は、全国地図に記載は無い。

【手城】

テジョウ。

大郡の萩坪境の丘陵頂上部にある。

テジョウとは何か。二説を挙げる。

①テジョウ←デジロ（出城）と転じた

か。神の峰城の枝城であろう。

②テジョウ（手城）←テシロ（手白）←テパク（手白）←テンパク（天白）と転訛したというのは考えすぎだろうか。近くに「手白」小字があり、そこに天伯配水池があるのが気になる。

全国地図にテジョウ地名は記載が無い。

【荒井】

アライ。

この小字はジンデ小字の西隣にあり、最上流部の紅葉川で繋がっている。北西向きの急傾斜地になっている。

アライとは、「荒れやすい川のある土地」であろう。小字発生時には、大雨の時に、しばしば荒れたのであろう。

【風ヶ崎】

カゼガサキ。

この小字は県道米川飯田線に沿っており、ダイモン小字の北西隣にある。

カゼガサキとは、「風の強い側稜の先端部」をいう。

ここでは瓦を焼いていたこともあるという。強い風を利用していたのであろう。

カゼガサキ地名も、全国地図には載っていない。

【扇屋】

オウギヤ。

この小字も大郡の県道米川飯田線に沿っており、カゼガサキ小字の北西隣になる。

オウギヤとは何か。扇は「全国各地の祭礼や民俗芸能などで古くから扇を手を持ち、神楽などの採物として用いられている」（民俗大辞典）というが、扇を作ったり売ったりできるほど需要は多くなかったと思われる。ではオウギヤとは何を意味するのか。語源

辞典に依りながら二説を挙げる。

①オウギは「扇形の地形」ではないかという。ヤはヤ（菴）であろう。すなわち、オウギヤとは「扇形をした地形になっている湿地」であろうか。

②ヤはイハ（岩）の約で「小石混じりの地」をいう。オウギヤとは「扇形になっていて、小石混じりの土地」をいうのであろうか。

全国地図には、オウギヤ地名が、1ヶ所、中・大字として挙げられており、「扇屋」の字が宛てられている。

【越田】

コシダ。

この小字の中を県道米川飯田線が通っており、ダイモン小字の西隣にある水田である。

コシダとは何か。語源辞典を見ながら三説を挙げる。

①コシは静岡では「麓」をいう。コシダとは「山稜の麓にある田んぼ」であろうか。

②コシは動詞コス（越）の連用形で「越す所」の意。ダはダ（処）。コシダとは「（谷か湿地を）越えてきた所」であろうか。旧道が迂回している場所で、現在の本道はかつては歩行路だったとも思われる。

③コシは動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で「水が湧き出る所」をいう。コシダとは「湿地になっているところ」か。

全国地図には、コシダ地名は、中・大字として、3ヶ所に記録されている。

【大門】

ダイモン。

千代小学校の西隣にある。

ダイモンは「大きな門。外構えの大きな正門。また特に、寺などの総門」

（国語大辞典）とある。伊那谷南部ではダイモン小字といえば寺院の総門が多い。しかし、この大郡ではどうであろうか。近くには寺院が見当たらない。

ダイモンとは何を意味するのか。課題としておきたい。

【井戸入】

イドイリ。

大郡諏訪社の上流部にある広い谷にある。貴楽田沢川が開析した谷である。

イドは井（井）・ド（処）で「流水のあるところ」をいい、イリ（入）は「川の上流部」をいう。

以上から、イドイリとは「谷川の最上流部分」を意味する。貴楽田沢川はこの小字から出発して、諏訪社の傍を走り抜ける。

【宮ノ沢】

ミヤノサワ。

大郡の諏訪神社は、この小字の中に

ある。ミヤノサワとは、「お宮の傍を流れる谷川」であろう。紅葉川の支流で、貴楽田沢川の一つ下流側の支流になる。

全国地図には、ミヤノサワ地名は、7ヶ所に中・大字として記載されている。

【諏訪ヶ池】

スワガイケ。

この小字は大郡の諏訪神社から200mほど北東側の高いところにある。今はないが、かつては池があったのであろう。

スワガイケとは何を意味するのか。二説を挙げておく。

①スワガイケとは「諏訪湖と繋がって

いる池」であろうか。諏訪神社と諏訪湖との結びつきを、この地でも再現しているのではないだろうか。しかし、このことは未確認。

②スハーソハ（岨）の転で、「山の斜面」をいう（語源辞典）。スワノイケとは、「山の斜面にある池」をいうのであろうか。

全国地図には、スワガイケ地名は載っていない。

【柳屋】

ヤナギヤ。

この小字は、スワガイケ小字のすぐ下にある。

ヤナギヤとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ヤ（屋）はイハ（岩）の約で「小石混じりの地」をいう。ヤナギヤとは「柳が自生している、小石混じりの土地」か。諏訪ヶ池の下流側にあるから、当時は柳が自生したであろうことは想像できる。

②ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（「場所」の接尾語）で、「傾斜地」をいい、後尾のヤはヤ（菴）か。すなわち、ヤナギヤとは「自然湧水のある傾斜地」を意味するか。

全国地図には、ヤナギヤ地名は記載が無い。

【家ノ上・家ノ前】

イエノウエ・イエノマエ。

大郡諏訪神社東方の家小字群である。

ここのイエ（家）は、近くにあるオオヤ小字かフジヤ小字にある屋敷を指すものと思われる。

【大屋】

オオヤ。

大郡の諏訪神社西方の家小字群の

中にある。面積も家小字群のひとつよりも、かなり大きい。

オオヤとは「この付近の本になる屋敷のあるところ」であろう。家小字群の本家になる家があったのか。

全国地図には、オオヤ地名は、中・大字として、64ヶ所にも挙げられている。

【藤屋】

フジヤ。

大郡諏訪神社東方の家小字群の中にある。

フジヤとは何か。これが難しい。三説を挙げておきたい。

①フジヤは富士講に関係がないだろうか。フジヤとは「富士講の先達の屋敷のあったところ」とするのはどうであろうか。富士山に見立てるような独立峰は西方 50m のところと、北方 200m 弱のところにある。

②フジブシと転訛したもので、ブシとは「小平地」（語源辞典）をいう。ヤはヤ（菴）か。すなわちフジヤとは「湧水のある小平地」かもしれない。小字内には水田もあるし、近くには池もある。

③ヤはヤ（屋）で、フジヤとは「小平地にある屋敷跡」か。

全国地図には、フジヤ地名が4ヶ所、中・大字として挙げられている。

【中野屋】

ナカノヤ。

これも大郡諏訪神社東方の家小字群の中にある。

ナカノヤとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①ナカノヤ小字は、カミヤとフジヤの二つのヤ（屋）小字に挟まれている。ナカノヤとは「二つの屋の間にある屋

敷」であろうか。

②ナカノヤ小字は、二つの側稜の先端部に挟まれるように位置している。ナカノヤとは、「二本の側稜の間にある小平地」をいうのだろうか。

ナカノヤ地名も全国地図には、中・大字として、4ヶ所挙げられている。

【森】

モリ。

モリ小字はナカノヤ小字の上側にある。

モリ（森）は「樹木が茂り立つ所。特に神社のある地の木立。神の降下してくるところ」（広辞苑）であるという。この大郡のモリ小字はかつて山の神などを祀った所であったかもしれない。

そこで、モリとは「樹木の茂った神聖な場所」としておきたい。

モリ地名は、全国地図に、128ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【紙屋】

カミヤ。

この大郡にカミヤ小字は、諏訪神社東方の家小字群の中にある。

カミヤの由来等については、毛呂窪の所で触れてあるので、省略したい。

【隣】

トナリ。

この小字は大郡諏訪神社の南東側にある。

トナリとは分かりきっているような地名であるが、意外とはっきりしない。三説を挙げたい。

①トナリとは「諏訪神社の隣」を意味しているのかもしれない。ただ、間にイドリ小字があり、距離が80mほど離れているのが気になる。

②トはト（利）で「高くなっていると

ころ」をいい、ナリは接尾語ナリ（成）で「～になった所」のこと（以上は語源辞典）。すなわち、トナリとは「高くなった所」をいうか。

③トナ←タナ（棚）の転訛した語で、リはリ（里）で「場所」を示す接尾語（以上は語源辞典）。従って、トナリとは「棚状になっている場所」を意味するか。

全国地図には、トナリ地名は記載がない。

【法ゲ】

ハウゲ。

大郡諏訪社東方の家小字群の南隣にある小さな小字である。

ハウゲとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。ハウゲ←ハウケ←ハケと転訛した語。

①ハウゲは「山の斜面の崩れたところ」をいう。

②ハウゲは「丘陵山地の片岸」のこと。

全国地図には、ハウゲ地名は、1ヶ所に中・大字として挙げられており、「法花」の字が宛てられている。

【荷後場】

ニオロシバ。

これも大郡諏訪社東方の家小字群のなかにある小さな小字である。

ニオロシバは、言葉の通りで、「積んである荷物をおろすところ」であろう（国語大辞典）。どうして荷を下ろすのか。それは荷物を積みかえるためではないだろうか。例えば、馬から人に、あるいは人から馬に、荷物の運搬の効率を考えた積み替え所であったと思われるが、どうであろうか。

全国地図には、ニオロシバ地名は記載が無い。

【洞】

ホラ。

この小字も大郡諏訪社東方の家小字群の南側にある。

ホラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ホラとは「山などが崩れた所」であろうか。現地には崩れた跡がある。

②ホラとは「谷間が行き詰まりになっているところ」か。どこの谷も行き詰まりにはなっている点が気になるが、ここの谷は浅いので、あるいはこの解釈の通りかもしれない。

ホラ地名は、全国地図には、26ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【小ヲゲ】

コオゲ。

大郡のホラ小字に囲まれた小さな小字である。

コオゲとは何か。語源辞典に依りながら見ていきたい。コオゲは郡家を意味するというが、ここ大郡に郡衙があったとは考えられない。また、コウゲはマツバイ（松葉蘭）の別名ともいうが、松葉蘭では小字名になりにくのではないか。

コウゲ←コウゲ（芝）と転じたものであろう。ではコウゲとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。①コウゲとは「短い草の生えた荒地で、畠にも水田にも開きにくい土地」かもしれない。小字の面積がやや小さいのが気になる。

②コウゲはコウゲ（香花）で、「仏前に供える香と花。また香花を供えること」の意がある。ここ大郡のコウゲは「香花を供える場所、すなわち墓地」をいうのだろうか。近くに墓地はある。

全国地図には、コウゲ地名は6ヶ所があり、うち4ヶ所は「郡家」の字が

宛てられている。

【島田屋】

シマダヤ。

大郡の庚申堂小字の北隣にあり、県道米川飯田線に沿っている。

シマダヤとは何を意味しているのであろうか。二説を挙げる。

①シマダを固有名詞とすれば「シマダという人の屋敷跡」ということになる。

②シマは丘陵末端部を島に見立てた語で、ダは（処）、ヤ（岩）で、シマダヤとは「島のような崎になっている小石混じりの土地」であろうか。

大郡にも「〇〇屋」小字が多いのは、何か意味があるのであろうか。

シマダヤ地名は、全国地図には記載が無い。

【野池田】

ノイケダ。

大郡の県道米川飯田線と紅葉川の間での低湿地にある。

ノイケダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ノ（野）は「緩傾斜地」をいう。イケ（池）は「窪地に自然に水がたまった所」。ダはダ（処）。以上から、ノイケダとは「自然に水が溜まった池のある緩傾斜地」であろう。現在は池がないようだが、小字発生時にはあったと思われる。

②イケとは「川」を意味する。ノイケダとは「川が流れている緩傾斜地」をいうか。現在も紅葉川とその支流が流れている。

全国地図にはノイケダ地名は載っていない。

【大東】

オオヒガシ。

大郡地区にあるが、ダイモン小字と

米川のカンノンザカ小字の間にある。

オオヒガシとは何か。

オオ(大)は美称の接頭語か。ヒガシは「東の方」であろう。

オオヒガシとは、「東の方にある土地」となるが、基準は何だろうか。恐らくは西の方にあるシンメイ(神明)小字と思われるがどうであろうか。

全国地図には、オオヒガシ地名が中・大字として、18ヶ所に挙げられている。

【鳥屋平】

トヤダイラ。

この小字はダイモン小字とオオヒガシ小字の間にある。丘陵の北向き斜面になっている。

トヤ(鳥屋)は、「ツグミなどの小鳥を捕らえる施設」で、ダイラは「山の中腹から麓のあたり」(語源辞典)をいう。

以上から、トヤダイラとは「小鳥を捕らえるための施設がある斜面」か。

全国地図には、トヤダイラ地名は記載が無い。

【小口】

コグチ。

大郡のコシダ小字の南隣にある。

コグチとは何を意味するのか。語源辞典に依りつつ、二説を挙げたい。

①コグチには「先端」の意がある。このコグチとは「丘陵の先端部になっているところ」であろうか。

②コグチ←コク(扱)・チ(「場所」を示す接尾語)と転訛したもので、コグチとは、「はぎ取られたような地形のあるところ」か。

全国地図には、コグチ地名は7ヶ所にあり、全て「小口」の字が宛てられている。

【竹下・竹沢】

タケシタ・タケザワ。

二つの小字は、大郡の紅葉川に南から注ぐ谷に並んでいる。

タケザワとは何か。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①タケ=ダケで「崖」をいう。すなわち、タケザワとは、「崖地があり谷川が流れているところ」か。

②タケザワとは「竹が自生していた谷川」かもしれない。小字が生まれた時には、竹が茂っていた可能性はある。

タケシタとは「タキザワ小字の下側の土地」であろう。

【天ノ窪】

アマノクボ。

米川地区で、アマノクボ小字については触れてあるので、ここでは重複しないようにしたい。

大郡地区には二ヶ所のアマノクボ小字があるが、千代村誌の伝える「天の久保城」は、東側の米川境にあるアマノクボ小字にあったと思われる。あるいは知久家落城当時の城主と姫の伝説が伝えられている。

【小ビエ作り】

コビエヅクリ。

この小字は、大郡の南部山地のアマノクボ小字に囲まれている。谷底部にある。

コビエヅクリとは何か。コ(小)は「ほとんど意味を持たない単なる接頭語」(語源辞典)か。コビエヅクリとは、発音の通りで、「田稗を栽培していた所」であろう。

全国地図にはコビエヅクリ地名は記載が無い。

【勝負沢】

ショウブザワ。

大郡南部山地の米川境にある。

ショウブサワとは何を意味しているのか。語源辞典によって二説を挙げたい。

①ショウブ＝ショウズで、「細流。清水」をいう。すなわち、ショウブザワとは「細い谷川が流れているところ」か。

②ショウブはハナショウブのことで、ショウブサワとは「ハナショウブが自生している谷」ということになる。

全国地図には、シュブサワ地名は、17ヶ所に中・大字として記載がある。

【松葉ヶ入】

マツバガイリ。

この小字は、大郡のショウブザワ小字に囲まれている。

マツバガイリとは何か。一般辞典類や語源辞典にはとっかかりがない。

マツバとは、この場合、谷筋が二股に分かれている地形を松葉に見立てたものと考えた。イリ（入）は「上流部」のこと。

以上から、マツバガイリとは「上流部にある二股に分かれた谷のあるところ」としたいが、どうであろうか。

マツバガイリ地名は、全国地図には記載が無い。

【大向】

オオムカイ。

この小字は大郡の二つのオオモリ小字の間にあり、谷底部となっている。

オオムカイとは何か。オオは美称の接頭語で、ムカイは「向こう側」であろう。ここのオオムカイとは、「(神明の) 向かい側にある土地」をいうのであろう。

オオムカイ地名は、全国地図に、中・大字として37ヶ所に挙げられて

いる。

【大森】

オオモリ。

大郡の南部山地にあり、小さなシンメイ小字と繋がっている。

オオモリとは、「広い面積になっていて、神社の森がある所」であろう。オオは単なる接頭語である可能性もある。

全国地図には、オオモリ地名は98ヶ所にあつて、中・大字として記載されている。

【向ノ小屋】

ムカイノコヤ。

大郡の紅葉川左岸の山稜の先端部にある。

コヤが何を意味するのか、はっきりしない。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①ムカイは紅葉川右岸の諏訪社のことと思えるが、あるいは南の神明社かもしれない。コヤはコ（小）・ヤ（菴）で「小湿地」をいうか。すなわち、ムカイノコヤとは、「(諏訪社の) 向かい側にある小湿地」か。この小字の面積が大き目なのが気になる。

②コヤは「仮小屋」か。すなわち、ムカイノコヤとは「(諏訪社の) 向かい側にある開墾よりの仮小屋のあるところ」か。大郡の中心部からそれほど離れていないのに、仮小屋が必要であったのかどうか、という疑問が残る。

③コヤ←コイ←クエ（崩）と転じた語で、「崖地」をいう。ムカイノコヤとは「(諏訪社の) 向こう側の崖地のあるところ」か。転訛と解するには少し無理気味か。

ムカイノコヤ地名は、全国地図には無い。

【新田】

シンデン。

大郡の紅葉川左岸の傾斜地と氾濫原からなる小字である。

シンデンとは何か。二説を挙げたい。

①シンデンとはシンデン(新田)で「開墾地」をいう。江戸時代の開墾地か。これも開墾地というには、大郡の中心部に近すぎるようにも思える。

②シンデンはシンデン(神田)で、「収穫物を神社の諸費用に充てた耕作地」か。神社とは大郡諏訪社であろう。

全国地図には、シンデン地名は、中・大字として、なんと572ヶ所が記載されている。宛てられている字は「新田」が多い。

【十六前田】

ジュウロクマエダ。

大郡に二ヶ所ある。一つは紅葉川左岸でムカイノコヤ小字の下流側にある大きな小字で、もう一つは南部山中の側稜の尾根にある小さな小字である。

ジュウロク(16)の意味は不明。もう一ヶ所、数字を頭につけた小字がある。ジュウシガサカ(十四ヶ坂)小字である。14と16が何を表しているのか分からないが、入会地関係の数字かもしれない。

マエダは「前の方にある土地」であるが、基準になっているのは、神明社と思えるがどうであろうか。

ジュウロクマエダとは、「16番の(神明社の)前の方にある土地」ということになるだろうか。

【中住】

ナカズミ。

シンメイ小字の西隣にある広大な面積を有する小字である。

ナカズミとは何を意味しているのか。語源辞典によって二説をあげておきたい。

①ナカ(中)は「側稜の間にある谷」をいう。スミはスミ(角)で、「曲がり角」のこと。従って、ナカズミとは「道がほぼ直角に曲がっている谷」を意味しているか。

②スミは動詞スム(住)の連用形が名詞化した語で、「居住地」をいう。つまり、ナカズミとは「居住地もある谷」であろうか。

ナカズミ地名は、全国地図に1ヶ所が挙げられている。宛てられている字は「中住」である。

【神明】

シンメイ。

大郡の南部山地で、ナカズミ小字やオオモリ小字と接している。側稜の頂上部になっている。

シンメイとは、「神明社が祀られていた場所」しか考えられないが、その痕跡はまだ確認してない。

神明信仰(伊勢信仰)は、15世紀に入ると御厨(在地領主が私領を伊勢神宮へ寄進した土地)を中心に伊勢講(神明講)が御師により組織化され、講を中心に参宮がなされ、伊勢信仰はさらに広い範囲に人々に及んでいったが、明治になって全ての末社が排除されたという(民俗大辞典)。

大郡の神明社がはっきりとしないのは、明治のはじめ頃、排除されたためであろう。

それでも、シンメイ地名は、全国地図に、36ヶ所も中・大字として残っている。

【鳥屋森】

トヤモリ。

大郡の南部山地のオオモリ小字の西隣にある大きな小字である。

モリは「樹木が茂り立つ所」（広辞苑）である。神聖な場所という印象は少しあるかもしれない。トヤは「渡ってくる小鳥を捕らえる施設」である。

以上から、トヤモリとは「小鳥を捕らえる施設のある樹木の茂った森」か。

トヤモリ地名は、全国地図に8ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【滝場】

タキバ。

この小字は大郡のナカズミ小字の下流、北隣にある。

タキバといえ、滝行が行われたところであることが多いが、ここのタキバ小字には、居住地と畑がほとんどで、それらしい様子がみえない。

そこで、次のように考えたがどうであろうか。

タキは「水の激しく流れた所」で、バは「場所」をいう。すなわち、タキバとは「水が激しく流れて浸食堆積したところ」ではないか。土石流が流れたところかもしれない。

全国地図には、タキバ地名は1ヶ所、中・大字として挙げられており、「滝馬」の字が宛てられている。

【兎畑・うさぎ畑】

ウサギバタ。

これらの小字は、大郡のオオノ小字の下流側に当たる北隣にあり、側稜の先端部の傾斜地になっている。

ウサギバタとは何か。二説を挙げたい。

①ウサギバタとはウサギ（兎）・ハタ（端）で、「兎の多い丘陵の先端部」ではなかったか。ここで兎狩りも行われたのであろう。

②ウサギはウサ（ユサ）・ギ（接尾語）から転訛した語。ユサはイサゴ（砂）から「砂地」をいい、ギは「場所」を示す（以上は語源辞典）。以上から、ウサギバタとは「砂地の多い丘陵先端部」をいうか。

全国地図には、ウサギバタ地名は記載が無い。

【大野】

オオノ。

大郡のナカズミ小字の西隣にある広大な小字である。

オオノとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ノ（野）は「緩傾斜地」をいう。すなわち、オオノとは「緩傾斜地になっている大きな谷」か。

②ノ←ヌ（沼）と転訛したもので、オオノとは「広い湿地」をいうか。

オオノ地名は、全国地図には198ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【通稲場】

トオリイナバ。

側稜の麓先端部にあり、兎畑沢川と日焼田沢川の二つの谷がつながっているところにある。大郡のオオノ小字の下流側になる。

トオリイナバとは何を意味するのか。トオリ（通り）は「繋がっている様」をいうのであろう。イナバは「稲干場」である。

以上から、トオリイナバとは「二つの谷に繋がっている稲干場」をいうか。

全国地図にはトオリイナバ地名は載っていない。

【道近田】

ドウキンダ。

大郡のオオノ小字に囲まれている。

谷底部の緩傾斜地にある。

毛呂窪にもドウキン（道近）小字があって、「陶器を造っていたところ」とした。この大郡のドウキンダも同じ理解でいいのではないかと考えている。

【血取場】

チトリバ。

この小字は、大郡のオオノ小字とタキバ小字に囲まれた丘陵の高い所にある。

血取場とは、「定期的にハクラク（伯楽）などと呼ばれる民間の獣医がやってきては、馬のひづめを削ったり悪血を抜いたりした場所」（民俗大辞典）。馬の首などの静脈から血をとることによって馬の健康が保たれるとされていた。ムラなどの共有地に設定されることが多いという。大郡にも伯楽がやってきたといわわれている。

全国地図にはチトリバ地名は挙げられていない。

【柳久保】

ヤナギクボ。

この小字は大郡に二ヶ所ある。一つは、大郡第3小組合集会所のある谷にあり、もう一つはバクチ小字と二面で接している比較的小さな小字である。

ヤナギクボとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヤナギクボとは、「柳が自生していた窪地」であろう。

②ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（接尾語）で（語源辞典）、ヤナギクボとは、「傾斜地のある窪地」であろうか。ギは「場所」を示す接尾語であるという。

全国地図には、ヤナギクボ地名は2ヶ所にあり、「柳久保」の字が宛てられている。

【傳田窪】

デンダクボ。

この小字も、大郡に二ヶ所ある。いずれも、オオノ小字にほぼ囲まれている。丘陵の頂上部付近にある。

デンダとは、下伊那郡と愛知県北設楽郡の方言で、「ゼンマイ」のこと。従って、デンダクボとは、「ゼンマイが自生している窪地」であろう。ゼンマイは救荒植物である。「凶荒は三年に一度ややってきた」（千代村誌）という。山野に自生する救荒植物が大切にされていたことがよくわかる。

全国地図には、デンダクボ地名は一つも載っていない。方言であるためであろうか。

【日焼田】

ヒヤケダ。

この小字は、大郡の日焼田沢川の谷に沿って、三ヶ所に分散している。現在はほとんどが谷底部になっている日焼田沢川の最も下流側にあるヒヤケダ小字に、わずかな水田があるだけ。

ヒヤケダとは、「早になると水の涸れやすい所」であろう。

全国地図には、ヒヤケダ地名は、1ヶ所に、中・大字として記載がある。

【家ノ入】

イエノイリ。

大郡の南部山地にある。日焼田沢川の最上流部で、トヤモリ小字の西隣にある大きな小字である。現在、谷底部は水田になっていて、住宅もある。

イエノイリとは、「川の上流部で居住地もある所」であろうか。

【蕨沢】

ワラビザワ。

この小字は大郡の南部山地に二ヶ所ある。大きな方はイエノイリ小字の

西隣になり、小さい方はハマイバ小字の南隣にある。百巢川と日焼田沢川の間にある丘陵の中にある。

ワラビザワとは何か。二説を挙げる。①ワラビサワとは字音の通りで、「ワラビが自生している、流水のある谷」であろう。ワラビは茎だけではなく、根も水に何度も晒して根花餅にした。救荒植物である。

②ワラはハラ(原)の転訛した語で「未墾の入会草刈地」をいい、ビはミ(辺)で、ばくぜんとした「場所」を示す(以上は語源辞典)。以上から、ワラビサワとは、「谷川が流れている入会草刈地」のことであろうか。

ワラビザワ地名は、全国地図に1ヶ所だけ中・大字として挙げられているが、ワラビサワ地名は無い。

【中ノ洞】

ナカノホラ。

大郡の日焼田沢川の最上流部にあつて、イエノイリ小字に囲まれている。

ナカノホラとは、「間にある洞」であろうか。アイダとは、日焼田沢川に開口する三つの洞の真ん中にある洞を意味する。すなわち、ナカノホラこあぎの上流側にはイエノイリ小字の洞があり、下流側にはヤナギクボ小字の洞がある。

【尾上】

オノウエ。

この小字は大郡の北部にあつて、マンジヤマ小字の一部を挟んで二ヶ所にあるが、かつては繋がっていたものと思われる。

オノウエとは、ヲ(尾根)・ノ(助詞)・ウエ(上)で、「尾根の高い所がある土地」をいうのであろう。

オノウエ地名は、全国地図に16ヶ

所が、中・大字として挙げられている。

【蛇社洞】

ジャシャボラ。

これも大郡北部でマンジヤマ小字に挟まれた小さな小字である。

ジャシャボラとは何を意味しているのか。

ジャはザレ・ゾレに通じ「崖地」をいい、シャは動詞シャル(晒。曝)の語幹で「露出地形、崩壊地形」をいう(以上は語源辞典)。

以上から、ジャシャボラとは、「崩壊した崖地がある洞」であろう。

ジャシャボラ地名は、全国地図には無い。

【社口】

シャグチ。

大郡のジャシャボラ小字の南東隣にある、細長い小字である。

シャグチ←ジャクチ(蛇口)と転訛したものか。ジャクチはジャクは「山などの崩れた所」(国語大辞典)で、チは「場所」を示す接尾語(語源辞典)である。

以上から、シャグチとは「山などで崩崖のある所」をいう。

全国地図にはシャグチ地名は記載が無い。

【小ぐり・上こぐり】

コグリ・カミコグリ。

コグリ小字は、大郡の「百巢川左岸の丘陵中腹の傾斜地にある小さな小字で、カミコグリ小字は、大郡の百瀬川右岸にあり、谷底部で比較的大きな小字である。現在は水田と畑になっている。

コグリとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コグリは、コ(接頭語)・グリ(礫)

で、「小石の多い所」か。

②クリはクリ(涅)で「湿地」をいう。コは「ほとんど意味を持たない単なる接頭語」。以上からコグリとは「湿地」のこと。

カミコグリは一般的には、コグリ小字の上流側にある土地をいうのであるが、このカミコグリ小字は、コグリ小字の下流側にある。

そこで、カミコグリは、カミ(嚙)・コグリではないかと判断した。つまり、カミコグリとは「水流にえぐられたようになっている小石の多い土地」か、あるいは「水流にえぐられているようになっている湿地」ではないだろうか。

全国地図には、コグリ地名が1ヶ所に挙げられて、「小栗」の字が宛てられているが、カミコグリ地名は無い。

【太子・太子向・太子池】

タイシ・タイシムカイ・タイシイケ。

これらの小字は、大郡のカミコグリ小字の周辺にある。

タイシとは、「聖徳太子の略」(広辞苑)である。

聖徳太子にまつわる信仰を太子信仰という。弘法大師を主とするダイシ(大師)信仰と混同されることがあるが、由来も内容も別の物であるという。太子信仰は建築職人(大工・左官・木挽・建具職・畳職・屋根屋)や山川の民(鉾山師・金物師・木地師)などの間に広まっていたという(民俗大辞典)。

タイシとは、太子堂でもあったのか、それとも太子講が行われたところなのか、具体的には分からないので、「太子信仰にかかわる地名」としておきたい。

タイシムカイは「タイシ小字の向こ

う側の土地」であろう。谷底部であるカミコグリ小字を挟んだ百巢川の対岸にある。

タイシイケは聖徳太子に関わるイケ(池)のことと思われるが、詳しいことは不明である。

全国地図には、タイシ地名は、中・大字として、7ヶ所に記載されている。

【尻・上尻】

シリ・カミジリ。

これらの小字は、大郡の百巢川左岸にある。

シリとは何か。語源辞典に依りつつ二説を挙げておく。

①シリ←スリ(磨)と転じた語で、「崖」をいう。スルの連用形の名詞化したものか。

②シリ=ジリで、シリとは「湿地」をいう。シル(汁)に通じるということであろうか。

カミジリとは、「上流側にあるシリ」であろう。百巢川の上流方向にある。

全国地図には、シリ地名もカミジリ地名も記載はない。

【場口・ばくち】

バクチ。

これらの小字は、大郡の百巢川左岸の傾斜地にある。

バクチはハグ(剥)・チ(「場所」を示す接尾語)で、バクチとは「崩崖のあるところ」をいう。「博奕打ちのように裸になった所」という説明もあるようだが、付会である。

全国地図には、バクチ地名は記載が無い。

【四ツ辻】

ヨツツジ。

大郡の百巢川の最上流部に二ヶ所ある。

ヨツツジとは「山道が合流する所」か。三叉路の場合もあるし、四ツ辻であることもあるか。

全国地図には、ヨツツジ地名は、中・大字として8ヶ所に挙げられている。

【十四ヶ坂・十四下坂】

ジュウシガサカ・ジュウシガシタサカ。

これらの小字は米峰地区の大郡境にある。ジュウシガサカ小字は二ヶ所に分かれている。

ジュウシ(十四)が何を表しているのか明らかでないが、大郡にはジュウロク(十六)があった。あるいは入会地に付けられた数字かもしれない。

シタサカは「下の方にある傾斜地」と思われるが、他のことは不明である。

【三本松】

サンボンマツ。

米峰の大郡境の丘陵の尾根と南向きの谷からなる小字である。

サンボンマツとは、「三つ股になっている松のあるところ」であろうか。あるいは「独立した三本の大きな松があるところ」か。

三つ股の枝のある樹木は三本木信仰といわれるように尊崇の対象であったという。東日本に多かったらしい(語源辞典)。

【荒屋】

アラヤ。

大郡の日焼田沢川と百瀬川の間にある尾根の峰にある。

アラヤとは何か。二説を挙げる。

①アラヤはアラ(荒)・ヤ(岩)で、「荒々しい岩のあるところ」か。

②アラヤとは、文字通りで「荒れた屋敷のあった所」か。

全国地図には、アラヤ地名は、中・大字として、127ヶ所に挙げられており、うち34ヶ所で「荒屋」の字が宛てられている。

【屋婦下】

ヤブシタ。

この小字は大郡の日焼田沢川中流の谷底部にある。

ヤブシタとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。①ヤブは動詞ヤブル(破)の語幹で「崩壊しやすい傾斜面」をいう。すなわち、ヤブシタとは、「崩壊しやすい傾斜地の麓」であろうか。

②ヤブは「低木、竹などが生い茂っている所」をいう。つまり、ヤブシタとは「灌木などの茂っている所の麓」か。

③ヤブシタとは、「由緒が分からなくなった屋敷神と思われる藪神がいらしい土地の麓」か。傾斜地の上にはアラヤ(荒屋)小字がある。

なぜか、ヤブシタ地名は、全国地図には無い。

【舂屋】

マスヤ。

この小字も、大郡の日焼田沢川の谷底部にある。ヤブシタ小字の下流側隣になる。現在は荒地と水田になっている。

マスヤとは何を意味するのか。語源辞典を見ながら二説を挙げたい。

①マスヤはマス(枘)・ヤ(岩)で、「四角形の形をした地形の小石混じりの土地」か。

②マスヤはマ(単なる接頭語)・ス(砂)・ヤ(菴)で、「砂地で湿地になっている所」も考えられる。

マスヤ地名は、全国地図に1ヶ所の記載があり、「増屋」の字が宛てられ

ている。

【殿山】

トノヤマ。

大郡の日焼田沢川右岸にある。

トノヤマとは「貴人の邸宅があった丘」であろう。

全国地図には、トノヤマ地名は、中・大字として、14ヶ所に挙げられている。

【殿林】

トノバヤシ。

大郡のトノヤマ小字の南西方向にある。

トノバヤシとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トノ←タナ（棚）と転訛したもの。すなわち、トノバヤシとは「棚状になった地形で、植物が生い茂っているところ」ではないだろうか。

②トノヤマ小字との絡みで、トノバヤシとは「有力者の居住地周辺の樹木の茂ったところ」とも考えることができる。

全国地図には、トノバヤシ地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【家ノ本】

イエノモト。

大郡の二つのヒャクダ小字に挟まれている。

モトはモト（許）で「そば」をいう（語源辞典）。すなわち、イエノモトとは「家の傍の土地」をいうのであろう。この場合のイエ（家）とは、「ヒャクダ小字にあった屋敷」をいうか、少し離れているが、「トノヤマ小字にあった有力者の家」をいうのであろう。どちらとも決めがたい。

全国地図には、イエノモト地名は1

ヶ所に記載があり、「家之元」の字が宛てられている。

【坂下】

サカシタ。

大郡の日焼田沢川左岸にあり、丘陵の麓になっている。

サカシタとは字面の通りで、「斜面の麓部分」をいうのであろう。

全国地図には、サカシタ地名は、中・大字として、83ヶ所もの記載がある。

【後田・後畑】

ウシロダ・ウシロバタ。

これらの小字は、大郡のヒャクダ小字の北側にある。

ウシロダは「裏側にある場所」であり、ウシロバタは「裏側にある畑」、あるいは「裏側にある丘陵の周囲」を意味する。

ウシロ（後）は、やはり、ヒャクダ小字にあった屋敷が基準になっているものと思われる。

全国地図には、ウシロダ地名は32ヶ所、ウシロバタ地名は10ヶ所に記載されている。

【百田】

ヒャクダ。

大郡のヒャクダ小字は三ヶ所に分散している。

ヒャクダとは何を意味しているのか。地図の見た目も、傾斜地が多く、「たくさん田んぼがあるところ」ではない。

ヒャク←ビャクと転訛した語で、「崖崩れ」を意味する（国語大辞典）。千葉県や八王子で使われている語という。ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語であろう。以上から、ヒャクダとは、「崖崩れのあった場所」である

うか。

ヒャクダ地名は、全国地図に2ヶ所が挙げられている。

【松葉・松場】

マツバ。

大郡の「松場」小字は2ヶ所、「松葉」小字は1ヶ所にある。

マツバとは何をいうのか。分りにくい地名である。二説を挙げる。

- ①マツバ（松場）で、「赤松が自生していた所」を意味するか。松は神の依代であり、目出度い行事にも使われる。
- ②マツバ（松葉）で、「尾根などが二股に分かれている分岐点」をいう。地形を松葉に見立てた表現か。三ヶ所の小字が繋がっていたとすれば、こうした解釈も可能になる。

マツバ地名は、全国地図に40ヶ所が中・大字として挙げられている。宛てられている字は、「松葉」が31ヶ所、「松場」が7ヶ所となっている。

【牛道】

ウシミチ。

この小字は毛呂窪と大郡の境にある丘陵の南向き斜面にある。丘陵には尾根道が通っている。

ウシミチとは、「牛が荷積みを載せて移動する道」であろう。この小字の北側の尾根道を指しているものと思われる。馬による輸送が主流であった東日本でも、道の険しい山地では、偶蹄類の牛がもっぱら用いられたという（民俗大辞典）。

ウシミチ地名は、全国地図には、中・大字として4ヶ所に採られていて、全てに「牛道」の字が宛てられている。

【中川尻】

ナカガワジリ。

この小字は毛呂窪の米川右岸にあ

り、南端は米川、北端は尾根筋になっている。

ナカガワジリとは何か。これも難しい地名である。

ナカガワとは、「毛呂窪の中心となっている川」をいうか。シリ（尻）は「上流部」をいう。すなわち、ナカガワジリとは、「中心となっている川の上流部」を意味するか。ただし、この場合は、上流部とは米川本流の上流ではなくて、支流まで含めての上流であろう。そうでないと解釈は生きてこない。

【大牧】

オオヒラ。『長野縣町村字地名大鑑』に従った。

毛呂窪の米峰境にある。

オオヒラとは何か。ヒラは「台地。平坦地」をいう（語源辞典）。オオヒラとは「台地上の広い平坦地」か。オオヒラ小字の尾根の頂上部に広い平地がある。

【市道】

イチミチ。

この小字は、毛呂窪の米川右岸にある。

イチミチとは何をいうのだろうか。イチはイチーイツ（巖）と転訛した語で、「けわしい地形」をいう（語源辞典）。すなわち、イチミチとは「険しい急傾斜地にある道」をいうのであろう。現在も急傾斜地を山道が通っている。

全国地図には、イチミチ地名は4ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【黒石】

クロイシ。

米峰地区の小字で、大郡境にあり、谷底部は、現在、ほとんどが水田にな

っている。

クロイシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①クロはクロ（畔）で、「畦」をいう。クロイシとは、「畦に小石を積み上げたところ」であろうか。小字発生時みも、ここには湧水を利用した水田があったと思われる。

②クロはクリ（涅）に通じ、「湿地」をいう。クロイシとは「小石混じりの湿地だったところ」か。

クロイシ地名は、全国地図に33件の記載があり、「黒石」の字が宛てられているのは31ヶ所に及ぶ。

【熊野社】

クマノシャ。

米峰地区のクロイシ小字の北隅にある小さな小字である。

クマノシャとは、「熊野権現を祀ったところ」であろう。

中世、宝印（熊野の神札）は熊野三山に従属した御師・先達・山臥・熊野比丘尼らが全国を遍歴して頒布し教導したため、熊野信仰が武家・庶民の間に広まり、熊野詣でが流行。熊野の分祀社も全国的に広まる。また、熊野権現は女性を穢れた存在として忌避してきた多くの山岳霊場の神々とは異なり、血穢の女性を嫌わなかったという（日本史小百科『神社』、民俗大辞典）。

ここに熊野社を分祀勧請したのは、山伏であったか、それとも比丘尼か。

しかし、全国地図には、クマノシャ地名は1ヶ所に記載があるだけ。

【砂窪】

スナクボ。

米峰の毛呂窪境にある谷に沿った細長い小字になっている。

スナクボとは、文字通りで「窪地になっている砂地の土地」であろうか。

全国地図には、スナクボ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【日焼田】

ヒヤケダ。

スナクボ小字の中にすっぽりと包まれている小さな小字である。

ヒヤケダとは字面の通りで、「早で水の涸れやすいところ」であろう。谷底部にあるが、水が涸れやすいところがあるということか。

【焼森】

ヤキモリ。

米峰の大郡境にある小さな小字で、ワラビサワ小字の北隣にある。

ヤキモリとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ヤキは「焼畑が行われていたところ」で、モリは「小高い丘」をいう。ヤキモリとは「小高い峰のある焼畑耕作が行われていた土地」であろうか。

②ヤキ←ヤハギと転訛したもので、ヤハギはイハ（岩）・ハギ（剥）で「崩崖」を意味する。以上から、ヤキモリとは「崩れ地もあり、神聖な森のあるところ」か。ほぼ円錐形の峰もあり、山の神が祀られていた可能性もある。

全国地図には、ヤキモリ地名は記載が無い。

【上】

カミ。

米峰の大郡境にある小字で、米川支流の最上流部に当たる。

カミとは何か。二説を挙げる。

①カミはカミ（紙）で、「紙漉きが行われていた作業所があったところ」か。

②カミはカミ（神）で、「神聖な場所」かもしれない。すぐ隣にはバンバトオ

ヤシロ小字がある。この小字にお宮があったとすれば、その通りの場所となる。

カミ地名は、全国地図に、中・大字として、なんと110ヶ所も挙げられている。

【森下】

モリシタ。

米峰にはモリシタ小字が三ヶ所にある。

モリシタとは「神聖なお宮の下側にある土地」をいう。このお宮が三ヶ所とも異なる。

西のモリシタのお宮は米峰神社、東のモリシタのお宮は番場較社、南のモリシタは阿弥陀堂ではないかと考えているがどうであろうか。

全国地図には、モリシタ地名は、中・大字として35ヶ所に挙げられている。

【番場遠社】

バンバトオヤシロ。どこにも出ていないので、勝手な読み方になっているかもしれない。

米峰地区のカミ小字の北西隣にある小字。

バンバトオヤシロとは何を意味するのであるか。二説を挙げる。

①バンバ＝ババで、ハマ・ハバ・ママ・マブと同系の語で、「崩壊地形、浸食地形」を意味し、トオ＝トで、「場所」を示す接尾語(語源辞典)。以上から、バンバトウヤシロとは、「崩壊地のある所に祀られたお宮」か。

②トオヤシロとは「遠いところから勧請したお宮」であろうか。従って、バンバトオヤシロとは、「崩壊地のある場所に祀られている遠い地から勧請されたお宮」かもしれない。

トオヤシロ地名は、全国地図には無い。

【中屋】

ナカヤ。

米峰神社周辺の米峰地区の中心部にある。

ナカヤとは、「地域の中心となるような有力者の屋敷があったところ」か。

全国地図には、ナカヤ地名は、中・大字として、64ヶ所に挙げられている。

【久保】

クボ。

米峰神社東側の洞にある。

クボとは、字面の通りで「窪地」をいう。

【水晶】

スイショウ。

この小字は、米峰神社南方の谷を越えた対岸にある。

スイショウとは「水晶が採れたことのある場所」であろうか。

水晶という現代的なひびきのある小字名が出てきて驚いたが、山梨県の塩山市竹森の玉諸神社の神体は水晶の原石であり、甲府市御岳の金桜神社には火の玉・水の玉と称する5個の水晶玉があるという。古い時代から宝物のように扱われていたのであろう。

スイショウ地名は、全国地図には載っていない。

【オノ神】

サイノカミ。

この小字は米峰のスイショウ小字の西隣にある。

サイノカミは繰り返して出てきているので、ここでは触れないが、境の神といわれている、その境がどこにあり、米峰とどこの境になるのか、まだわか

らないでいる。

【キジヤ】

米峰神社の南東方向にある小さな小字で、クロイシ小字とオオマキ小字の間にある。

キジヤはキジヤ（木地屋）で、「木地屋が住んでいたことがある場所」であろう。

木地屋は轆轤を用いて木製の椀・丸膳・盆・鉢など、主として丸物とよばれる木地物を製作した職人である。良質の原木を求めて山地を移動することが多かったが、それでも野池山には各所に木地屋の墓があるという（千代風土記）。

全国地図には、キジヤ地名が、中・大字として、3ヶ所に記載されていて、宛てられている字は全て「木地屋」となっている。

【大牧】

オオマキ。

キジヤの北東隣にある小字である。頂上が平坦部になっている丘陵で麓には流水もある。

オオマキとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オオはオホ（大）で「中心となる」の意、マキはマキ（牧）で「牧場」をいう。すなわち、オオマキとは「中心になるような牧場」で、牛馬を放牧していたと思われる。

②オオはヲ（峰）で、マキは「小平坦地」をいう。オオマキとは、「頂上部が峰もあり、小平坦地になっているところ」か。

オオマキ地名は、全国地図に、中・大字として27ヶ所が挙げられている。

【禿】

カブロ。

この小字は米峰の山中境にあり、米川に接している。対岸の左岸には、山中地区のカブロ（かぶ路）小字がある。

カブロは、「木のない禿地」をいう。カム（嚙）・ロ（場所をいう接尾語）で、「崩壊地形、露出地形」のこと（語源辞典）。小字発生時には、禿地になっていたものと思われる。

全国地図には、カブロ地名は記載が無い。

【小屋場】

コヤバ。

この小字は、米峰のカブロ小字の西隣の山地にあり、現在、頂上部は果樹園で平坦地になっている。

コヤバとは何か。語源辞典に添いながら、二説を挙げる。

①コヤバとは「開墾のための野小屋があったところ」であろうか。頂上部の広い平坦地は後の整地によるものと思われるが、頂上部の開墾は小字発生時には始まっていたのかもしれない。

②コヤはコ（小）・ヤ（菴）で、「小湿地」をいう。コヤバとは「小湿地があった土地」を意味するか。

コヤバ地名は、全国地図に、12ヶ所が中・大字として挙げられている。

【寺ノ先】

テラノサキ。

米峰のテラノサキ小字は二ヶ所にある。一つはカザハラ小字の南方の谷を越えた対岸にあり、もう一つは更に南方の米川右岸にある。この小字が生まれた時には、二つの小字は繋がっていた可能性もある。

サキはサキ（先）で「丘陵の先端部」をいう（語源辞典）。従って、テラノサキとは「寺院のあった丘陵先端部」

を意味するのであろう。

全国地図には、テラノサキ地名は載っていない。

【彦十郎】

ヒコジュウロウ。

米峰地区のテラノサキ小字の西隣と更に西方に、もう一ヶ所のヒコジュウロウ小字がある。いずれも尾根か尾根に近い傾斜地にある。

ヒコジュウロウとは何をいうのだろうか。二説を挙げる。

①ヒコジュウロウ（彦十郎）は固有名詞か。であれば、ヒコジュウロウとは「彦十郎が所有する土地」ということになるが、焼畑耕作が行われていたのであろうか。

②ヒコは動詞ヒク（引）の連用形が名詞化した語で、上代東国方言のヒコから丘などが連なっていること」をいい、ジュウロウはジュルに通じ「湿地」を示す（以上は語源辞典）。ヒコジュウロウとは「丘がつらなり、湿地もあるところ」か。

【井戸ヶ洞】

イドガホラ。

この小字は、二つのテラノサキ小字の間にあり、西隣を米川が流れている。

イドはキ（井）・ド（処）で「流水のあるところ」を意味する。つまり、イドガホラとは、「川が流れているところを開いている洞」である。

【谿岩】

タニイワ。

この小字は米川右岸にあつて、カブロ小字の下流側にある。

タニイワとは「谷川に岩が顕れているところ」であらうか。この付近の米川の岸には岩がごろごろと出ている。

タニイワ地名は、全国地図には記載

が無い。

【入道淵】

ニュードウブチ。

この小字も米川右岸にあつて、タニイワ小字の下流側になる。

ニュードウ（入道）には、「奇勝、奇景」の意があり、フチはフチ（縁）で「川べり」のこと（以上は語源辞典）。以上から、ニュードウブチとは「奇岩・奇景のある川べり」をいうのであろう。川岸が浸食作用をうけて、岩が顕れているのであろう。

全国地図には、ニュードウブチ地名は、中・大字として、一ヶ所に記されている。

【阿弥陀前】

アミダマエ。

米峰神社の南側の谷を越えた対岸にある。すぐ南側にはテラノサキ（寺ノ先）小字があり、北西 70m ほどのところにはテラヤシキ（寺屋敷）小字がある。

アミダマエとは「阿弥陀堂があつたところ」であらう。この付近には寺院関係の小字名が多いが、寺院名等ははっきりしていない。

全国地図にはアミダマエ地名は無いが、アミダ地名は3ヶ所にある。

【蘇武田】

ソブタ。

米峰神社南側の谷底部にある小字で、現在、水田にもなっている。

ソブは「たまり水などの上に浮かんで鉄さびのように光るもの」（国語大辞典）と、ごたごたした説明があるが、鉄さびのことを指す。山間地の田んぼではよくみる光景である。

ソブダとは「鉄サビが出ている田んぼ」であらう。

ソブタ地名が全国地図に記載が無いのは、方言であるためかもしれない。

【観地】

カンチ。

米峰神社の南東方向にあり、クロイシ小字とスナクボ小字の間にある。

カンチとは何か。あまり聞いたことのない地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カンカム（上）の略形で「高いところ」をいうか。チはミチ（道）の上略形。すなわち、カンチとは「高い所を通る道のあるところ」になる。ここには、現在、尾根道が通っているが、この道が小字発生時にはあったのかどうか。

②カンは動詞カム（噛）の連用形カミが転じた語で、チは「場所」を表す接尾語ではないか。とすれば、カンチとは「噛まれたような崩壊地のあるところ」となる。

カンチ地名は、全国地図には無い。

【風原】

カザハラ。

この小字は米峰神社の南側斜面にある。

カザハラとは「風当たりの強い所」であろう。南側には南東方向に開けた谷になっていて、巽の風がよく当たるところである。現在は、稲が倒伏したり、稲はざが倒れたりすることがあるという。

カザハラ地名は、全国地図に1ヶ所だけ、中・大字として挙げられている。

【森】

モリ。

米峰神社が鎮座する小字である。

モリとは「神社のある地の木立で、神が降下してくるところ」である。

なお、米峰神社は伊雑（いぞわ）皇神が祭神という（千代村誌）。伊雑宮は伊勢神宮内宮の所属神社となっている。御師によって勧請されたのであろうか。

【竹ノ内】

タケノウチ。

この小字は、米峰神社の境内に懸かっており、近くの独立峰やその斜面も含んだ地籍になっている。

タケノウチはタケ（高）・ノ（助詞）・ウチ（内）で（語源辞典）、「峰もある中腹の平坦地」をいうのであろうか。

タケノウチ地名は、全国地図に、なんと105ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【寺屋敷】

テラヤシキ。

この小字は、米峰神社南西麓にある。テラヤシキとは「寺の屋敷地。また、寺跡の屋敷」をいう（広辞苑）。いずれにしても寺院のあったところであろう。小字発生当時に、寺院の明確な形があったのかどうかは不明。

全国地図には、テラヤシキ地名は中・大字として、10ヶ所が挙げられている。

【蔵本】

クラモト。

この小字は、米峰神社のある丘陵の南西側中腹にある。そこは小平坦地になっている。

クラモトとは何か。岩波日本史辞典によれば、「年貢等の保管用倉庫の管理に当たる名主百姓」をいうのであろうか。したがって、このクラモトとは「年貢等の管理をする村の有力者の屋敷があったところ」か。

クラモト地名は、全国地図に、26

ヶ所で中・大字として記載されている。

【深田】

フカダ。

この小字は米峰神社南の谷底部にある。

フカダとは「泥の深い田。沼田」(広辞苑)である。

全国地図にはフカダ地名は15ヶ所に、中・大字として記載がある。

【落田】

オチダ。

これも米峰神社南の谷底部にある。

オチダとは何か。語源辞典によりながら、三説を挙げる。

①オチ←オンジ(隠地)と転じた語で、「貢租をのがれるための隠し田」か。とすれば、オチダとは「貢租のがれの隠し田」をいう。

②オチには「湿地」の意味がある。すなわち、オチダとは、「湿地にある水田」ということになる。

③オチはウチ(内)に通じ、「小盆地」と解することもできる。従って、オチダとは「小盆地にある田んぼ」であろうか。

全国地図には、オチダ地名は2ヶ所にあり、いずれも「落田」の字を宛てている。

【社口】

シャグチ。

この小字は米峰神社南西方向のウチクボ小字とハッピークメ小字の間にある。尾根続きの峰に近い。

シャグチとは何か。二説を挙げる。

①シャグチ←ジャクチ(蛇口)と転訛したもので、「山などの崩れたところ」をいう。

②シャグジ←シャクチと転じた語で諏訪地方中心に広がるシャクジ信仰

にかかわる地名であろう。多様な音転呼称があり、伝承も多岐に及ぶという(民俗大辞典)。

全国地図には、シャグチ地名もシャクチ地名も記載は無い。

【井戸畑】

イドハタ。

米峰神社西方の丘陵中腹部にある。

イドハタとは、字面の通りで、「流水のある畑地」をいう。

イドハタ地名も全国地図には載っていない。

【垣外】

カイト。

米峰神社につながる丘陵の西先端部の傾斜地にある。

カイトとは「屋敷跡」をいう。

【乳母屋敷】

ウバヤシキ。

この小字は米峰神社丘陵の西の先端部中腹にある。

ウバヤシキとは、「老女(姥)が住んでいた屋敷のあったところ」か、「乳母が住んでいた屋敷があったところ」であろうか。

全国地図には、ウバヤシキは2ヶ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている文字は「姥屋敷」である。

【出登り】

デノボリ。

これもウバヤシキ小字の近くにある小さな小字である。

デノボリとは何を意味するのか。

デは動詞イヅ(出)の連用形イデの上略で「突出した所」をいい、ノボリ(登)は「上り坂になっている所」をいう(以上は語源辞典)。

以上から、デノボリとは「丘陵末端

部が平坦地に飛び出ているところにある坂道」をいうのではないだろうか。

デノボリ地名は、全国地図には、1ヶ所にだけ記載があり「出登」の字が宛てられている。

【入り】

イリ。

この小字は、米峰神社のあるタケノウチ小字の西隣にある。

イリとは、「谷の奥で行き詰まりになっているところ」をいうのであろう。

全国地図には、イリ地名は22ヶ所に挙げられており、うち19ヶ所には「入」の字が宛てられている。

【竹屋】

タケヤ。

この小字は米峰のイリ小字に囲まれている。

タケヤとは何か。考えられることを二つ挙げたい。

①タケヤは文字通りタケヤ（竹屋）で「竹製品を作り販売していた職人のいた家」か。山窩との関わりは、考えられない。

②タケ＝ダケで「崖」をいう（語源辞典）。ヤはヤ（菴）。以上から、タケヤとは「崩崖のある湿地」か。

全国地図には、タケヤ地名は、9ヶ所に中・大字として挙げられている。

【浜井場】

ハマイバ。

この小字は米峰神社丘陵の北西の麓にある。米峰神社からは直線にして250mほど離れている。

この米峰のハマイバは何を意味しているのか。語源辞典に添いながら、一応、二説を挙げる。

①ハマはハマ（岨）で「山などの険しい所」をいう。イバは井（井）・バ（場）

で、「流水のあるところ」か。以上から、ハマイバとは「川が流れており、山の険しいところ」であろうか。

②ハマイバとは「破魔打が行われたところ」であろう。村はずれで行われることが多いといわれているが、ここは、まさに毛呂窪境になっている。

【小屋垣外】

コヤガイト。

この小字は米峰の毛呂窪境にあり、ハマイバ小字の西隣の谷底部になっており、現在は棚田になっている。

コヤガイトとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コヤガイトとは、文字通りで「野小屋が置かれていたことにある土地」か。小字発生当時には、水田が開かれつつあったのであろうか。

②コヤはコ（小）・ヤ（菴）で「小湿地」をいう。すなわち、コヤガイトとは「小湿地にある居住地跡のあった所」かもしれない。

全国地図には、コヤガイト地名は無い。

【松屋】

マツヤ。

コヤガイト小字の谷底部に向かう東向きの傾斜地にある小さな小字である。

マツヤとは、はっきりとはしないが、瑞祥地名のマツ（松）の名前をつけた屋敷があったのであろうか。

全国地図の中・大字には、マツヤ地名は4ヶ所が挙げられている。

【角垣外】

スミガイト。

米峰のコヤガイト小字の口のところにあり、平坦地になっている。

スミガイトとは何か。これも語源辞

典に依りながら二説を挙げる。

①スミはスミ（隅）で「平地の隅」をいう。この奥は斜度のやや大きい階段状の谷につながる。すなわち、スミガイトとは、「平地の隅にある居住地跡」か。

②スミはス（砂）・ミ（場所を表す接尾語）で、「砂地」をいう。つまり、スミガイトとは、「砂地になっている居住地跡」をいうか。

全国地図には、スミガイト地名は1ヶ所にある。

【細尻】

ホソジリ。

米峰のスミガイト小字の東隣にある小さな小字である。

シリはジリで、「湿地」をいう。ホソジリとは、「細い形の湿地」であろう。

全国地図には、ホソジリ地名は記載が無い。

【有木目田】

ウキメダ。

この小字は米峰神社南方の谷底部にありハッピークメ小字にほぼ囲まれている。

ウキはウキ（泥）で「泥深い地」をいい、メはべ（辺）の転訛した語で「あたり」をいう（以上は語源辞典）。以上からウキメダとは、「泥深い湿地のあたりにある田んぼ」をいうのであろう。

ウキメダ地名も全国地図には載っていない。

【折窪】

オリクボ。

米峰神社南方の谷の対岸にある。

オリクボとは何か。これも語源辞典を見ながら二説を挙げる。

①オリはヲリ（折）で「曲がり目」をいう。つまり、オリクボとは「山麓や道が曲がっている窪地」か。丘陵の先端部になっている。

②オリはオリ（澱）で「湿地」をいう。オリクボとは「湿地になっている窪地」であろうか。

全国地図には、オリクボ地名が、中・大字として1ヶ所に記載され、「折久保」の字が宛てられている。

【柿ヶ洞】

カキガホラ。

米峰のオリクボ小字の南隣にある。

カキガホラは柿がある洞ではあるまい。カキは動詞カク（欠）の連用形が名詞化した語で「崩崖」をいう（語源辞典）。すなわち、カキガホラとは「崩崖のある谷」ということになる。

全国地図には、カキガホラ地名は記載されていない。

【竹下・下竹下】

タケシタ・シモタケシタ。

これらの小字は、主要地方道飯田富山佐久間線の北東側にあり、尾根と谷が入り組んでいる。タケシタ小字には、現在もわずかに水田があり、険しい谷川が中を流れている。

タケシタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タケ＝ダケで「崖」のこと、シタは副詞シタシタから「湿地」をいう。以上から、タケシタとは「崖地もあり、湿地もある土地」をいうのか。

②シタは動詞シタム（涸）、シタツ（滴）の語幹で「水が垂れ流れる様子」をいう。つまり、タケシタとは「崖もあり水が垂れ流れる谷もある土地」になるだろうか。

シモタケシタは「下の方にあるタケ

シタ」であろう。

なお、タケシタ地名は、全国地図には9ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【稲垣外】

イナカイト。

この小字は、タケシタ小字の北東隣のやや高い所にある。

イナカイトとは何をいうのか。語源辞典に添いながら二説を挙げる。

①イナは砂を意味する古語ヨナの転訛した語で、「砂地」を意味する。従って、イナカイトとは、「砂地にあった住居跡」をいうか。

②イナはウナ（畝）の転じたもので、「高み」をいう。イナカイトとは、「少し高い所にある住居跡」であろうか。

全国地図には、イナカイト地名は載っていない。

【長畑】

ナガハタ。

米峰のタケシタ小字の北隣にある小さな谷になっている小字である。

ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」を意味する（語源辞典）。ナガハタとは「傾斜地にある耕作地」だろうか。現在は荒地になってはいる。

【長洞・長洞尻】

ナガボラ・ナガボラジリ。

これらの小字は、米峰第3集会所付近から、南西に延びる谷沿いにある。三ヶ所にナガボラ小字があり、その間に一ヶ所、ナガボラジリ小字がある。これらの小字は、小字名が生まれた時には一つながりになっていたのかもしれない。

ナガボラとは、「長く続いている谷」をいうのであろう。

ナガボラジリとは、「ナガボラ小字

の下流側の土地」であろう。

全国地図には、ナガボラ小字は、中・大字として、1ヶ所が挙げられている。

【井戸洞】

イドボラ。

この小字は、ナガボラ小字の近くに二ヶ所ある。

イドボラとは、井（井）・ド（処）・ホラで、「自然湧水のある洞」であろう。

【田中】

タナカ。

この小字もナガボラ小字の近くの谷底部にある。

タナカとは、「水田に囲まれた家のあるところ」か。現在は荒地と畑になっているが、棚状の地形になっており、地名発生時には水田であった可能性は高い。

【丸山】

マルヤマ。

この小字もナガボラ小字の周辺にある。

マルヤマとは「近くに円錐形の山のあるところ」か。神聖な山と見なされ、山の神などを祀ることもありそうだ。米峰の甘南備か。

【家抜】

イエノキ。

この小字は、ナガボラ小字の北端にある。

イエノキとは、何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イエ←ウエ（上）と転訛した語で、「高い所」をいい、ノキはノキ（抜）の転じた語で「崩壊地形」を意味する。以上から、イエノキとは、「高い所で崩れ地のあるところ」であろうか。

②イエはイエ(家)で「家屋」のこと。すなわち、イエノキとは「家ごと崩れおちた所」をいうのであろうか。

全国地図には、イエノキ地名は記載が無い。

【西ヶ洞】

ニシガホラ。

この小字もナガボラ小字の周辺にある。

ニシガホラとは何か。二説を挙げたい。

①ニシガホラとは「(米峰神社の)西の方にある洞」であらうか。

②ニシ←ニジと転じたもので、ニジは動詞ニジム(滲)の語幹で「湿地」をいう。ニシガホラとは「湿地になっている洞」か。

【秋苅】

アキカリ。

この小字は、米峰のナカボラ小字の一つ西側の谷と尾根にある。谷底部は、現在、水田になっている所が多い。

アキカリとは何を意味しているのか。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アキはアキ(開)で「開けた地形」で、カリ(刈)で「刈り払われた所」をいう。重複語であるが、アキカリは「刈り払われたように開けた土地」か。

②アキはアクタ(芥)が転訛した語で「湿地」を意味し、カリ(刈)には「崩壊地形」の意もある。以上から、アキカリとは「崩壊地のある湿地帯」をいうのであろうか。

全国地図には、アキカリ地名は載っていない。

【摺木田】

スリコギダ。

この小字は、米峰にあり、アキカリ

小字の西隣になる谷にある

スリコギダとは何か。

スリは動詞スル(磨)の連用形が名詞化した語で「崩崖」をいうか。コギも動詞コグ(扱)の連用形が名詞化した語。同義語を重複させて意味を強めたか。スリコギダとは「崩壊地のある土地」であらうか。

全国地図に、スリコギダ地名は記載が無い。

【白砂】

シラスナ。

米峰の主要地方道飯田富山佐久間線と米川に沿った右岸にある。

シラスナとは「白い砂地の土地」であらう。花崗岩が風化して白砂になっているところであらう。

全国地図には、シラスナ地名は2ヶ所で中・大字として挙げられている。

【打窪・打窪尻】

ウチクボ・ウチクボジリ。

これらの小字は、米峰南部の泰阜境近くにある。

ウチクボとは何か。語源辞典を見ながら二説を挙げたい。

①ウチはウチ(内)で「山谷の小平地」のこと。ウチクボとは「山頂や谷底部に小平地をもつ窪地」か。

②ウチはウチ(打)で「切り取られたような地形」をいう。ウチクボとは「崩崖があちこちにある窪地」であらうか。

ウチクボジリとは「ウチクボ小字の下流側にある土地」か。

ウチクボ地名は、全国地図には3ヶ所が中・大字として挙げられている。宛てられている文字は、すべて「内久保」となっている。

【四ツ辻】

ヨツツジ。

この小字は、米峰南部の法全寺境にある。

ヨツツジと言え、**「四叉路」**のことをいう。たとえ四本の道が交わっていなくても複数の道路が交差しておれば、ヨツツジと呼ぶこともあろう。

このヨツツジ小字には変形四叉路が現在でもある。

【由ヶ洞】

ユイガボラ。

米峰最南端にあり米川沿岸の右岸になっている。

ユイガボラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ユイはユ（水）・キ（川）の同義反復で「川など水のあるところ」を示すという。従って、ユイガボラとは「川が流れている洞」である。小字の南端を米川が流れている。

②ユイはユ（斎）・キ（川）で、「禊神事などを行う神聖な水辺」である。ユイガボラとは「禊神事を行う神聖な水辺のある谷」であろう。

なぜか、ユイガボラ地名は、全国地図に記載が無い。

【子ノ神】

ネノカミ。

この小字も米峰最南端にあり、米川右岸のユイガボラ小字の南西隣にある。

ネノカミとは「子ノ神を祀った所」であろうか。

子の神は十二支の北方にあたる子の神を神格化したもので、キノエネサマと呼んでいるところもある（総合日本民俗語彙）。子の権現ともいう。天台系修験道と深い関係があり、修験者によって伝播されたという。（民俗大辞典）山中に、この小字があることに

納得がいく。

ネノカミ地名は、全国地図には5ヶ所に中・大字として記載がある。

【崩岩】

ナギイワ。

ネノカミ小字と米川に囲まれた小さな小字である。

ナギイワとは「崩壊場所のある岩壁」をいうのであろう。

【なぎの手】

ナギノテ。

米川に沿った右岸にある大きな小字である。

①ナギノテとは何か。語源辞典に添いながら二説を挙げたい。

ナギは「崩壊地」で、ノテ（野手）は「入会地」をいう。従って、ナギノテは「崩壊地のある入会地」をいうか。

②ノテはノ（助詞）・テ（場所を示す接尾語）である。ナギノテとは、「崩壊地のあるところ」か。

全国地図にはナギノテ地名は無い。

【丸子打場】

マルコウチバ。

米峰地区の最南端の米川右岸にある。

マルコウチバとは何をいうのだろうか。二説を挙げる。

①マルコウチバとは「破魔を打ち合った場所」で、破魔打ちの神事を行ったところであろう。川辺でもあるし、村境にもなっていて、破魔打ち神事に最適な場所といえよう。

②可能性は薄いかもしれないが、次のようなことも全く考えられないこともない。古代の部に丸子部があった。その職掌は「椀作りに従事した」という（語源辞典）。打場とはその作業場であろう。ここに木地師の作業場があ

ったことは、十分に考えられる。どうであろうか。

全国地図にマルコウチバ地名は無い。

【登城畑】

トジョウバタ。

この小字も米峰最南端の米川右岸にある。

近くに城があったのかどうか、登城には関係しないであろう。

トジョウバタとは何を意味するのか。次のように考えたい。

トジョウ(登城)←ドジョウ(土場)←ドバ(土場)と転訛したもので、この地域で使っている「渡場」を意味すると思われる。すなわち、「川を流し下す材木の受け渡しをする場所」であろう。

従って、ドジョウバタとは、「末端部に川流しをする材木の受け渡しをする場所のある土地」であろうか。ハタはハタ(端)である。

全国地図にはドジョウバタ地名は記載が無い。

【弾古坂】

ダンゴザカ。

これも米峰最南端の米川右岸にある大きな小字である。

ダンゴザカとは何か。

ダンゴ←タンゴ←タム(タミの転)・ゴ(処)と転じた。タムはタミ(廻)の連用形が名詞化した語で(以上は語源辞典)、「廻っているところ」をいうのであろう。

以上から、ダンゴザカとは「岬のように川に突き出て曲がっているところ」をいうのであろう。

全国地図には、ダンゴザカ地名は1ヶ所にある。

【稗田・稗田尻】

ヒエダ・ヒエダジリ。

これらの小字はダンゴザカ小字の北隣付近にある。ヒエダ小字が二ヶ所、ヒエダジリ小字が一ヶ所。

ヒエダとは何か。二説を挙げる。

①ヒエダとは「田稗を栽培していた田んぼのあった所」であろう。離れた所にあるヒエダ小字は傾斜地だけであるが、かつては北側の大きいヒエダ小字に繋がっていたと思われる。

②ヒエは動詞ヒウ(聳)の連用形が名詞化した語で「削りとられた地形」をいう(語源辞典)。ヒエダとは「崩壊地のある土地」か。

ヒエダジリとは「ヒエダ小字の下流側にある土地」であろう。

【岩下】

イワシタ。

この小字も米峰最南端の米川右岸にある。

イワシタとは何か。二説を挙げる。

①イワシタとは、文字通り「岩が出ている下側の土地」か。道路傍と米川の沿岸に、岩が出ているようだが、そのシタ(下)がどこなのか、少し気になる。

②シタは「湿地」をいう。イワシタとは「岩がごつごつと出ていて、湧水のある土地」か。

イワイタ地名は、全国地図の中・大字として、48ヶ所に記載がある。

【芝立】

シバタテ。

この小字は、イワシタ小字の北隣の尾根の頂上付近にある。

シバタテとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①シバは「焼畑」をいい、タテは「丘陵の先端部」のこと。シバタテとは「丘陵の先端部で焼畑耕作が行われたところ」か。

②シバは動詞シバク(打)の語幹で「崩崖」をいう。すなわち、シバタテとは「丘陵の先端部で崩崖のある土地」であろうか。

③シバはシ(石)・バ(場)で「丘陵先端部で砂地のある土地」をいうか。

全国地図には、シバタテ地名は中・大字として、3ヶ所に挙げられている。